新羅都城の成立と展開

李　　恩　　碩

例　言

1．本書は、2023年6月に専修大学大学院に提出する論文博士請求論文である。
2．各章を構成するした論考はすでに公表したものがあり、本論文を作成するにあたって、全体に調整を加えている。なお、初出論文の出典は以下のとおりである。

序　章　研究目的と方法および本稿の構成、研究史

「日帝强占期 新羅都城研究와 그 意義」『日帝强占期 嶺南地域에서의 古跡調査』学研文化社(2013)に加筆補訂

第 1 章　蘿井の歴史性と性格

「新羅 王京 発掘의 課題」『新羅史学報』第5號 新羅史学会(2005)に加筆補訂

第 2 章　金城の位置比定と月城の構造

「新羅 都城의 構造와 城廓調査의 成果」『季刊 韓国의 考古学』vol 46 周留城(2020)に加筆補訂

第 3 章　6-7世紀の寺院創建と構造

「皇龍寺建立と運営に関する考察」『日韓文化財論集』Ⅳ 奈良文化財研究所・国立文化財研究所(2021)に加筆補訂

第 4 章　計画都市の成立と発展

「新羅王京の都市計画」『東アジアの古代都城』 創立50周年記念奈良文化財研究所学報第66冊 研究論集ⅩⅣ(2003)に加筆補訂

「王京의 成立과 発展」『統一新羅時代考古学』第28回韓国考古学全国大会発表資料集(2004)に加筆補訂

「王京과 地方都市」『嶺南의 考古学』 社会評論社 嶺南考古学会(2015)に加筆補訂

第 5 章　生活空間の宮と政治空間の殿

「古代王城의 比較 -阿羅伽耶와 新羅를 中心으로-」『阿羅伽耶의 歴史와 空間』 昌原大学校慶南学研究センター阿羅伽耶学術叢書１図書出版선인(2018)に加筆補訂

「皇龍寺의 建立과 新羅 王京의 造成」皇龍寺址発掘調査 40周年記念 国際学術大会発表資料集 国立慶州文化財研究所(2016)に加筆補訂

「皇龍寺 北便 龍宮에 関한 一考察」『東아시아의 文物』中軒 沈奉謹先生 古稀記念論選集(2012)に加筆補訂

第 6 章　都城民の生活

「尙州 伏龍洞遺跡과 慶州王京」『古代都市 尙州와 伏龍洞遺跡』 嶺南文化財研究院『嶺南文化財研究』第24輯(2010)に加筆補訂

「7世紀代 新羅 家屋構造에 對한 考察」『新羅史学報』37 新羅史学会(2016)に加筆補訂

「安山邑城氷庫」第9回 全国海洋文化学者大会 発表資料集(2018)に加筆補訂

終　章　総合考察

目　　次

序　章 …… 1
第 1 節 ： 研究目的と方法および本稿の構成 …… 3
第 2 節 ： 研究史 …… 5

第Ⅰ部　新羅の建国と王宮 …… 19

第 1 章 ： 蘿井の歴史性と性格 …… 21
問題の所在 …… 21
第 1 節 ： 蘿井発掘遺跡の再検討 …… 22
第 2 節 ： 周辺遺跡と比較 …… 30
第 3 節 ： 蘿井遺跡と史料の関係 …… 35
結　語 …… 38
第 2 章 ： 金城の位置比定と月城の構造 …… 45
問題の所在 …… 45
第 1 節 ： 金城 － 新羅の初期王城 － …… 46
第 2 節 ： 南堂の位置比定 …… 53
第 3 節 ： 月城 － 新羅の中心王城 － …… 55
結　語 …… 86

第Ⅱ部　佛教寺院と計画都市の出現と運営 … 91

第 3 章 ： 6～7世紀の寺院創建と構造 …… 93
問題の所在 …… 93
第 1 節 ： 皇龍寺の造成と構造 …… 94
第 2 節 ： 芬皇寺の造成と構造 …… 109
第 3 節 ： 皇福寺の造成と構造 …… 111
結　語 …… 119
第 4 章 ： 計画都市の成立と発展 …… 123
問題の所在 …… 123

第 1 節 ： 5～6世紀の官道 …… 124
第 2 節 ： 計画都市の背景と成立 …… 126
第 3 節 ： 都市の展開 …… 135
結　語 …… 149

第Ⅲ部　宮・殿と都城民の生活 …… 155

第 5 章 ： 生活空間の宮と政治空間の殿 …… 157
問題の所在 …… 157
第 1 節 ： 東宮・月池と臨海殿の位置 …… 158
第 2 節 ： 北宮と南宮の位置 …… 169
第 3 節 ： 龍宮の位置 …… 177
結　語 …… 187
第 6 章 ： 都城民の生活 …… 193
問題の所在 …… 193
第 1 節 ：竪穴家屋、貴族寺院と金入宅 …… 194
第 2 節 ：都市基盤施設 …… 214
第 3 節 ：溫石の伝来と使用 …… 229
結　語 …… 243

終　章 ： 総合考察 …… 251

参考文献 …… 259

新羅始祖赫居世 前漢五鳳元年甲子 開國

王都長三千七十五步 廣三千一十八步 三十五里 六部　　『三国史記』

京中十七萬八千九百三十六戸 一千三百六十坊 五十五里　　『三国遺事』

序　章

新羅は、韓半島のいわゆる「三国時代」以降、最も長い王朝体制(B.C.57～A.D.935)を維持した古代国家であり、初代王である朴赫居世から最後の王となる56代の敬順王に至るまで、慶尚北道慶州市の一帯を都城として維持してきた。都城は、国家政治の中心聚落であり、政治・経済・祭儀といった国務を主管する空間を意味し、中国においては市街地を取りまく羅城が築かれた王都と定義されていた。韓国古代史の史書である『三国史記』や『三国遺事』には、新羅の都であった現在の慶州が、都城・京都・王城・王京・王都など様々な表現で登場しているが、これらはいずれも都の意味を持っていた。

新羅は、慶州地域を中心とする斯盧国という辰韓小国から始まり、周辺諸国を統合しつつ古代国家へと発展した。中古期（4～5世紀）以降は中国の都城制度を受け入れ、当時の自然環境と地理空間に合わせ都市が発展していきた。都城の基本構造は、防御と統制のための羅城を備えるのが理想的だが、新羅は羅城を持たず、王城である月城などを中心に体制を整えながら維持されていった。

1～3世紀においては、丘陵地に住居地が形成され、伝統的な墓制は辰韓および伽耶地域に共通する木棺や木槨墓であった。しかし、4～5世紀代になると、慶州を中心に、新羅独特の積石木槨墳をはじめ、金銀製品やガラス器といった多様な遺物が副葬される特徴的な墓制が登場した。6世紀代には、仏教公認（528年）とともに思想的体系を整え始め、古代国家体制の構築とともに、平地に王宮建設が計画された。しかし、王宮は皇龍寺に変更され、6世紀代の「王即仏」という概念と相まって、都城構造体系に大きな影響を与えた。7世紀後半に新羅が三国を統一すると、王宮・寺院・貴族・庶民の住居空間や墓域などが複合的に構成され、時期別に変化しながら、中国の影響を受けた方格化された都市構造が整備されていった。ただし新羅は、中国唐の長安城や日本の平城京のような新都を造ったのではなく、既存の墓域が維持されたまま、湿地を埋め立てつつ都心地を造っていったため、多様かつ複雑な構造が形成された。

9世紀前後には、大いに普及した禅宗思想の影響を受けて、南山に多数の寺院が建立され、都城内にも個人の願刹が多数寄進される傾向が見られるようになった。936年には、高麗王朝の成立に伴い、都城には慶州という名称が与えられ、東京とも呼ばれたが、その中心地は邑城の建築に伴って西へと移動した。1238年には、モンゴルの侵攻

によって皇龍寺の焼失をはじめ都市の全域が破壊され、かつての新羅の中心地は廃墟となった。そのため現在、石造物を除く新羅建築物の痕跡を見出すことはできない。

朝鮮時代においては、1592年から始まった壬辰倭乱および丁酉再乱（文禄・慶長の役）において、慶州邑城は再び多大な被害を受けた。17世紀中後半以降は儒教的正統性を確立するため、地元住民は新羅王代の記録に登場する朴・石・金などの遺跡と遺物を探し始めた。その後、多くの遺跡は歴史的な真偽よりも史料上の位置に基づいて指定され、現在に至るまで維持されている。

近代に入ると、1900年代初めから新羅の研究が行われ、金冠塚をはじめとする積石木槨墳の発掘によって金冠が出土すると注目が集まり、王宮の金城、月城などに関する様々な調査が行われた。1970年以前の研究は、史料の解釈と推定に依存する傾向が強かったが、70年代半ば以降から、雁鴨池をはじめ皇龍寺址など都城関連遺跡の発掘が進められ、全般的な研究が活性化し始めた。

新羅都城遺跡は、40年余りにわたって集中的に発掘され、多くの情報を提供してきたが、千年の歴史を復元することは非常に難しい作業である。文献や文字資料の断片的な内容や考古学的資料を活用した様々な理論が提示されているが、その実証においてはいまだ足りない点も多い。史料の誤りや問題点を認識しつつも、考古学的発掘成果を史料に合わせて解釈する場合も多く見受けられる。

中国、日本の古代都城との相互比較研究は以前から進められてきたが、都市形成の傾向が異なっており、新羅都城への適用が困難な点も多い。百済や高句麗の都城研究の進展にも期待されるところが大きいが、既に多くの破壊と都心の近現代化によってその把握が容易ではない状況も勘案せざるを得ない。

一方、いわゆる後三国時代における弓裔の泰封都城（鉄原地域、901～918年）は新羅都城の概念を受け継いでいるとされるが、南北非武装地帯（いわゆる休戦ライン地域）内に位置しており、現実的に調査が不可能である。新羅と泰封の都城の概念を受け継いだ高麗の開城は、2007年から2014年にかけて南北共同発掘が行われたが、その研究は緒に就いたばかりであり、相互比較が可能な段階ではない。

新羅の都城を全面発掘し、それに基づいて解釈することができれば、それに勝るものはないと言えるが、そのためには膨大な時間がかかるであろう。今の発掘速度で進めるには、数百年以上かかる至難の作業である。現時点では、発掘・研究された成果を総合的な観点から考古学的に解釈し、古代史の政治的観点ではなく、新羅人の生活像に重点を置きつつ当時の様相を充実に再現していくことを目的とする。これによって新たな研究の地平が開かれることを望んでいる。

第 1 節　研究目的と方法および本稿の構成

近代以降、新羅史研究は史料と金石文などを中心に持続的に進められてきた。1920年代、慶州市内で初めて発掘された金冠塚をはじめ、瑞鳳塚や金鈴塚などから出土した金冠は古代新羅文化に対する人々の好奇心と関心を集め、都心にある多様な規模の積石木槨墳は古都慶州の観光資源化に寄与することになる。

その後、1971年には慶州観光総合開発計画が策定された。これは、弥鄒王陵地区古墳群の浄化および古墳公園造成事業の一環として発掘調査を行い、その内部を公開できるよう復元するというもので、これによって天馬塚（1973年）や皇南大塚（1973～1975年）の発掘が進められた。このような計画的な調査は、歴史および考古学界に多くの研究資料を提供する契機となった。

両大古墳の発掘後、1975年の雁鴨池(現在の名称は東宮と月池)を皮切りに、皇龍寺址、月城濠、芬皇寺址、王京遺跡などの都市遺跡整備事業のための計画発掘が進められた。発掘された各種建物遺跡と生活遺跡は、これまで限られていた文献史料中心の研究の裾野を広げる契機となった。

特に新羅の正宮である月城においては、まず1984年に着手された堀の発掘に始まり、2010年には月城に関する総合学術調査報告書が刊行され、2014年からは城壁と濠、内部の建物址の発掘が進められている。新羅最大の寺院である皇龍寺址も、1976年から1983年まで発掘調査が行われ、一塔三金堂という新たな構造が明らかになり、また近年では南門址などの再調査が行われ、2018年からは西側の未調査区域の発掘が進行中である。

一方、皇龍寺址の西側に位置する廃寺の調査が1984年～1986年にかけて行われ、東側は都市遺跡（王京S1E1地区）が1987年～2002年まで発掘され、これによって統一新羅時代の基本住居構造方式が確認できた。南側の広場と都市遺跡は、整備のために持続的に発掘中である。このほか、四天王寺址、昌林寺址、皇福寺址、天官寺址、味呑寺址といった新羅史に登場する寺院が発掘され、都城の形成にかかわる資料が蓄積されている。

これらの遺跡発掘結果は、史料と符合する部分もないわけではないが、そうでない問題も学界の中で違いが見られる部分がある。発掘による新資料は、既存の史料を裏付ける契機にもなり歓迎すべきことではあるが、一方で、歴史学の立場から史料の年代や事件に結びつけようとする解釈も目立ってきた。朝鮮時代に指定された第1代王朴赫居世の墓は五陵ではなく六陵であるという説もあり、4世紀代以降に登場する積石木

槨墳の構造で、明らかにするには、発掘が必要である。また、五陵の指定と関連する朴赫居世の誕生地である蘿井については、発掘の結果と文献史料の間に差異があることが報告されている。朝鮮時代後期には、朴、石、金氏が互いに協議し、新羅歴代王陵を適当に史料に合わせて指定したが、その指定については『羅陵眞贋說』（1730年代に編纂）に記録された問題がある。南山の西側には、五陵を皮切りに指定された10人の朴氏王の墓があるが、その真偽については不明である。

このほかにも、1970年代に発掘された皇南大塚の南墳の被葬者をめぐる見解の差（奈勿王陵（402年）、訥祗王陵（458年）や、最近は月城の調査における築造年代の問題と、発見された人骨を人身供犠とする見解の妥当性などがある。発掘資料の解釈には、解釈には宗教と思想的な概念が当時の建築物などにどのように適用されたかを把握するためには融合研究でアプローチしなければならないが、容易ではない。

「金城」については、新羅初期から5世紀代までの史料において、存否の問題や、その具体的な位置の定説がなく、朝元殿、崇礼殿、東宮・南宮・北宮など文献史料に登場する宮殿や皇龍寺伽藍の系譜、龍宮の位置、坊制の施行時期や規模、里や坊に関する表記や範囲についても、研究者の見解は様々であり、これまでの発掘成果を得てもなお、新たな解釈や意見が持続的に提起され、その差が縮まってはいない。明確な史料的証拠が出てこない以上、論争化は避けられない。

したがって、古代都城の理解においては、考古学的発掘によって得られた資料を客観的かつ新たな観点から分析する作業に加え、当時の社会環境や意識に合わせて史料を解釈しつつ、考古学的資料との整合性を検討する必要がある。さらに史料に明示されていない当該時代の生活遺跡の性質についても、解釈が必要となる。

本稿では、新羅初期から史料と関連した蘿井、金城の位置問題、月城の築造時期と人身供犠の実態、皇龍寺の築造と王宮の関係、竜宮の位置、東宮・北宮・南宮の位置検討、都市遺跡と寺院の関係などを重点的に考察し、新たな視点から解釈を試みる。また、宗教施設である皇龍寺をはじめとする各種寺院などを調査し、都城民の生活と関連した各種施設である道路、橋、氷庫(氷室)、溫石などを具体的に検討し、当時の生活状況を復元してみたい。

第 2 節　研究史

新羅都城の研究は、古代史の研究に始まり、考古学的な調査がこれを後押ししてきたが、その研究史は大きく4つの時期に区分される。

草創期～初期にあたる第1期には、遺跡の発掘が重点的に行われ、都城の基本構造や規模に関する情報が得られた。次いで藤島亥治郎などが地籍図を用い、格子状の道路に区切られた「坊」の性格を把握し、これによって古代都市構造の研究における基本枠が示された。藤島亥治郎が作成した復元図や研究成果は、現在においても活用されている。

第2期は、おおむね1945年から1970年初頭までの期間であり、古代史料の解釈に基づいて、いわゆる新羅の六部の位置比定など、新羅初期の国家形成に関する研究に焦点が当てられた。しかし、考古学的調査がほとんど行われず、研究の方向性や進展がさほど見られなかった。

第3期は、おおむね1971年から1996年までである。1971年に慶州観光開発計画が策定され、天馬塚などの遺跡の発掘が進み、都城関連遺跡の重要性が認識されるようになった。この期間中、藤島亥治郎の図面を活用した様々な復元図が示されたが、特に中国の長安城や日本の平城京と類似した朱雀大路が存在したとされる復元図が1990年代まで主流であった。

第4期は、1997年から現在に至るまでの期間である。同期間中に皇龍寺址の東側に位置する王京S1E1地区（1坊）の発掘調査が行われ、家屋・道路などの構造が確認された。この報告書が2002年に刊行されると、都城構造に関する研究が盛んになった。その後も慶州市内で100カ所以上の都市遺跡が発掘され、道路に区画される坊の構造や規模が確認された。

一方、新羅時代の寺院の調査において、天官寺址、四天王寺址、皇福寺址、仁旺洞寺址(傳仁容寺址)、味呑寺址、昌林寺址といった慶州一帯の主な寺院跡が発掘され、皇龍寺の復元研究が行われた。2014年からは月城と皇龍寺址周辺が本格的に発掘され、都城の構造に関する研究が進展した。この間、都城に関連する文献史学、考古学、古建築学など諸分野における論文の発表や、学術大会の開催が行われ、これらの成果が相互に比較・検討されたことで、研究にさらなる進歩が見られた。

第1期 ： 新羅都城研究の草創～初期（1902～1945年）

慶州の遺跡が最初に世間に紹介されたのは、1902年、関野貞によってである。その

後、1906年に今西龍がこれを補完し、その全容が明らかになり始めた[1]。今西は慶州市街地の西川と北川の小金剛山から韮山までの範囲を調査し、東西道路や街路などに言及し、都城時代の痕跡であると最初に認識した[2]。

都城遺跡の中心地である月城は、1914年に鳥居龍蔵によって城壁が発掘されたが、この時は先史時代の遺跡に重点が置かれ、都城の重要性が十分に認識されなかった。1920年代には、藤田元春と藤島亥治郎による具体的な都城研究が行われ、1937年には斎藤忠が北川辺の発掘で見つかった長屋建物を北宮址と推定して宮廊址と命名し、都城の形態を一部推定する契機となった。

藤田元春は、1920年代に新羅都城が井田状に構成されていると認識し、慶州に関する研究を進めた。藤田は慶州邑城の調査によって坊の規模を算出した[3]。さらに日本の古代都市の大阪地域区画との類似点を見出し、それらを合わせながら慶州について研究を進めた。彼は、慶州邑城の規模を逆算し、1坊の大きさが400×400尺（約140m）だったと結論付けた。こうした古代新羅の坊に対する規格化の試みは、当時の学界において画期的なものであったと考えられる。彼が計測した範囲は限られていたため、全体的な範囲については確認できなかったが、藤島治治郎の研究に大きな影響を与えたものと考えられる。

藤島亥治郎は1929年に東京帝国大学の指示の下で調査を行った[4]。彼は慶州平野の1/1,200地籍図を使用し、1町を400尺と見て1町を1坊として、新羅王京の復元図作業を行った。復元案は月城と皇龍寺の間を通る南北大路を中心に、左京と右京に分けられ、左京は東西7,120尺×南北12,860尺、右京は東西7,280尺×南北13,220尺に復元された。その範囲では北・西・南川を境とし、東には普門寺一帯までとした。左京と右京に差がある理由は、都市計画がある時期に同時に行われたのではなく、異なる時期に、数回にわたって実施されたと考えた。復原図は北川の北側と一部地域で坊の構造に一部誤差があるが、王京研究の基礎を築いた論文と評価されており、現在までも発掘資料に活用されている。しかし、その後、王京を現在の市街地内に縮小、再配置した図面も提示された。

斎藤忠は、慶州宮城を中心に、王京遺跡は街区条坊の遺制であると考えた[5]。現存する大小の道路や田畑の境界となる畦道水溝が、東西南北に整然と区画されている例が多く、特に水田の区画に至るまで整然としているというのである。また石畳が畑の土手に接して長く積まれているのは、当時の宅墻の一部であるとしている[6]。

第2期 ： 新羅都城研究の停滞期（1946～1971年）

光復（1945年8月15日）と韓国戦争の後、新羅王京に関する論文は1本のみで[7]、既存の研究に関する内容を紹介する程度であり、慶州の遺跡発掘は壺衍塚、銀鈴塚などの古墳調査に限られていた。しかし、日本では継続的な新羅都城研究が行われた。村上四男や井上秀雄、末松保和は『梁書』に見られる6喙評・6部・6畿停の解釈を通じ王都と王畿の範囲を論じ、高麗初期の慶州大都督府との範囲解釈に相互見解の相違がある。しかし、王京の全般的な変遷と計画都市建設については接近しなかった[8]。

第3期 ： 新羅都城研究の発展期（1972～1996年）

1971年に策定された慶州観光合開発計画により、慶州観光業が活性化し始めた。同計画では、すでに公表されていた藤島亥治郎の図面を利用した様々な復元案が示された。また、雁鴨池や皇龍寺址の調査も行われ、1976年から1983年にかけて行われた皇龍寺址の発掘結果が報告された。1987年には、皇龍寺址東側の王京S1E1地区でも道路や住居跡が確認され、この地域における「坊」の研究が具体化し始めた。

文献を中心に、初期の王京を形成した新羅六部と、その前身とされる斯盧六村との関係や位置比定を焦点をあてた論文が存在する。この論文においては、六部の位置が慶州圏内または慶北地域に限定されるのかについての議論が続いている[9]。

尹武炳は、1972年と1987年に、北川の南側にある殿廊址(推定北宮址)と月城を結ぶ中心に、朱雀大路が存在した可能性を提唱した[10]。また尹氏は、坊の面積を160m×140mに復元することが妥当であると考えた。後に、この考え方を基に、慶州市内を規格化した構造が35坊で提示された。このアイデアは、中国の長安城の概念に基づいて復元を試みたものであり、これに基づく論文も発表された[11]。

尹張燮は、坊里区画が統一新羅時代以後、皇龍寺一帯を中心に施行されはじめ、この時期において、坊の規模は高麗尺で東西400尺、南北360~480尺であったと報告している。尹氏は、先行する研究者とは異なり、坊の南北長が地域によって異なる可能性があるという仮説を提唱した。また、時期が下るにつれ坊里区画の配列がやや不規則となり、王京内部が定型化された碁盤の形のように区画されることはなかったと推定した。さらに、坊里区の跡は残っていないが、北川以北まで市街地が広がったと考えられることを述べた[12]。

張順鏞は、地籍図を利用し、北の境界は栢栗寺付近まで、東は孝恭王陵が位置するポガッ山西麓、東南は四天王寺と望徳寺まで、西は西川、西南の境界は三陵地域とし、人口は15～20万人程度と推定した[13]。

鬼頭清明は、藤島亥治郎の地籍図を用いて、坊里区画の跡が確認しにくい地域について、四天王寺や明活山付近、南川以南の西南部は、坊里区画が施行されたとしても、部分的な拡張に過ぎず、意味を付与しにくいという意見を提起した[14]。

金秉模は坊里の大きさは東西460東魏尺(160m)、南北400東魏尺(140m)であり、坊里の数は360坊であり、軸と規模が共に一定に作図されているが、王京の全体規模は東西3.9km、南北4.3kmになるとした[15]。

閔徳植は、新羅の王京が南北長5,600m、東西幅5,593mの正方形に近い形であり、王京の周囲は東魏尺で470尺(約63,960尺または10,660歩)で35.533里になるとしている。また各坊の規模は東魏尺で南北400尺(約140m)、東西470尺(約164.5m)に分割され、王京全体は南北40坊、東西34坊から構成されているとし、『三国遺事』に見える1360坊が正確な数字であったと考えた。さらに新羅王京は、中国の中央の宮殿の原則に従って建設されたとし、唐の長安城や日本の平城京、渤海の東京城と同様に、道路を別途に区画しなかった推定し、道路が重なった坊は、道路の幅の分だけ小さくなり、他の都城とは異なり、新羅王京に古墳が数多くあることから、新京建設のように一時的な事業ではなく、既存の形態に中央宮殿の原則を取る王京制を初めて採択したためだと考えた。一方、統一期にあたる文武王代になると、唐の長安城の影響を受け、都城の改築が行われたとし、北宮とされる城東洞殿廊址が築かれたと推定した。このような条坊制は、三国時代の都城や小京でも一部実施された痕跡があり、統一新羅時代には都城だけでなく、小京や州治などの地方都市にまで拡大実施されたとした[16]。

東潮・田中俊明(1988)、田中俊明(1991)、亀田博(1993)などは、中国の長安城と日本の平城京の構造を参考に、朱雀大路を含む新羅都城の復元案を提示した[17]。

以上見てきたように、中国や日本の都城制に合わせて、新羅都城には「朱雀大路」が都心中央に位置し、月城と推定される北宮を中心に方形化した図案が示されている。また『三国遺事』の記録に基づいて慶州全域を360坊あるいは1360坊に分割し、日本平城京の1坊16坪制を導入・活用し、地籍図を用いて東魏尺に合わせる作業が進められた。このような都市構造は、新羅の三国統一(676年)による王権の専制化とそれに伴う変化を示すものと考えられている。

第4期 ： 新羅都城研究の活性期 (1997年～現在)

第4期に区分できる最大の要因は、国立慶州文化財研究所が1987年から皇龍寺址の東側王京S1E1地区で、道路遺跡や住居址などの1坊全体の遺構調査を行ったことである。1996年までに、一次全面露出調査が完了した。その後2000年代初めまで、東川洞7B/L

宅地区域、西部洞19番地、仁旺洞556番地など、市内の随所で都市遺跡の発掘が続けられ、都城の構造を把握できる多くの資料が提供されはじめた。2000年代初めには、新羅王京発掘と関連する資料が、次の報告書に収録されている[18]。

このような資料をもとに、禹成勳は建築学的観点から新羅王京を分析した。まず、地籍図と地形図（1917年度）を重ねて、1/10,000の縮尺で王京を復原しようと試みた。周尺は19.91cmで、一坊の大きさが四方100歩（800尺）、大路幅は80尺で、道路幅に道路幅によって規模の異なる地域があることが分かった。復元図面によると、地域ごとに坊の大きさが異なり、同じ規模で計画されたものではないことが示された。この図面により、従来の藤島亥治郎の図面では把握できなかった北川北側の地割りが発見され、現在でも多くの研究者が古代市街地の区画研究の資料として活用している[19]。

朴方龍は、都城の変化が3期に分けられるとし、初期の宮殿は西南山一帯が有力であったと推定した。また王京は360の坊に分かれ、大中小の道路が走っており、既説によって示された城東洞の殿址と月城北門を結ぶ朱雀大路は存在しなかった可能性があると考えた。特に、469年の坊里名を定めた記事を史実と認め、5世紀半ばには坊制が実施されていたと捉えた。朴方龍は禹成勳の図面に基づいて自身の復元図を作成し、国立慶州博物館境内で確認された大路が[20]、藤島亥治郎が設定した左京と右京に分かれる中央地域と判断され、ここを王京大路として設定した[21]。

李起鳳は、慶州地域内の1,360坊の記録が事実であり、これは王都ではなく六部を合わせた王京全体であったとし、王京の範囲は四方約5.4km、5.5kmであると主張した[22]。山田隆文は、既存の慶州中心道路を朴方龍が主張した大路として、方形の都城構造に合わせて、周辺は1次および2次にわたって追加する案を示した[23]。

国立慶州文化財研所は2002年、1987年から進めてきた皇龍寺址東側のS1E1王京遺跡発掘を完了し、16年間の発掘結果を『新羅王京Ⅰ』報告書として刊行する。2003年にはこれを記念した学術大会「新羅王京調査の成果と意義」が開催され、王京研究が活発化する。

李恩碩(2003外)は、王京S1E1地区と仁旺洞556番地、西部洞19番地発掘結果を基に、新羅王京の段階的発展論を考古学的証拠として提示した。新羅の王京は、全域が同時に道路に区画されたのではなく、6世紀半ばから皇龍寺を中心に1次都市区画となり、以後7世紀末まで漸進的な拡大が行われた。また、坊制は最初から完全ではなく、慶州邑城のある西便地域と北川北側、月城南側地域へと次第に拡大し、8世紀初めになってようやく坊制が完成したが、この過程で角度が傾いた現象が生じたのは、自然環境に合わせて道路を築造したためだとした。また「金入宅」は「金殿(堂)入宅」または「金人入宅」の略であり、「個人が所有する寺院を備えた住宅」と解釈されるとした[24]。

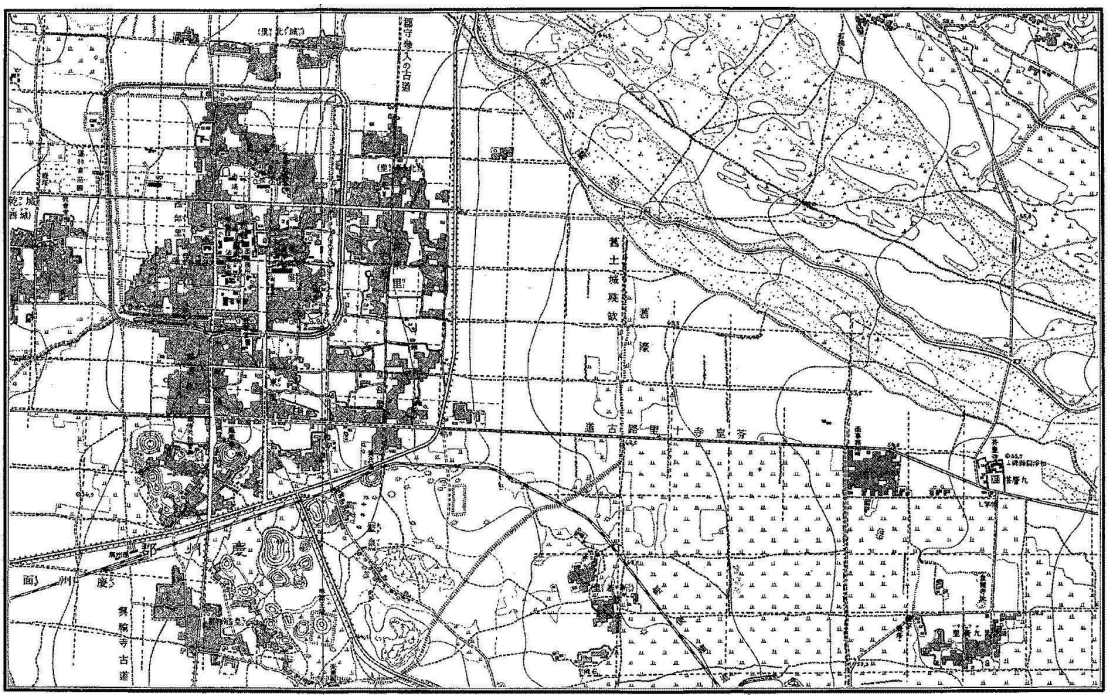


図 1 慶州土地區画圖（藤田元春1929）

図 2 新羅王京復原案（藤島亥治郎1930）

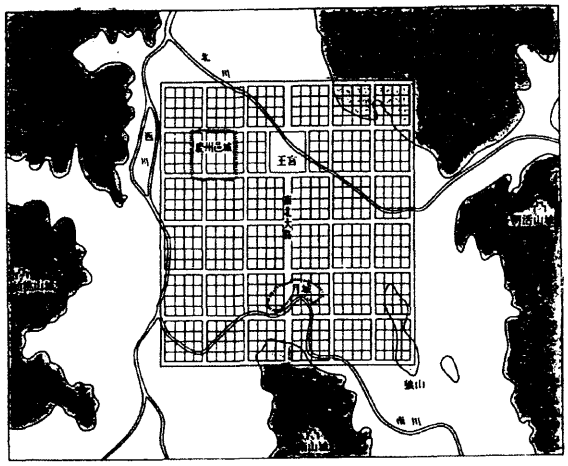


図 3 新羅王京復原案（尹武炳1987）

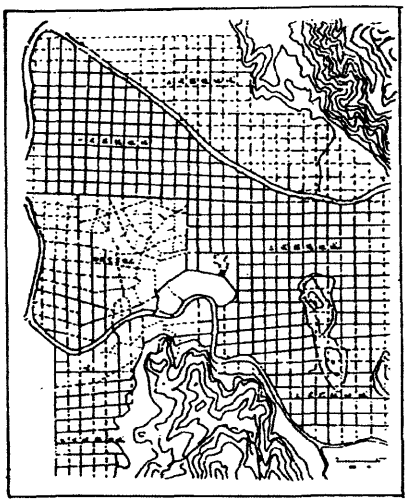


図 4 新羅王京復原案（張順鏞1976）

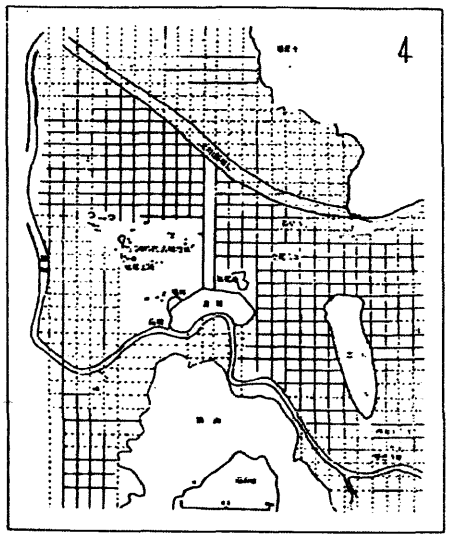


図 5 新羅王京復原案（金秉模1984）

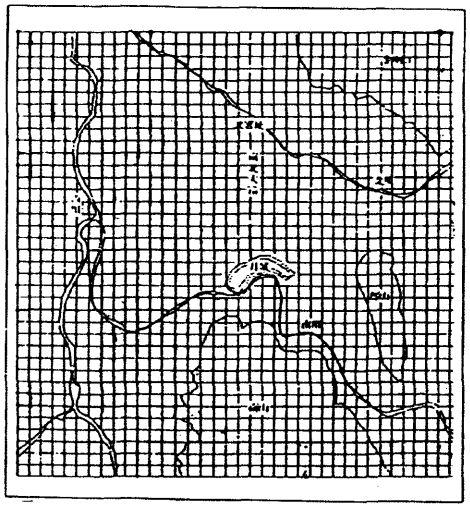


図 6 新羅王京復原案（閔德植1989）

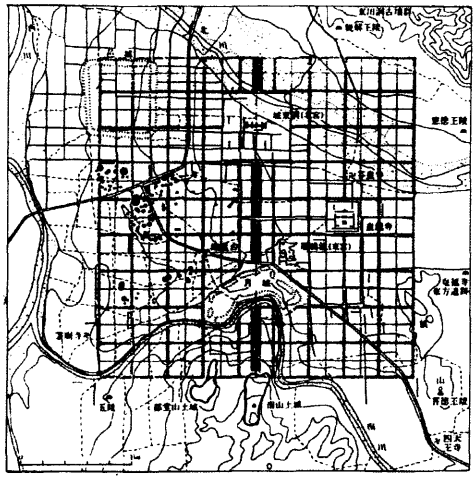


図 7 新羅王京復原案（田中俊明1988）

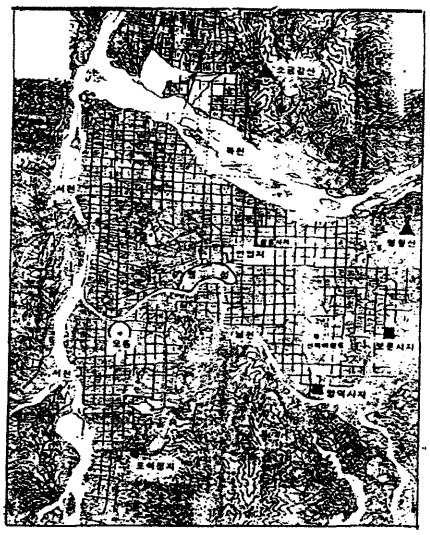


図 8 新羅王京復原案（禹成勳1996）

図 9 新羅王京復原案（藤島亥治郎1980修正）

図 10 新羅王京復原案（山田隆文2002）

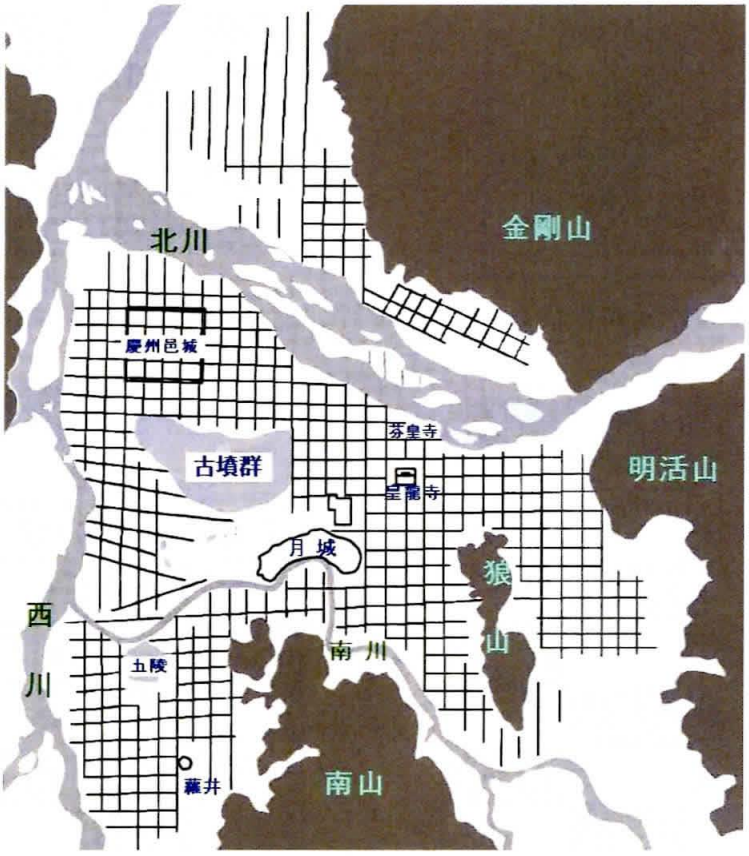


図 11 新羅王京復原案（李恩碩2004）

黄仁鎬は、『新羅王京Ⅰ』の発刊と報告書の内容から、東魏尺（35.5cm）の規模で坊の大きさを設定し、住宅地が長400尺（約142m）、道路が長60尺（約21.3m）であるという仮説を示した。坊は、16坊制の分割による大・中・小路に区切られる構造ではなく、最初から宅地と道路が均等に配列されており、これは発掘調査の結果から裏付けられるとした[25]。第2段階の都城拡張時代（7世紀）には道路の幅が40歩（約12m）に減り、第3段階の8世紀代以降は道路の幅が20歩（約6m）であり、坊の規模も変わり430×330歩（約130×100m）に変化したと言える。現在では、この案が坊区画に最も符合すると考えられているが、道路区画において区域別に若干の差異が見られる場合もある。

古代都城研究が盛んになると、国立文化財研究所は日本奈良文化財研究所と2005年から「日本古代都城と韓国王京の形成と発展に関する共同研究」を締結し、研究活性化に寄与することになる。

梁正錫は、2008年に発表された皇龍寺の建設に関する史料とその発掘結果を基に、新羅都城と藤原京の比較研究を行った。彼は、藤原京の太極殿と大官大寺の建立において、新羅王京と類似した都市計画が用いられていたと推定し、両者が同様の象徴的な意味合いを持つことを示唆した。その後も新羅王京に関する包括的な論文を継続的に発表しながら、多岐にわたる研究を進めている[26]。

全徳在は、発掘資料と歴史資料を比較検討し、王京の構造は里坊制で構成され、王京小論を主張し、北宮を永昌宮と推定した[27]。

李賢泰も里坊制の主張をし、その開始時期は520年まで遡ると考え、「南宮之印」銘記と国立慶州博物館から出土した1点から、ここが南宮であり、官庁である可能性があることを示唆した。また、道路が存在することから、王宮内部にも道路が存在した可能性があると考えている[28]。

皇甫垠叔は、6世紀中葉から統一以前までの王京の形成期、7世紀後半、すなわち統一以後から8世紀中半までの王京の拡散期、最後に8世紀後半以後を王京の完成期に区分し、初期の王城である金城は隍城洞地域にあったと推定した[29]。李康根は月城の北側にあり、北宮址という宮殿址について明堂である可能性を示した[30]。

李相俊は、最初の王京開発は6世紀半ばに施行され、新宮建設予定範囲に限定されていたと主張する。中古期を経て、皇龍寺址の西側が最初に開発され、その後、段階的に東側と狼山の上半部を含む南側が開発された。7世紀後半から8世紀半ばまでの期間は、宮内の重修や多数の寺刹の建立が行われた時期であり、王京全体に大規模な土木事業が実施されたと考えられている。一方、東川洞については従来、研究者の多くが8世紀以降の3段階にわたる王京開発と関連づけてきた。しかし近年における東川洞一帯の発掘調査によって、道路、塀、建物跡などの王京関連遺構と、7世紀代に編年さ

れる多数の遺物が出土したことから、この地域においては7世紀代に坊里制が施行されていた可能性があることが示唆されている[31]。

車順喆は、坊里の造成期をやや早期に設定しており、月城と隣接した仁旺洞一帯は5世紀末から6世紀に、皇龍寺址が位置する九黄洞一帯は6世紀半ば以降、西部洞一帯は7世紀後半、東川洞一帯は7世紀末から9世紀、隍城洞一帯は8世紀後半以降漸進的に拡大していったとしている。また東川洞一帯の坊里構造は、皇龍寺一帯とは異なる方向に傾いているが、これは当時の自然環境を反映したものだとした[32]。

張企明は、既発表の資料と論文を結合し、政治・行政の中心地である月城をはじめとする王宮構造が次第に改装され、王宮(月城正宮、東宮、南宮)+離宮の宮城体系が作られたと見ている[33]。

金敬烈は、東宮発掘を検討し、宮殿址が北宮であり、国立慶州博物館の敷地が南宮であるという主張に疑問点を提起した。そして現在の東宮西側のA建物址については王の政事と関連した権威建物と判断し、東宮付属建物と生活空間区域は現月池東側地域と判断した[34]。

2014年には文化財庁新羅王京核心遺跡復原整備事業推進団の発足、慶州中心地域の学術発掘調査や整備事業が活発に行われている。国立慶州文化財研究所、国立慶州博物館、新羅文化遺産研究院などは、月城、王京、東宮、皇龍寺関連の遺跡に対する調査が活性化するにつれ、都市遺跡発掘の成果による様々な学術大会を毎年開催している。

2010年には「韓国の都城国際学術大会」、2011年には「東アジアの中の新羅都城復原問題」、2012年には「東アジアの古代宮城と新羅王京と月池」、2013年には「東宮と月池」をテーマに韓中日国際学術大会」、2015年には「慶州月城の発掘調査と世界遺産の発掘整備事例」、「新羅中心区域の坊整備と活用」、「慶州財買井活用案のための学術シンポジウム」などが開催された。

2016年には「文献で見る新羅の王京と月城」と「皇龍寺址発掘調査40周年紀念国際学術大会」、2017年には「東アジア古代都城の建築儀礼と月城垓字木簡」と「文献で見る新羅の王京と月城」、2018年には「月城古環境復原研究国際学術大会」、 2019年には「新羅王京と浦項中城里新羅碑」、「新羅王京と月城の空間と機能」、「古代都城と月城の空間構造と景観」、「新羅王京から高麗開京に」、「慶州月城と新羅王京の古地形」、2020年には「統一新羅の宮苑池－東宮と月池の調査と研究」などが開催された。

2021年には「慶州地域の古地形研究の現況と課題」、「月城西城壁の発掘調査専門家 フォーラム」、「新羅王京の旧水路」、2022年には「新羅加耶の土木技術」、「新

羅寺刹の建築技術と生活文化」、「新羅王京の都市構造と慶州月城」、「慶州東宮と月池-研究の現段階と争点」、「新羅の住居文化」などが開催されるなど、都城関連の学術大会が毎年2～3回開催されてきた。

研究史の内容を見ると、新羅都城の方格都市区画を使用する基本的な「尺度」は高麗(東魏)尺と考えられることが多い。また553年の皇龍寺建立以後、都城が段階的に発展していくことには、発掘と研究結果の両方で共通した意見として集められる。もちろん、研究者の間に一部の年差はある。しかし、唐尺が受容された統一新羅時代にも東魏尺が使われ続けたのか、歩や里の数値を正確に算定できるのかについては、今後の課題として残っている。そして、歴史資料に見られる朝元殿をはじめとする各種正殿の位置考証も解決すべき問題である。

1) 慶州研究は、1945年までに進展し、その全般的な内容は以下の書籍で詳細に説明されている。
国立慶州文化財研究所 2010『慶州 月城 基礎学術調査 報告書Ⅰ研究報告書』pp34-40

2) 李富五・橋本 繁 譯 2008『金西 龍의 新羅史研究』p111

3) 藤田元春 1929「都城考」『尺度綜考』刀江書院
新羅王京究史は次の発表によく整理・紹介されており、一部引き用とする。
梁正錫 2012「新羅王京의 研究史的 検討」『皇龍寺 復原研究フォーラム』国立文化財研究所・慶州市

4) 藤島亥治郎 1930『朝鮮建築史論』;1982 景仁文化社 覆刻本

5) 齊藤忠 1936「新羅の王京跡」『夢殿』15 ; 1973『新羅文化論攷』吉川弘文館 pp114-127

6) 斎藤は坊に区切られた都市遺跡の発掘は行っていなかったものの、既に石築坊の存在を理解しており、その後1937年の殿廊址の調査の際に塀を明らかにしている。

7) 李弘稙 1959「新羅の東京と条坊」『地方行政』12月号

8) 新羅史全般にわたって様々な研究を行った。
末松保和 1954「梁書新羅傳考」『新羅史の諸問題』東京 東洋文庫
村上四男 1962「新羅王都顧略」『朝鮮学報』24
井上秀雄 1968「新羅 王畿の構成」『朝鮮学報』49 朝鮮学会

9) 文暻鉉 1973「新羅国 形成過程의 研究」『大邱史学』6 大邱史学会
金元龍 1976「斯盧六村과 慶州古墳」 『歴史学報』70 歴史学会
李丙燾 1979「新羅의 起源問題」『韓国古代史研究』博英社
李鍾旭 1980「新羅上古時代의 六村과 六部」『眞檀学報』49 眞檀学会
崔在錫 1987「新羅의 六村・六部」『東洋学』16 檀国大学校 東洋学研究所
吳英勳 1987「新羅王京에 대한 考察-成立과 発展을 中心으로-」東国大学校 碩士学位論文

10) 尹武炳・金正基 1972「歴史都市 慶州의 保存에 대한 調査」『文化財의 科学的 保存에 대한 研究Ⅰ』

11) 尹武炳 1987「新羅王京의 坊制」『斗溪 李丙燾博士 九旬記念 韓国史論叢』

12) 現在の発掘結果に最も合致する復元案を提示している。

尹張燮 1973「古新羅建築」「統一新羅建築」『韓国建築史』東明社

13) 張順鏞 1976「新羅王京의 都市計画에 関한 研究」ソウル大学校 碩士学位論文 pp59-79

14) 鬼頭清明 1979「新羅における都城制の発達」『朝鮮歴史論集(上)』龍溪書舎

15) 金秉模 1984「都市計画」『歴史都市 慶州』pp131-134

16) 閔德植 1986「新羅 王京의 都市設計와 運營에 관한 考察」『白山学報』33 pp11-12
1989「新羅 王京의 都市計画에 관한 試考」(上・下)『史叢』35・36

17) 田中俊明 1992「新羅における王京の成立」『朝鮮史研究会論文集』30

18) 国立慶州文化財研究所 2002『新羅王京』発掘調査報告書Ⅰ
2003『慶州 仁旺洞 556・566番地 遺跡』発掘調査報告書
韓国文化財保護財団 2003『慶州 北門路 王京遺跡』試発掘調査報告書

19) 禹成勳 1996「新羅王京 慶州의 都市計画에 関한 研究」成均館大学校 建築工学科 碩士学位論文

20) 国立慶州博物館 2002『国立慶州博物館 新築美術館 連結通路敷地 発掘調査報告書』

21) 朴方龍は、国立慶州博物館の敷地内で確認された幅23mの南北道路を王京大路と称した。この道路は以前から「王京大路」と主張されてきたが、実際には上下層の重畳が激しく、数度にわたって改築されている。そのため、道路の重心軸が時期によって異なることが分かっている。また、道路の改修工事が行われるにつれて古い部分が削除され、同化する様相を呈している。このような事情から、発掘結果に対する正確な理解が困難である。そして道路築造以前の時期の下部にある土器などが5世紀代のものであることを主張し、469年の坊里名記事による都市計画が5世紀代には行われたと見ているが、報告書の検討の結果、道路築造は6世紀後半以降に延期されることが確認された。最近、この道路と皇龍寺の西側に連結される場所である東宮北東側を発掘した結果、東宮地域の大形建物址が道路を侵犯する部分が確認された。このように、この道路は都城大路としての役割を果たしていなかったことが証明されたのである。(国立慶州文化財研究所 2019 『東宮과月池ⅠⅡⅢ 発掘調査報告書』参照)
朴方龍 1999『新羅 都城 研究』東亞大学校 博士学位論文
2001「皇龍寺와 新羅王京의 造成」『皇龍寺의 綜合的 考察』新羅文化祭学術論文集 第22輯 東国大学校 新羅文化研究所
2013『新羅 都城』 学研文化社

22) 李起鳳 2002『新羅王京의 範圍와 区域에 대한 地理的 研究』ソウル大学校 地理学科 博士学位論文

23) 山田隆文 2002「新羅金京復原試論」『古代学研究』159

24) 李恩碩 2003「新羅王京の都市計画」『東アジアの古代都城』創立50周年記念 奈良文化財研究所学報 第66冊 研究論集XⅣ
2004「王京의 成立과 発展」『統一新羅時代考古学』第28会 韓国考古学全国大会発表集

25) 黄仁鎬 2004『慶州 王京 道路를 통해 본 新羅 都市計画 研究』東亞大学校 碩士学位論文
2006「新羅王京の変遷 -道路を通って見た都市計画-」『東アジアの古代文化』126号 古代社会研究所 東京 大和書房
2007「新羅 王京의 造営計画에 대한 一考察」『韓日文化財論集Ⅰ』国立文化財研究所・奈良文化財研究所
2009「新羅 王京의 計画都市化 過程 研究」『新羅史学報』17 新羅史学会
2010「新羅 王京 整備의 基準線과 尺度」『韓日文化財論集Ⅱ』国立文化財研究所・奈良文化財研究所
2015「新羅 王京 中心部의 都市化過程 및 坊里構造 考察」『韓国上古史学報』90

26) 梁正錫 2004『韓国 古代 正殿의 系譜와 都城制』西景文化社
2008『皇龍寺의 造營과 王權』西景文化社

2015「統一新羅王京의 都市体系」『新羅王京 中心区域 坊整備 및 活用을 위한 学術シンポジウム』

27) 全德在 2009『新羅 王京의 歴史』새문사

28) 李賢泰 2010「新羅 中古期 里坊制의 受容과 王京의 中心軸線」『先史와 古代』32 韓国古代学会
2011「新羅 南宮의 性格 -南宮之印名 기와의 出土地 分析을 中心으로-」『歴史와 現実』81
2019「1974年 国立慶州博物館敷地의 発掘調査와 成果 -道路遺構를 中心으로-」『東垣学術論文集』20

29) 皇甫垠叔 2008「新羅王京의 都市的 発達」『新羅文化』32
2009「金城의 位置 比定」『新羅文化』34

30) 李康根 2013「城東洞 殿廊址의 性格에 대한 再照明」『先史와 古代』38

31) 李相俊 2019「新羅 王京의 開発過程과 考古学的 境界」『新羅 王京과 月城의 空間과 機能』国立慶州文化財研究所・嶺南考古学会 学術大会資料集

32) 車順喆 2019「新羅 王京의 道路와 都市構造」『新羅 王京과 月城의 空間과 機能』国立慶州文化財研究所・嶺南考古学会 学術大会資料集

33) 張企明 2020「新羅 王京의 造成 原理와 運営体系」『嶺南考古学』88 嶺南考古学会

34) 金敬烈 2022「東宮과 月池 周辺 建物群의 構造와 機能에 대한 考古学的 検討 -A建物址 発掘調査成果를 中心으로」『慶州 東宮과 月池 -研究의 現段階와 争点』国立慶州博物館

第Ⅰ部　新羅の建国と王宮

第 1 章　蘿井の歴史性と性格

問題の所在

蘿井は、新羅の始祖である朴赫居世の生家であると同時に神宮址と推定されている場所で、1970年に史跡第254号に指定された。『三国遺事』には「楊山蘿井のそばには白馬と青い卵があり、その卵を割ると男の子が現れ、東川に入浴させると彼の体から光彩が放たれた」という記事があり[1)]、また、『三国史記』によれば、2代王の南解次次雄3年（西暦6年）に始祖廟が建てられ、その記録は480年まで登場する[2)]。

487年に神宮が建立されると、そこで祭祀が行われるようになったという記録が相次いで登場することから、蘿井と神宮は同一地域であると推定されるようになった。

2002年からは整備のための発掘が進められ、蘿井の存在が実証されたことで、注目を集めた。2005年10月に学術会議が開催され、新羅時代初期の史料と発掘資料が一致するかどうかが検討された[3)]。学術会議においては、蘿井の井戸は竪穴遺構ではなく、ある建物を建てるための施設であったと推定され、その周辺にある掘立柱をめぐらせた建物の存続時期が議論の対象となり、この建物が廃棄された後、統一新羅時代には八角基壇の建物が築造され、祭祀関連施設として用いられたと推定された。さらに時代が下り、朝鮮時代後期になると、蘿井の記録に合わせた歴史性を備えるため、碑石や礎石などを最終的に設置した遺跡として議論された。一方、調査団は小型の柱穴からB.C.1～A.D.1世紀頃の初期鐵器時代土器片が出土したことから、遺跡の記録と一致すると判断している。報告書においては、A.D.1世紀頃から竪穴遺構が7世紀代まで維持され、八角建物が神殿の役割を果たしたと結論づけられた[4)]。

報告書の発刊後、整備のための学術会議において、蘿井の歴史と符合すると認定された遺跡が認められ、それに伴う解釈が提示されたが、これまで異議を唱えていた問題には触れられずに終了した[5)]。つまり、朝鮮時代の後期に蘿井と指定された場所と位置をそのまま認め、竪穴遺構と掘立柱建物址が600年以上続き、その場所に八角形の建物址が築造され、祭祀施設が維持されてきたと認める結論が導かれた。この結果は、新羅初期の史料の信頼性と時期的な問題に対して非常に重要であり、次章で扱う

金城と月城の位置の未確定性と時期の問題にも関連しているため、この遺跡について再検討を試み、その性格を把握したい。

第１節　蘿井発掘遺跡の再検討

蘿井発掘は、新羅史研究において新たな問題点を提示した。2005年に開催された学術大会では、様々な解釈方法が示され、「これを蘿井と同じものと見なすことができるのか」という疑問が提起された。発掘結果をどのような観点から眺めるかによって解釈が完全に変わるため、より客観的な観点が必要であったことが示唆された。しかし当時の問題提起の多くは、報告書の発刊に伴い、これ以上注目されることはなかった。

1.円形の掘立柱建物跡

蘿井遺跡から発見された円形の掘立主建物跡について、中央文化財研究院は4回にわたる現場説明会や2005年の学術会議において、それが井戸である可能性を示唆した。しかしながら、2005年の学術会議における問題提起の後、国立扶余文化財研究所が2006年に発掘した軍守里寺址でも、同様の構造の竪穴が確認された[6]。すなわち、中央の竪穴遺構は、中心柱を立てるための斜道が設置されたことが証明されており、これにより遺構の性質について異論の余地はないと判断された。円形の竪穴と周辺に配置された柱穴は、この施設にかかわるものと考えられ、全体をめぐる外部木柵施設に関連する柱穴も同一の施設と見て大きな問題はないと判断された。

発掘調査の過程で、中央の柱穴を井戸と推定し、その場で廃棄されたと判断した。現場の解説資料には「井戸の場所を表す平面的な形状が割石と無紋塼を使用して作られており、廃棄の際には、燃えた割石と無紋塼が見つかり、不完全燃焼の板材で埋められた」と記述された。また井戸の廃棄も、これと同時期であると考えられた。

最終発掘報告書が2008年に刊行された後、李文炯[7]がこれについて発表し、（図2ー4）で示したように、中央の穴の遺跡を中心に周辺の柱穴群と直径14m、木槨施設（直径28m）が紀元前後に１次的に築造されたと見ている。柱穴とその周辺から出土した初期鉄器時代の豆形土器片（紀元前後）に基づいた判断である。

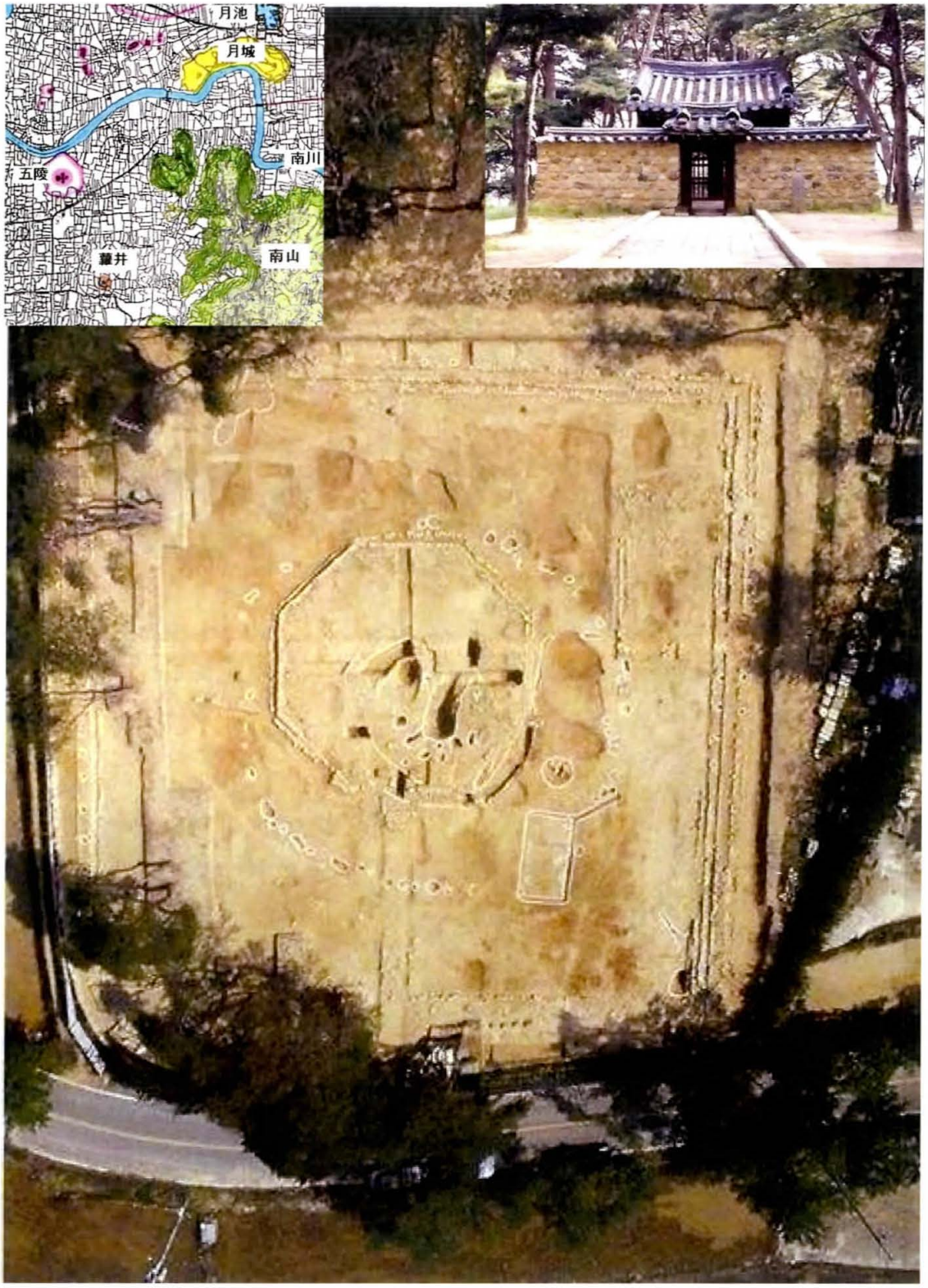


図 1 蘿井発掘後全景（上:蘿井位置図と発掘前碑閣）

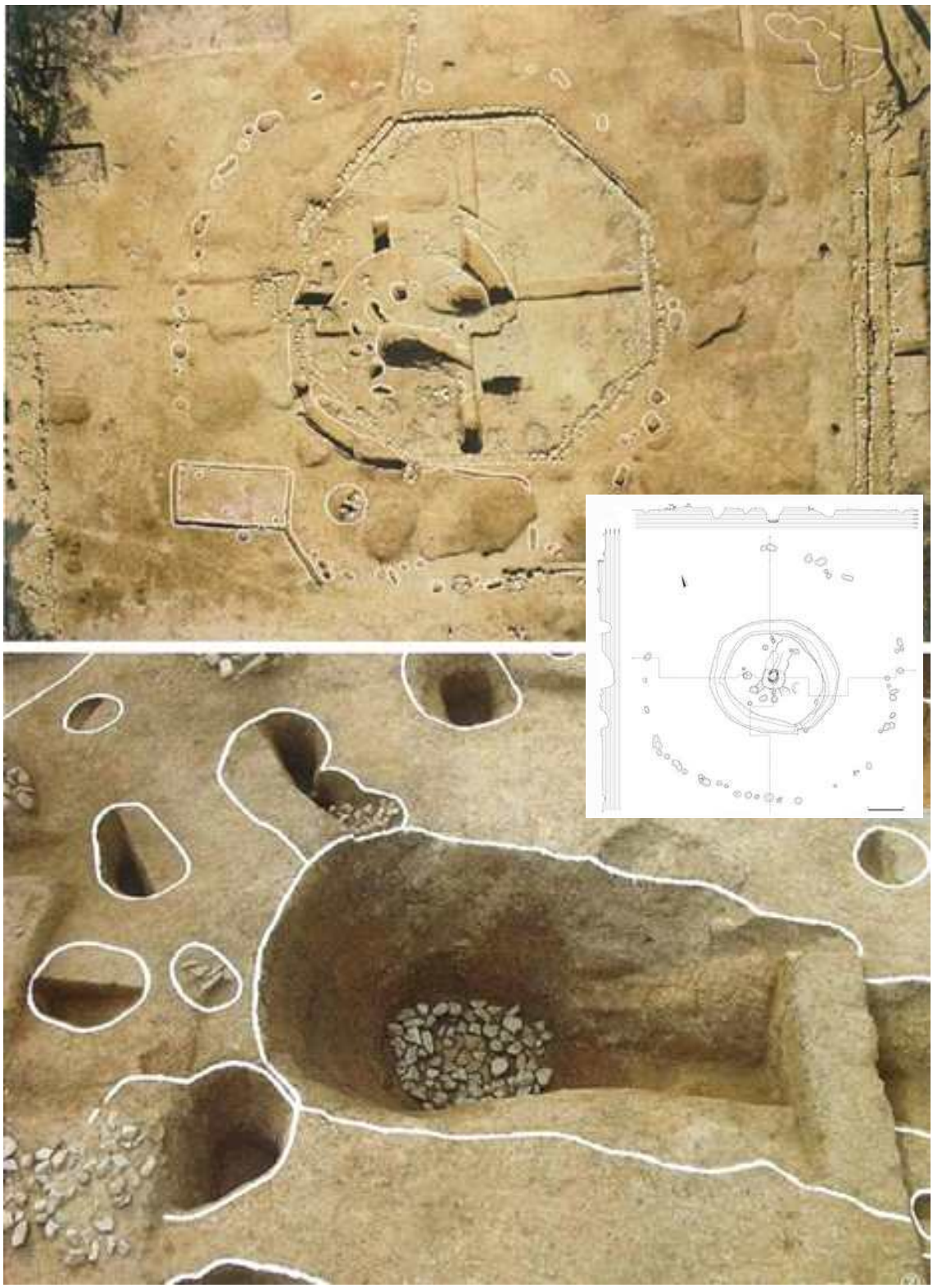


図 2 八角建物址と竪穴遺構の重複狀態（上 ： 全景　中 ： 1次竪穴遺構 平面図　　下 ： 竪穴細部）
（李文炯は紀元前後に1次竪穴遺構が築造された後、2次に心柱を立て7世紀まで使用されたと主張）

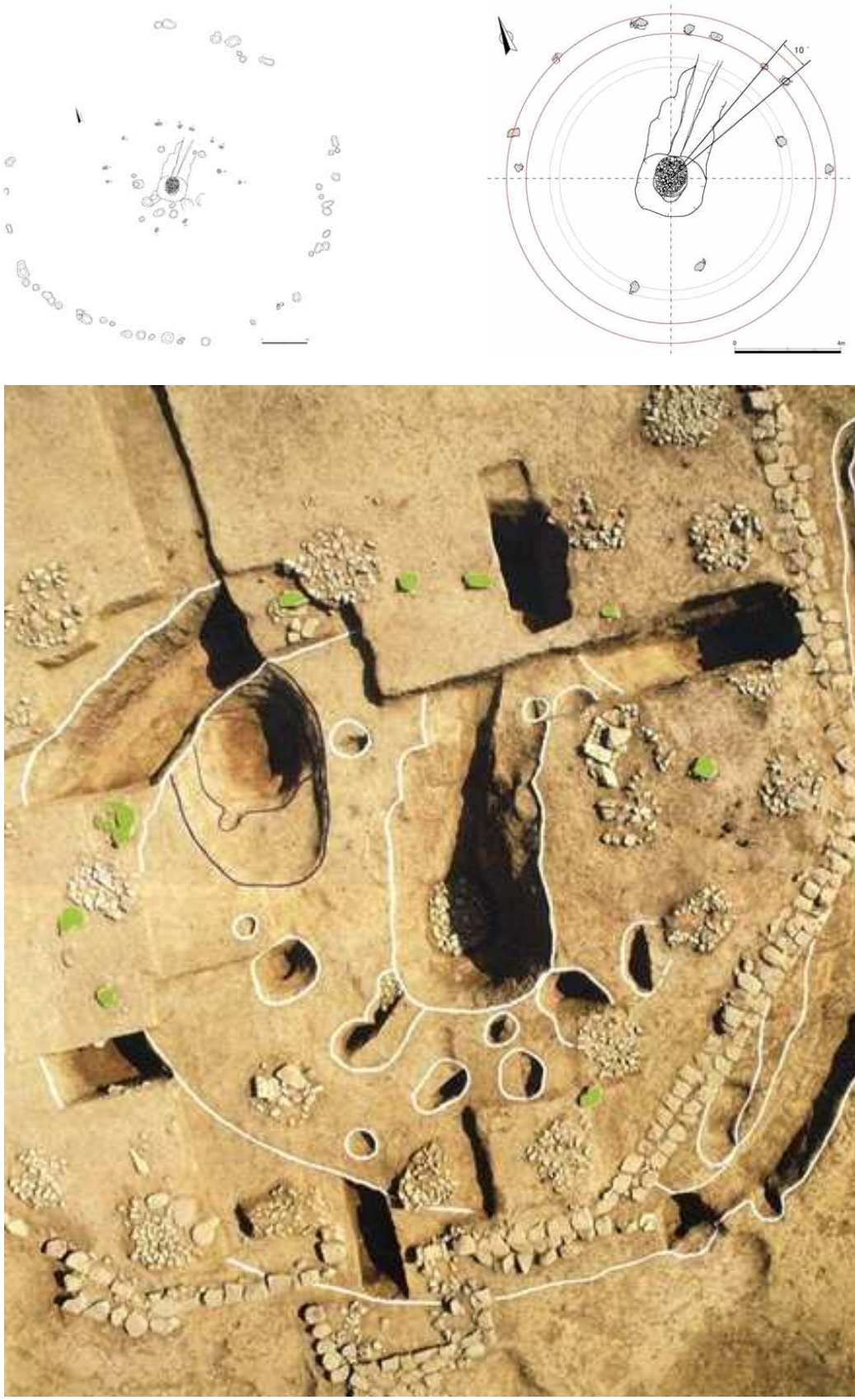


図 3 2次竪穴遺構建物址（中央掘立柱と小形楚石建物址）

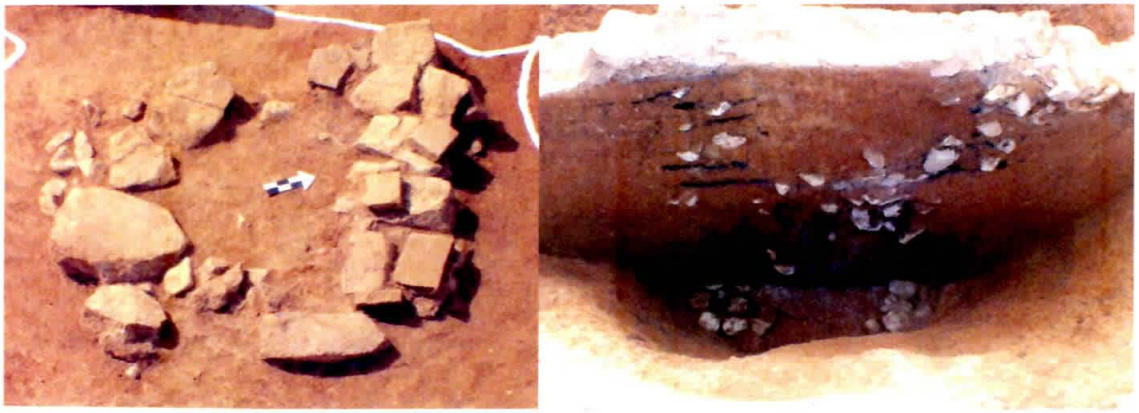


図 4 中央掘立柱と土層

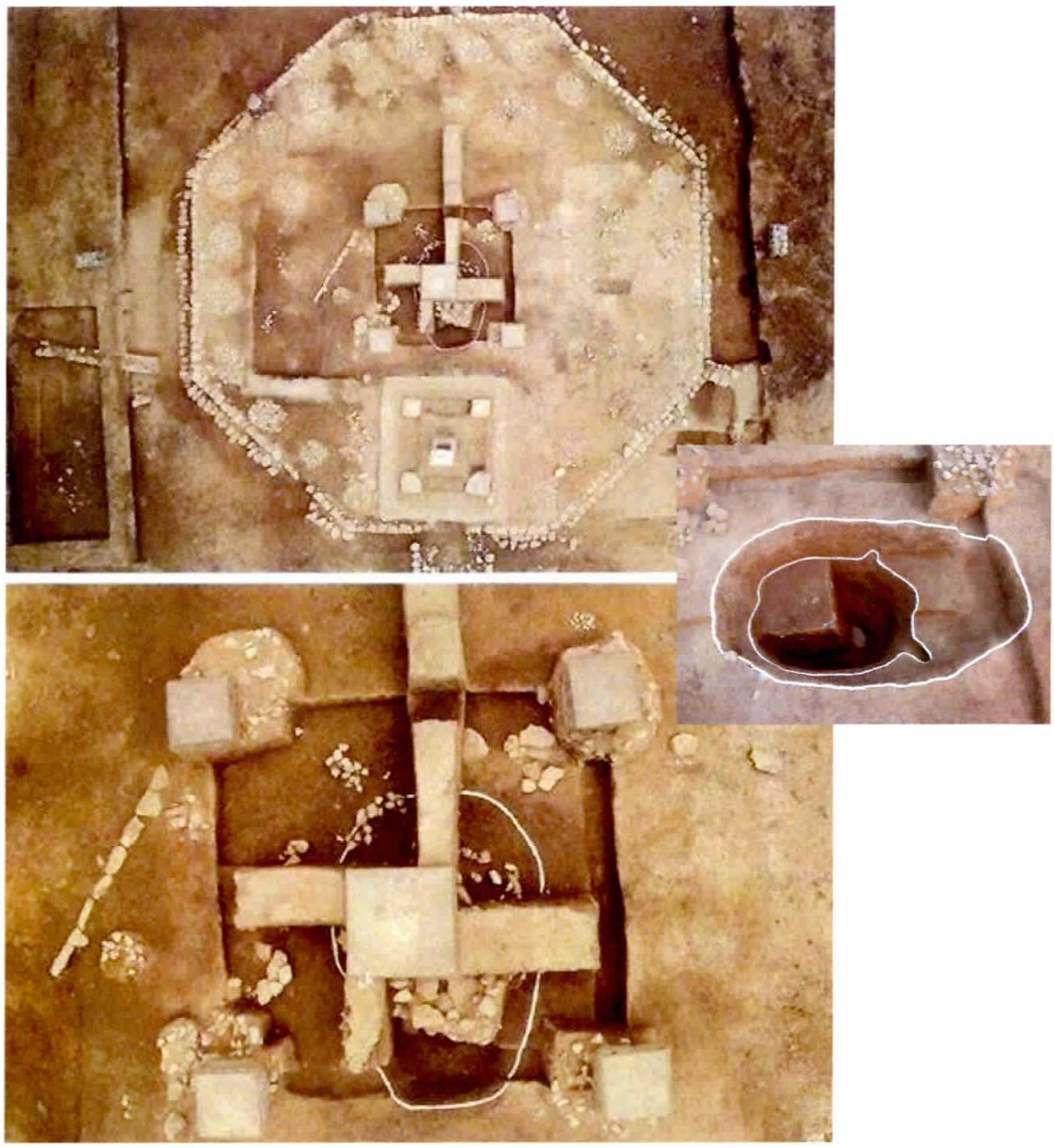


図 5 八角建物址（3次施設）と中央竪穴

そして、溝状遺構の内部からは、6世紀前半以前に編年される土器が出土したため、6世紀代に２次的に竪穴の内部に柱を立て、溝状遺構上に小型礎石を置いて築造された建物址は、7世紀まで運営されていたと推測した。

また、「儀鳳四年皆土」（679年）銘文瓦が出土したことから、八角建物は7世紀後半に築造、運営され、その中央に位置する別の竪穴もまた同時期の造成と見ている。

このように、竪穴遺構、溝状遺構、木槨施設は、１世紀から６世紀にかけて約500年間存在し、6世紀になって竪穴状遺跡が埋められ、その上に中心柱と小形礎石を使用した建物が約150年間建てられた後、八角形の建物が築造されたと主張した。この主張は、周辺から青銅器時代の住居跡と初期鉄器時代の土器片が出土しており、この時期と同様に竪穴遺構が500年余り存続していたという蘿井の歴史的な証拠に基づいているため、この時期に合わせるために調整された結果である。

そこで、この解釈に関する問題点を全て提示してみたいと思う。

① 紀元前後の溝状遺溝において、中央竪穴と周辺の主穴に柱を立てて建物を建てる場合、その維持期間について疑問が残されている。このような遺溝は露出しているため、雨水の浸入や自然風化によって、建物の維持に10年以上かかるかどうかが不明である。また、全体的に屋根を建てて保護措置を施したとしても、地下水の浸入などにより凹状を維持することは困難である。さらに、風化した岩盤層でも耐え難い状況である。

② 約500年間使用された竪穴遺構に2次的に大きな柱を立てて、溝状遺構上に小さな礎石の建物を建てたとされたが、一方では竪穴後方の斜道と溝状遺跡が連結されているが、時期的に差があると記述している。この意味は1次中心柱を立てる時は斜道が使われ直ちに埋められたが、その後、溝状遺構が作られ5世紀末から6世紀初めまで使われ、ここを覆って小さな建物を作ったと解釈できる。しかし、溝状遺構と斜道が同時に使用されたものと見なければならない。最初の発掘時には同時期と見なされ、解釈する際に内容が修正された。問題のある解釈である。

③ 竪穴遺構の柱座上段に使用された割石と無紋塼は、7世紀代に廃棄されたと考えられる。（図4）を見ると、中央の柱を支える補強用の土のような役割を果たしていたが、廃棄の際には固められたと思われる。図で、柱の周りに詰まったものは、柱を立てる際に使用した補充材料であると解釈されるべきである。割石材と無紋塼の破片は、柱座の周囲にのみ存在する。塼の使用年代は、5世紀末から6世紀初めまで

の遺物は確認されておらず、通常、6世紀中盤以降、統一期段階にさまざまな文様の塼が出土していることを考慮する必要がある。

④　直径28mの木柵施設は、1次施設と2次施設に加え、さらに使用が続いた可能性が示唆されている。つまり、この施設は600年以上にわたって同じ場所で使用されている可能性があるという主張がなされている。

以上のように、現在の知見では4つの条件で考古学的に証明できるものはなく、1次と2次施設が500年ないし600年以上竪穴あるいは木柱を立てて運営できる建物は、理論上あるいは現実的に不可能である。特に紀元前後に建物を建てた同じ場所に少なくとも400年が経ってそのまま使用するということは不可能である。現在、日本の伊勢神宮では、20年周期で建物の位置を変えながら、新たに木造建物を建てていることが知られている。

あらためてこの遺構について解釈すると、掘立柱を用いた大型の建物址は、1次工程と2次工程が同時に行われており、少なくとも6世紀前半以降に斜道を利用して中心柱を先に建て、周辺に小さな掘立柱を建てて中心柱を補強したものと考えられる。また、小型の礎石は中心柱周辺の円形建物を構築するために使用されたものと解釈される。周辺には、6世紀後半以降の瓦が出土するが、瓦を載せることができる構造と見るには礎石などの構造が不十分であるため、直接使われたとは考えにくい。塀の役割をする木柵も同じ時期に建てられたものと見なければならない。

溝状遺構は、大型の中心掘立柱を立てるために掘削された溝と関係があり、その目的が達成された後はすぐに埋められることで、柱が維持され、他の施設に影響を及ぼさないようになった。溝状遺構が長期にわたって使用されたなら、すべてが崩壊して維持することができなくなる。小型の礎石建物は、6世紀代の中後半以降に出現したものであり、掘立柱建物の遺構も6～7世紀代以降に多数発見されている[8)]。

結論を述べれば、築造時期ではなく工程上に見える違いが、紀元前後に築造され、7世紀まで使用されたことを主張している。この期間中存続していたとすれば、2～4世紀末に至る遺物が出土しなければならないが、全く確認されないため、強引に相互関係を結びつけている。これは、新羅初期の史料に合わせるために、遺構を時期に代入して解釈した結果である。

最近、中国でこのような構造を再考できる遺跡が確認された。梁銀景は2021年に南

京西営村南朝仏寺遺跡から発掘された木塔址の構造を研究し、地下に柱を立て、周辺は土石混築の版築技法が見られることから、5世紀前半という早い時期に築造されたものと推定した[9]。このような木塔に見られる土石混築法の伝播過程を図式化すると、南朝　→　北朝・百済　→　隋唐・新羅・日本に伝わったと考えられる。また扶余軍守里寺址に見られる構造とも関連があり、築造時期も6世紀中後半以降と推定される。このような建物構造は中国でも主に寺院や礼制建築物と考えられている。

図 6 南京西營村木塔址の地宮（心楚）
（龔巨平・梁銀景 2022）

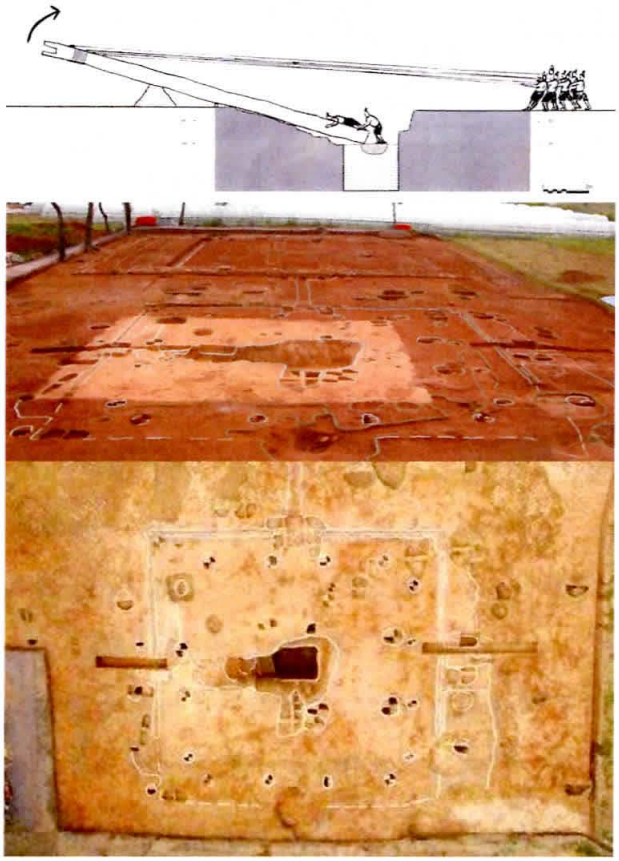


図 7 扶余軍守里木塔址の心楚（上：鄭子永作図）

2.八角建物址とその内部施設

3次施設には、八角形の建物址と中央の竪穴遺構、そして方形の石塀がある。八角形の建物址は、石垣基壇の一辺の長さが8mに達し、各3間の規模で非常に大きな建物であった。この建物址は、日本法隆寺の西円堂よりも基壇の長さが約1m以上大きく、礎石も基壇と接しているため、はるかに大きな規模の建物であると推定される。

現在、この建物の築造時期は統一新羅時代と推定されている。建物址からは「儀鳳四年皆土」（679年）の銘文瓦が出土しており、この前後期と推測されている。しかし（図5）に示すように、建物址の中央にある楕円形の穴は東南側にやや偏っており、朝

鮮時代後期の遺構と推定される。また、内部の土層からは朝鮮時代の白磁が出土した。ただし、李氏は、八角形の建物址と関連があると考えられていたが、その理由は正確には分からない。この時期には中央に掘立柱で心柱を立てる構造ではなく、地上化構造になる。朝鮮時代に作られた穴を統一新羅時代までと見ている。

また、内部の根石と基壇列根石を同時期と見るには問題がある。まず、内部に東西3間の建物址と見られる構造を把握した際、両側の間が狭く中心間が広い形式であり、八角建物址とは5°以上（少なくとも6～7°）東南側に傾いていることが確認される（図8）。そして北側には1間程度が広がっており、現存の状態から復元すると「凸」字形の構造になることが分かる。現在、南側には多くの撹乱により正確に把握されていないが「十」字型建物地と推定復元できる（図9）。これと似た構造のものとして仁旺洞寺址から重門址が確認された。「十」字型の建物構造だが、性格は違う。しかし、このような構造の建物が統一新羅時代に築造される技法で比較してみる必要がある。そして建物址21は間口3間、奥行2間で中心間が西側に一間突出し「┤」型である。柱間距離はすべて3.4mで同じである。写真で見ると「十」字型のように東側に根石が残っており、蘿井と非常に似ている[10]（図10～13）。

一方、京畿道河南において、高麗時代の官衙址でその例が確認された。河南校山洞82-2番地では、図面や写真によって「十」字型建物址が明確に現れている（図14・15）。蘿井の八角建物址発掘当時には、本人がこのような構造を持った建物だと推定した。その後発掘されたこの特異な構造の建物は、東西4間、南北3間の建物と推定されている。このような建物は一般生活施設ではなく、官庁あるいは他の役割の建物（寺院）と判断されている[11]。現在、17世紀に築造された完州松広寺の鐘楼は、「十」字型建物の中で唯一残存しており、宝物に指定されている（図16）。

第 2 節　周辺遺跡と比較

蘿井で発掘された住居関連遺構などについては、祭儀遺跡であるとされている。この点について、周辺で発掘された遺跡と比較し、その性格を確認してみたい。

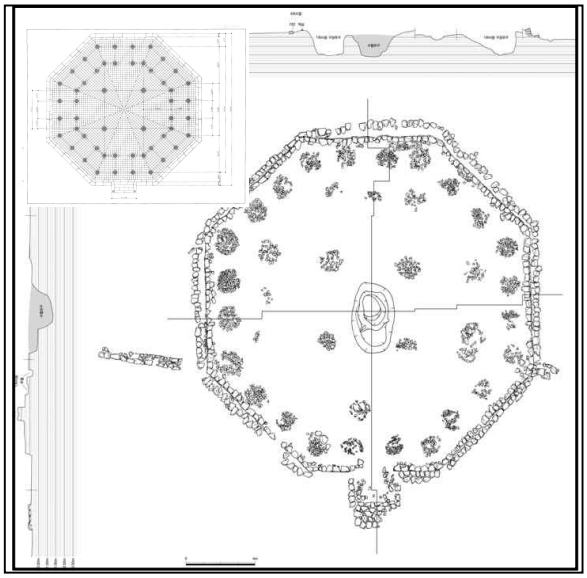


図 8　八角建物址平面図（上:推定復元図）

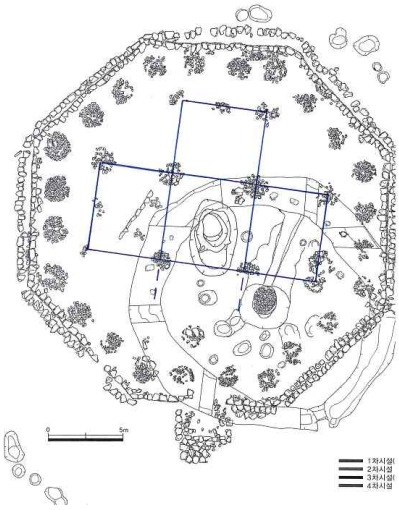


図 9 八角建物址と「十」字形建物址
重複構造（李恩碩案）

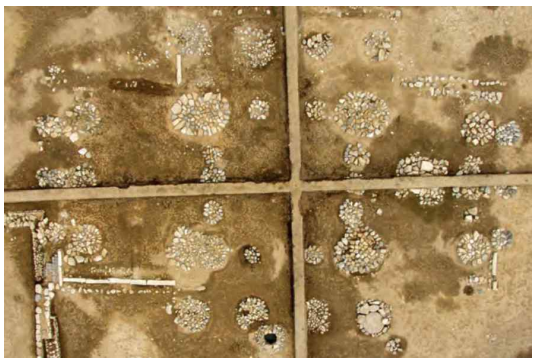


図 10 仁旺洞寺址中門址

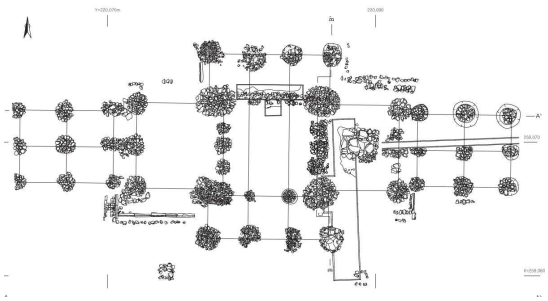


図 11 仁旺洞寺址中門址平面図

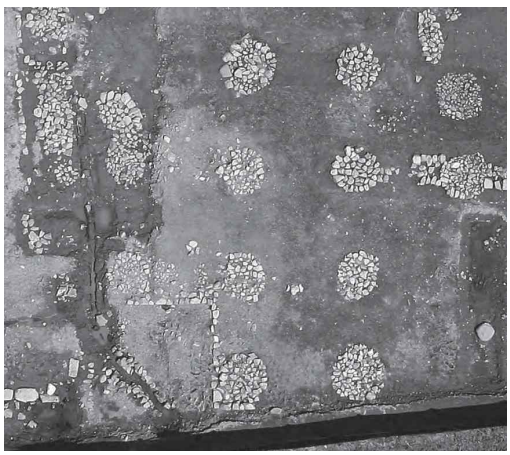


図 12 仁旺洞寺址建物址21

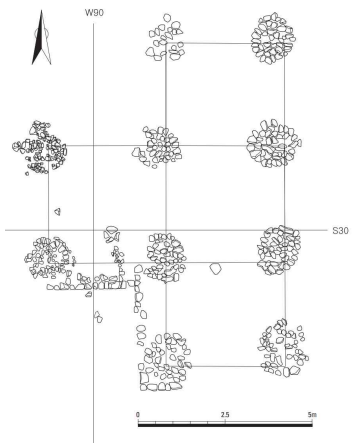


図 13 仁旺洞寺址建物址21
平面図

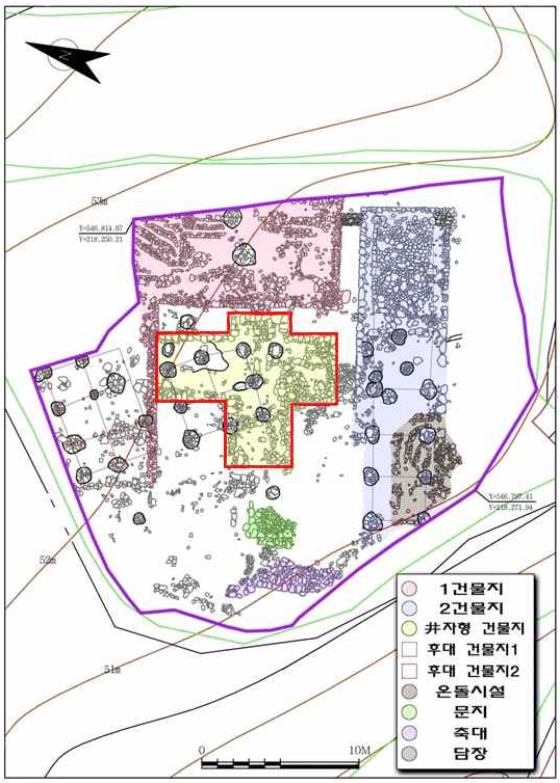


図 14 河南市校山洞82「十」字型建物址平面図

図 15 河南市校山洞82「十」字型建物址

図 16 完州松広寺の鐘楼「十」字型建物

1.蘿井の竪穴遺構

蘿井で発掘された青銅器時代の住居址と初期鉄器時代の竪穴遺構は、持続的な居住

を示す好例であり、これまでにも月精橋址の南側農地や校洞158-2番地から、円形粘土帯土器など様々な遺物が出土しており、今後、南山周辺の発掘により、多量の遺物が発見される可能性がある[12)]。

注目すべき点は、三国時代の竪穴遺構である。現在までに6つの遺構が確認されているが、出土遺物は皇南洞110号墳の時期（5世紀前半）にあたるが、皇南大塚南墳から出土した高杯片のうち、1、2点はやや遅い時期のものである。つまり、ほとんどの出土品は、時期的に大きな差異がないと考えられる。

現在確認されている竪穴遺構は、隅丸の長方形である（4.7×3.8m）。竪穴内には主穴などは確認されておらず、中央部からは炭層が集中的に出土しており、わずかに関連した人為的な行為とともに土器などが廃棄された跡が見つかっている。これらの特徴から、この遺構は祭儀行為に関連したものと推定されている。

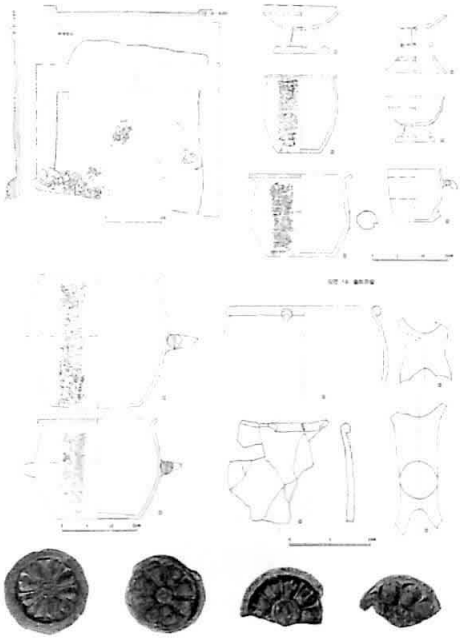


図 17 月淨橋址南側農地1号遺構と各種遺物

2.月淨橋址南側農地発掘地域

蘿井から北に1.4km離れた月淨橋址の南側の農地で発掘された遺跡・遺物において、蘿井遺跡とほぼ同時期の1号竪穴遺構が確認されている。本文では、この住居跡について次のように説明されている（図17）。

この遺構は、平面的な隅丸長方形の半竪穴住居跡であると推定される…（中略）…遺構内部は炭と焼土で覆われており、床の中央には20cm程度の石と焼土が混ざっており、爐址であったと考えられる。また西側と北側の一部では、幅約20cmの泥土が露出しており、この時期の住居跡に壁体が利用されていたことが分かった（現在の南北長は5.8m、東西幅は5.2mである）。

蘿井とこの周辺地域は、南山から南川へと続く丘陵地であり、青銅器時代から住居地として利用されていたことが分かっている。発掘調査の結果、蘿井遺跡と同様の隅

丸長方形住居址や炭が出土しており、出土遺物の時期もほぼ同じであることが注目された。ただし、出土数量には差がある。月浄橋址南側の農地からは、3～4世紀の遺構と遺物が出土したことが報告された。

また最近、南山調査時の西南山一帯には多くの土器窯跡と古墳、瓦窯跡などが調査されている点に注目しなければならない[13]。蘿井のある長倉谷は三国時代の瓦窯跡が確認され、蘿井から昌林寺址西側の田んぼでも窯構造物と同じ焼土を実見したところ、蘿井周辺に土器、瓦窯があった可能性が高い[14]。現在、ここで塀の下から出土する瓦の場合、周辺に窯が存在する可能性も高い。

したがって、月浄橋址の南側にある農地一帯や現在の蘿井は、当時の一般的な生活地域と関連していた可能性が高い。しかしながら、持続的な祭祀施設として使用されたり、400年以上存続してきたりしたとする客観的な証明資料は確認されていない。すなわち、土器が廃された地域で一部の動物の骨が出土することから、少なくとも5世紀代以降に祭祀施設と関連した遺跡が形成された可能性があると推測される。

3.天官寺址遺跡

天官寺址（史跡第340号）は、蘿井から約900m北側に位置しており、発掘調査によって多数の類似点が確認された[15]。木塔址は3×3間の規模であり、この建物が造成される前に掘立柱が確認された。年代測定の結果、5世紀後半（490年から495年）と確認され、5世紀後半から6世紀以降の土器が出土した[16]。木塔などの建物の築造は8～9世紀段階と考えられている。注目すべき点は、蘿井のように建物址下部から5～6世紀代の掘立柱建物が確認されることである（図18）。

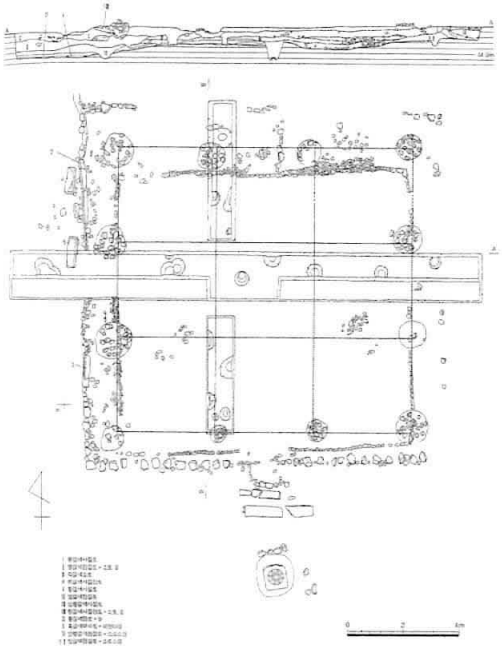


図 18 天官寺址木塔址の探索坑内柱穴

金堂址の下部でも焼土層とともに5世紀後半から6世紀代以降の土器が出土しており、西側に3.6m×2.4mの竪穴から、上記時期の土器や単板蓮華文軒丸瓦などが多量に出土

した。建物址下層から掘立主建物址、5～6世紀代の土器片の多量出土、6世紀中～後半以降に編年される多量の単板蓮華軒丸瓦などが確認され、統一新羅期およびその後の築石建物築造の様相は、蘿井で確認されたものと非常に似通っている。

すなわち、南川と蘿井一帯は一般的な生活遺構が確認される地域であり、1～5世紀前半段階まで祭祀と関連する施設は全く確認されない。塔洞、拜洞など南川南側の都市発達が7世紀後半以降の統一期段階で定型化されるという点に注目する必要があり、新羅都城の都市発展が段階的に行われ、新羅統一後、南側に市街地が拡張されることを証明する[17]。

下の表は、蘿井と南川周辺地域の発掘内容を表にまとめたものである。

表 1 蘿井と周辺遺跡の現況比較

	蘿 井	月淨橋址南側農地 (校洞162-2、163-3)	天官寺址
新石器時代		土器	
青銅器時代	住居址 7棟	土器、石器	
初期鐵器時代	粘土帶・ 把水壺・黑陶壺	高杯・円形粘土帶	
掘立柱建物址	有	無（未確認）	有
三國時代の 竪穴遺構	5世紀	3～5世紀（住居址）	5世紀以後
古新羅土器	5世紀	3～5世紀	5世紀以後
單板蓮花文軒丸瓦 (6世紀以後)	多量	小量	多量
石垣基壇建物址	八角建物址など	4間建物址	寺刹、石塔

第 3 節　蘿井遺跡と史料の関係

蘿井の発掘は、新羅史研究に多くの示唆を与えた画期的な資料である。特に八角建物が祭祀と関連した施設として意味を持つことには特別な異議がない。しかし、ここが蘿井であるという記録に基づいて、朴赫居世が生まれたという、すなわち第２代南解王の時から祭祀が行われた場所であるのか、蘿井をこの位置と見るべきかどうかという点については、現在考古学的の成果からは証明されていない[18]。

心柱外郭の柱穴からは、B.C.1世紀前後の土器片が出土した。この施設が、新羅初期に建てられた祠堂の役割を果たし、4～6世紀まで維持され、7世紀末には八角建物が築造されたと、発掘者は推定している。掘立主建物が長期間存在しても30～40年以上は無理だと考えられる。日本の神社の場合、立柱建物が20～30年ごとに場所を変えて築造するのを見ると、ここは一度だけ築造したと見るしかないであろう。400～500年間、掘立主建物の構造が続いた場合、数十回の改築が必要であり、また祭祀遺物が出土しなければならないはずである。したがって、1～4世紀末まで（5世紀以降、穴の遺跡などが一緒に存在したとすれば）、どのような遺物や遺構でも証明されなければならないが、全く確認されないという点が問題となる。

蘿井から約500m東南側には、昌林寺址と石塔が残っている。『三国遺事』によると、ここが新羅初期の宮殿があった場所であるとされている。一方、朝鮮時代には、蘿井の歴史性が浮上し、ここが五陵の一つである朴赫居世（パク・ヒョクコセ）墓と推定され、西南山一帯が全て朴（パク）氏と関連した遺跡であると朝鮮後期に指定された。しかし、最近の昌林寺および周辺の発掘では、王宮関連施設や遺物などは確認されていない[19]。

下の表は新羅王の即位直後、始祖廟に祭祀を行った南解3年（西暦6年）から親祀始祖廟の記録は炤知2年（480年）まで計20回がある[20]。その後、智證3年（502年）から親祀神宮に関する記事は55代景哀王（924年）まで21回がある。つまり、この程度の記事内容から見て、現在の蘿井が実際にその役割を果たしたとすれば、1～4世紀代の考古資料がある程度出土しなければならないが、全く確認されていない。

表 2 親祀始祖廟の一覧

王代	王名	年·月	西暦	記　事	王代	王名	年·月	西暦	記　事
2	南解	三·正	6	入始祖廟	12	沾解	二·二	247	謁始祖廟
3	儒理	二·二	25	親祀始祖廟 大赦	13	味鄒	二·二	263	親祀國祖廟 大赦
4	脫解	二·二	58	親祀始祖廟	14	儒禮	二·五	285	謁始祖廟
5	婆娑	二·二	81	親祀始祖廟（赦）	15	基臨	二·二	299	謁始祖廟
6	祇摩	二·二	113	親祀始祖廟	16	訖解	二·二	311	親祀始祖廟
7	逸聖	二·正	135	親祀始祖廟	17	奈勿	三·二	358	親祀始祖廟 紫雲盤施廟上 神雀集於廟庭
8	阿達羅	二·正	155	親祀始祖廟 大赦	18	實聖	三·二	404	親謁始祖廟
9	伐休	二·正	185	親祀始祖廟 大赦	19	訥祇	二·正	418	親謁始祖廟
10	奈解	元·七	197	謁始祖廟	20	慈悲	二·二	459	謁始祖廟
11	助賁	元·七	230	謁始祖廟	21	炤知	二·二	480	祀始祖廟

そのため、蘿井の位置が正しければ、新羅史料の初期記録と出土した遺跡・遺物とは合致しない。考古学と史料との相違が平行線をたどっている。発掘された蘿井が数百年間その場で維持されたと証明することもできず、連結されないものを合わせようとすると、遺跡解釈に問題が発生するのである。

特に地理的条件上、慶州盆地は紀元前後の段階であえて井戸を作る必要がないという点で、蘿井が果たして井戸なのかも曖昧である。三つの河川が流れており飲用水の供給は十分であり、南山には渓谷ごとに水が流れており十分な用水を供給している。坊里制が施行され、皇龍寺が築造され都市が形成される時期である6世紀代半ば以降から家屋建築物と共に都心地内に井戸を築造したことが発掘で確認される。

『新増東国輿地勝覧』（1530年）には「蘿井が慶州府南7里にある」と初めて記録がある[21]。17世紀頃、李舜相（1659～1729年）の『松菊齋集』に「蘿井祈雨文」という文章があり、そこには次のような記録がある[22]。

「蘿井という井戸に国様が誕生したのですね…中略…、ここ蘿井は完全に古跡を帯びており、霊異が大きく明るいですね…」

金相定の「東都訪古記」（1760年）には次のような記録が残っている[23]。

「蘿井を訪ねると、松林の真ん中にった。井戸は一つの石で覆われ、四隅に（小さな）石が埋められていた。平地との距離はわずかに大きな家の一間くらいに離れていた…」

記録によると、1700年代初めには特別な施設が見えないが、1760年には礎石が置かれた今のような形で築造されたことが把握できる。すなわち、およそ60年の間に蘿井の形状が変更された事実が分かる。

この時期は、花渓柳宜健が記述した「羅陵眞贋説」（1730年）と密接な関連があると考えられる[24]。17世紀末から18世紀初めには建物や他の施設が存在しておらず、その後、蘿井であることを示すための作業が行われた。当時、中央に竪穴を掘り、その後礎石を据える過程で、下部が埋没した際に白磁片が混入した可能性が高い。また、中央礎石周辺には真檀具が埋められたものと推測される。

7～8世紀に築造された八角形の建物が、祭祀施設として使用され、その後いつ廃棄されたかは不明である。「十」字型の建物が改築され、内部で祭祀行為が行われた可能性があるが、朝鮮前期まで存在していたかは不明である。蘿井碑文（1803年）によると、祠堂が世宗の時代に設立されたという記録があるが、18世紀初めにはその痕跡を見出すことはできない。この記録が事実だとすれば、壬辰倭乱（16世紀末）の際に焼失し、その後忘れられてしまった可能性もある[25]。祠堂が実際に建てられたとすれば、『新増東国輿地勝覧』（1530年）に明確に記述された可能性がある。しかし、蘿井の正統性を確立するために、1803年に碑文が作成された時にのみ文言だけが挿入されたと推測される。

このように、蘿井と呼ばれるこの場所が、新羅中期以降、祭祀行為が行われたところは明らかであるが、『三国史記』や『三国遺事』の蘿井と合致する根拠は全くない。朝鮮前期の『新増東国輿地勝覧』の際になって初めて蘿井の位置に関する記事が登場し、18世紀後半に造成されたと見るのが妥当だと考えられる[26]。

結　語

以上、新羅の蘿井について、蘿井とされる遺跡や南山周辺の遺跡などを比較し、考古学的に検討した。その内容をまとめると以下の通りである。

現在の蘿井遺跡が井戸である根拠は存在しない。また、竪穴遺構は1次遺構と2次遺構に分かれ、400年～500年もの間存続した可能性は低いと考えられる。なぜなら、1世紀に築造された遺構に再び5～6世紀代に2次遺構が築造されるということは不可能であるためだ。さらに、1世紀から4世紀末までの遺構や遺物が全く確認されていないことからも、この考えを裏付ける。軍守里寺址のように、竪穴遺構に心柱を建てる構造は、溝状遺跡と同時期に造成されたものであり、築造過程において現れる工程と考えられる。

心柱上部の割石と塼は、心柱を支えるための施設と考えられ、八角建物を築造するために心柱が除去された後、埋没したことが土層の上から確認される。

八角建物址は、内部の長方形建物址（「十」字型）とは切り合い（重複）関係と見るべきであり、八角建物が廃棄された後のある時期に、一般建物とは異なる施設が建

てられたものと理解すべきである。内部の根石は外陳の列と全く合わず、東南向きに傾く。2005年の学術会議でもこの点が問題になったが、解決されなかった。新羅の仁王洞寺址でも「十」字型と「┤」型建物址が、高麗時代にも「十」字型建物址が確認されており、重複関係の再検討が必要である。

5世紀に編年される周辺の竪穴遺構と5世紀末6世紀初頭に築造された第2次掘立主建物址との直接的な関連性に関する問題を検討してみると、第1次遺構と第2次遺構の連続性を根拠に、周辺の祭祀遺跡が400～500年もの間維持されてきたことを説明するのは不可能である。むしろ5世紀前半～半ば頃に祭祀遺構の性格を持つ竪穴遺構があり、祭祀関連施設が初めて建てられ、6世紀代半ば頃以降、心柱を持つ立柱建物が建てられたとするのが最も妥当な解釈と判断される。

これまで蘿井で見つかった八角建物の解釈において、祭儀のための建築物としては異論がないが、その用途に関しては南堂、神宮、都堂、明堂など様々な意見が提示されている[27]。宗廟制度が真徳女王（647～654年）の時に導入され、神文王（681～692年）の時に五廟制が整備された。この時期の建築物としての八角建物の解釈は妥当である。

まず、古代都城の祭場の位置から推定してみると、唐の制度を導入した7世紀中半以降は、ここが祭天儀礼を行った南郊であった可能性が指摘できる。位置的にも、王城である月城南西側に位置しており、これまで南側に特別な祭場が確認されていないという点が挙げられる。『三国遺事』によれば、418年の奈勿王金堤上条に、訥祇王が、日本に人質として赴いていた弟の美海（未斯欣）が帰ってきた際に迎えた場所が南郊であった。百官たちは30～40km南の屈歇駅（今の蔚山）まで行って出迎えたという記事もあり注目される。蘿井がある場所は、海を通じて蔚山地域からの交通路上に位置しており、慶州の関門のような場所にあたる。真平王（579～632年）の際、郊祀や廟祀に天賜玉帯を着装したという記事がある[28]。元暁法師が活動した7世紀にも南郊が、803年哀荘王が南郊に出て麦作りを観たという記事がある[29]。

百済の比流王の記事によれば、比流王10年（313年）の春正月に南郊で天地に祭祀を行ったことが記されている。王自身が割いた牲を神に捧げたとされる[30]。農作業と祭天儀式の場所が関連していると考えると、南郊が高麗・朝鮮時代に入ってから蘿井と認識された可能性が高い。

このように、新羅時代から祭祀を行う場所として伝えられてきた南郊であるが、そ

の機能については明確に伝わっていなかった。朝鮮時代になり、近くの五陵が朴赫居世の墓に指定されたことで、南郊はこれと関連した遺跡だと認識されるようになった。しかし、高麗時代において、南郊が祭祀施設を備えた特定の場所であることが、当時の位置概念によって認識され、その固有名称が記録されたと考えられる[31]。南郊は、新羅史料で5世紀代に初めて登場する一般的な郊外と解釈される傾向がある。

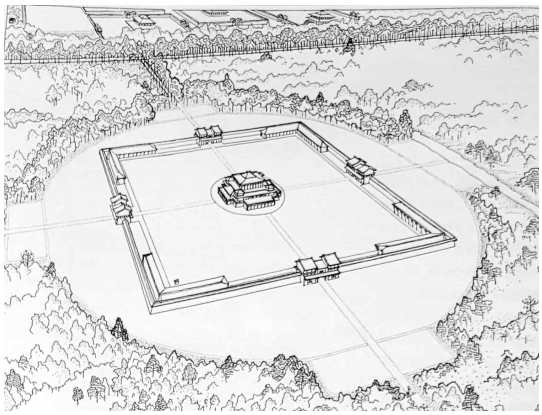


図 19 中国漢の長安城南郊禮制建築復元図
（考古 1963-9より）

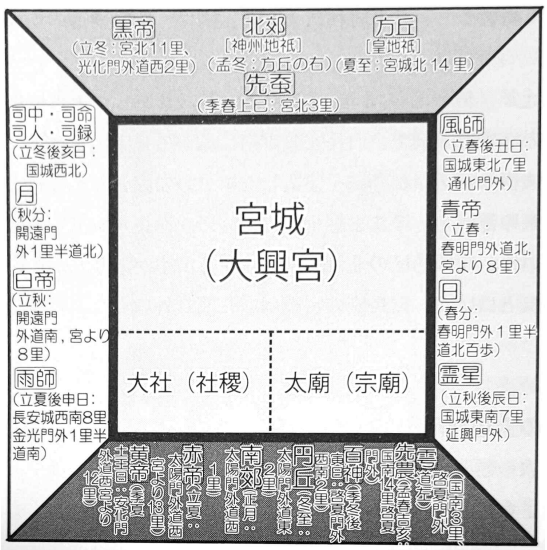


図 20 都城の儀礼空間（隋:大興城モデル
妹尾達彦 2015）

中国漢の長安城南郊の復元から分かるように、四方に方形塀を巡らせ、中央に祭祀施設を備えた姿が発掘された蘿井と類似していることがわかる。ただその時期においては違いがある（図19）。隋のモデルを見ると、儀礼空間である南郊と圜丘が分離され、祭祀の時期も異なっていることが分かる。南西側に位置する月城や蘿井とも類似したものを考えてみる必要がある[32]（図20）。

天壇は、明清時代に圜丘、南郊と称されたこともあり、南には圜丘壇、北の祈谷壇の中心に位置する円形の祈年殿は、皇帝が豊作を祈願した場所として知られており[33]、円形と八角形の建物があった蘿井

図 21 朝鮮時代首善全圖（○南壇の位置）

の実態について、新たな観点からアプローチする必要があるだろう[34]。また、中世時代以降は天神に祭祀を行う南壇とも比較され[35]、社稷壇と後農祭、雨を祈願する祭りとしての意味もある[36]。

---

1) 『三国遺事』巻1 奇異 第1篇
楊山下蘿井傍…、有一白馬跪拜之狀 尋撿之 有一紫卵（一云青大卵）馬見人長嘶上天 剖其卵得童男形儀端美 驚異之 浴於東泉（東泉寺在詞腦野北）身生光彩 鳥獸率舞 天地振動…

2) 2代目南海王から21代目炤知王まで計20回にわたって「謁始祖廟」という記事が登場している。
按新羅宗廟之制、第二代南解王三年春、始立始祖赫居世廟、四時祭之…

3) 中央文化財研究院は、2005年10月14日に「慶州 蘿井 -神話에서 歴史로-」をテーマに学術会議を開催し、史料と発掘解釈について検討が行われた。

4) 2002年から2005年までの発掘結果は以下の報告書に収録されている。
中央文化財研究院 2008『慶州 蘿井』発掘調査報告書

5) 李文炯 2009「慶州 蘿井（史跡 第245号）発掘成果」『慶州蘿井 整備計画 樹立을 위한 学術シンポジウム」慶州市

6) 鄭子永・卓京柏 2007「韓国 古代 木塔의 基壇 및 心礎部 築造技法에 관한 考察 -百済寺址를 中心으로-」『文化財』40 国立文化財研究所

7) 李文炯 2009 前掲 p30-60 発表文で主張している内容である。

8) 慶州の掘立柱建物址は1990年代に発掘された月城濠で5～7世紀代の建物址23基、6世紀代以降は慶州蓀谷洞競遺跡の発掘から掘立柱建物址が確認された。このような建物址の構造は、6章で再び取り上げる。
李恩碩 2016「7世紀代 新羅 家屋構造에 對한 考察」『新羅史学報』第37号 新羅史学会

9) 梁銀景 2022「南朝木塔의 築造技法과 周邊国家와의 交流 -南京 西營村 木塔址를 中心으로-」『百濟와 南朝寺院의 새로운 認識』国際学術大会資料集 国立扶余文化財研究所・釜山大学校

10) 国立慶州文化財研究所 2007『傳仁容寺址 発掘調査中間報告書』
2013『傳仁容寺址 発掘調査報告書Ⅰ』

11) 河南歴史博物館 2012「河南市 校山洞 82 建築物新築敷地内遺跡 発掘調査略報告書」

12) 1988年、慶州校洞162-2、163-3番地一帯の発掘で新石器時代の土器片、青銅器時代の半月形石刀と初期鉄器時代の円形粘土帯土器・豆形土器（B.C.2-1世紀）、炉形土器（3世紀）など多様な遺物が出土しており、南山周辺が人の居住に非常に良い環境であったことを示している。また、北側にすぐ隣接した月精橋址南側の橋脚地周辺である校洞158-2番地発掘でも青銅器時代の住居と遺物、初期鉄器時代の遺物、統一新羅時代の道路、方池と旧河道などが確認されている。
慶州文化財研究所 1991「月淨橋址 南便農地 発掘調査」『文化遺跡発掘調査報告-緊急遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
慶州市・鷄林文化財研究院 2017『慶州 校洞 158-2番地 遺跡』

13) 南川と蘿井の間である塔洞（天官寺址西側・北側一帯）で2010年代以後、木棺墓、木槨墓、積石木槨墓、石槨墓など130基余りが確認されており、西南山勢力の根拠地と見ている。
徐羅伐文化財研究院 2016『慶州 塔洞 37番地一円 近隣生活施設（病院）新築敷地内遺跡 文化財発掘調査 略報告書』
韓国文化財財団 2021『慶州 塔洞 28-1番地遺跡 発掘調査略報告書』

14) この瓦窯跡では、新羅時代から統一新羅時代に至るまで月城、南澗寺、霊妙寺、四天王寺など17ヶ所に瓦が供給されたと推定している。
威德大學校博物館 2001『慶州 南山 長倉谷 新羅瓦窯址 地表調査報告書』

15) 国立慶州文化財研究所 2004『慶州 天官寺址 発掘調査報告書』

16) 5世紀の遺構や遺物の炭素年代測定において、40-50年誤差が生じた場合、これを克服することは容易ではない。したがって、現在ここから出土した土器が5世紀後半~6世紀初めに編年されており、年代測定資料は補正資料として活用できる。

17) 新羅都城の都市発展が段階的に行われ、新羅統一後、南側に市街地が拡張されていったことは、発表以後発掘調査を通じて確認されている。
李恩碩 2003、黄仁鎬 2004 前掲

18) 李根直は狼山一帯に蘿井があったとみている。
李根直 1997「新羅 三姓始祖의 誕降址 研究」『慶州史学』16

19) 昌林寺跡の発掘は2014年から2022年まで年次的に実施されたが、初期王宮関連遺跡はない。
慶州市・鷄林文化財研究院 2022『慶州 昌林寺址Ⅰ』

20) 井上秀雄 1978『古代朝鮮史序説（王者と宗教）』寧楽社 p52

21) 東京雑記（1669年）、輿地圖書（1765年頃）、（1790年前後）にはいずれも蘿井に関する同一内容が掲載されている。

22) 国立慶州文化財研究所・慶州市 2004『慶州南山 精密学術調査報告書』pp195-196

23) 上報告 p869。「訪蘿井 在松林中 井面覆以一石 四隅置磚石…」

24) 柳宜健は『新増東国輿地勝覧』などから、朝鮮時代前期から位置を知ることができる王陵は11基であることが分かる。それらの王陵は、1代朴赫居世陵、13代弥鄒王陵、23代法興王陵、24代真興王陵、27代善德女王、29代武烈王陵、30代文武王陵、32代孝昭王陵、33代聖德王陵、41代憲德王陵、42代興德王陵である。朝鮮英祖6年（1730年）以降、17基の王陵が追加で指定されたことについては詳しく記録されている。
新羅1～3世紀代の古墳構造は、小型の木棺や木槨構造であったが、大型の墳丘を持つ構造は4世紀半ば以降、積石木槨墳構造が初めて登場した。現在の五陵は双墳があり、計6つの古墳で構成されており、4世紀半ば以降の積石木槨墳であると推定されている。五陵の位置に関する記録は、朝鮮時代に初めて現れる。『三国史記』には「葬蛇陵　在曇巖寺北」との記録があり、『三国遺事』の「新羅始祖赫居世王條」には、「各葬五體爲五陵 亦名蛇陵 曇巖寺北陵是也」とあり、朴赫居世の身体が5体に分けて五陵に葬られたことから、朝鮮前期に曇巌寺の位置などを考慮して指定されたと推測される。
18世紀以降、五陵には朴赫居世の閼英夫人と2代南海王、3代儒理王、5代婆娑王も同じ墓域に入り、五陵南側の蘿井とこの一帯にはすべて朴氏王陵（10人）に指定された。北側からは6代智摩王陵、7代逸聖王陵、三陵（8代阿達羅王、53代神德王、54代景明王）と55代景哀王陵などが順に指定されている。
初期の6～8代王は新羅後期に現れる石室墳であり、朴氏であるため8代王と53代、54代王が一つの墓域内に指定された。『三国史記』の記録には、神德王は竹城に、景明王は狼山の皇福寺の北側に、景德王は南山の蟹目嶺に葬礼を行ったというが、この記録とは全く関係なく、現在の位置に指定された。
李根直・李恩碩 2002「王陵・古墳」『慶州 南山 GYOUNGJU NASAN』国立慶州文化財研究所
李根直は慶州にある新羅55基の王陵のうち、記録と位置が合致するのは7基である。具体的には、27代善德女王陵、29代武烈王陵、30代文武王陵、33代聖德王陵、38代元聖王陵、41代憲德王陵、42代興德王陵などがあげられる。それ以外の陵墓については、朝鮮時代以降に指定されたものであると考えられる。
李根直 2012『新羅王陵研究』学研文化社

25) …（中略）李朝。自世宗時、始修崇報之禮、建廟于州南而祀之…

26) このような問題があるにもかかわらず、朴氏集団が南山一帯に定着し初期中心地として有力であると認識し発表している。以前発表された資料と論文を十分に考察しなければならない。
張企明 2022『新羅 宮城의 建立과 擴張을 둘러싼 論議와 새로운 摸索』韓国古代史学会

27）金台植 聯合ニュース 2005.8.25.日付

28）郊廟祭祀のように王が自ら祭祀する「大きな祭祀」と見る見解（羅熙羅 2003『新羅의 国家祭事』知識産業社 pp156~157）、「郊廟」を「神宮」または「神宮祭事」と理解する見解（蔡美河 2008『新羅国家祭事와 王権』 혜안 pp101-102）があり、「郊廟大祀」を南郊神宮での天祭や北郊での先農祭、そして宗廟祭の祀りなどとして把握している。（パク・ナムス(박남수) 2019「唐의 祀典体系와 新羅의 祀典整備」『新羅史学報』45 p485）。このような見地は、現在の蘿井を神宮と理解する傾向にあると考えられる。

29）『三國遺事』①奈勿王 金堤上 ②天賜玉帶 ③洛山二大聖 觀音 正趣 調信
① 命百官迎於屈歇驛 王與親弟寶海迎於南郊 入闕設宴…
② 眞平王…、然後其使上天 凡郊廟大祀皆服之
③ 元曉法師…、繼踵而來 欲求瞻禮 初至於南郊水田中
『三國史記』新羅本紀。
訥祗麻立干 二年 春正月…王弟卜好自高句麗堤上奈麻還來 秋 王弟未斯欣自倭國逃還照知（一云毗處）麻立干…八月 幸南郊觀嫁哀莊王…、四年 夏四月 王幸南郊觀麥

30）『三國史記』百濟本紀 比流王條。
十年 春正月 祀天地於南郊 王親割牲

31）古代中国では天に祭祀を行う郊祀を主に「辛日」に奉行したということから、「辛」の字が「郊祀」に関する文字として把握している。「本宮辛審」・「辛審龍王」と「辛番洗宅」・「辛番東宮洗宅」などの銘文木簡や青銅遺物は、供え物と関連した物品の荷札や祭器と推定する意見がある。
イ・スフン（이수훈）2019「新羅王京出土遺物의 辛・辛審・辛番銘と郊祀 -雁鴨池와 国立慶州博物館（南側敷地）出土遺物를 を中心으로」『歴史와 境界』113

32）妹尾達彦 2011「隋唐長安城と郊外の誕生」『東アジアの都城の比較研究』京都大学出版会
2015「隋唐長安城と関中平野の土地利用－官人居住地と墓葬地の変遷を中心に－」『都市と環境の歴史学〔増補版〕 第3集 特集 東アジアの都城と葬制』p40

33）中国の皇帝が天をまつる儀礼を行う壇。漢代以来、都城の南郊に設けられるのを原則とし、圜丘・南郊とも称した。北京に現存する天壇は、明・清両朝皇帝が祭天の儀を行ったところで、明の永楽18年（1420年）に当時の南郊に天地合祀の大祀殿が創建され、嘉靖9年（1530年）、四郊分祀の制に改めて圜丘を新築、1538年大享殿を新築した。
namuwikiなどから引用

34）崔光植 2007「韓中日 古代의 祭祀制度 比較研究－八角建物址를 中心으로」『古代』27 韓国古代学会

35）朝鮮都城に関連する南壇の小丘陵について、ソウル龍山地域に残されている意味を考慮する必要がある。平木寛氏は、雨乞いの祭りが行われた風雨雷雨壇が南檀だったと推測したが、この位置が朝鮮時代の都城の西南側に位置していることにも注目する必要がある。新羅の都城構造と比較しても、時期的な違いはあるものの、蘿井で雨乞いの祭り（蘿井祈雨文）を行うことも考慮する必要があると思われる。つまり、ここで農作業に関連した雨乞いの祭りの伝統が受け継がれた可能性もあるということである。
平木 寛 2001『朝鮮社会文化史研究Ⅱ』阿吽社

36）余昊奎 2003「新羅 都城의 儀礼空間과 王京制의 成立過程」『新羅王京調査의 成果와 課題』国立文化財研究所・国立慶州文化財研究所 國際学術大会 發表論文

第 2 章　金城の位置比定と月城の構造

問題の所在

古代都城は、王が居住する宮城を中心に、官庁や儀礼空間などが造成され、王朝が変わるたびに、正統性の確立と先代王朝との差別化のために遷都が不可欠であった[1)]。韓半島においては、同一の王朝において２回以上都を移した高麗や百済の例もあるが、新羅は千年間にわたり都を維持した。新羅は三国統一後の685年、遷都を試みたが実現には至らなかった。

古代の王朝の中心である王宮築造に関する記事は、始祖朴赫居世から登場する。『三国史記』が刊行された12世紀（1145年）に、千年前の王宮の位置を正確に考証するのは困難であり、用語が統一されていない部分も多く確認される。特に1世紀から3世紀代の史料とこれまでの考古学的発掘結果は、整合性がとれない点が多く、神話的な初期記録の真偽と年代記的な問題点が存在する。しかし、新羅歴史の母胎となる斯盧6村や6部、そして初期の王宮の位置をどこに比定するかによって、論旨展開が全く異なるため、諸学者間で異なる主張が提起されている。

金城は、城門の存在や攻撃を受けた記事などの史料に数回登場するが、考古学的な実物資料が確認されておらず、存在に対する意見が提示されるだけである。したがって、新羅王宮について、歴史資料と考古学的な調査結果を総合的に分析し、その位置を特定することが重要である。

月城は新羅の正宮であり、1984年から発掘調査が続けられ、その規模と構造が把握されている。最近の発掘で、城壁築造時に人を犠牲にして祭祀を行ったとされる「人身供犠」の遺跡や城門址に関する報道や学術会議が行われた。学界では、この点について意見が分かれており、客観的な分析と関連遺跡との比較による実体究明が求められる。

第 1 節　金城 － 新羅の初期王城 －

1.金城の歴史性

金城が初めて登場するのは、紀元前32年に王宮として建設されて以来、東南側に西暦101年に月城が築かれたという記録である。現存する遺跡に基づいた歴史的観点は、月城が初期から王宮の分割を行っていたとするものであるが、その地位が詳細に明らかになっていない金城は、新羅初期の代表的な国名あるいは別称とする説や[2)]、月城の西北側の閼川付近や市内の古墳群とする説[3)]、高麗～朝鮮時代に築かれた慶州邑城址に比定する説[4)]などがある。また13世紀に編纂された『三国遺事』には、南山西側に建つ昌林寺に初期の宮室を造営したという記録があり[5)]、15世紀に刊行された『新増東国輿地勝覧』などに引用され続け、初期の王宮の根拠地として伝承されてきた。したがって、第1章で提起した蘿井とその一帯が初期の王宮址であるという意見が有力だという提起もあった[6)]。

しかしながら、2014年から2021年にかけて行われた昌林寺址の発掘結果では、初期の王宮に関連する施設や住居跡は確認されず、8世紀代に築造された金堂や付属建物などは 14世紀まで運営されていたことが分かった[7)]。

このように、発掘による根拠が明らかになっていないため、文献史学の立場からは、金城の名称について新羅を代表する都の名称としてきた。しかし、1980年代後半から始まった隍城洞の発掘により、1～9世紀代に至る様々な遺跡が確認され、特に大量発見された製鉄遺物に注目が集まった。李凡泓は鉄は韓国語で「鉄=쇠（Soi）」であり、これを扱う場所を「伐（beol）」ということに注目し、「セボル（Soibeol）」が新羅の初期の名稱である「ソラボル（Seorabeol、徐羅伐）」を指しており、これを漢字で表現したのが「金城」だとした[8)]。これは隍城洞一帯を初期新羅の根拠地と考えるもので、金浩祥も隍城公園一帯が狭義の宮城であり、広義の国号と考えた[9)]。

2014年から月城発掘調査が本格化し、既存の金城存在に関する認識が再評価されている。これによると、『三国史記』に見られる月城築造記事（101年）に合致する遺跡は確認されず、月城の築造を4世紀台に引き下げる試みとともに、1～3世紀代の王城をどう解釈すべきかという問題に直面した。前章で述べたように、初期の近代王陵や考古学的結果や記録と合わず、蘿井もやはりその歴史的根拠が不足しているため、再考せざるを得ない。そこでまず、金城に関する記事が、考古学的資料とどのように結合されるかを考えてみる。『三国史記』の金城記事を年代別に抜粋すると、以下の通りである。

表 1『三国史記』新羅本紀の金城記事

王 名	年 度	解 釋	原 文
始祖 赫居世居西干	21年（紀元前37年）	宮城を築き金城という。	築宮城 號金城
	60年 （西暦3年）	秋の九月、金城井に龍二頭が現れた。 雨上がりで宮城南門に雷が落ちた。61年（西暦4年）春3月に居西干（王）が崩御した。	六十年 秋九月 二龍見於金城井中 暴雷雨 震城南門 六十一年 春三月 居西干升遐
南解次次雄	元年（4年）	楽浪兵が来て金城を幾重にも囲んだ。	樂浪兵至 圍金城數重
	11年（14年）	楽浪が来て金城を攻めた。。	樂浪謂內虛 來攻金城甚急
儒理尼師今	33年（56年）	夏の4月、金城井に龍が現れた。34年（西暦57年）冬10月に王が亡くなると、虵陵園で葬儀を行った。	三十三年 夏四月 龍見金城井 有頃暴雨自西北來 三十四年 冬十月 王薨 葬虵陵園內
脫解尼師今	9年（65年）	王様が夜、月城西方の霜降りの木の間から鶏の鳴き声を聞いた。（金城の誤記）	王夜聞 金城西始林樹間 有鷄鳴聲
	24年（80年）	夏の4月、京都に大きな風が吹き、金城の東門が自然に崩れた。秋の八月、王が亡くなった。城北の壤井丘に葬られた。	二十四年 夏四月 京都大風 金城東門自壞 秋八月 王薨 葬城北壤井丘
婆娑尼師今	17年（96年）	嵐が南から吹いて金城南の大木を抜いた。	暴風自南 拔金城南大樹
	22年（101年）	金城の東南側に城を築き、月城あるいは在城と呼ばれた。	於金城東南築城 號月城 或號在城
祇摩尼師今	12年（123年）	金城の東の民家が陥没して池になった。	金城東民屋陷爲池
逸聖尼師今	5年（138年）	金城に政事堂を設置した。	置政事堂於金城
阿達羅尼師今	7年（160年）	雨が降って閼川の水があふれて民家が流された。金城北門がおのずと崩れた。	七年 夏四月 暴雨 閼川水溢 漂流人家 金城北門自毁
伐休尼師今	13年（196年）	金城東門に雷が落ちた。	又震金城東門 王薨
奈解尼師今	10年（205年）	狐が金城と始祖廟の庭に来て泣いた。	狐鳴金城及始祖廟庭
助賁尼師今	3年（232年）	倭人が突如来て金城を包囲した。	倭人猝至圍金城
沾解尼師今	7年（253年）	金城の南に倒れていた柳がおのずと立ち上がった。	龍見宮東池 金城南臥柳自起
味鄒尼師今	元年（262年）	春の三月、龍が宮東の池に現れた。秋の7月、金城西門が火事になり、火が広がり民家300軒余りを燃やした。	元年 春三月 龍見宮東池 秋七月 金城西門災 延燒人家三百餘區
儒禮尼師今	14年（297年）	伊西古国が金城を攻めた。	伊西古国來攻金城
訖解尼師今	37年（346年）	倭兵が金城を包囲した…、王が城門を閉めて出場しなかった。	倭兵猝至風島 抄掠邊戶 又進圍金城 …王然之 閉門不出
奈勿麻立干	38年（393年）	倭人が来て金城を五日間包囲した。	倭人來圍金城 五日不解
實聖麻立干	14年（415年）	穴城の野原で軍隊を大きく査閲し、王が金城南門に行って弓術を見物した。	大閱於穴城原 又御金城南門觀射
訥池麻立干	28年（444年）	倭兵が金城を十日間包囲して食糧が底をつくと帰った。	倭兵圍金城十日 糧盡乃歸
	42年（458年）	地震が発生した。金城南門がおのずと崩れた。	地震 金城南門自毁
慈悲麻立干	4年（461年）	夏の4月、金城井に龍が現れた。	四年 夏四月 龍見金城井中
炤知麻立干	4年（482年）	金城南門が火事になった。	春二月 大風拔木 金城南門火
	22年（500年）	夏の4月、暴風が吹いて木が抜かれ、金城井に龍が現れた。京都に黄霧が立ち込めて四方が遮られた。冬の11月、王が亡くなった。	二十二年 夏四月 暴風拔木 龍見金城井 京都黃霧四塞 …

記事の内容を見ると、紀元3年に金城井に龍が出現し（城内と認識することもできる）、楽浪の攻囲（4年）、金城井に龍が出現（56年）、伊西古国における攻囲（297年）、金城井における龍の出現（461年）が挙げられる。ここで、龍の出現記事を除けば、楽浪と伊西古国の攻撃が注目される。これは新羅の都に進軍した可能性が示唆されるが、この他にも500年以降は金城が都城の名称として『旧唐書』と『新唐書』、『括地志』、『崇福寺碑』（896年）に登場する[10]。中国側の史料で新羅の都城名とし

て使われ、500年以降はすべて月城中心の史料が登場するため、文献史的に金城を認めない場合がほとんどである。

しかし表によれば、王が居住する宮城としての金城については、非常に詳細な記述が確認される。宮城の築造（紀元前37年）、宮城南門の落雷（3年）、楽浪軍による城の包囲（4年）、月城西始林（65年）、東門の崩落（80年）、城の南側の大木が抜けたこと（96年）、東南側に月城を築造（101年）、東民家が池となったこと（123年）、政事堂の設置（138年）、北門の崩落（160年）、東門（196年）、狐の侵入（205年）、倭人による城の包囲（232年）、南柳の存在（253年）、西門の火災で民家300軒が焼失（262年）、倭兵による城の包囲と王が城門を閉めて出征しなかったこと（346年）、倭人による5日間の包囲（393年）、南門（415年）、倭兵による10日間包囲（444年）、南門の崩落（458年）、南門の火事（482年）などから、金城が実際に存在する場所であることが明確に記述されている。

金城が築かれた後、北門・東門・西門・南門がすべて存在し、内部に政庁が設置され、城壁を包囲する楽浪と倭兵の侵入記事は城壁が実際に存在していたことを示している。もちろん、初期の記事の年代的な真偽はあるとしても、一般的な内容や、侵入などの歴史的な情況は、大きな加減なく記録したものが伝来したと考えられる。

月城に関する記事は5世紀代から本格的に登場するが、459年倭人が兵船100隻余りで東辺境を襲撃し、ひいては月城に進撃する記事が登場する。以後、473年に慈悲麻立干が明活城を修理し、475年に王が明活城に移り住んだという記事と、次の王である炤知麻立干が487年に月城を修理し、488年の正月王が移り住んだという記事以降には金城に関する具体的な事項は見られない。500年、金城井に龍の出現を最後に『三国史記』で金城に関する記事は消える。

このような記録から見て、皇城洞製鉄遺跡と木棺墓と木槨墓などの発掘結果は、1～3世紀代の慶州の空白を埋める、金城の存在可能性が推定できる遺跡として浮上したものである。

2.金城の位置比定

1990年代以降、皇城洞一帯では製鉄、製錬関連遺跡が計7カ所で確認され、鍛冶炉、溶解炉、作業場など多様な関連遺構が調査された。その後、ここが1～3世紀代の大規模製鉄遺跡として認識されていることが明らかになった。また、新石器時代の遺物を含む層、

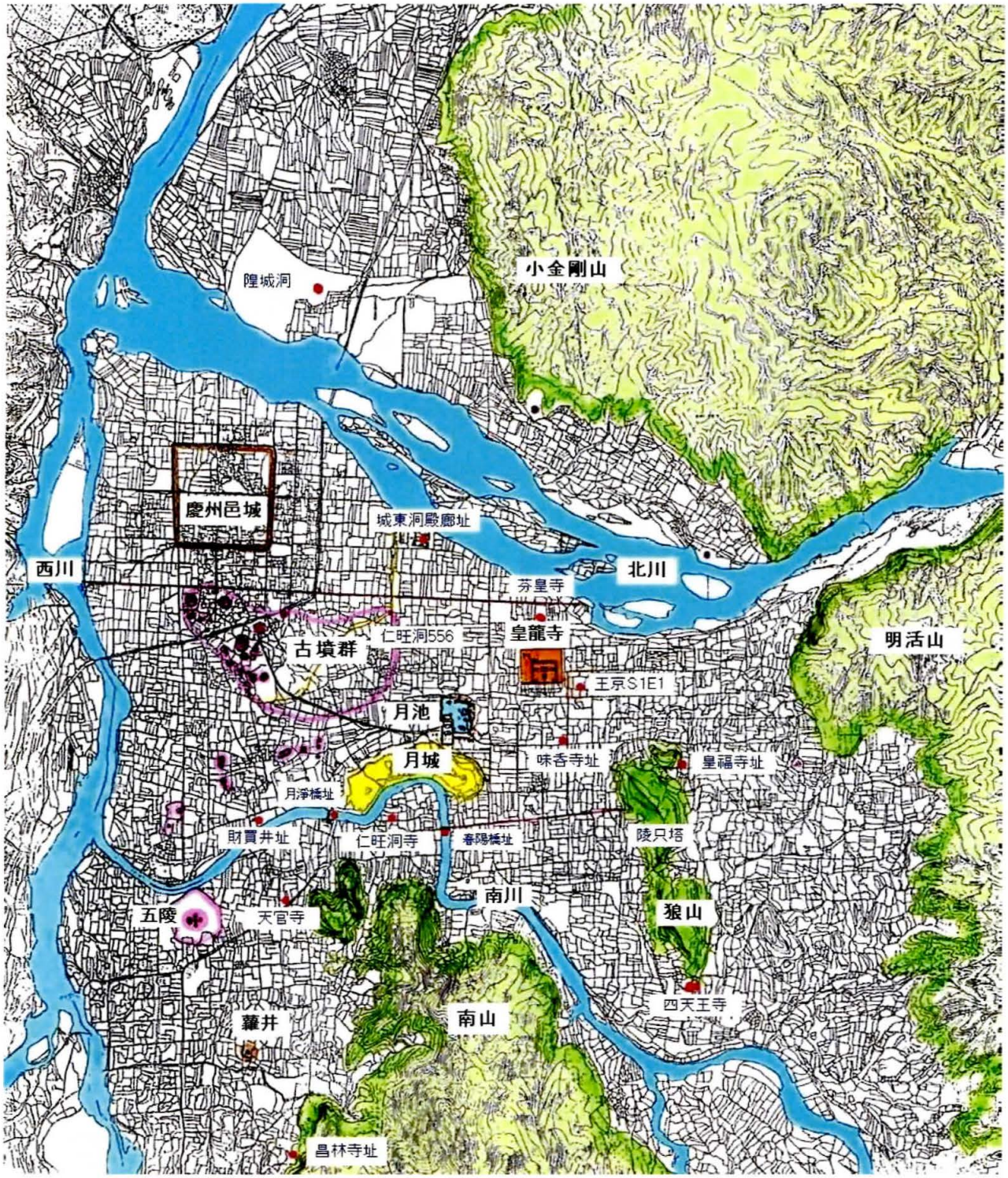


図 1 慶州地形地籍図（1917年度、禹成勳1996より引用）

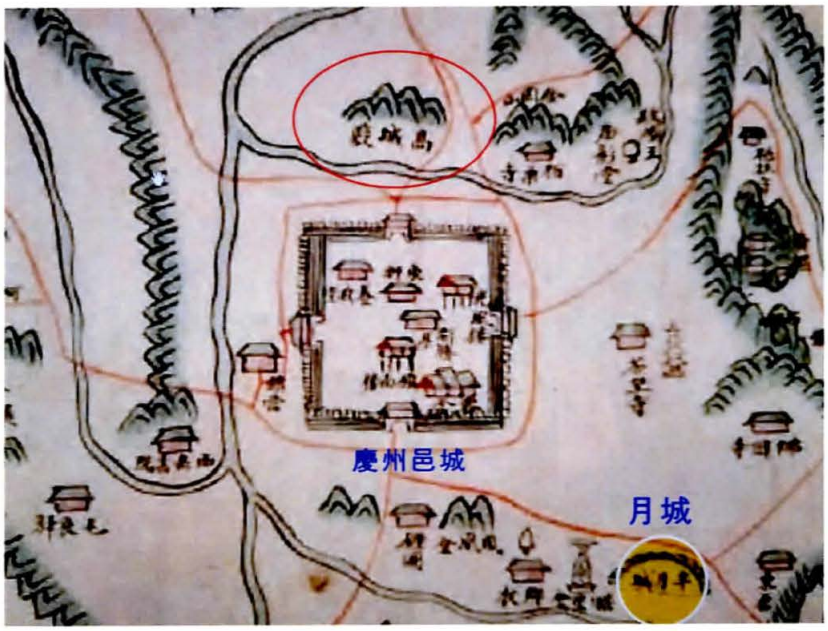


図 2 海東地図（朝鮮時代18世紀、○古城類）

図 3 地形図（1912年、1/5万）

図 4 地形図（1917年、1/5万）

図 5 地形圖（1930年代、1/2.5万）

図 6 慶州遺跡案内地図（1930年代）

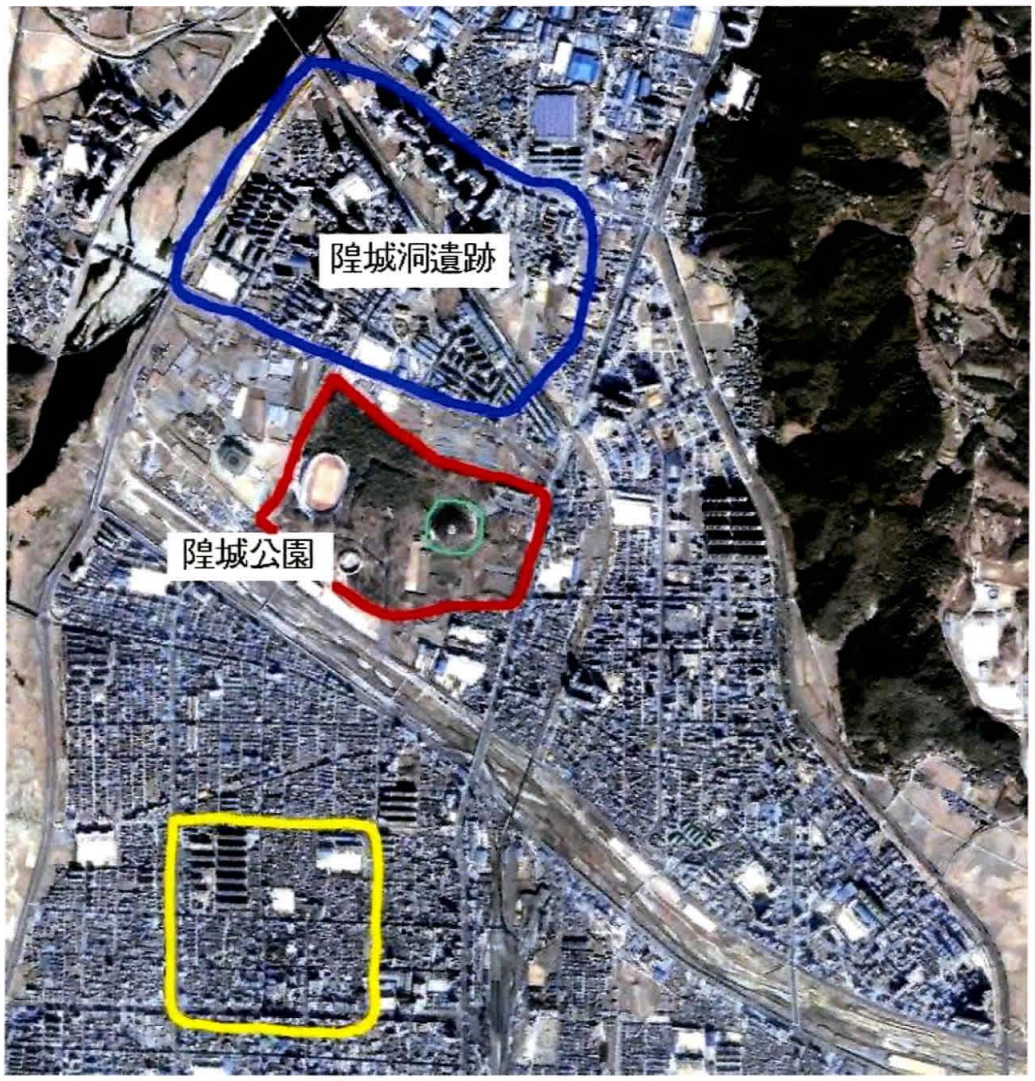


図 7 隍城公園の推定金城（中央○）

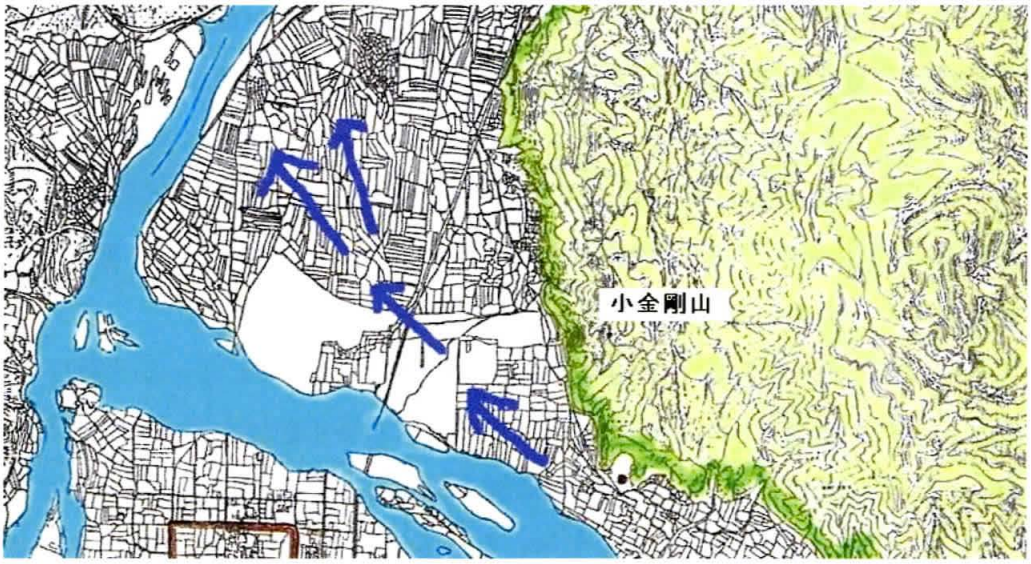


図 8 北川氾濫推定図

青銅器時代の住居址、1〜3世紀代の住居址と木棺墓、木槨墓があり、5世紀代以降の積石木槨墓と石室墓、統一新羅時代の道路と生活遺構など、多様な遺跡が調査され、古墳や生活遺跡などは計46件に上っている[11]。また、毎年1〜2件程度の発掘が進められており、古墳周辺でも製鉄遺跡と都市遺跡などが一緒に調査されている。

このような重要遺跡の密集度を考慮すると、皇城洞一帯は当然初期新羅の根拠地であり勢力の中心地と判断できる。しかし、王宮と推定される場所である隍城公園は、18世紀以降から20世紀初めに地図が製作された当時も高城址あるいは高城林と呼ばれ、開発が不可能な場所であった。現在でも、隍城公園はすべて保存地域となっており、発掘調査などが進められない状況にある。

図1は1917年度の地形図と地籍図を結合して作成されたもので、慶州邑城と北川の北側には田畑と1筆地の広い敷地が形成されている。一方、図2は18世紀半ばに製作された朝鮮時代の海東地図で、今の隍城洞一帯が高城薙（水溝のある高い城）と表記されている。すなわち、濠のある高い城という意味の地名と見られる。その後、1912年頃に製作された地形図（1/5万）では鼓城と表記されているが、これは製作時に同音の漢字が用いられたものと見られる（図3）。

その後、1917年度地形図（1/5万）では高城と独山という地名が現れ（図4）、1930年代に製作された地形図（1/25,000）で古城里と隍城里の名跡が一緒に記載され、高城薙が高城林（論虎薙）と表現されるようになり、カタカナも表記された（図5）。やはりこの時期に製作された慶州遺跡案内地図では独山、古城林（論虎薙）と表記されている。

朝鮮時代の18世紀以降、ここには高城が存在していたことが地図製作に表記され、1900年代以降、近代地図を製作しながら若干の差異があるが、隍城里という名称も高城里と共に濠がある城という意味で呼ばれるようになり、1930年代以降記載されるようになったと考えられる。そして、今も残っている直径120m程度、高さ20m（標高57.8mで周辺公園一帯の平地が海抜33m内外）の丸い野山が単独であり、独山という名称で呼ばれるようになったと推測される[12]。

独山と呼ばれる場所は現在も平地にそびえており、丸形をなしている（図7）。この場所が新羅時代の金城ならば、土城または木柵城である可能性が高いと考えられる。位置的には、『三国史記』において金城の東南側に月城が存在すると記されている。図1を見ると、慶州邑城や古墳群の東南側にも月城が位置しており、文献から金城の位

置を推定することができるが、前述のように発掘調査からは未確認である。

独山を金城と推測するならば、西歴138年に東にある民家が陥没して池になったことは、北川の氾濫などによる影響と推測される。また、160年の豪雨で閼川（今の北川）が氾濫して民家が流され、北門が自然に沈んだということは、北城門の方に水が流れなくても地下水の流れによって浸水した可能性を考慮すべきである。既存の発掘調査では、隍城洞遺跡が多く分布する地域において新石器時代の土器層が確認されたが遺跡は残っておらず、また旧河道があったことから、先史時代にはここに北川が流れていたことを示している[13]。北川氾濫時に流れたと推定する水路推定ラインを表示したものである[14]。

隍城洞で1世紀から4世紀に至る木棺墓と木槨墓が多様な遺物を副葬し、時期別に墓域を異にすることが確認される。しかし4世紀後半から6世紀半ばまで慶州市街地内に築造される大型の積石木槨墓は現れず、数量も少ない方である。すなわち、この時期に、勢力の中心が月城に移動していくものと解釈できる。その後は規模の大きい石室が築造されることもあり、この地域が重要な地域として継続的に維持されていたと見られる[15]。

文献史料においても、金城関係記事が登場する4～5世紀代の新羅都城を指す用語は京都と表現されており、王城である金城と明確に区別していたことが明らかになっていると言えるだろう。

第 2 節　南堂の位置比定

隍城公園一帯が初期王城である金城であると推定するならば、記録上の南堂の位置づけについても検討が必要である。下表は『三国史記』に見られる南堂関係の記事である。

表 2『三国史記』新羅本紀の南堂記事

王名	年 度	解　　釈	原　　文
逸聖尼師今	5年（138年）	金城に政事堂を設置した。	置政事堂於金城
沾解尼師今	3年（249年）	秋の７月、王宮の南側に南堂を建てた。（南堂を都堂ともいう）	秋七月　作南堂於宮南（南堂或云都堂）
	5年（251年）	春の正月、南堂で初めて政務を処理した。	春正月 始聽政於南堂
味鄒尼師今	7年（269年）	春夏に雨が降らず南堂で君臣と会合し、自ら政治と刑罰の得失を尋ねた。	春夏 不雨 會羣臣於南堂 親問政刑得失
訥祇麻立干	7年（423年）	夏の４月、南堂で養老宴を行い、自ら食べ物を差し上げて穀物と絹を差をつけて下賜した。	夏四月 養老於南堂 王親執食 賜穀帛有差
眞平王	7年（586年）	春の３月、日照りになって王が正殿を避け常飯を減らし、自ら南堂で罪人を世話した。	七年　春三月　旱　王避正殿減常膳御南堂親錄囚

まず、金城に設置した政事堂（逸聖尼師今5年、138年）がどのような役割を果たしたのかは不明であり、憲徳王（809～826年）の時に忠公閣が官員の人事を調べたという記録があるが、700年もの時期差があり、同じ建物や役割とは見なし難い[16]。沾解尼師今3年（249年）に王宮南側に南堂を建てた後政務を処理し、弥鄒尼師金と訥祇麻立干、真平王の時に南堂で一部行事が行われたが、少なくとも586年まで登場する点には注目すべきである。488年に月城から王が離去した後、586年に南堂で行事を行ったことから月城に南堂が存在したと見るのが最も妥当である。

百済の記録でも古尒王28年（262年）に南堂で業務を行い、東城王11年（490年）に南堂で君臣に宴会を行った記事があり[17]、宮の外朝正殿とする見方もある[18]。したがって、金城の南側に南堂を築造した記事によるならば、本稿で推定した隍城公園のすぐ南側に築造することは困難であろう。地理的に見ても、北川と接する場所であるため、洪水などの被害を受けないためには丘陵地に位置しなければならない。現在の慶州市街地が皇龍寺周辺などを含めて全て湿地であり、月城、古墳群などが残っているところがある程度高い地帯だったためである。このように、住居建築と生活根拠地が丘陵地帯であることは、5～6世紀代まで新羅、百済、伽耶ともに共通の現象である。南堂の位置について、それが南側の都堂山であったとする主張は、月城が最初から正宮であることを前提としているためである[19]。

表 3『三国史記』新羅本紀の金城・明活城・南堂・月城年代比較

年 度	金城・明活城	年 度	南堂・月城
232年	倭人が金城を包囲	249年	王宮の南側に南堂建立
		251年	南堂で初めて政務処理
262年	金城西門の火災	269年	南堂で君臣と会合
297年	伊西古国が金城を攻撃	290年	洪水で崩れ（月城）
346年	倭兵が金城を包囲		
393年	倭人が金城を五日間包囲		
405年	倭兵が明活城を攻撃	423年	南堂で養老宴を挙行
431年	倭兵が明活城を包囲		
444年	倭兵が金城を10日間包囲		
458年	地震で金星南門崩れ	459年	倭人が月城に進撃、戦闘
473年	明活城の修理（慈悲麻立干）		
475年	明活城に移轉（慈悲麻立干）		
482年	金城南門の火災	487年	月城の修理（炤知麻立干）
		488年	月城に移轉（炤知麻立干）
500年	金城井に龍出現（炤知麻立干蒙）		
		586年	南堂で罪人を世話

月城の築造年代である101年の記録は置いておいて、南堂建立以後から調べると、232年に金城が包囲された後、249年に王宮南側に南堂が建立されたことがわかる。年代記によると、4世紀代には50年単位で倭兵に包囲や攻撃を受け、5世紀に入ってからは明活城に侵攻するため、新たな王城が必要になったのであろう。444年に金城が包囲された記事があったのが、この時点ではまだ月城へ完全に移転していなかったと考えられる。結局、458年に地震で金城の南門が倒壊し、防御が不可能になったため、459年に月城に移転し、倭人と戦争を繰り広げたと推定される。この戦争の余波などで明活山城に移転していたが、482年金城南門の火災などでこれ以上王宮の役割が不可能になり、488年最終的に月城に移転していったと判断される。無論、月城に既存に設置した南堂が維持されていたとしても、何の問題もない。4世紀代には南堂の記事がないが、423年に養老宴を催したという記事から、一定規模の建物があったことが分かる。すなわち、金城と月城の二元体制で運営された可能性がある。

結論を述べれば、初期の金城が隍城公園で王宮の役割を果たし、また月城には南堂が建てられ、その経営が行われた可能性がある。時期的には差があるが、2代王の南解次雄の婿である昔脱解（4代王、西暦57～80年）が結婚前に、瓠公が居住していた月城を冶匠の土地という計略で奪ったという史料が存在する[20]。この内容は説話的であるが、歴史的には多様な解釈がされている。隍城洞の職人勢力が南側の月城に進出する契機となり、勢力拡張という文脈から考える必要がある。488年以降は、月城が完全な正宮体制に整えられ、その内部に南堂が残っていたが、7世紀代の中国式都城制度導入とともに王宮が再編され、この時に南堂が完全に消えたと考えられる。しかし、南堂の位置に関して、古代史料の解釈においては、学者間で意見が分かれている。

第 3 節　月城 － 新羅の中心王城 －

1.月城の概要

月城は、記録上101年に築造されたとされ、初期段階の運営時期が実際に符合しているかどうかは、現在も多くの研究が進行中である。前述したように、5世紀代以降は、実際の王宮関連記事と考古学的資料にはほぼ差がなく、935年まで正宮として運営されていたことは明らかであり、もはや言及する必要はない。

月城は、現在慶州市街地中央南側に位置する丘陵地で、東西890m、南北260m、周囲が2,340m、内部面積が207,528㎡である[21]。傾斜が緩やかな丘陵地に土城壁が築かれており、現在の城壁の最大高は18m、最低高は約10mである。

月城の北側には濠が、南側には南川が流れ、防御施設を全て備えている。633年には北の外郭に瞻星台という天文台が、674年には北東側に月池（雁鴨池）が造成され、760年には東に春陽橋、西に月精橋が築造され、仏教寺院が多数造営される南山に通じる道路を両側に備えることになった。新月城、滿月城などの名称も記録に示されており、後期王宮拡張領域の範囲をどこまで算定するかについては、多様な研究結果が提示されている[22]。

表 4 慶州月城の発掘調査年表

調査機関	調査期間	主要調査地域	調 査 内 容
鳥居龍藏	1915	西城壁発掘調査	城壁下部の5層上から骨鏃、炭化穀物、土器片など出土
国立文化財研究所 慶州古蹟 発掘調査団	1979~1980	東門址発掘調査	東門址発掘調査 濠地区「ナ」区域石垣濠の一部確認
	1984~1985	外郭地域 試掘調査	「タ」区域濠の大まかな規模と性格把握 月城北側一帯調査
	1985~1995	外郭地域 発掘調査	濠地区「ナ」区域石垣濠、「タ」区域 1~3号濠と建物址 「ラ」区域濠と建物址 月城東側、鷄林南側、鷄林北側、瞻星台南側、月城北西側
国立慶州 文化財研究所	1999~2014	外郭地域 発掘調査	濠地区「タ」区域 4~5号濠「ラ」区域建物址 鷄林北側追加調査（皇南洞123-2番地遺跡）
	2003~2007	月城基礎調査	月城内部地表調査、月城基礎学術調査 （精密地表調査と測量、地下レーダー探査、地形植生研究など）
	2014~2023	月城と濠 発掘調査	A地区西城壁·西門址、C地区中央建物址 濠地区

月城の重要性から、1915年には鳥居龍蔵が初めて城壁調査を実施し、1979年から現在まで40年以上持続的な発掘が行われている。月城の象徴性と重要性により、まず東門址をはじめとし、濠の調査が集中的に推進されるようになった。2014年12月からは、実体究明と整備の基本方向設定のため、城内と城壁、濠の発掘が進められている。城内は西から　A～D地区に、濠は東から（カ）－（ラ）区域に区分され、体系的な調査が進められている[23]。

1980年代以降、月城の濠(垓字）と周辺遺跡の発掘によって、文献史料の築造年代（101年）とは合わない遺跡や遺物が確認されたが、濠の築造時期は通常5世紀中後半以降に編年されており、大きな異論はなかった[24]。土器の編年も研究者による差はあるが5世紀代以降ということは認められてきた。しかし最近、月城西門址発掘時に「人身供犠」行為と推定される遺構が確認されたと国立慶州文化財研究所が発表し、月城

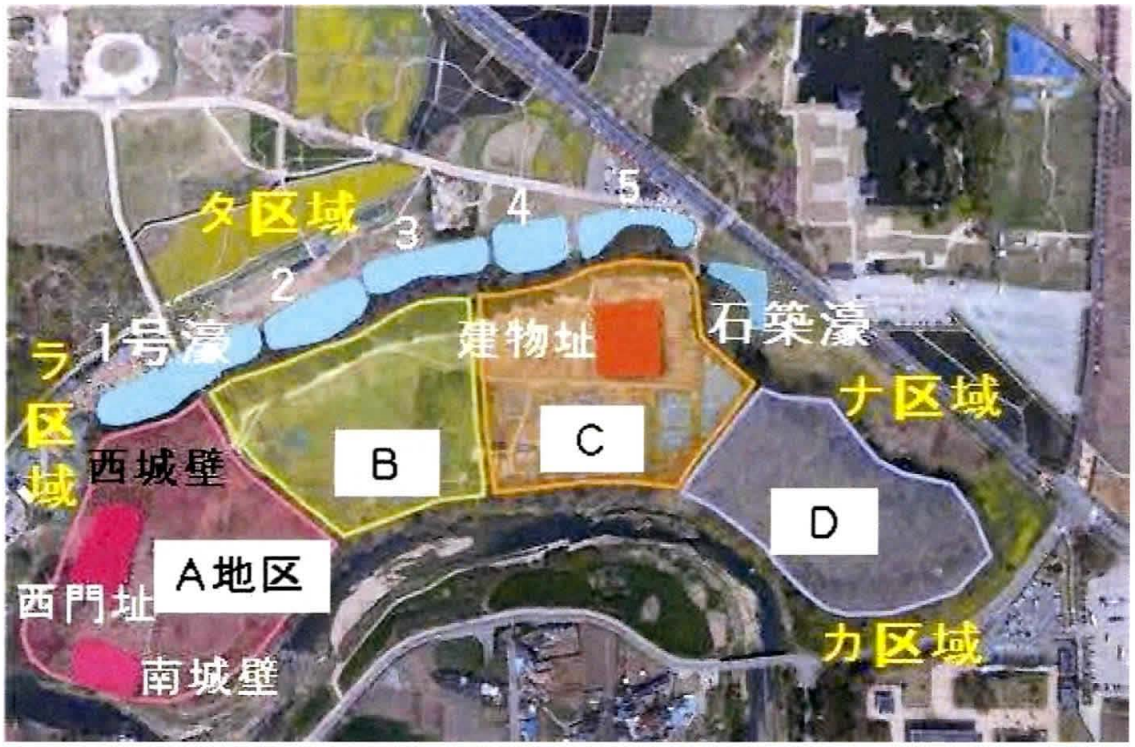


図 9 月城発掘調査区画現況図（国立慶州文化財研究所）

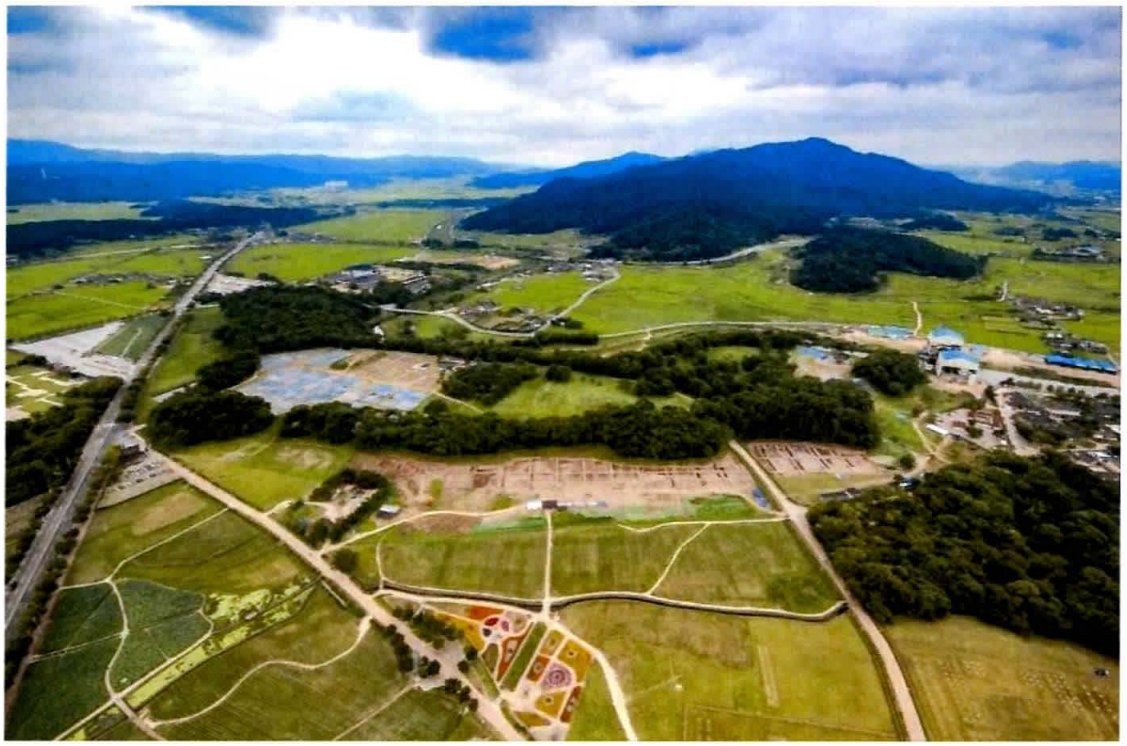


図 10 月城発掘調査現況（北から、国立慶州文化財研究所）

の築造時期に関する問題が浮上した。すなわち、敷葉工法の上で行われた祭儀行為が4世紀代における築城のためのものであり、城壁から出土する土器は5世紀代半ば以降に編年されるので、長期間にわたって築城されたと提起されているのである。これを受けて、濠と城壁の築造時期をどう見るか、内部生活遺跡はどのように解釈すべきかが学界の関心を集めている。そこで本稿では、これらについて重点的に扱ってみたい。

2.濠の築造と時期

月城は低丘陵の上に形成された平地城であり、同時期の遺跡では百済王城と推定される風納土城と比較されている。李晟準は、風納土城などの国家重要施設を構築する場合、超大型建造物の建設事業を総括的に遂行できる能力が備わっていなければならず、技術的には設計能力と施工能力が前提であり、同時に労働生産性を向上させ財政の健全性を確保するための高度な経営戦略も求められるとする。さらに出土遺物と放射性炭素年代測定などから、風納土城の初築完成時期を４世紀半ば、１次増築時期を４世紀中後半、2次増築時期を5世紀前半と見ている。増築時には内壁だけが行われたため、濠も初築当時から造成されたものと考えられている[25)]。

通常、土城を築く際には、濠を掘って得た土で城壁を築き、土の不足分は他の場所から調達することが最も経済的であり、普遍的な方法と言えよう。したがって、月城の年代は、その内部の底から出土する土器などに基づいて決定されている。これまでに発掘された土器の年代には、研究者間で一部の違いがあるが、5世紀代以降と見るのが妥当とされている。発掘担当者は、これまでの発掘成果に基づいて、城壁が5世紀に築造され、6世紀に改修されたものであると見ている[26)]。

濠は5世紀代に竪穴（土築）であったものが、7世紀後半に石垣に変化する。これは護岸の築造技法によって池型濠と石垣濠に区分され、9世紀以降まで使われたと把握される。竪穴濠からは護岸の流失と異物流入の防止を目的に、45本の木柱を1.5m間隔で打ち込み、板材を7段に重ねた痕跡が見つかった。内部からは卜骨として使われたイノシシの骨をはじめ、穀物、堅果類、香辛料など60種余りの種・実類が出土した。2019年には船型木製品と黒色と赤色が塗られた盾型木製品が出土した[27)]。

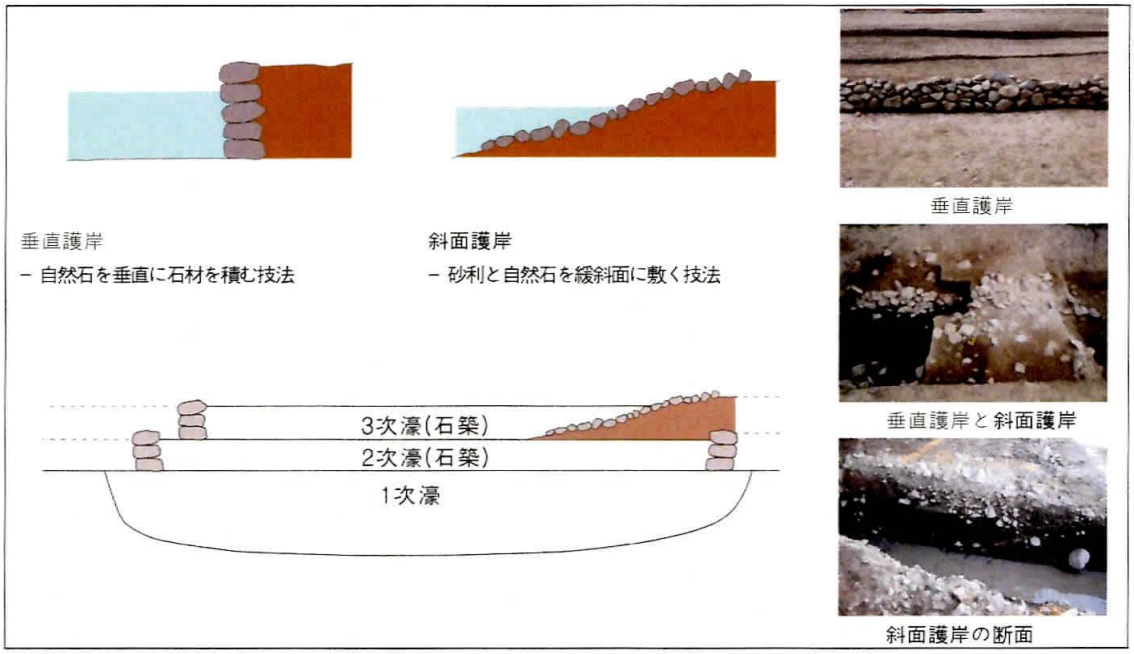


図 11 月城濠の護岸築造技法（朴正宰・崔文禎作図）

また、濠から出土した各種有機質などを分析し、放射線炭素年代測定によって濠の築造時期を集中的に調査、研究した[28]。イ・チャンヒ(이창희)は、この発表で、月城濠で初めて作られた竪穴濠の護岸木製構造物の建築部材として使われた木材を試料にして、ウィグルマッチ法（wiggle matching）を利用し、放射線炭素年代を測定した。酸素同位元素比年輪年代法を用い、7件29点の試料から測定した結果は424年と433年と決定され、ウィグルマッチ法による放射線炭素年代測定の結果は5世紀前半であることが明らかになった。この結果から「月城濠築造年代＝5世紀前半」という明確な年代を導き出すことができ、今後この成果は月城をめぐる新羅史の重要なタイムスケールとして作用するものと期待される[29]。キム・ヨジョン（김요정）は、慶州月城年輪年代紀に含まれた木部材を分析し、433年の晩秋から 434年の初春に伐採された木材が使用されていることから、慶州月城濠が434年または直後に造成されたと発表した[30]。

これにより、濠の年代は、既存の見解よりも時期が早くなったが、研究者の間で大きな異論は出ていない[31]。5世紀中後半から40～50年ほど上がったため、記録に出てくる423年の養老宴を催した訥祗王代の前後期と推論できる。文献史料との比較で見れば、418年に王位に就いた後、高句麗と日本に人質に行った卜好と美海(未斯欣)が帰国し、体制整備のための新しい国策事業で月城整備事業を開始した可能性も推定できる。民を動員して築城と関連した土木事業を推進したとすれば、記録に残った可能性

もあるが全く見えない。濠だけ整備し、城壁はそれ以前に築造が完了したのか、その後なのかは次章にて扱うことにする。

3.城壁の築造と時期

2017年と2021年、国立慶州文化財研究所は月城西門址の下部から発掘された人骨2体に対し、城壁築造時に祭儀のために犠牲にした「人身供献」という内容で報道資料を配布した[32)]。

当時、各メディアにおいて大々的に報道され、その場所が新羅王城であったこともあり、学界でも多くの関心を集めた。その後、2017年にさらに女性が1名確認され、2021年9月に専門家フォーラムが開催され、月城で行われた「人身供犠」に関する問題が検討された。当時、発表者の内容において、さまざまな意見が出され、参加者の多数が「人身供犠」を認める雰囲気であったが、フォーラム後、人身供犠に関する内容を整理して、論文として発表した[33)]。一部の学者は、人身供犠や層位に関して疑問を持ち、西門址とみなすことができるのかも提起された[34)]。

この問題について、まずフォーラムで示された発掘資料と図面を検討してみたい。ここは月城西門址と推定される場所の中で西端に位置し、近代まで月城の進入路として利用されていた。そのため、門址の可能性が最も高く、発掘に着手することになった（図12・13）。記録によると、月城には帰正門、北門、仁化門、玄徳門、武平門、礼門、南門などがあったとされるが、その位置は分からず、現在の地形から見て11カ所程度と推定されている。また、忠談師に接見するために景徳王（742～765年）が帰正門に上がったという記録から、重層構造の門楼があり、月上楼、望徳楼、望恩楼、鳴鶴楼、鼓楼などの楼閣があったことが分かる。発掘の結果、門址と推定できる遺構は確認されなかったが、調査団は月淨橋につながる帰正門址と推定されている。朝鮮時代以降に道路が作られ、門と関連した施設がすべて滅失したと見ており、城壁造成時期はⅠ層の基底部造成層の上に1次城壁の築造が完了するのが5世紀前後、2次城壁は6世紀中後半、3・4次修築は7世紀代以降と考えられる。これを念頭に置きつつ、発掘資料を検討してみたい。

1979年から1980年にかけて行われた発掘調査により、東門址の構造が礎石と根石がよく残っており、城壁の内側に築造されており、外側から入るためには濠を通って登る構造である（図14）。この地域は北に月池があり、非常に重要な地域であるため、

最も典型的な城門址と見なされている[35]。一方、現在の発掘地域である西門址については、実際に城門があったとして、その前方に濠、または１次防御を目的とした何らかの施設が必要であるかどうかについては疑問がある。実際に、1984-85年度および1990年の調査においては、そうした施設が全く確認されていない。（図13）を見ると、2次内壁の石列のうち、西城壁1と西城壁2がつながっていることが確認される。

このように、表土の下に2次城壁が築造される時期の文化層が残っており、筆者自身も直接実見したことがある。2次城壁の築造時期が6世紀中後半だとすると、1次城壁築造時に作られた城門や基本施設はそのまま使用するか、その上に改築されると考えられる。ここが朝鮮時代の時に道路の開設によって消失したと推定されているが、門址というものは通常、継続して利用されるため、強制的に破壊されない限り、一部なりとも残っているはずである。しかし、そうした痕跡が皆無であるという点が、疑問である。これについて調査団は、城門が城壁の上にあったと推定しているが、現在他の門址と推定される場所と比べると、城壁の上に城門を作った場所は、その構造を想像するのが難しい。

通常、時間が経過するにつれ、城壁が拡大していくのが自然であるが、図13から見ると、1次外壁が「人身供犠」とされる人骨の出土地域よりも北にあって最も遠く、4次外壁がその内側に存在しているというのは、いくつかの点で矛盾に思われる。1次外壁がこれほど外側までつながっていたのであれば、この場所を城門址と見なすのは困難であり、もし城壁のラインが下ってきたとしても、防御のための城壁の傾斜角は浅く、有事の際に城門に入り込む敵にとって非常に有利となる。

つまり、城門の外側が十分な傾斜を持つことが防御条件に必要であると考える。調査団は、城壁上部にあった門址関連施設が後代に全て失われたと報告しているが、このような条件を考慮すると、この場所は門址でなかった可能性が最も高いと判断さる。

西城壁　1と西城壁　2が出会う地点は、築造工程上の角度が変更される地域であり、低湿地であるため出入り施設が築造されにくい場所であることを考慮する必要がある。

1990年に調査された（図16・18～20）によると、敷葉工法のすぐ上層には統一新羅時代の層が形成され、土器倉庫建物が築造されたことが確認された。王宮の門の直前に倉庫を建設することは不可能であり、この建物が門を塞ぐために築かれたものではないことが示唆される。また、この建物が西城壁1と同様の角度で築造されていることから、この場所には城門が存在しなかったことを証明している。

では、なぜここが城門と推定されるようになったのか。築造ラインが互いに異なる城壁が出会う地点であるため、最も崩れやすい場所であり、数百年の年月を経て、雨水などによって自然に城壁が流失したところに、朝鮮時代の道路が作られた可能性も想定される。また、高麗や朝鮮時代には城壁が残っていたところを取り壊し、他の用途に使用した可能性もあり、例えば慶州郷校やその付属建物などの建設のため多量の土が必要であったなら、最も近い月城から採取するのが便利であったであろう。以後、出入りしやすい道路が自然に作られたと考えられる。

もし、ここが城門であり、新羅滅亡後も出入り施設として使用され続けたと仮定すると（道路として利用されたとすれば）、現存する朝鮮時代道路の下に高麗時代道路も存在しているはずであるが、それは全く確認されていない。したがって、門址ではないと仮定する場合には、儀礼行為と見なされた人身供犠や築造工程なども全て再考する必要がある。

4.人身供犠の諸問題

2017年に見つかった人骨が「人身供犠」と解釈された大きな理由は、男女2人のための墓穴を掘った痕跡がなく、副葬土器が頭や足下ではなく足の横から出てきたことから、合葬とは考えられない、ということであった。そこで調査団は、人骨が城壁に接しつつ、西城壁の進行方向に沿って埋まっていたことから、祭儀行為であると判断したのである。以下の内容は、人身供犠が行われた層と、その下の基底部造成層、敷葉工法が用いられた土層について、調査団が「フォーラム」に掲載した内容をそのまま編集して掲載したものである。

まず、湿地の影響を強く受けた砂+黒色粘質土層（腐蝕層）の基盤層の上に有機物質が多量に含まれた黒褐色泥質粘土が高さ1.5～1.8mほど固められ、基底部造成層（Ⅰ層）が作られる。基底部の造成層は、底面から中間地点まで木柱を一定間隔で打ち込むことで基礎の地盤が押し流されないようにし、上部地点には木柱と板材を組み合わせた木製構造物を支えとして粘土を突き固めつつ積み上げ、さらに様々な有機物質を重ね合わせた敷葉工法によって仕上げられた。

追加の人骨の状況を見ると、既存の人身供犠者の造成層（Ⅱ-1-a層）の上面から追加の人身供犠者の頭部主軸方向に沿ってⅡ-1-b層を一度敷きつめた後、浅く

土を掘って人骨、着装品や周辺遺物-草本類、木製蓋の順に安置した（Ⅱ-1-c層）。その後、Ⅱ-1-c層の上にⅡ-1-d層が敷かれ、整地面が仕上げられるが、その内部には動物骨が特定地点に遺棄され、人身供犠者と一緒に埋葬された同一器種の土器が定置されたまま確認された…、2016年のトレンチ調査の過程で、50代男女の人骨付近の人身供犠の整地層で収拾された人骨は、右上腕骨に木質痕が付着しており、5歳前後の幼児と推定される。中心土塁の近隣地点に配置された人身供犠事例が非常に多様な年齢を示しており、人身供犠の選別基準に対する一定の意味を持っていると見ることができる。人身供犠の整地層において、成年女性人骨が埋葬された後、動物の死骸が近隣地点に集中的に遺棄された。動物の死骸は、一つの個体を完全な形で埋納した事例が見られず、概して特定部位、特に肋骨だけを解体して遺棄するという様相を見せる。

（1990年調査の再検討の内容）　黒色灰層から木製蓋と類似した板材が検出され、その近隣地点から人骨2体が見つかった。特に、人骨1体の周辺遺物として鉄矛1点、刀子2点、土器1点が出土した（図24）。①木製蓋の想定可能性や人骨が整然と安置された姿勢、・②貢献遺物の存在と同一土器機種の配置定型性などが認められ、ラ区域150E30地点の1号人骨、4号人骨は人身供犠の可能性が高いといえる…、城壁築造と関連した人身犠牲は乳児人骨1体、未成年人骨9体、成年人骨8体、40～50代人骨2体と、少なくとも20体以上の存在が確認され、成人以上と考えられる人骨のうち8体のみ性別判定が可能であり、その性別構成は男性3人、女性5人だった。したがって、城壁築造と関連した人骨の総数は、少なくとも27体以上であり、多様な年齢からなり、概して栄養状態が良好でないことから、地位の低い者であったと推定される。

上記の内容は、城壁を築造前の状態を説明したもので、この上に城壁が築造されるという点は、工程上問題がない。しかし、土層の解釈との整合性や、人身供犠という点においていくつかの問題が生じるように思われる。以下では、これらを重点的に検討してみたい。

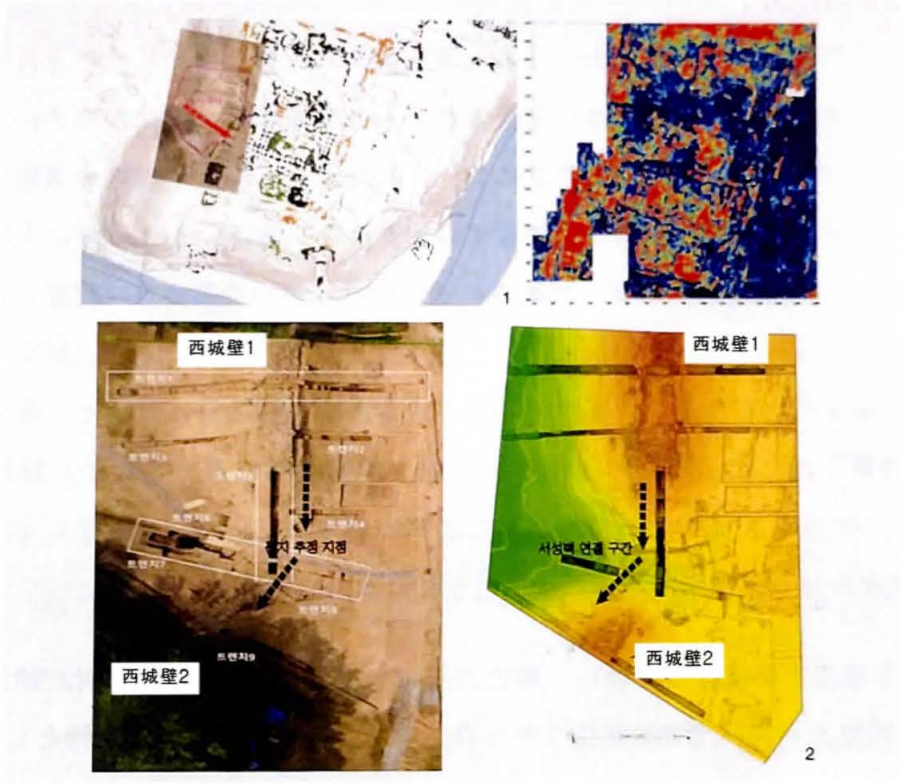


図 12 発掘区域の位置（西門址）

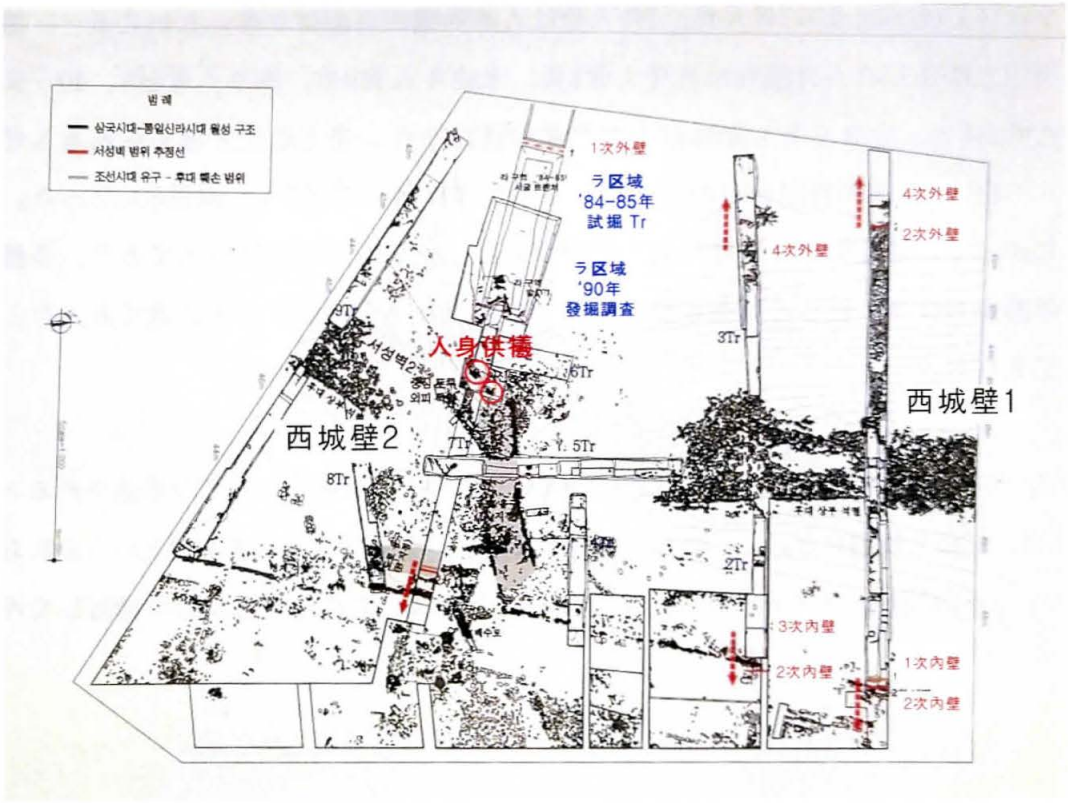


図 13「人身供犠」位置図

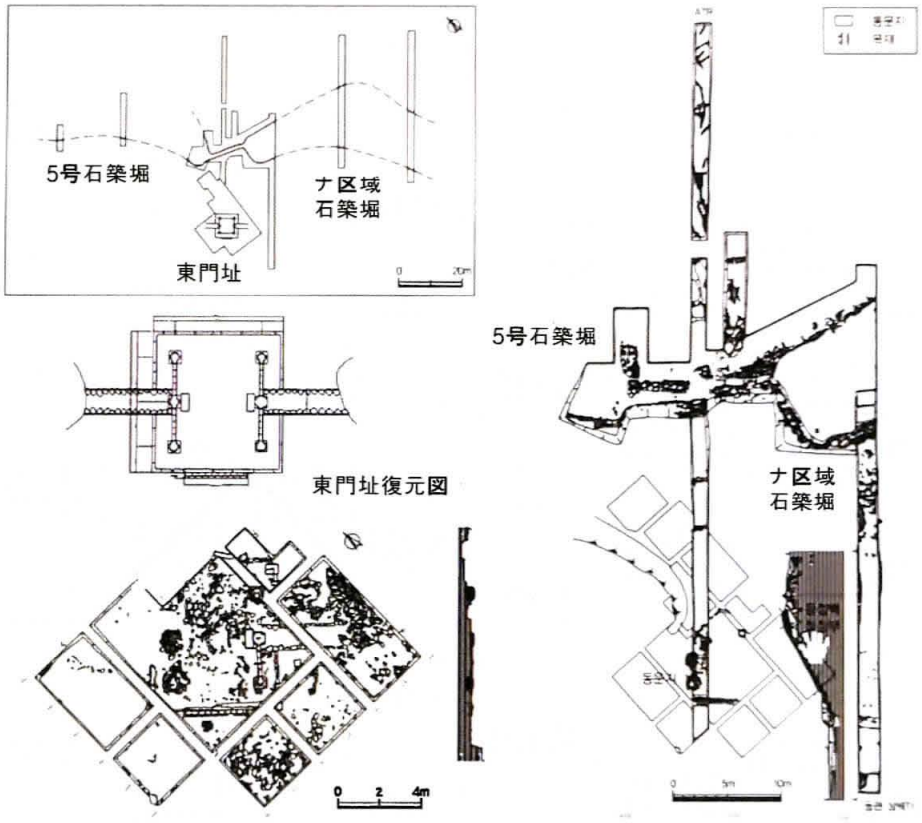


図 14　東門址発掘露出図（1980年）

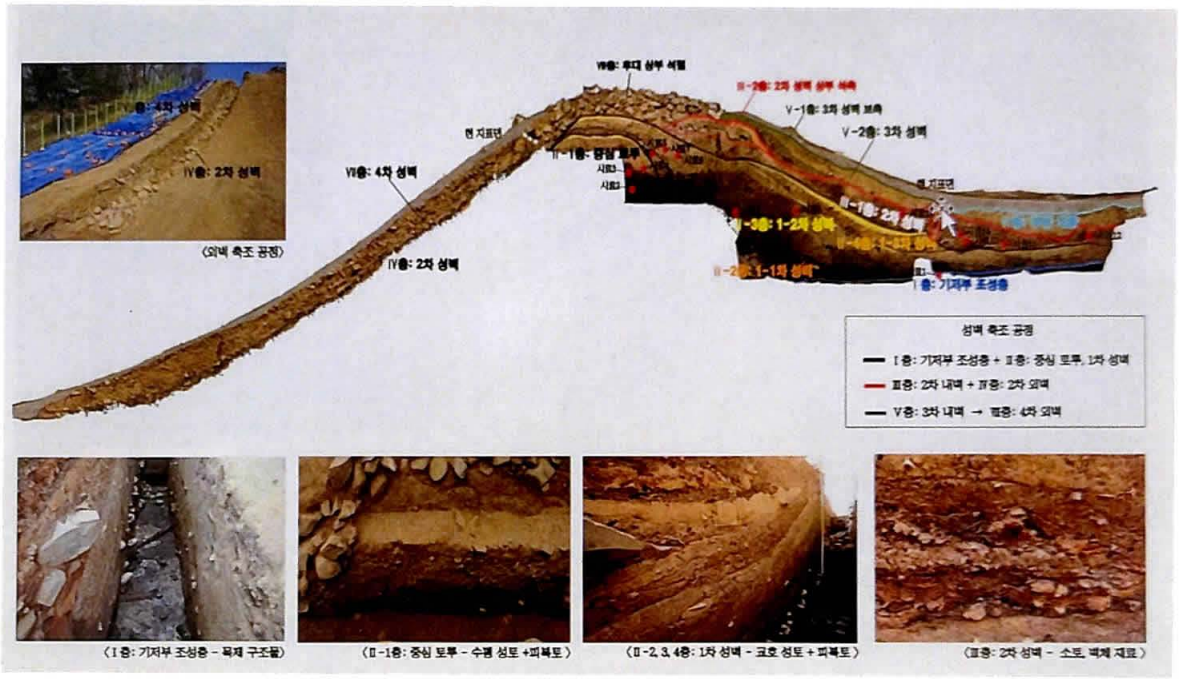


図 15 西城壁1の断面

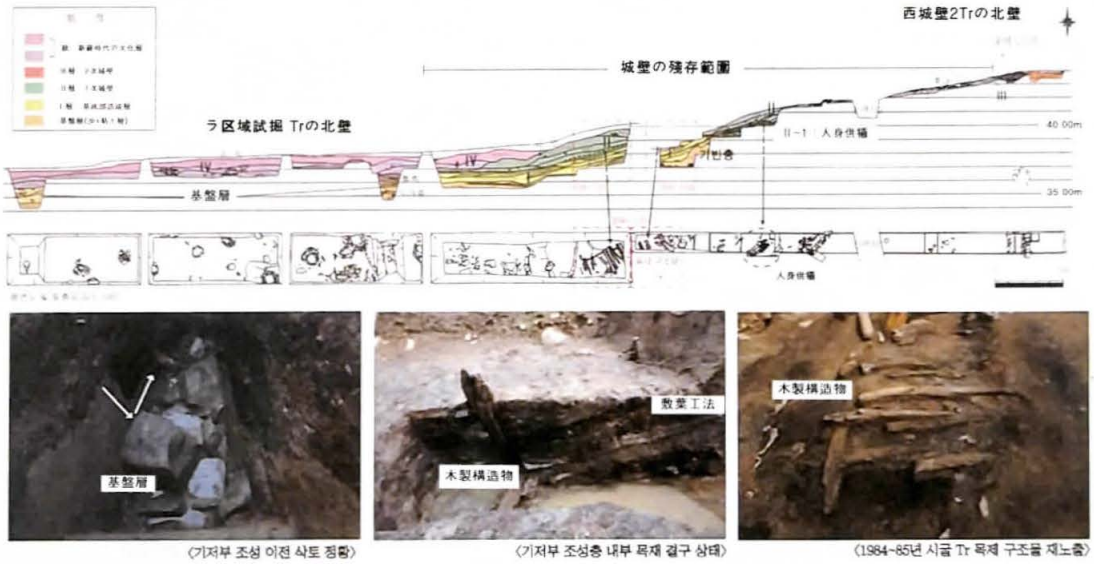


図 16 基底部造成層土層図と木材

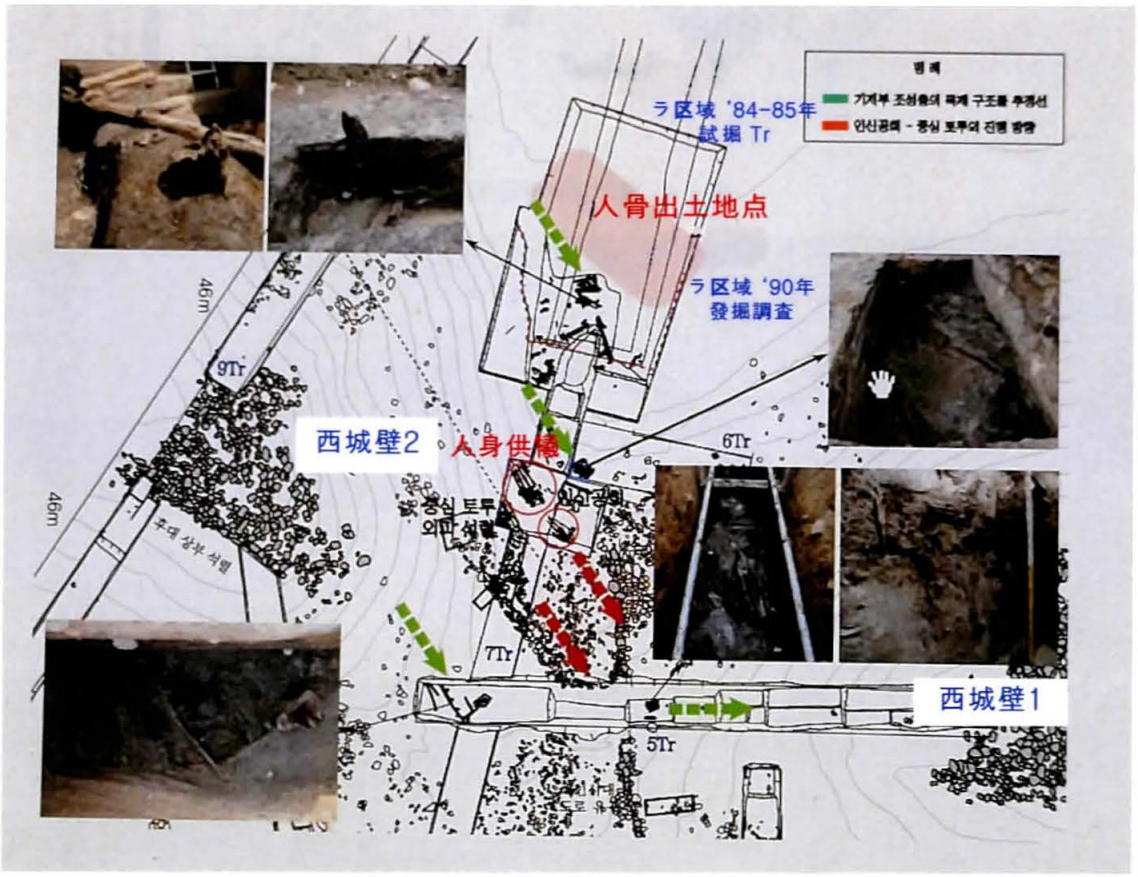


図 17 西城壁基底部造成層の木製構造物と人身供犠

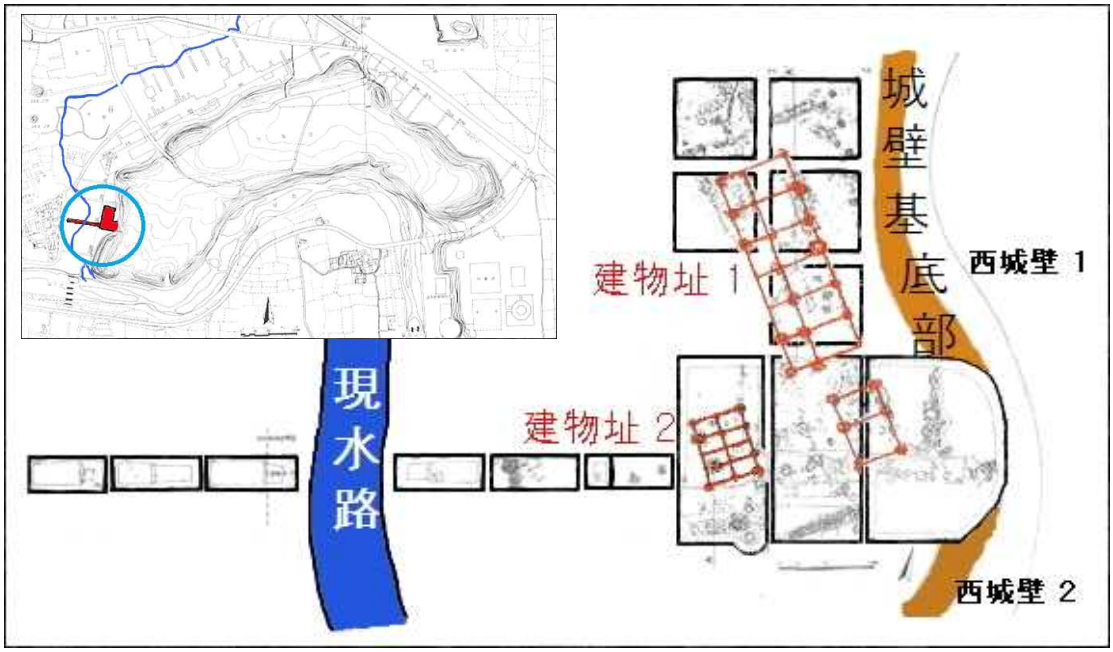


図 18 1990年「ラ」区域調査平面図（1990年報告書を再編輯/筆者）

図 19 1990年「ラ」区域建物址2の露出状態

図 20 1990年「ラ」区域建物址2の土器出土状態

図 21 人身供犠の位置

図 22 月城西城壁の人身供犠特徴と儀礼遺物

図 23 西城壁2の7Tr拡張区間の人身供犧　　50代男女の合葬

図 24「ラ」区域試掘トレンチの人骨と出土遺物（1984~85年）

図 25 風納土城の西城壁下部敷葉工法

図 26 風納土城の敷葉工法細部

図 27 水城の敷葉工法（九州歴史資料館 2009）

図 28 水城土層（敷葉工法）

図 29 慶州校洞158-2遺跡

図 30 慶州校洞158-2旧河道

図 31 慶州校洞158-2旧河道の人骨·獣骨

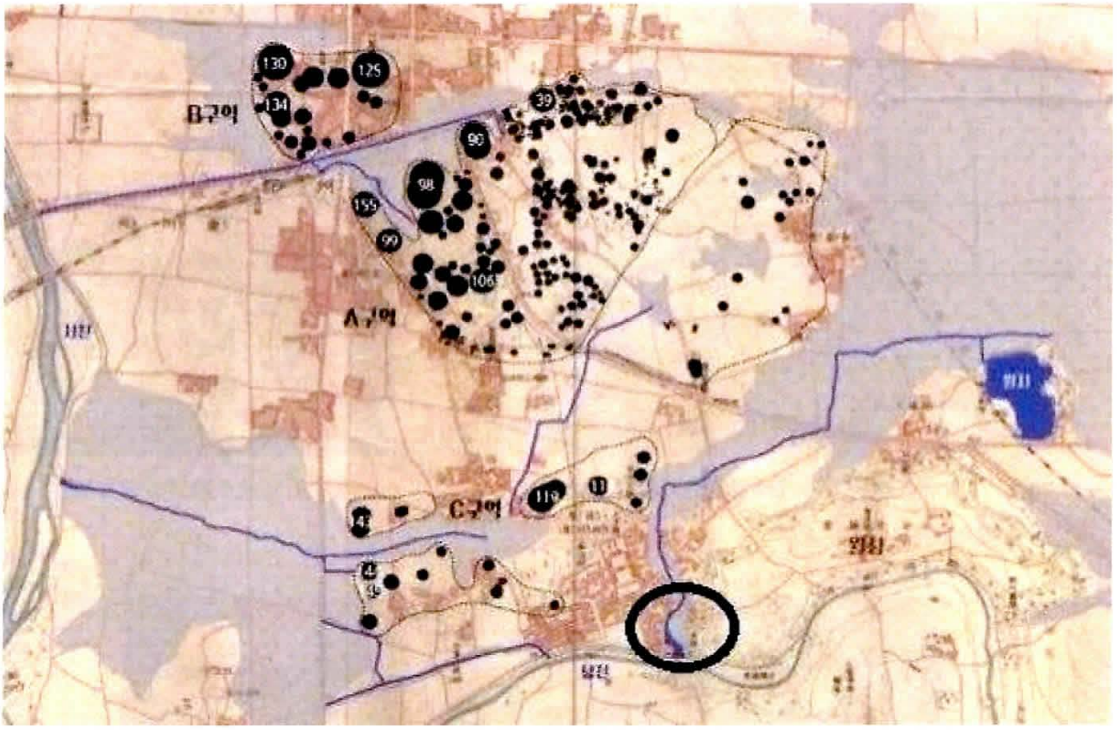


図 32　新羅古墳群の分布と立地復元図（旧河道と低湿地復元 ： 沈炫暾 2018）

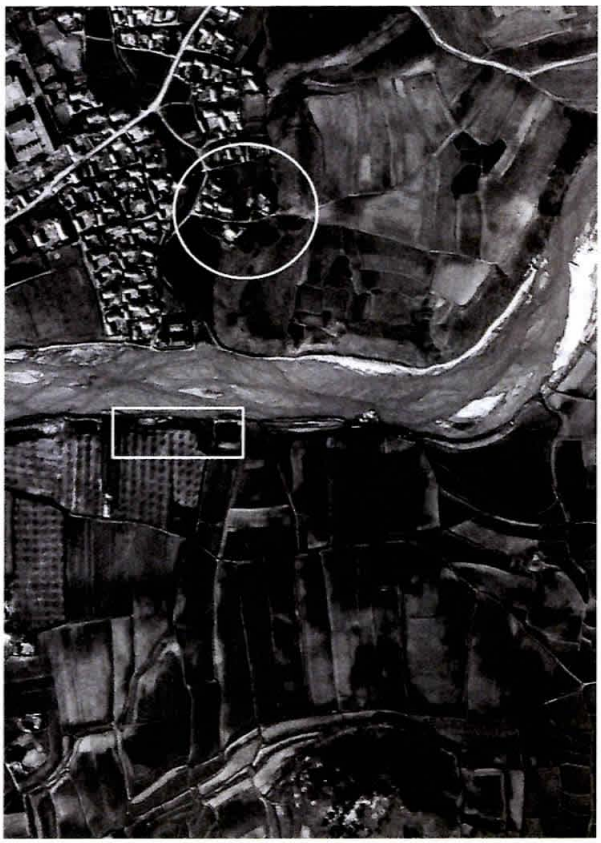


図 33 1950年代の航空写真
月城発掘「ラ」区域○、校洞158-2遺跡□

① 基盤層の上に造成された1.5～1.8mの有機物で固められた黒褐色泥質粘土（I層、基底部造成層）は人為的なものではなく、自然な低湿地であることが分かる（図32）。北側から流れてくる潑川が南川へと続く地点であり、長期にわたる浸水地域であることが示唆される[36]。したがってこの場所に濠を築造する必要はない。図33は1950年代の航空写真であり、低湿地の上層が統一新羅時代から埋め立てられて建物址があった場所であるため、近代まで民家が残っていたことが分かる。つまり、この場所は古代から7世紀代まで低湿地として維持され、7世紀代以降に埋め立てられたことが、土層断面（図16上）からも確認されている。すなわち、5～6世紀代の土層が形成されず、統一新羅時代の土層へと直結しているのである。

② 有機物質を幾重にも積み上げた敷葉工法ではなく、ここが低湿地であるため各種草本類が育ち、落ち葉が積もると自然に敷葉工法のように見えるのである。敷葉工法は一定の範囲内で同じ高さに草本類を敷き詰めるものである。しかし、この場所については、30m以上広い城壁区間に傾斜角が10°以上であり、城壁の下部範囲と判断され、かつ上下高低差が約6mに達する全地域に、敷葉工法を実施したと考えられた（図16上、城壁の残存範囲）。敷葉工法とは、一定の範囲において平面的に城壁の荷重に耐えるために設けられるもので、厚さは10cm前後で平らな面に敷き詰められる。城壁築造の基本的な方法であり、技術としては中国から伝来したもので、百済の風納土城、扶蘇山城、咸安山城、日本の水城など、半島や日本でも確認されている。図25～28の写真とは異なり、新羅月城だけが特別に敷葉工法によって1.5m以上積み上げられたというのは、理解に苦しむ。現代の湿地型池を見ると、落ち葉の堆積によって底面が腐蝕する様相は、自然状態で放置されれば月城発掘地域と同じように腐蝕が進むことが簡単に分かる（図34）。

図 34 現代の濕地形池（初冬）

③ 基底部造成層に木柱を一定間隔で打ち込んだのは、自然低湿地層に板材と木柱を打

ち込んで城壁築造のための作業路と作業空間確保のための施設と見なければならず、その上に板材や木柱を部分的に敷いて作業を容易にしたものである。現在も、低湿地に似た水田の畦などには、木柱を打ち込んで板材を当て、人が歩きやすいよう措置することもある。通行路を確保するための最も基本的な方法である。

④ 初めて男女合葬の人骨が出土した際には、墓壙のラインが確認できなかったため敷葉層の上で祭儀を行ったと発表された。しかし、成年の女性人骨については、墓壙を掘り、頸飾や腕輪を着装した状態で安置されたことが断面で確認されている（図23最下↓）。また、層位にも若干の差があるとされている。大規模な城壁を築造する前の儀礼行為だとすれば、殉葬が行なわれる際の条件、つまり同時性[37]などが確認されなければならないが、そのような点は見られない。さらに50代の男女、成人女性、5歳の幼児、副葬品などは、いずれも統一性が見られないにもかかわらず、「人身供犠における選別基準に対する一定の意味を持つ」と述べられている。この「一定の意味」とは何を指すのかが具体的に説明されておらず、同時性や従属性を示す証拠は全く見つかっていないので、強制性があるとも言えない。

⑤ 成年女性の周辺に遺棄した動物の死骸について、特定の部位のみが出土した点を挙げて儀礼行為と見ている。これと類似した遺跡は、月城南側の月淨橋址周辺の発掘で確認されている。校洞158-2遺跡においては、旧河道内で、人骨3体と各種動物骨が多量に出土しており、以下にその調査内容を掲載する。図33の□区域が校洞158-2遺骸である[38]。

旧河道は、調査地域の東の境界部に偏って位置しており、傾斜が高い南から南川と接した北に向かい、さらに調査地域の境界外へと進む。調査地域内で確認される規模は長さ27.5m、幅5.6～8.8m、深さ85～150cmである。旧河道は、岩盤と砂質岩盤である基盤層で形成された自然の小河川と見られるが、部分的に河道沿いの平坦地に河原石が敷かれている点、旧河道西側の一部に50cm程度の基盤岩の石材が斜面に沿って密集している点、そして北西側に小さな礫石が河道辺境界部に一列で確認される点などから見て、部分的に人工的に手が加えられたと判断される。

旧河道の内部は、ほぼ粘質土で満たされており、調査の過程で人骨（頭蓋骨）3

個体分と鳥類、草食動物（馬または牛など）の骨が多量に確認された。またアワビ、ムール貝などの貝類、サメの骨、桃の種、栗皮などの有機物も出土した。土器類としては平底壺、「井」や「右官」の銘が入った瓦などが出土した。

この場所は、760年に築造された月精橋から東に約70mの距離に位置し、この間に方池がある。都堂山の東側から自然に流れ落ちる一般水路であり、南川に直接流入するところである。向かい側の北側の月城と同一条件から見れば、水が流れる低湿地腐蝕層のような様相である。上記の内容に基づけば、自然の小河川の周辺は上部が整備され、ある程度管理されており、ここに一列の石列が確認されることから見て、川を渡る橋などの施設があった可能性がある。その下の湿地層内部には、死者と各種動物骨などが遺棄されたものと見られる。

人身供犠という点から見れば、井戸においては、国立慶州博物館敷地と東宮・月池などでその痕跡が確認されているが、小河川においては確認されていない。月淨橋の築造にかかわる人身供犠とするには、距離が70mも離れているので、ここで人身供犠をしたと言える根拠が貧弱である。3人が同時に死亡したのか、それとも順に死亡したのかは分からない。これが祭儀行為であるとすれば、死者のための祭祀行為の後に遺棄したと見ることができる。出土した瓦などが同じ層の同伴遺物であるかどうかは不明であるが、銘文瓦が登場するのは、8世紀代以降とされるのが一般的である[39]。

⑥ 1990年の調査によると、黒色灰層からは鉄矛1点、刀子2点、土器が一緒に出土し、人骨や木材板で覆われた人骨、27体以上の遺骨などが見つかった。これらは一般的な集団墓地とみなされる。乳児、未成年、成人、40代から50代の人骨には共通性は見られず、栄養状態が悪かった下層民とされている。これらの結果と関連して、以前に発表された月城濠調査報告書に収録された内容を再検討してみたい。以下の文は、人骨鑑定の原文を引用したものである[40]。

1985年に慶州月城濠から出土した5体の人骨の鑑定結果はすでに報告されている。その後、この近くで再び紹介しようとする人骨片が出土した。これらの人骨は、その出土状況から見て、一定の形式を整えて埋葬されたものではなく、遺骸が一度に投げ込まれたものと考えられる。このような事情は発掘過程で明らかになるが、この場所は戦争や伝染病のような災害によって生じた共同埋葬場所と考

えられる…、幼児は4名（1、3、4、9号）であり、残りの8名（2、5、7、8、10、11、12号）は成人である。そのうち2、10号は男性で、5、6、11、12号の4人は女性と推定される…、冠状縫合線の結合状態から見て、成人男女は40歳前後と推定される5号を除くと、おおむね21歳前後と推定される…、以上の人骨から見ると、ここでは幼い子供3～4人、成人11人（男性5人、女性4、未詳2）程度の合計15人前後が埋まっていたと推定される。

報告書の内容から見れば、人骨の出土状況は、一度に投げ込まれたように整っておらず、戦争や災害によって生じた共同埋葬場所と判断した。戦争であれ災害であれ、死者を尊重して葬儀をきちんと行ったわけではなく、また何らかの格式を持った儀礼行為（いわゆる人身供犠）とは言えない。人身供犠において、犠牲と見なすべき基準とは何か。西城壁の2ラインに合わせた3人と、1985年に見つかった木蓋を覆って若干の副葬物を伴う人骨はそれなりに良い待遇を受けたと言えるが、こうした差はどのような意味があるのだろうか。埋葬においては、時間的な差も土層から確認され、埋葬手法、死者への儀礼行為（人身供犠と見なす場合でも、格式は同じであるべきである）、一定区間など、いずれも統一されたものがない。

このような遺跡と比較される日本の砂丘地帯である由比ヶ浜中世集團墓遺跡では、700基以上の埋葬遺構が発見された。農業や住居に不向きの不毛地に設けられた墓地であり、儀礼祭祀に関する遺物も出土したが、重なり合った状態のアワビや土師器、地面に刺した状態の鉄鏃や刀子、そして卜骨などが出土した[41]。

一方、韓国の晋州でも最近、晋州城の東約150mの地点で、統一新羅時代後期の集団墓が確認された[42]。晋州は、統一新羅時代の9州5小京の一つである菁州と呼ばれる都市であった。古代都市であった晋州は、道路に区画される坊制が適用された。発掘区域は都市南側の端にあり、両側丘陵の間の低湿地であり、南江に小河川が連結される地域である。溝状遺跡には、埋納空間として割石で区画された施設があり、多量の頭蓋骨や四肢骨などが混在しており、土器などの遺物も同伴出土した。統一新羅時代の治所と関連した濠施設と推定され、月城同様、低湿地層に作られた埋葬施設であり、由比ヶ浜中世集団墓遺跡のように一般下層民の墓地と推定されるが、戦争や虐殺で死亡した人々の埋葬地などと解釈することもできる。

図 35 由比ヶ浜中世集団墓遺跡
（潮風と砂の考古学 2018）

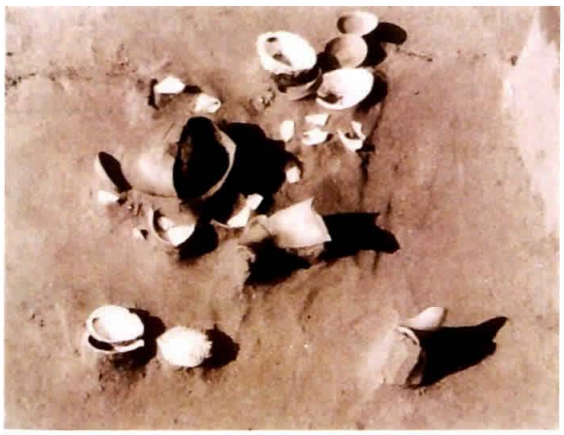


図 36 由比ヶ浜中世集団墓遺跡 祭祀遺物
（潮風と砂の考古学 2018）

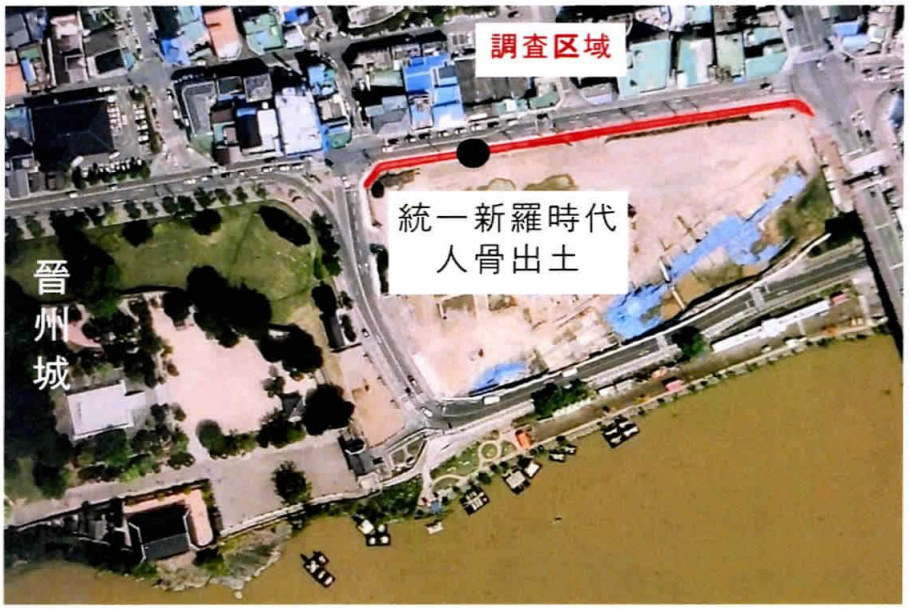


図 37 晋州本城洞遺跡

図 38 晋州本城洞遺跡の人骨

図 39 晋州本城洞遺跡の人骨細部

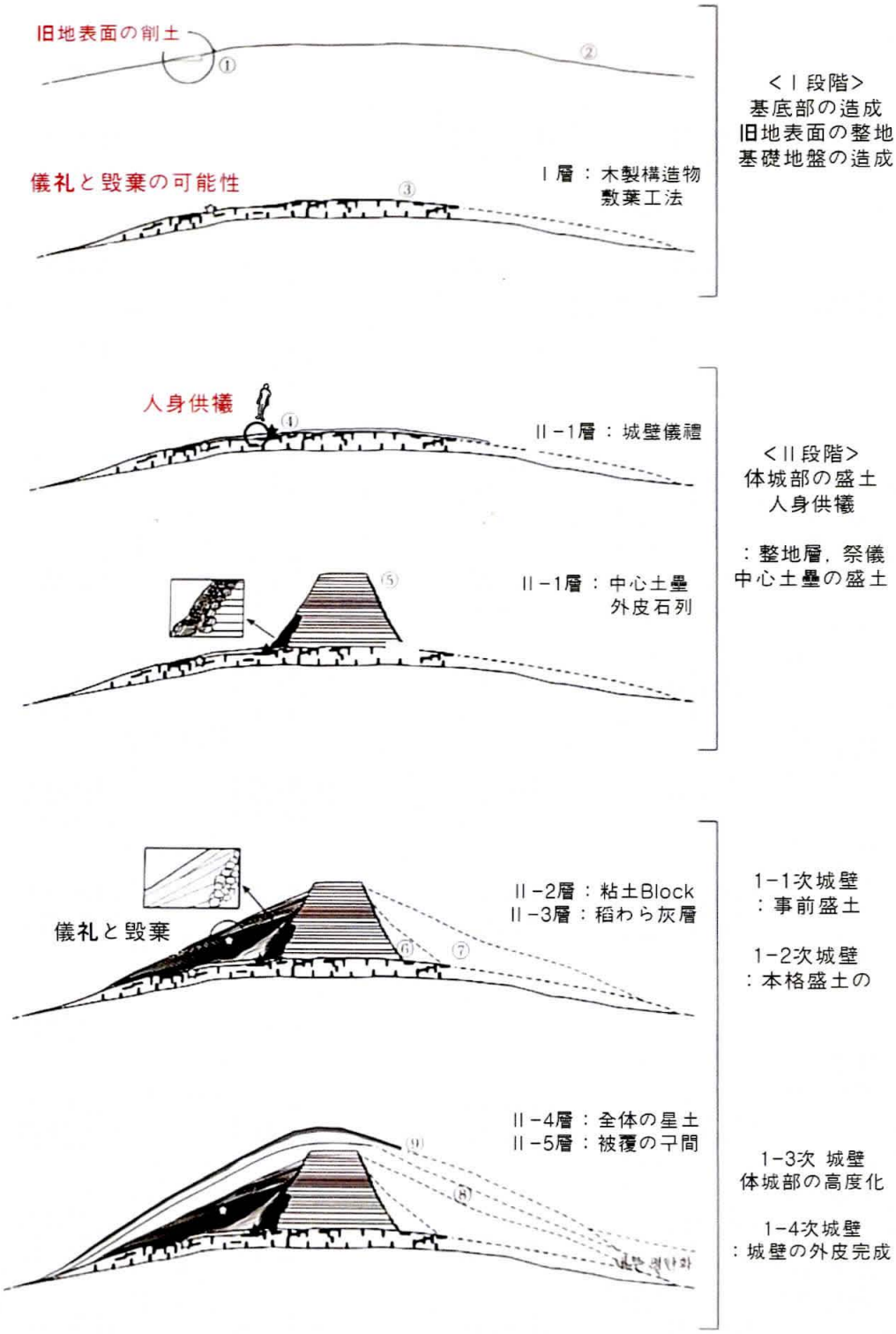


図 40 月城城壁の復元模式図（国立慶州文化財研究所調査団作図）

図 41 月城西城壁の築造工程と出土遺物（1～6Tr ： 西城壁1，6～9Tr ： 西城壁2 / 縮尺不同）

1 ： 7Tr-2017-5-2，2 ： 7Tr-参考913，3 ： 7Tr-参考882，4 ： 7Tr-参考883，5 ： 7Tr-2018-4-31，6~9 ： 50代男性人骨の足部　10 ： 動物骨副葬の附近　11・12 ： 成年女性骨の頭部　13 ： 7Tr-2016-10-21，14 ： 7Tr-2017-6-5，15 ： 6Tr-2016-11-15，16 ： 7Tr-2017-2-1，17 ： 1Tr-参考89，18 ： 1Tr-参考94，19 ： 6Tr-参考634，20 ： 1Tr-参考144，21 ： 1Tr-2018-2-9，22 ： 4Tr-参考435，23 ： 2Tr-2018-6-1，24 ： 1Tr-参考293，25 ： 1Tr-参考302，26 ： 1Tr-参考246，27 ： 1Tr-参考233，28 ： 2Tr-2018-6-6，29 ： 3GR-2015-12-33，30 ： 5GR-2015-11-96，31 ： 7・8GR-2016-3-43，32 ： 5GR-2015-11-97，33 ： 3Tr-参考409，34 ： 1Tr-2016-2-24，35 ： 1Tr-2015-10-24，36 ： 1Tr-2016-3-49

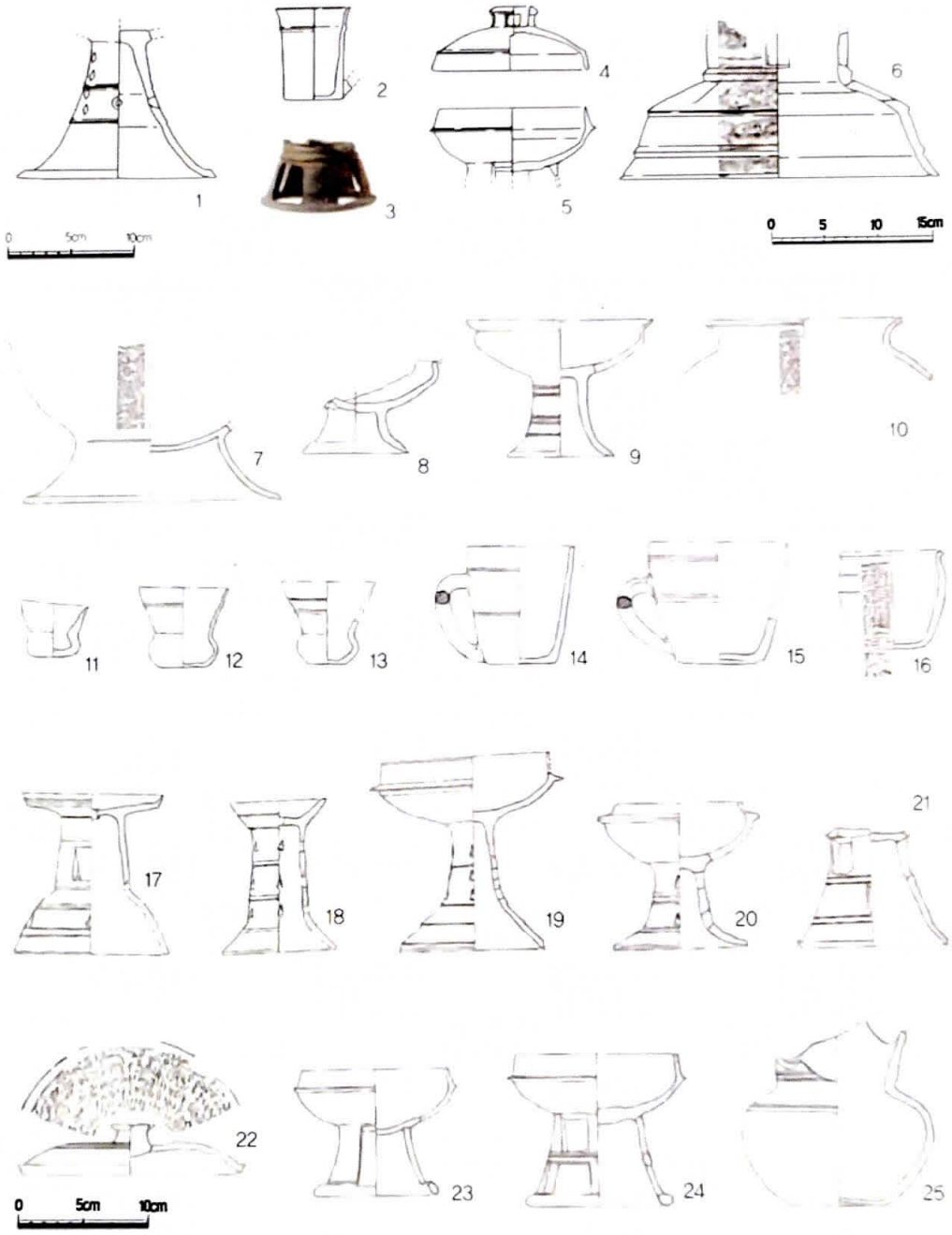


図 42 黒色灰層出土遺物と単位工程別区分（1~6：5号濠一帯 /7~25：
西門址「ラ」区域一帯、1990年）

以上の内容を総合すると、月城西門址入口と推定される地域は自然低湿地であり、出土遺物や炭素年代測定から見て、月城築造以前の4世紀代に形成された下層民中心の集団墓と判断される[43]。校洞158-2遺跡と日本の奈良・平安時代の由比ヶ浜中世集団墓

遺跡や晋州本城洞遺跡と比較すると、ほぼ同じ様相を呈している。すなわち、城壁築造のために城門前で儀礼行為として人身供犠を行ったのではなく、低湿地であり集団墓があったところに表土を除去し、柔らかい低湿地地盤を板材と木材で基礎施設を造った後、城壁を築造したのである。また低湿地であるため濠施設が必要なく、継続的に維持され、統一新羅時代になってここを埋め立てて建物を築造し、土器倉庫を造成したと判断するのが最も妥当だと考えられる。

西城壁2とラインを合わせて行われたという3人の人身供犠は、低湿地に形成された東頭位の一般墓であり、合葬の理由は確認できないが、病気などの理由で同時に死亡して埋葬されたのであろう。また、装身具を着用した成年女性は、下層民の中で若干の財力あるいは地位があったと推定される。最初の2人の埋葬時、墓壙線が確実に現れなかったのは、低湿地層にそのまま土を掘って墓を築造したためであろう。すぐ隣の成年女性の墓では、一部の墓壙線が見え、その上を切土した跡が見えるのは、この墓があった場所が、後に城壁が築造される際、上部を除去したためにできたものと判断される。通常、城壁築造時には表土を除去し、その上に築土する方式が進行されると考えられる。

低湿地に形成される下層民の集団墓は、最近まで続いたものと考えられる。なぜなら、最近のソウルの再開発事業において、多量の人骨が出土したが、その多くは埋葬様式が確認されないものであったためである。これらの墓は主に不毛な野山や低湿地などで発見されている[44)]。

したがって、集団墓とその下層である低湿地層は上部に築かれた城壁とは区別すべきであるが、調査団はこれらを全て同じ工程であると発表したため、時期的な編年に関する問題が発生したのである。基盤層の上に造成された1.5～1.8mの有機物層を人為的に固められた基底部造成層と判断し、4世紀代中後半に人身供犠が行われた後、長くは100年以上、短くは50～60年間にわたって城壁が築造されたと主張している（図41-①～④）。なぜこのような違いが生じるのかという疑問については、最初の儀礼行為の後、相当期間が経過した後に城壁を築城した可能性を調査団は提示している（2次以降の城壁築造は異論がない）。

従来の土器編年から見ると、いわゆる人身供犠者の副葬遺物は4世紀半ば以降であり、城壁築城時に出土する皇南大塚高杯（402年または458年）とは少なくとも50年ないし100年の差が出る可能性がある。図41に示すように、基底部造成層と人身供犠土器はいずれも4世紀に編年され、1次城壁の体城部出土土器は5世紀代以降（15-21）であ

り、前期から中期の段階まで見られる。図42において、1990年に発掘された濠から出土した遺物のうち、濠内部の底から5世紀代半ば程度の（3・4・5）土器が確認される。また、黒色灰層（低湿地層）から出土した土器は4世紀代と5世紀代の遺物が混在しており、同一層で収集されたものではないため、違いが存在すると判断される。

結論を言えば、中国の春秋戦国時代以前に行われた人身供犠が4世紀代の新羅に突然登場したのではなく、一般民ないし下層民の墓地として土層を再解釈し調整しなければならない。また、濠の築造と関連して見ると、年輪年代によって明らかになった434年頃に濠を掘って全体にめぐらせて城壁とし、遺骸の見つかった場所（既存の墓域かつ低湿地帯）には木製加工物などを打ち込んで築城作業区間として活用したと見るべきである。慶州校洞158-2遺跡、由比ヶ浜中世集団墓遺跡、晋州本城洞遺跡などの低湿地や不毛地に設けられた一般下層民の集団墓などは、このような地形に発掘が進められるとその例が増加すると判断される。また、434年に月城が築造されたと見ると、新羅土器の編年観とは30年ほどの開きがあるが、具体的な編年観は別途提示することにし、この時期に合わせることには異見がない。

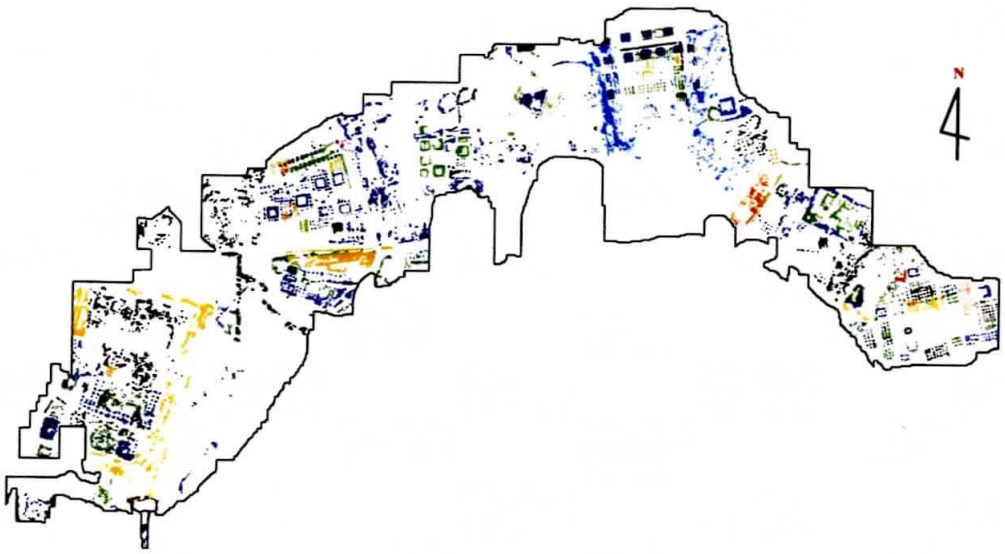


図 43 月城レーダー探査図（国立慶州文化財研究所 2007）

5.月城建物跡

月城内部に対しては、2003～2007年に地下レーダー探査などの基礎学術調査が実施

された（図43）。2014年からは、王宮関連の建物が残っていると推定される中心部のC地区に対する調査が推進された（図44・45）。

真平王7年（585年）に大宮、梁宮、沙梁宮に関する記事と、月城濠出土木簡10号に大宮の表現がある[45]。大宮は王が居住する本宮の意味も持ち、5世紀以降、月城と関連する可能性が最も高い内容であり、月城中央のC地区にある可能性も期待された。発掘の結果、ここでは建物址26棟、瓦坑13基、道路1基、溝状遺構2基、井戸1基、塀址5基、竪穴遺構9基、近代建物址1基と4世紀代以降の7つの文化層が確認された[46]。

国立慶州文化財研究所では、客観的な年代測定のために「C」地区テストピットから試料を採取し、放射線年代測定を行った。その結果、月城内部の基盤層からVI層までは比較的早い時期（1～3世紀）に敷地が造成され、それと関連した生活遺跡が造成されたことを確認した。また、敷地造成のための盛土層は4～5世紀にかけて持続的に補強されたと判断され、敷地造成のための大規模な盛土作業は少なくとも5世紀中～後半以降には行われなかったと考えられた[47]。

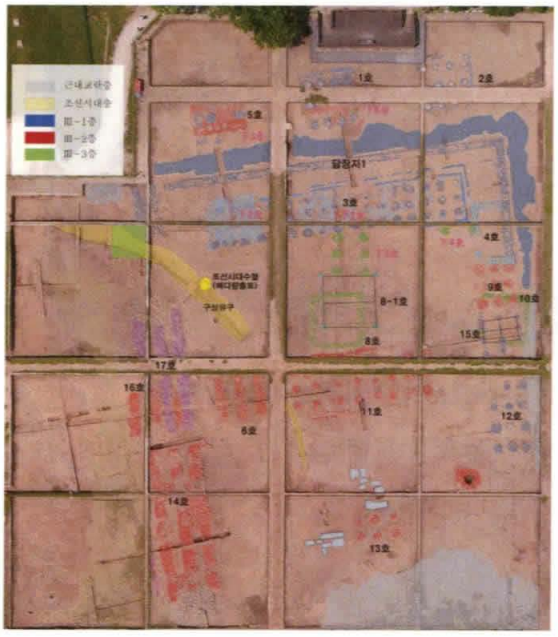


図 44 月城C地区建物址の配置（赤色建物:60m）

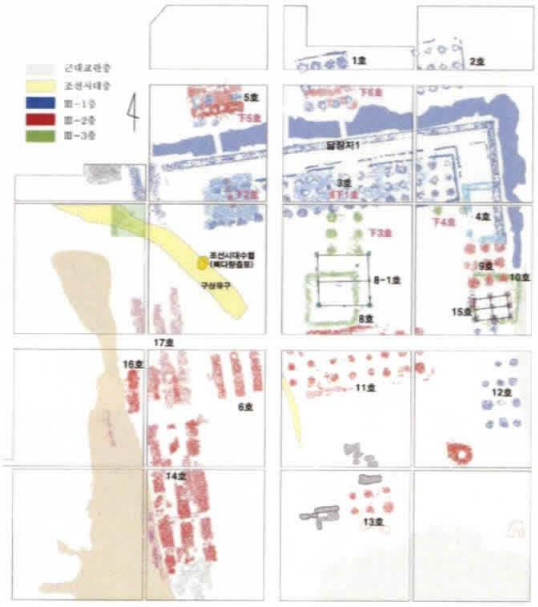


図 45 月城C地区建物址の配置（青赤建物:37m）

まず最上層に残っている8～10世紀代に造成された建物址を調査した結果、統一新羅時代の文化層は3つあり、7世紀代以降、約300年にわたって建物の改築が行われ、建物の軸も変化したことが分かる。統一新羅初期には、磁北の軸に合わせて建物が築造されたが、時代が経つほど、西側に傾く様相を示している。

図 46 月城北便建物址

図 47 皇南洞123-2鷄林北便建物址の地鎮具

図 48 月城北便建物址（左:皇南洞123-2 鷄林北便建物址　右:瞻星台南便建物址）

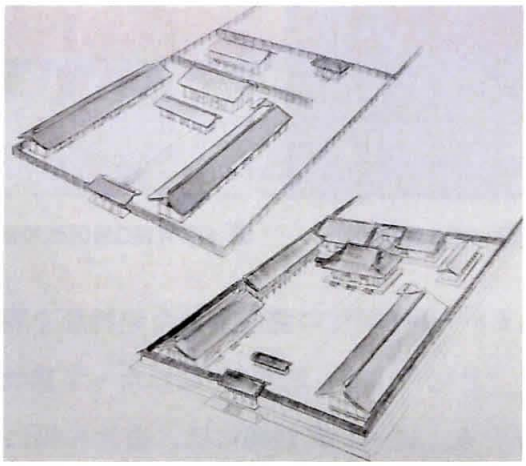


図 49 平城宮塼積み基壇官衙区域の變遷
（上:8世紀前半 下:8世紀後半）
「古代の宮殿と寺院」『古代史研究8』1988 講談社

本来は、最も月城の中心というべき区域であり、中央軸である北側に合わせたが、時期が経つにつれ西側に大きく傾いたB地区の軸と合わせながら自然に改築されたものと推定される。南側に出入りする構造で、間口2間-7間-16間の長方形建物を順に造営し、建物と建物の間に20mほどの庭を配した空間構造が確認された。建物は南→北に行くほど逆三角形の構図であり、安定感を持って配置されていた。

北側中央に位置する3号建物址は東西の長さが37m（間口16間×奥行2間）であり、14号建物址は南北60mの列根石構造と確認されたが、構造から見て正殿の役割ではないと判断される。建物の配置を見ると、東には小規模の出入施設型建物と付属建物があり、西には列根石構造の建物が南北に長く築かれ、東西に長い建物を塀で保護していることから、王や王族の寝殿に関わるものではなく、官僚などが業務を行う場所と関係がある可能性が高いと考えられる。また、硯片111点が出土したが、これが統一新羅時代の王宮内文書行政関連部署建物群なのか、それとも王命を執行する部署なのかは不明である。

ここは、月城内部で最も中央に位置し、月池や皇龍寺に繋がる東門址に入るとまず出迎える場所である。したがって、王宮の出入にかかわる部署の建物群とも推定される。今後、調査地域が拡大すれば、王宮内の関連施設との関連性を考慮する必要がある。同様に、月城濠の北側から長舎形建物址が発掘・整備されていることについても理解する必要がある。

韓国では、一方向に長く延びる建物を回廊形建物址または長廊址と呼んでおり、日本では長舎という用語が用いられる[48]。月城濠北西の皇南洞123-2鶏林北便建物址は、両側に長廊の建物と中央に政庁のような建物が配置される構造である[49]。百済の益山王宮里や、日本の前期難波宮（652～686年）、藤原宮朝堂院（694～710年）、平城宮中宮院（8世紀前半）の回廊式建物址に似た性格と理解されている。後方中央の1号建物址を挟んで奥行2間の南北に長い建物址3棟が一列に位置する。すなわち、建物1の西側には間口（南北）10間、奥行（東西）2間の建物6～8、東側には間口（南北）10間、奥行（東西）2間の建物2～4が配置されている。建物址7～8の西側には間口（南北）13間、奥行（東西）1間の建物10、建物3、4の東側には間口（南北）12間、奥行（東西）1間の建物5が配置されている（図46～48）。

このような建物配置は官庁建物とも認識されるが、王室の祭儀と関連した建築物とする見方もある。地鎮具の出土から宗廟建物との見方もあるが、王宮の北西という配

置が宗廟社稷といった儀礼建築の配置に反するため、無理がある。このような長舎形建物址は城東洞殿廊址で確認できる。中央には間口3間×奥行3間の建物があり、南北長75.4mの長舎型建物址2棟が取り囲んでいる構造が確認される[50]。

このような規模から副宮、離宮、北宮と推定する傾向が強く、唐の体制を受け入れ北側に王宮を配置する構造と認識されてきた。しかし、月城が新羅滅亡まで王宮としての役割を果たしたと史料に見られることから、全面発掘によって明らかにしない限り、その用途は推論の域を出ない。また、明堂などの礼制関連の建築物と見ることもある[51]。月城内のC地区建物群においては、様々な用途が推定されているが、不明な点が多く、今後周辺地域の追加発掘によって相互比較が可能になれば、その性格も究明されるであろう。

結　語

本章では、初期の王城である金城の概念や場所について、史料の分析と、周辺遺跡と地形などを考慮し、その位置を隍城公園内部の低い丘陵地と推定した。記録上に見える南堂も、やはり最初に造られた時、離宮的性格の月城内部に建設され、最後に登場する586年ごろまで維持されたと考えた。そして、昔脱解の瓠公との月城争奪説話は、隍城洞の製鉄勢力が月城を占める過程が美化されたものだと分析した。初期記録と考古学的証拠資料は時期的に整合せず、一連の内容は3～4世紀代に設定すべきだと考える。

最近、発掘が進められている月城において話題となった人身供犠については、調査地域の上層と下層を区分すれば不要の議論であったが、これを同じ工程と見なしたため、研究者に混乱を来したものと考えられる。また西門址が発見されなかった点については、門の痕跡が失われたのではなく、もともと城門が存在しなかったことを示すものであり、その前に統一新羅時代の建物が建てられていることがこれを証明している。城門の前に建築物が存在するということは、視野を遮る、すなわち、防御が不可能にすることを意味するものであり、特に城門から侵入する敵にとっての遮蔽物を提供する結果にもなる。城門の不在は、すなわち「人身供犠」を論理的に説明する根拠も存在しないことになるが、今後、これをめぐって多くの議論が予想される。

また、木材の年輪年代に基づいて濠の築造時期を434年であると確定できれば、考古学研究において多くの調整が必要になるが、その一方で大きな前進も期待される。このように、金城や月城については今後の発掘調査結果に期待しつつ、論を終えることとする。

---

1) 日本では、岸俊男の提案により「宮都」という用語が使用されていることが記されている（『日本書紀』天武12年12月庚午条、京都府）。

2) 朱甫暾は以下の論文で、『三国史記』、『旧唐書』、『新唐書』に出てくる金城が新羅王京を指さす固有の名稱であることが確実であるとしつつ、最近では別途の王宮存在の可能性についても言及している。
朱甫暾 2017「新羅 王京論」『文献으로 보는 新羅 王京과 月城』国立慶州文化財研究所。
パク・ソンヒョン（박성현）2017「新羅 王京 關聯 文献을 어떻게 研究할 것인가?」『文献으로 보는 新羅 王京과 月城』国立慶州文化財研究所

3) 余昊奎は、慶州盆地の古地形に対する最新の研究成果をもとに、金城が瞻星台周辺あるいは大陵苑西南側の皇南洞と沙正洞一帯と見ている。しかし、これまでの発掘結果を考慮すると、この二つの地域に1-3世紀の遺跡が存在する可能性は低いと判断される。
余昊奎 2021「新羅 上古期의 都城 構造와 金城・月城의 性格」『新羅文化』58

4) 藤島亥治郎は閼川附近で、藤田元春、金秉模、全徳在などは慶州の邑城として提起したが、邑城とその周辺地域の発掘が多数行われたが、初期の金城に関連する1～4世紀代の遺跡はないことが確認された。イ・ドンジュ（이동주）は、新羅の都の性格を固有名詞の中で「金京」という用語に圧縮し、月城を正宮とすることに整理した。研究史に関する全体的な内容は次の論文で整理されている。
イ・ドンジュ（이동주）2017「新羅 王京의 定意와 그 範囲」『文献으로 보는 新羅 王京과 月城』国立慶州文化財研究所

5) 『三国遺事』王曆第一 新羅始祖 赫居世王。
營宮室於南山西麓（今昌林寺）奉養二聖兒 男以卵生 卵如瓠

6) 朴方龍は、金城を王都全体の代名詞と見たり、初期の王宮を蘿井一帯と見たりもする。2013 前掲

7) 金弼淑 2021「慶州 昌林寺址 発掘調査（2次）」第1回 慶州地域 文化遺産調査・研究成果 發表会
国立慶州博物館・文化財庁新羅王京核心遺跡復元整備推進団・国立慶州文化財研究所
鷄林文化財研究院 2022『慶州 昌林寺址Ⅰ』

8) 李凡泓 1992「斯盧国地域의 3～4世紀代 土器研究」『韓国上古史学報』10 韓国上古史学会
1991年からは、隍城洞住居遺跡と製鉄遺跡に関して、金世基、李栄勳、尹東錫、孫明助、金権一らが研究を行い、墳墓遺跡と遺物については安在皓、車順喆などが、遺跡集団の性格については崔景圭と林東在らが研究を行った。これらの内容は、黄甫垠叔（2009）に詳しく記述されている。

9) 金鎬詳が修士論文で発表した後、李根直と黄甫垠淑が再び隍城洞地域を金城と提示した。
李根直 1998「慶州地域 新羅文化의 成立과 傳承過程 研究」『韓国文化論集』釜山専門大學 韓国文化研究所 創刊号 pp38-40
金鎬詳 1999「新羅 王京의 金城研究」『慶州史学』18 慶州史学会
皇甫垠叔 2009「金城의 位置 比定」『新羅文化』34 東国大学校 新羅文化研究所

10) 以下の内容は、イ・ドンジュ（이동주）前掲 p83から引用した。
『舊唐書』巻199上 列傳 第149上 新羅国。
王之所居曰金城 周七八里 衛兵三千人 設獅子隊
『新唐書』巻220 列傳 第145 新羅。
而王居金城 環八里所 衛兵三千人 謂城爲侵牟羅
『括地志』（『翰苑』蕃夷部 新羅 注 所引）

括地志曰 新羅治金城 本三韓之故址
『崇福寺碑』金城之离 日觀之麓 有伽藍號崇福者…

11) 隍城洞など慶州全地域の発掘資料が集成されている。
国立慶州文化財研究所 2020『慶州地域 遺跡分析資料 DB構築 및 分析研究1 DB分析資料集 新羅王京』

12) 六村長たちが閼川辺（北川）で会議途中、朴赫居世の誕生を知らせる蘿井の瑞光を見るために高いところに登って南側を見た（乗高南望）という記事から見て、独山であると考えられた。
丁仲煥 1984「新羅建国説話 小考」『慶州史学』3 慶州史学会 pp11-12

13) 東国大學校慶州キャンパス博物館 1996『慶州 隍城洞 267 略報告』

14) 『三国史記』に記録された洪水記録を調べ、27.9年（836年/30日）あるいは28.8年（836年/29日）に一度の割合で洪水が発生したことを把握し、北川堤防の修理について考察している。
姜奉遠 2005「慶州 北川의 修理에 관한 歴史 및 考古学的 考察」『新羅文化』25 東国大学校 新羅文化研究所 p342

15) 車順喆 2009「慶州 隍城洞古墳群」『韓国考古学専門事典 古墳篇』

16) 金炳坤 2017「新羅 王城의 変遷과 居住集団」『文献으로 보는 新羅 王京과 月城』国立慶州文化財研究所

17) 『三国史記』百濟本紀。
古尒王 二十八年 春正月 … 坐南堂聽事東城王 十一年 十一月 宴羣臣於南堂

18) 朴淳發 2021「風納土城 築城의 意義」『風納土城 築城技術의 秘密을 풀다』国立江華文化財研究所

19) 朴方龍、2013前掲。「南堂を都堂と呼ぶ」という説は、都堂山土城の別名が南堂であることに由来するものであるが、都堂山の名称は近代地図にも確認できないため、この名称が使用されるようになった時期は不明である。一方で、土城の基底部の木炭が放射線炭素年代測定により4世紀代と確認されたことから、この地域には青銅器時代から10世紀までの遺跡が存在することが示唆される。また、この地域には直径20m前後の大型古墳も存在し、真徳女王陵（647～654年）と考えられることもある。そのため、南堂に大型古墳が造成される可能性は低いと考えられる。
聖林文化財研究院 2017『慶州 校洞 都堂山土城 遺跡』
朴洪国 2019「慶州 南山 藥水谷과 都堂山 西北麓의 王陵及 単独古墳」『新羅史学報』45

20) 『三国史記』新羅本紀。
脱解尼師今…、望楊山下瓠公宅 以爲吉地 設詭計 以取而居之 其地後爲月城
『三国遺事』王曆第一 第四脱解王。
望城中可居之地 見一峯如三日月 勢可久之地 乃下尋之 卽瓠公宅也 乃設詭計 潛埋礪炭於其側 詰朝至門云此是吾祖代家屋 瓠公云 否 爭訟不決 乃告于官 官曰 以何驗是汝家 童曰 我本冶匠 乍出隣鄉而人取居之請掘地撿看 從之 果得礪炭 乃取而居焉

21) 国立慶州文化財研究所 2021『慶州 月城 試・発掘調査報告書』p28

22) 李旼馨 2022「慶州 東部史跡地帶 撥川遺跡 調査成果」『撥川 慶州의 옛물길』 新羅王京核心遺跡復元整備事業推進団・慶州市・慶北文化財團文化財研究院 p50 図面

23) 月城 調査報告書、分析資料、学術大会資料など計63件の原文がホームページに提供されている。
国立慶州文化財研究所 https://www.nrich.go.kr/gyeongju/index.do

24) 李相俊 1997「慶州 月城의 変遷過程에 대한 小考」『嶺南考古学』 21 嶺南考古学会
金洛中 1998「新羅 月城의性格과 変遷」『韓国上古史学報』27 韓国上古史学会

25) 李晟準 2018『漢城百済의 成長』 진인진
2021「風納土城 東城壁의 築造와 規模의 擴大」『風納土城 築城技術의 秘密을 풀다 学術大会發表資料集』国立江華文化財研究所

26) 朴正宰・崔文禎 2017「慶州 月城과 周辺建物址의 時期別 変遷過程-月城垓字 調査 成果를 中心으로-」『考古学』16 中部考古学会

27) 国立慶州文化財研究所が提供する資料として、最近発掘された月城遺跡などを紹介した。
国立慶州文化財研究所 2019『新羅 千年의 宮城、月城』
李恩碩 2021「新羅 都城의 構造와 城郭調査의 成果」『季刊 韓国의 考古学』vol46 周留城

28) 国立慶州文化財研究所 2021『年代 測定学을 통해 본 古代 慶州의 時間』

29) イ・チャンヒ (이창희) 2021「放射性炭素年代를 利用한 月城 垓字의 歴年代」上前掲 pp66-80

30) キム・ヨジョン (김요정) 2021「木材의 年代分析을 통한 慶州地域 年代記 復原」上前掲 pp40-49

31) 張企明は築造時点が城壁の基底部造成以後、体城部盛土と相まって4世紀中～後半に該当すると判断している。竪穴濠は5世紀前頃前後に一度の補修、整備と見ている。これは考古学的な出土遺物の時期などと合わせて編年したものではなく、人身供犠の年代に合わせようとしたものと見られる。
張企明 2021「月城垓字의 調査 成果와 古環境 研究와의 接点」『新羅文化』58 東国大学校WISE キャンパス 新羅文化研究所

32) 文化財庁報道資料 2017年5月16日、2021年9月7日付

33) 張企明・崔文禎 2022「新羅 月城 西城壁의 築造 工程과 人身供犠」『嶺南考古學』92 嶺南考古学会

34) 発表資料と討論内容をすべて収録した。
国立慶州文化財研究所 2022『月城 西城壁 発掘調査 専門家フォーラム』

35) 国立慶州文化財研究所 2017『月城 東門址 및 東城壁 試・発掘調査報告書』

36) 沈炫暾 2018「慶州盆地의 古地形과 大陵苑一圓 新羅古墳의 立地」『文化財』51-4

37) 新羅と加耶に見られる殉葬は、同時性・強制性・従属性を殉葬判別の条件として設定している。
李晟準・金秀桓 2011「韓半島 古代社会의 殉葬文化」『韓国考古学報』81 韓国考古学会

38) 鷄林文化財研究院 2015「月精橋 周辺 整備事業敷地内 遺跡発掘調査略報告書」

39) 国立慶州博物館では小児1人が、東宮建物址3号井戸では成人1人と小児、幼児、乳児の4人が確認された。
金宰賢 2002「連結通路敷地内 우물出土 人骨에 대한 所見」『国立慶州博物館敷地内 発掘調査報告書』国立慶州博物館 pp471-477
金宰賢・김주희・김형철・鄭珉圭 2018「新羅王京遺跡 3號우물出土 人骨에 대한 考察」『慶州 東宮과 月池Ⅲ』 国立慶州文化財研究所 pp680-685

40) 崔夢龍・千命薫 1990「Ⅵ. 出土人骨」『月城垓字Ⅰ』文化財研究所 慶州古跡発掘調査団

41) 神奈川県教育委員会・平塚市博物館・神奈川県立歴史博物館 2018『潮風と砂の考古学』平成30年度かながわの遺跡展

42) 慶尚文化財研究院 2023「晋州 本城洞 雨汚水管整備區間内 遺跡発掘調査 専門家検討会議資料集」

43) 2021年9月7日のフォーラムの討論では、集団埋葬地と唱えたのは安在皓氏のみであり、ほとんどの人は人身供犠を認める雰囲気であった。

44) 最近の脱北女性の証言によると、脱北時に逮捕された人々は教化所（監獄）に送られ、そこで死亡した人々は周辺の低湿地に埋められ、その上に農作物が植えられる様子を目撃したという。
聯合ニュース 2023年3月17日付

45)『三国史記』新羅本紀
眞平王條王七年 大宮梁宮沙梁宮三所置私臣…

46) 国立慶州文化財研究所 2021『慶州月城 試・発掘調査報告書』1・2・3

47) 崔文禎 2021「慶州 月城에서의 年代測定 研究와 方向」『年代 測定学을 통해 본 古代 慶州의 時間』国立慶州文化財研究所・嶺南考古学会

48) 宮殿内に存在するこのような建物址の機能や役割について相互比較した研究があり、その調査内容を引用した。
田庸昊 2021「益山地域における長舍と鳥形土製品に關する研究-6～8世紀の日韓宮城の建物配置と寺院出土塑像の比較検討を中心に-」『日韓文化財論集』Ⅳ 奈良文化財研究所・国立文化財研究所

49) 国立慶州文化財研究所・慶州市 2009『慶州 皇南洞 大形建物址-皇南洞123-2番地 遺跡』

50) 1937年の調査後、1993年に西側の長廊址と南高壘一帯を再調査し、一部の規模を確認した。
齋藤忠（朝鮮古蹟研究會）1938「城東里の殿廊址」「慶州に於ける統一新羅時代遺構址の調査」『昭和十二年度古蹟調査報告』pp81-83
国立慶州文化財研究所 1995『殿廊址・南高壘 発掘調査報告書』

51) 李康根 2013「城東洞 殿廊址의 性格에 대한 再照明」『先史와 古代』38

第Ⅱ部

佛教寺院と計画都市の出現と運営

第 3 章　6～7世紀の寺院創建と構造

問題の所在

新羅史において、皇龍寺の建立は古代都市中心国家の誕生を告げる重要な時点に位置づけられる。6世紀に入り、新羅には重大な社会的変化が起こった。殉葬の禁止（502年）、東市の設置（509年）、律令頒布と百官公服の制定（520年）、仏教の公認（528年）、建元年号の使用（532年）、最初の伽藍である興輪寺の建立（544年）、梁・陳との交流などである[1)]。

一方、同時期の百済は、538年の泗沘遷都の後、567年に陵山里に寺院が建立され、577年には王興寺が建てられた。一方、中国では、495年に北魏の孝文帝が平城から洛陽に遷都し、502年に梁が成立し、504年には仏教が国教化された。534年には、北魏から東魏が分かれ、535年には西魏が成立した。550年には、東魏が滅亡し、北斉が成立した。557年には、西魏が滅亡し、北周が成立した。同時期に梁が滅亡し、建康を都とする陳が成立した。577年には北周が北斉を滅ぼしたが、最終的に隋が成立し、北周を滅ぼして長安に大興城を建設し、587年には後梁を、589年には陳を滅ぼして中国の統一を達成した。一方、日本では飛鳥時代に入り、仏教と中国の政治制度などを受け入れるようになった。

このように、6世紀の中国における20～30年周期の度重なる興亡と、仏教の拡散は、東北アジア諸国に多大な影響を及ぼすことになった。新羅は553年、真興王代に漢江下流域へと領土を拡張し、中国への進出路を確保した。当時の東北アジア諸国においては、都の建設という大きな動きがあり、新羅のように王権の象徴となる建造物（新宮）を建設することは、その流れに沿ったものであった。

新宮建設においては、単なる宮殿建築にとどまらず、古代都市の造営、特に条坊制を導入した新都市の造営と相まって中国の制度と概念を受け入れることになった。新羅は都城を移転しなかったため、自然地形・範囲を維持しつつ独創的な要素が加えられて新羅式都城制へと発展し、8世紀代まで都市範囲が拡張された。その中心にあったのが、皇龍寺である。皇龍寺は、政治、思想、宗教の中心地であり、国難克服の代表

的な護国寺院であった。皇龍寺の木塔と丈六尊像は新羅三宝の一つとされ、当時の社会における重要な場所であった。1976年から1983年まで行われた境内発掘により、1塔3金堂式構造と講堂および付属建物が確認され、最近では南側広場・都市遺跡と連結される地域に対して発掘が進行中である。しかし、芬皇寺との境界に当たる北側や、西側の発掘調査はまだ進んでおらず、周辺との空間構造的関係の解釈は困難である[2)]。

発掘の結果、皇龍寺は新羅史研究において代表的な寺院とされ、2000年代以降は皇龍寺の復元研究や都城との関係について、多くの学術大会や研究論文が発表されている。また、2005年からは国立文化財研究院の建築文化財研究室でも研究が進められている[3)]。しかし、三金堂の建立の理由およびその背景については、中国に起源を求めてはいるものの、具体的な解釈は困難を伴っている[4)]。

本稿では、新羅都城の都市計画の中心と基準となる皇龍寺の築造過程と意義について、新しい視点から接近して考察する。また、528年に新羅で仏教が公認された後、7世紀半ばまでに建立された寺院は45カ所と記録されている。その中から王室と関連して発掘され、初期の型式が把握できる寺址についても検討する。

第 1 節　皇龍寺の造成と構造

1.建設過程の再認識

皇龍寺は新羅最大の寺院であり、『三国史記』と『三国遺事』に建立内容が詳しく記述されている。建立は553年で、574年には丈六尊像が安置され、伽藍全体の基本構造が整えられた。その後645年に九層木塔が建立されるまで、約100年にわたって造営が続けられた。各種の重修記録が残されており、1238年のモンゴル侵入まで維持された。三金堂、木塔、講堂、鏡楼、鐘楼、僧坊、回廊、中門、南門と北側に各種の付属建物などが数回にわたって建てられ、その寺域は24,500坪に達する。現在は発掘後に伽藍が整備され、国立慶州文化財研究所が発掘現場事務室として使用していたため、未調査だった西側回廊外郭の一部区域についても2018年から発掘が行われており、建物の性格究明が進められている[5)]。『三国史記』と『三国遺事』において、真興王が新宮を建設しようとしたが、黄龍が現れたため寺院に変更したという記事については異論がない。発掘調査の結果、最下層から黒色粘土層が確認され[6)]、寺院建設

以前は沼地であったこと、また黄龍は四方を護衛する四神の長であり、皇帝の権威を象徴する存在であったことなどは、十分に理解されている。真興王の時代的背景において、古代国家の基礎を築き、北方地域と漢江流域の領土拡張および強力な王権を築いたという記事が常に登場する。

新羅時代には、史料に龍の出現が見られ、一般的には、神格化された龍神信仰や王の死亡などの国家的大事件と関連づけられて解釈されてきた。しかしながら、これらの史料において、龍が具体的にどのように現れたのか、またそれに伴う追加的な問題については十分に検討されていなかった。龍は、王の尊厳を象徴する存在として捉えられ、神話的な要素を含んでいるとされていった。

これに対し本稿では、新羅時代の史料における龍の出現が自然現象とどのように結びつくのかについて[7]、従来に検討されてこなかった具体的なアプローチによって検討する。龍がどのように現れたのか、それがどのように解釈されたのか、そしてそれによってどのような影響がもたらされたのかを検討したい。

『三国史記』新羅本紀には「龍の出現」記録が13回あり、また、自然現象中には大風記事も加えた。

表 1『三国史記』新羅本紀:龍の出現と大風記事

王 名	年 度	解 釋	原 文
始祖 赫居世居西干	5年 (紀元前53年)	春の正月に竜が閼英井に現れた…始祖が聞いて王妃とした。	春正月 龍見於閼英井 …始祖聞之 納以爲妃
	61年 (西暦4年)	秋の九月に金城井に龍二頭が現れた。大雨が降り、宮城の南門に雷が落ちた。61年 (西暦4年) 春の3月に居西幹が崩御された。	六十年 秋九月 二龍見於金城井中 暴雷雨 震城南門 六十一年 春三月 居西干升遐
儒理尼師今	33年 (57年)	夏の4月、金城井に龍が現れた。34年 (57年) 冬10月に王が亡くなると、蛇陵園で葬られた。	三十三年 夏四月 龍見金城井有頃暴雨自西北來 三十四年 冬十月 王薨 葬蛇陵園内
脱解尼師今	24年 (80年)	夏の4月、京都に大きな風が吹き、金城の東門が自然に崩れた。秋の八月、王が亡くなった。城北の壌井丘に葬られた。	二十四年 夏四月 京都大風 金城東門自壊 秋八月 王薨 葬城北壌井丘
祇摩尼師今	11年 (122年)	夏の4月、大きな風が東から吹いてきて木を膨らませて瓦を飛ばそうとしたが、夕方になって止まった。 王都の民が「倭兵が大きく侵攻してきた」と誤って山の谷間に隠れた。	十一年 夏四月 大風東來 折木飛瓦 至夕而止 都人訛言 倭兵大來 爭遁山谷
阿達羅尼師今	11年 (164年)	春の2月、京都に龍が現れた。	十一年 春二月 龍見京都
沾解尼師今	7年 (253年)	夏の4月、龍が宮東の池に現れた。金星の南側に倒れていた柳が自ら立ち上がった。	夏四月 龍見宮東池 金城南臥柳自起
味鄒尼師今	元年 (262年)	春の三月、龍が宮東の池に現れた。秋の7月に金城の西門が火事になり、火が広がり民家300軒余りを燃やした。	元年 春三月 龍見宮東池. 秋七月 金城西門災 延燒人家三百餘區
訖解尼師今	35年 (344年)	夏の4月、嵐が吹いて宮南の大木が抜か	三十五年 … 夏四月 暴風拔宮

		れた。	南大樹
奈勿尼師今	18年（373年）	夏の五月、京都に雨が降るどき魚が落ちた。	夏五月 京都雨魚
慈悲麻立干	4年（461年）	夏の４月、金城井に龍が現れた。	四年 夏四月 龍見金城井中
炤知麻立干	12年（490年）	３月、鄒羅井に龍が現れた。	十二年 三月 龍見鄒羅井
	22年（500年）	夏の４月、暴風が吹いて木が抜かれ、金城井に龍が現れた。京都に霧が立ち込めて四方が遮られた。冬の11月、王が亡くなった。	二十二年　夏四月　暴風拔木．龍見金城井．京都黄霧四塞…
法興王	3年（516年）	春の正月、王が神宮に祭祀を行った。龍が楊山井の中に現れた。	三年 春正月 親祀神宮 龍見楊山井中
眞興王	14年（553年）	春の２月、王が担当官庁に命じて、月城の東側に新宮を建てさせたが、黄龍がその地に現れた。王が不思議に思って直して寺を建て、名前を付けて皇龍とした。	十四年 春二月 王命所司 築新宮於月城東 黄龍見其地 王疑之 改爲佛寺 賜號曰皇龍
眞平王	53年（631年）	秋の七月、白い虹が宮井に入った。54年（632年）春正月、王が死去した。	五十三年　秋七月 白虹飲于宮井 五十四年 春正月 王薨
景德王	23年（764年）	３月、龍が楊山の下に現れ、しばらくして飛んでしまった。	二十三年 三月 龍見楊山下 俄而飛去
文聖王	12年（850年）	春の正月、土星が月に入った。京都に土雨が降って風が強く吹いて木が抜かれた。死刑以下の囚人を赦免した。	十二年 春正月 土星入月．京都雨土 大風拔木．赦獄囚殊死已下
景文王	15年（875年）	春の２月、京都の東の地に地震が起きた。…夏の５月、龍が王宮井に現れたが、しばらくして雲と霧が四方から集まって飛んでいった。秋の７月８日に王が亡くなると、諡号を景文とした。	十五年　春二月　京都及国東地震．…夏五月　龍見王宮井　須臾雲霧四合飛去　　秋七月八日 王薨 諡曰景文

表1を見ると、龍が主に井や池に現れ、天気が不順となり、王の死などの記事と関連していることが分かる。閼英井に龍が現れたのは、朴赫居世の王妃誕生説話で、権威を象徴していると考えられる8)。しかし、自然現象に合わせた可能性もある。その後、記事では、龍が現れると雷や木が抜ける状況や霧などと王の死が結びつけられている。ここで注目すべきは、龍の出現をどのように見るべきかである。

慶州盆地は四方を山に囲まれており、3つの河川が流れており、春になると山の間の河川の上に抜ける風が強くなる9)。

このような強風が互いに当たると竜巻を引き起こす恐れがある。大型の竜巻は主に春に発生し、大気上層と地上間の気温差が大きくなり、非常に不安定な状態になることが主な原因であると推定されている。

慶州では、本人は実際に皇龍寺址発掘現場事務室で風が激しい時、庭で小規模の竜巻が発生するのを数回目撃したことがある。今は市街地や各地域に高い建物が建っており、大きな竜巻を起こすほどの自然現象は起きないが、新羅時代には高い建物や家屋がない環境では風も大きくなり、強度が増し竜巻へと変わる。このような現象はやはり天気の不純と関係があり、国家的な厄運事項と結び付けることができるものと推定される。今も韓国では竜巻を龍が昇天することから「龍オルム（昇天）」と呼ばれ

ており、主に海で発生するが内陸でも現れている[10]。また、竜巻には雷や稲妻、夕立、雹が伴うこともある[11]。

すると、慶州で風が最も強い期間である新暦3～5月と符合する期間は旧暦で2～4月に該当する。上記記事の中で旧暦2～4月に龍が登場する記事は9回に達し、1月2回、5月1回、9月1回である。また龍は登場しないものの、4月に大風、暴風が吹いたという記事が4回登場し、正月の1月に1回である。そして1月に土砂が降り、5月に雨が降る時に魚が落ちたという記事もあり[12]、竜巻と関連性のある記事が2回登場する。

図 1 京畿道高揚市一山の龍オルム (2014.6.10.MBC)

図 2 光州の龍オルム (2014.6.12.MBC)

このように、いずれも旧暦1～5月の春から初夏に強風が吹いて龍が出現するという点は、注目すべきである。ただし、9月には1回のみ例外である。253年の記録によれば、龍が現れ、柳が自然に立ったということは竜巻で立ててられた可能性がある。上記の龍の出現記事からもわかるように、皇龍寺が建立される前の6世紀代半ば以前には、10回の出現記録がある。その後、764年には楊山で1回、875年には景文王が亡くなった5月に王宮で1回のみが見られる。皇龍寺の建立と慶州全域に新都市が建設された後は、龍の出現記録が2回しかなく、竜巻もほとんど起こらなかったことが分かる。

図 3 濠州の砂漠隣近ラザマヌ村に落ちった魚 (朝鮮日報)

そして、龍が井戸から現れたという記事は閼英井1回、金城井4回、鄒来井1回、王宮井1回、楊山井1回の計8回で最も多く見られる。また、王宮東池で2回、京都で1回、新

宮（皇龍寺）で1回、楊山で1回と、水と関連のある場所である井戸や池などが合わせて10箇所あり、井戸から龍が水から昇天することを表現したものであると推測される。実際、新羅都城は都市化以前に3つの河川が流れ、用水が豊富であったため、井戸の築造は必要がない。しかし、7世紀代以降に都市化が進むとともに石垣井戸が出現したため、『三国史記』に記載された高麗時代の状況を考慮して解釈する必要がある。また、京都1回を除いて、閼英井、鄒来、金城、王宮、新宮、楊山の井戸はすべて、王宮や王との関連性を示唆していることにも注目する必要がある。

このように、龍の出現とは、竜巻が王との関連性を示唆するものと解釈できる。この他に『三国史記』の金庾信条には直接的な竜巻記事が現れている。「779年4月、竜巻が巻き起こり、金庾信の墓から始祖大王の陵に至ったが、ホコリと霧が立ち込めて人と物を見分けることができなかった」という内容から、翌年の780年に恵恭王が反乱で殺害されたことを示唆したものと考えられる[13]。一方、高句麗や百済では、龍の出現に関する記録はほとんど見られない。これは、新羅と他国との自然環境が異なることを示唆している。高麗や百済では、3月や4月に龍が1回出現したことが記録されている[14]。

皇龍寺は、慶州盆地の中央に位置しており、竜巻が発生すれば大きな影響を受ける可能性がある場所である。また、皇龍寺創建記事に見られる「龍の出現」と、どのような関連性を持つのかを明らかにする必要がある。特に、異なる見解から龍の出現を解釈する余地がある。

『三国史記』には、「王が、黄龍が現れたことを不思議に思い（王疑之）、寺院に変更して皇龍と言った」とある[15]。『三国遺事』には、「將に紫宮を龍宮の南に建てようとしたが、黄龍が現れたため、これを改めて寺とし、黄龍寺と名づけた」と記されている[16]。結局、寺院に変更したという内容は同じだが、展開過程は異なることが推測できる。

1．黄龍の登場を不可思議に思うことの意味は、真興王がまったく予想していなかったが、皇龍の出現を契機として天命を受け、天下を治める支配者になるという意味から「皇」の字を用いるものである。これは、真興王が天命を受けざるを得ない、すなわち、計画していなくても当然のこととして、皇帝の地位を天が与えてくれるという意味であると理解することができ、かなり意図的な文字の選択だといえる。

2．龍宮の存在[17]、すなわち龍が既にいる地である南に宮殿を建て、黄龍が現れるのを待っていたか、予想して龍が現れるとすぐに「黄龍」と命名したいうものである。

これまでの解釈は、発掘の結果、最下層が沼地だったため、普通龍宮（井戸や池など水のあるところ）に住む龍が昇天したという一般的な常識に基づいたものである。しかし、他の観点から見ると、すでに存在している龍宮の南側に紫宮を建立するという前提があり、もちろん『三国遺事』が編纂された高麗時代には龍宮があることが認知されており、龍宮の南と表現したのかもしれないが、龍がすでにここに留まっていることを認知していたと考えられる。この記事は、真興王が沼地を埋めて新しい宮殿を建設する場所が新都市建設の中央地点であり、また竜巻が起きる場所、すなわち皇龍の出現を予測して計画し進行したとも解釈できる。

皇龍寺は、狼山と月城の間の中軸線中央に位置し、従来造成されていた西側地域の積石木槨墳（4～6世紀半ば）墓域を離れた中心地域に、新宮と新都市を建設するという真興王の意図がうかがえる[18]。つまり陰陽五行による王宮の配置とも正確に合致しているということである（図4）。

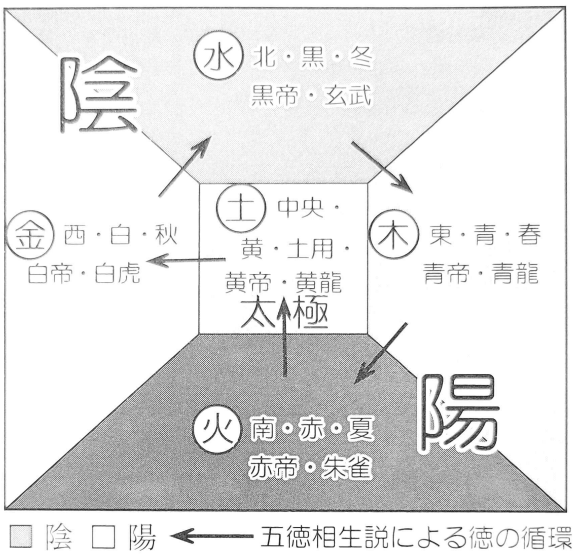


図 4 陰陽五行による空間分割（妹尾達彦2015p43）

真興王は、新宮（皇龍寺）の建設と共に、内部的には王権強化を、外部では領土拡張を推進し、自らを転輪聖王（全世界を統治する王）と称して、王即仏時代を導いた[19]。新宮または皇龍寺の建立が、王権強化を意味することに異論はない。息子は銅輪（26代真平王の父）、鉄輪（25代真智王）と名付けられ、釈迦牟尼の家系がそのまま転生したことを示した。真興王の孫である真平王は、自分と王妃が釈迦牟尼の両親の名前である白浄、摩耶夫人と称し、2人の弟は釈迦牟尼の叔父である伯飯、国飯であり、その娘である善徳女王の名前もやはり釈迦族の公主の徳曼であった。このような家系図を見ると、黄龍の登場とは、天下の支配者となることを自ら象徴することであり、また、寺院に変更して建てたということは、すなわち、釈迦牟尼が居住する場所を造り、仏教中心世界観によって統治するという理念を立てたのである。

2.三金堂の建立と運営

皇龍寺は、伽藍構造が特異な並列式の三金堂構造を持っている[20]。このような構造は、中国、高句麗、百済、日本などでも確認されておらず、その後建設される芬皇寺には三金堂が造営されたが、「品」字型金堂構造に型式変化している。現在、中央金堂には、長六尊像を安置した石造座台が残っているが、東・西金堂には仏像を安置する座台、あるいはその関連施設が発掘当時に全く確認されていないため、疑問が残っている。したがって、王宮の基本概念をすべて備えた場所に皇龍寺を建てたが、三金堂が、どのような思想を反映して造成・運営されたのかを検証する必要がある。

三国に仏教が伝来した4～5世紀初頭、中国では仏教が大いに発展し、北方十六国地域

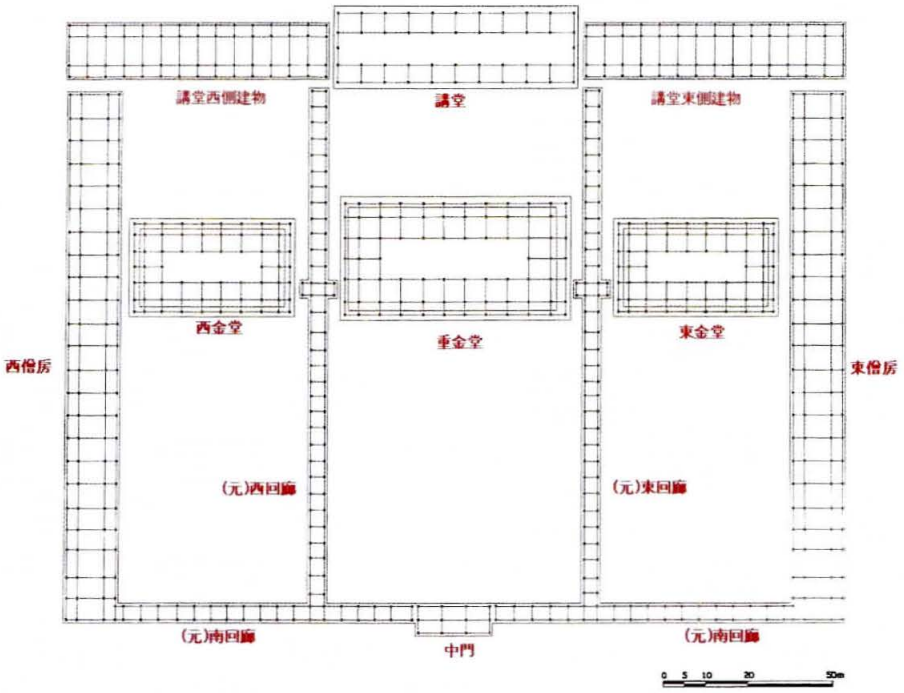


図 5　6～7世紀における皇龍寺伽藍配置図（金淑瓊2020）

に893ヶ所の寺院が建てられた[21]。南北朝時代と隋の統一時期の6世紀末までが、寺院建立の絶頂期であった。南北朝時代には、仏殿の前に塔を建て、回廊を巡らせ、四方に門を備えた配置形態、仏殿の後方に講堂をくわえる配置形態が新たに登場する。双塔配置も出現し、これらは唐代の仏舎建築の平面配置の発展と定型化の基礎となったと考えられる。隋の文帝代には中国全土に既に3792カ所の寺院があったが、煬帝代では3985カ所

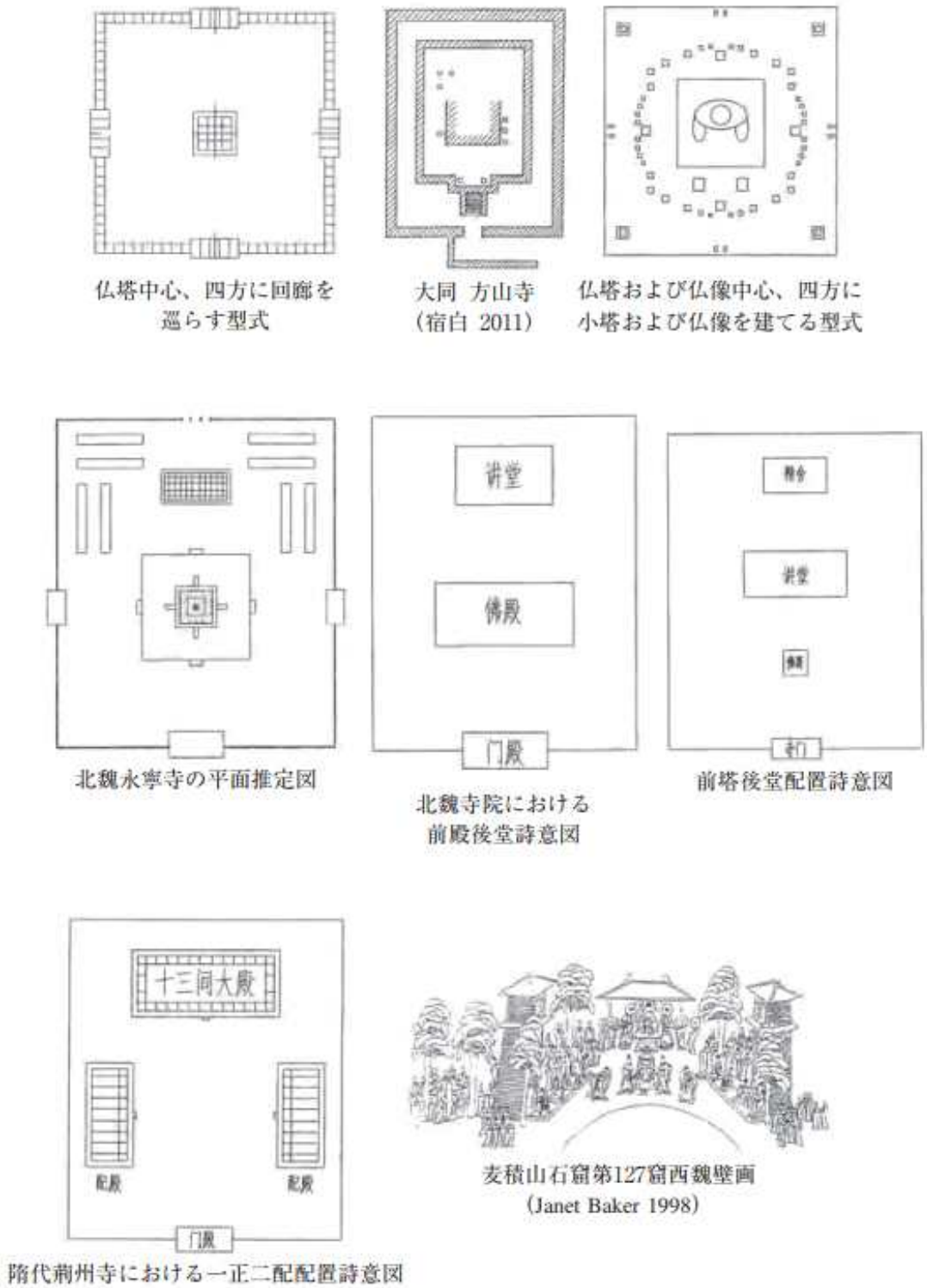
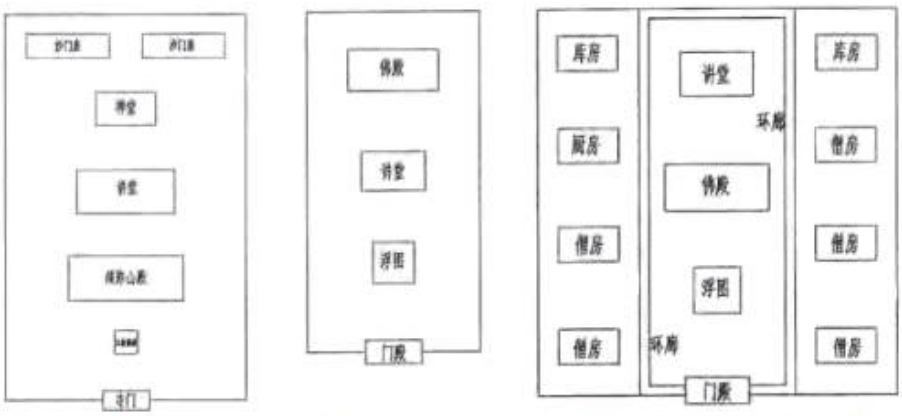
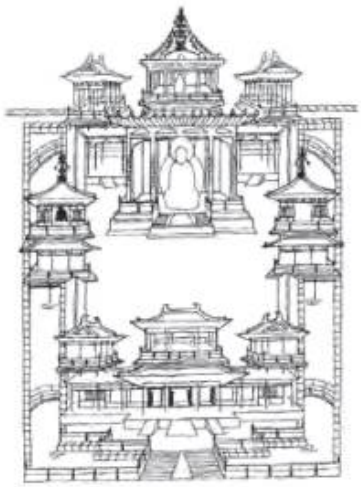


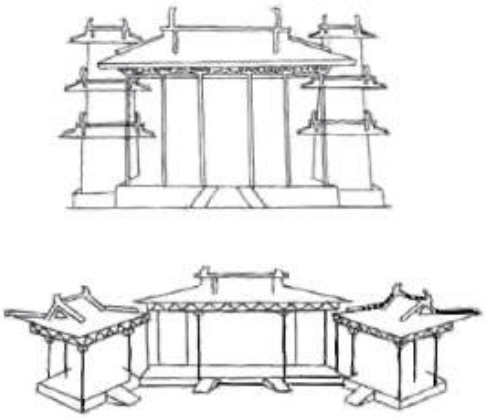
図 6 古代中国の仏殿配置様式図 1（王貴祥2013から引用）



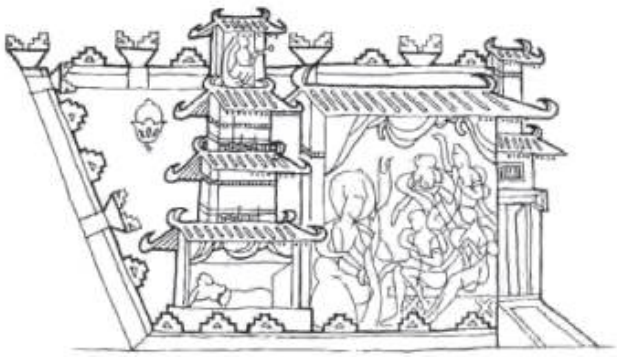
北魏天興元年寺院配置詩意図　塔－堂－殿配置詩意図　塔－殿－堂配置に回廊、僧房、厨庫を加えた配置詩意図



敦煌361窟南壁の阿弥陀経変にみられる仏寺双閣配置（蕭默2002）



敦煌莫高窟周代壁画にみられる一殿双閣型式（宿白2011）



敦煌莫高窟第257窟の北魏壁画中にみられる一殿二塔型式（蕭默 2002）

図 7 古代中国の仏殿配置様式図 2（王貴祥2013から引用）

に増え、僧侶が23万6000人いたという。唐の高宗の時期には5358カ所に達し、比丘尼は7万5524人、尼は5万576人に及んだという。

仏塔中心の平面配置は「仏塔を中心に四方に回廊を巡らせた型式」、または「仏塔と仏像を中心に、四方に小塔と仏像を立てた型式」を呈することから、上座仏教の影響下にあったことを示している。東晋南北朝後期に至ると、北魏の永寧寺のような前塔後殿が登場し、北魏の『洛陽伽藍記』には「木構造の九層塔一基と、浮屠の北に仏殿一棟があるが、形態が太極殿と同じ」であると記録されており、また、洛陽建中寺は前庁後堂の構造で、仏殿と講堂を順に配した姿が見えるとある。隋代に入り、仏塔、仏殿、講堂を同時に造営した寺院は蘇州の重玄寺である。殿を建て、堂を建て、廊廡（回廊）と廚庫（台所）までを完備したという表現が残っていることから、構造の基本概念において皇龍寺と関連づけられる寺院である。

ここから三金堂の構造を類推することができるのは、一正二配の構造である。中央に正殿、その両脇に配殿を置く形式が隋代にすでに出現しており、『法苑珠林』の記録によると、荊州寺は間口13間、東西脇殿が各9間と記述されている。また一閣二樓の配置は、中軸線の上に高角、左右に二樓を置くか、あるいは南に高閣を建てて塔を配し、北に北殿を配置する構造もみられる。そして一殿双塔は、隋文帝が584年に建立した長安大雲経寺でみられるが、前殿後堂を基礎として仏殿前に左右対称の双塔を建てたものである。

以上のように、中国の仏殿建築型式を見ると、高句麗清岩里廃寺において、塔を中心に置き、北・東・西に仏殿を配置した一正二配構造が、日本の飛鳥寺まで続くことが三金堂の造成原理を示す意味と解釈されている。

しかし皇龍寺の三金堂は上記の寺院とは異なり、西金堂-中金堂-東金堂の順に一列配置されている。東金堂と西金堂は台座跡がないことから、東、西金堂の一所には、東築寺から迎えた模型三尊仏を、一所には仏画を安置したと考えられるが、奉安された図像については不明である[22]。皇龍寺中金堂には丈六尊像など、19像を安置する構造が発掘で確認されているが、東・西金堂にはどのような仏像を安置し、どのような儀礼が行われたのであろうか。まず、北魏洛陽城太極殿と皇龍寺の規模を比較してみる。

錢国祥は最近の論文で、北魏洛陽城（孝文帝495年に遷都）の太極殿構造と規模について次のように説明している[23]（図8）。太極殿の宮院は端門の内側にあり、そこは大朝宮院に相当する。南北300m、東西330mに達し、太極殿の主殿と東堂・西堂は宮院の

北部中央に位置し、主体建築として三殿が東西に並んでいる。太極殿は東西の長さが102m、南北の幅が62mであり、面積は6,324㎡で、東・西堂はそれぞれ長さ48m、幅22mである[24]。

皇龍寺の中金堂は二重基壇で、下層基壇は東西長55.3m、南北幅30.3m、上層基壇は東西長49.5m、南北幅24.4mで（全面積1,675㎡）、洛陽太極殿の1/2程度であり、東・西堂の規模と類似する[25]。

梁正錫は王宮の概念のもとで、魏の文帝が洛陽遷都とともに、太極殿と同時に東西堂を造成し、この建物は、太極殿の左右で皇帝の日常的な政務だけでなく、各種行事が行われる補助的な役割をなしたことを明らかにした[26]。

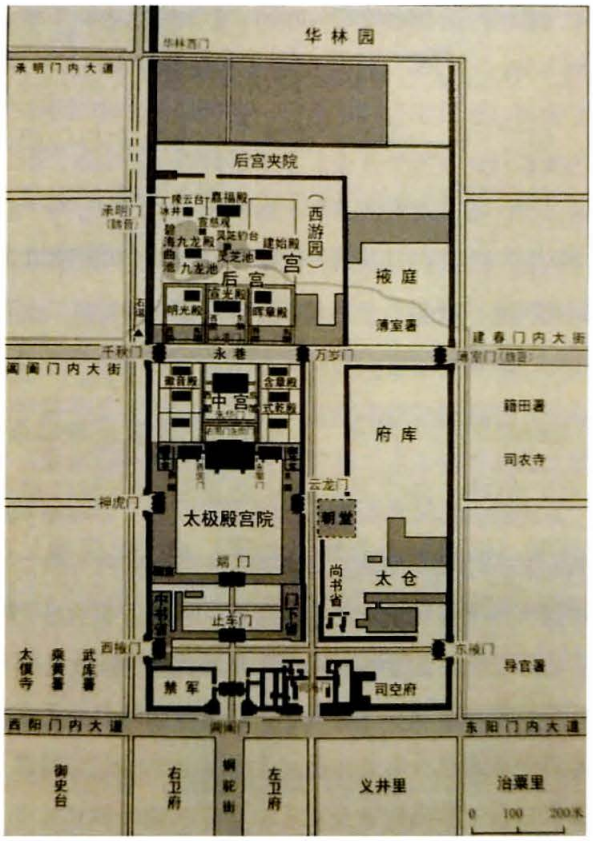


図 8 北魏洛陽城概念図（錢国祥2022）

また、皇龍寺の再建過程で新しく造成された金堂の平面構造が、太極殿と同じ形態だったという点を明らかにしている[27]。しかし、都城の整備に伴い宮廷が新たに整備される過程で問題が生じると、すぐに、皇龍寺は一部の計画変更した状態で造営されたか、あるいは新たに受容した都城計画にもとづき、皇龍寺が造営されたとする。皇龍寺創建期の回廊によって区画された3棟の建物は、再建過程で回廊が撤去されるとともに、東西建物は7間に縮小されるが、中央建物は拡大した構造へと変化する。東西に配置された建物も、やはり太極殿と関連した宮殿配置構造に合わせて造成された可能性があると考えた。したがって外見上、再建伽藍は木塔を除けば、太極殿の東西堂からなる、中国南北朝時代の宮殿構造と同じであると考えている。また、新羅下代にも見られる西堂の記録として、また別の太極殿が存在する可能性も提示し、東西堂制度が隋代に至り廃止される状況で、なぜ後代まで存続したのかという点について、疑問を提起している。

以上をまとめると、東西堂制度が消滅する段階において、新羅の真興王は、この制度をもとに宮殿を作ったが、仏殿への変更に伴い太極殿としての役割はなしえず、新たな太極殿のような政事建物がどこかに存在したと推定される。しかしその位置、あるいは造成計

画は現時点ではわからないため、新資料の発見を期待して結論を終えている。

真興王が当初は王宮を計画するなかで、3棟の建物を竝列して配置することを基本原理としたならば、梁正錫の指摘どおり、東西堂を備えた太極殿を意味していたとみることができる。創建期には、中央建物の両側を南北回廊で区分し、その東西に相当な規模があったと推定し、百済弥勒寺のような「三院式三金堂」の配置形態として理解しようとした[28]。

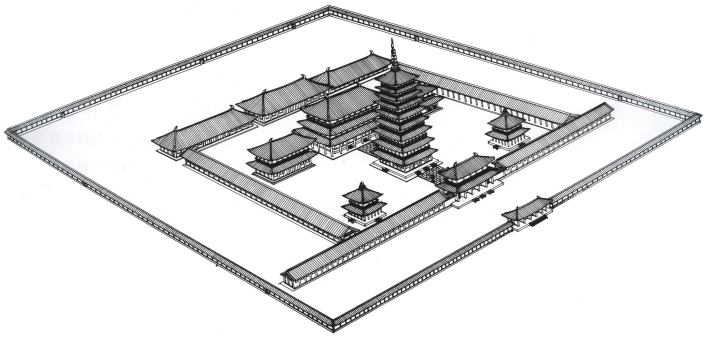


図 9 皇龍寺伽藍復元図

梁正錫が提示した構造は、蘇州にある重玄寺の構造とも関連する。一列配置と東西に各種付属建物の配置をする様子は、皇龍寺初期伽藍とも関連づけることができる。ところが、こうした解釈では、王宮の概念と仏教寺院建築の概念が混在しているため、両者の判別は不可能である。王宮から寺院への変更にともない、丈六尊像など19体の尊像を祀る寺院の構造に変わるが、東西の建物の用途、つまり主尊仏を祀っているのにもかかわらず、左右の金堂の役割をなぜ維持しようとしたのだろうか。太極殿の役割でもなく、東西堂制度も消滅したのに、なぜ三金堂の構造を維持しようとしたのだろうか。

真興王による皇龍寺建立の目的が王権強化にあったとする理解はほぼ定説化しているが[29]、王宮と仏教を組み合わせ、建築にどのように反映させたのかについて、真興王の意図を複合的に考える必要がある。真興王は「王即仏」、すなわち中金堂に釈迦牟尼像を安置し、その東西金堂を、自分と息子のための施設として計画することで、王権強化を宣明することができる。具体的な意味を考えると、東は東輪太子のため、東宮の概念を持った、あるいは太子のための礼拝施設として、西は転輪聖王である自分のための施設と捉えると、三金堂の概念と一致する[30]。しかし、東輪太子の死去（572年）によって長子継承がなされなくなり、王権強化に揺れが生じた。さらに真智王が4年ほどで廃位されると、真平王が即位する。これは嫡統-長子-の継承が続けら

れ、再び王権強化という体制の整備が行われるようになったと理解するができる。真平王の登極は、王権の再確立が優先的な目標であり、名分を立てることであった31)。

その名分を裏付けるのが天賜玉帯である。即位年に天からもたらされた玉帯は、すなわち王権の象徴であり、天命を受けて統治する支配者を意味すると考えられる。郊社や宗廟の大きな祭祀の際には、これを着装したとされる。つまり、皇龍寺丈六尊像、皇龍寺九重塔、天使玉帯は、新羅の三宝であり、そのうちの二つは皇龍寺そのものであったのである。

図 10 皇龍寺址現況（南から）

図 11 皇龍寺址中金堂台座

図 12 皇龍寺址回廊と西金堂（西から）

皇龍寺に丈六尊像金堂が完工した後、東西金堂の役割はどのようなものであったのであろうか。前述のように、東金堂が太子のための東宮の意味を持つならば、それに

ふさわしい仏像が造られたか[32]、『三国遺事』の記録通り、東竺寺の三尊仏が安置された可能性が高い[33]。そうであれば、西金堂の役割は、王の象徴-真興王の系譜を正統に継承した真平王による造像事業-ということよりも、自身の王権強化の重要根拠となる天賜玉帯を保管する場所とした可能性を提示したい。もちろん推論であるため断定できないが、三金堂造営の一つの案として示すものである。

三金堂の中央金堂には丈六尊像を安置し、東金堂には塑造丈六尊像（あるいは薬師如来仏像）、西金堂には天賜玉帯を保管して、王権の象徴を示す姿で展開した。以後、645年に造成された九層木塔は、新羅三宝として皇龍寺の完成を示す、新羅都城において最重要の場所であることを証明しているといえよう。

天賜玉帯の保管場所については、新羅後代に皇龍寺と関連した記録が伝わっている。景明王5年（921年）に天賜玉帯の逸話が伝えられている。新羅三宝の一つであるこの玉帯は、真平王が身に着けていたもので、代々伝わり「南庫」に保管していると90歳を超えた皇龍寺老僧が陳述している。以後、937年に高麗王朝に移譲されるまで保管されていた[34]。この南庫は、王室の各種器物を保管する場所であり、真平王が初めから天賜玉帯を南庫に保管したいたとみることはできない。王権強化の象徴である天賜玉帯が、真平王が登極した579年から約300年余りの間、初めから南庫に保管されたという記録は残っていない。

真平王以降、金春秋につらなる真骨系の王権変化、儒教的統治理念の拡散、8～9世紀代の王権弱体化による象徴性の欠如、金氏王から朴氏王への交替（神徳王912年）、金堂の修理または再建、仏教界の教理の変化、皇龍寺における様々な変化を背景として、その時期は特定しがたいが、保管場所の変更が行われたと考えられる[35]。

阿弥陀仏信仰は7世紀半ばから中国で広く流行し始め、新羅では善徳女王の治世に慈蔵が『阿弥陀経疏』を著したことで西方浄土信仰が始まった。以後、特定宗派に限らず仏教信仰の一般的な形態として定着した。日本では、12世紀に形成された浄土宗と13世紀に形成された浄土真宗が現在も続いている[36]。

東金堂に薬師如来仏を建立した際、西金堂は西方浄土に留まり、衆生を極楽に導く阿弥陀信仰の伽藍へと変化した[37]。その後、芬皇寺も薬師大仏を中金堂に安置するため、8世紀半ば以降、重建された。したがって、善徳女王以降、あるいは統一新羅時代に西金堂の役割が変わる可能性があることを十分に考慮する必要がある。

図 13 永福寺址全景（googleから）

図 14 永福寺址
CG復元図（湘南工科大学製作）

このような三金堂の構造は時期が異なるが、日本では鎌倉時代の1192年に造営された永福寺に見られる（図13・14）。中金堂が二階堂をなし、左金堂が薬師堂、右金堂が阿弥陀堂と並んで造成された。中央に釈迦牟尼主尊を安置し、薬師如来仏の東方浄土と阿弥陀如来仏の西方浄土の概念を全て備えた金堂構造であり、このような配置構造は当時流行した仏教教理と結びついていると考えられる[38]。

一方、百済弥勒寺では639年に三金堂の構造が造成された。三塔が一緒に造成されたため、西塔から出土した舎利具は武王と王妃の造成と関係があると考えられる。さらに、東金堂と東塔は太子だった義慈王のための施設であると推測される。当時、百済と新羅は対立関係にあり、それが100年余り続いていたことが知られている。このことから、王室の安寧と護国のための寺院建立を王が持続的に推進したことが分かる。

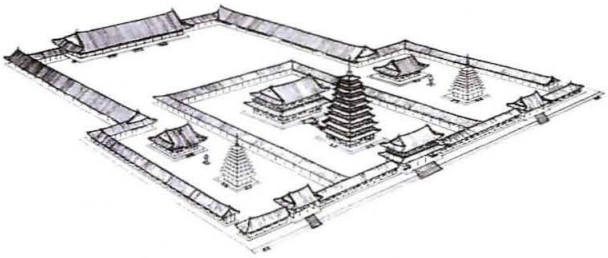


図 15 弥勒寺伽藍復元図

図 16 皇龍寺址西回廊外廓出土錠（2020年）

最近、皇龍寺址西回廊外郭発掘区域の建物址内から金銅製の鳳凰装飾錠が出土した。龍や鳳凰の装飾は、王や

王妃などの貴族が使用する文様であり、貴重な物品を保管する場所であることを示している。建物址内からは、他に重要な遺物は出土しておらず、これ以上の推測はできないが、天賜玉帯などの王や王室の行事に使用された各種の重要な物品を保管していた場所であった可能性がある。

第 2 節　芬皇寺の造成と構造

芬皇寺は、真興王の孫娘であり真平王の長女である善徳女王が即位すると同時に、王室寺院として造営された。寺院は皇龍寺の北に位置している。善徳女王の治世の3年、すなわち634年に創建され、木塔ではなく模塼石塔が築造された。この寺院は、百済の弥勒寺が創建された639年と同時期で、木塔から石塔に変化する段階を示す寺院の一つである。特に仏教が公認された後、皇龍寺、芬皇寺、皇福寺の三つの寺院は、すべて「皇」の字が用いられており、王室と直接的な関連があることが注目されてい

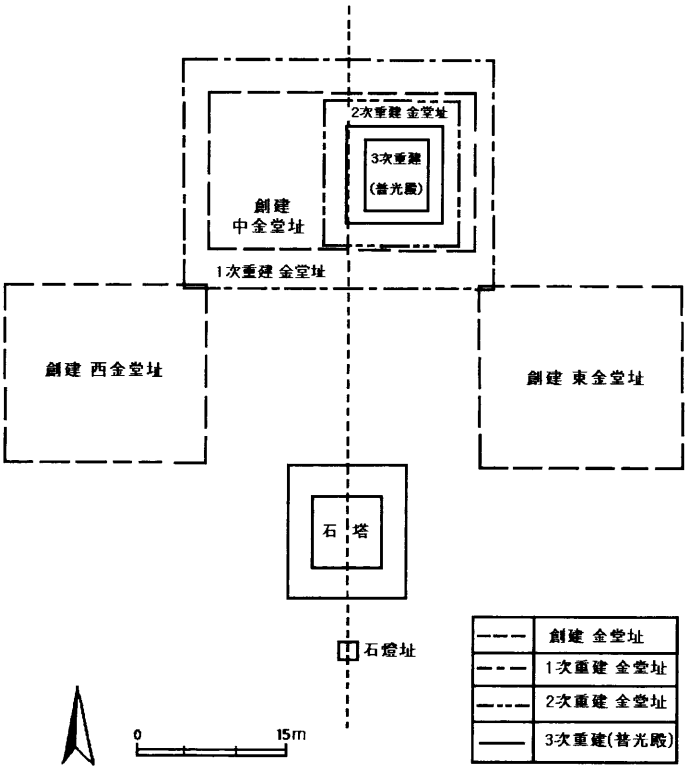


図 17 芬皇寺伽藍配置図（金堂は3次重建）

る。当代の高僧慈蔵（590～658年）と元暁（617～686年）が滞在した。芬皇寺は、元暁が華厳経疏などを著した寺とされ、皇龍寺金堂壁画である「老松圖」で有名な率居が観音菩薩像を描いたと伝えられている。

図 18 芬皇寺現況

芬皇寺の発掘は1990年から開始され、2012年まで寺域全体の調査が行われ[39]、全時期にわたる伽藍配置の変化が明らかになった。中門から入ると中央に模塼石塔が位置し、その北には金堂が「品」字型となる独特な構造を持っていたことがわかる。3次にわたって重建され、中金堂と石塔中心間の距離が35.6mであり、高句麗尺100隻に該当する。尺度の関係は、後述の都市計画の場であらためて取り上げたい。

この伽藍配置は、皇龍寺とは異なり、新羅において初めて確認された型式である。一部では、高句麗の清岩里廃寺や日本の飛鳥寺の系譜につながるという意見もあるが、新羅式独自の伽藍が出現したことにより、大きな意味を持っている[40]。

景徳王14年（755年）に、康古乃末が306,700斤の薬師如来銅像を鋳造した記録がある[41]。この仏像を安置するため中金堂を再建して、東西金堂を取り壊したとする見解と[42]、左殿に千手観音大悲壁画が存在し続けている記事によって維持されたとする見解に分かれる[43]。2次中金堂は、13世紀までは維持されていたと考えられる。その後、文禄の役（壬辰倭亂、1592年）で薬師如来が流失し、一部残った殿閣も慶長の役（丁酉再亂、1597年）に全焼したという。1608年に普光殿などが重建され、薬師如来が鋳造・安置され、1680年には普光殿を修復するなどの記録が残っており、寺院はこれまで法統を続けている[44]。

芬皇寺が新羅王室の絶対的庇護を受け、その後も非常に重要な位置を占めていたことは、上記の内容からも十分に理解できる。だとすれば、初期創建時にどのような意図で品字型金堂を築造したのだろうか。なぜ皇龍寺のような三金堂の構造であるにもかかわらず、金堂の配置が変わったのか。なぜお互いに差があるのか。これまでに確認された6～7世紀の伽藍では、このような例はない。

この点については、仏教の教理や思想的な解釈だけではなく、王室の家系を再検討することによっても解明できる可能性がある。真平王も、先に掲載されている家系図に従って、釈迦の家系に沿って命名されたとされる。もし彼の息子が生まれて王位を継いだ場合、「王即仏」という概念に基づいて、一列に配置された三金堂が建てられたかもしれない。しかし、善徳女王は釈迦族の姫であったため、主尊である釈迦と同格に置かれることは適切ではなかったと思われる。したがって、中央金堂は北側に、東西の金堂はその下、南側に配置された可能性がある。このような伽藍配置は、634年の創建以降、8世紀後半まで維持されたと考えられている。その後は薬師如来像が安置され、今日に至るまでその伝統が続いている。

新羅の王統である聖骨の系譜は、善徳女王の後、真徳女王の代で途絶え、「王即仏」の系譜も継続できない状況になった。特に唐の制度の積極的な受け入れや儒教概念の導入など、社会的変化が三金堂制度の消滅をもたらすこととなった。その後の寺院構造は、双塔一金堂と一塔一金堂の型式に発展することになる。

第 3 節　皇福寺の造成と構造

慶州狼山（史跡第163号）は皇龍寺址東南辺に位置し、善徳女王陵、四天王寺址、陵只塔など、新羅の主要遺跡が密集する地である。皇福寺は真徳女王8年の654年、義湘大師がここから出家したという記事が『三国遺事』に見られ、石塔周辺に十二支神像や亀趺などがあり、古くから王陵や寺院跡と伝えられていた。1942年、皇福寺跡の三層石塔を修理する際、金製如来坐像（国宝第79号）と金製如来立像（国宝第80号）が発見された。金銅舎利盒の蓋の記録には「神文大王が692年に薨去されたため、神穆王太后と孝昭大王は宗廟の神聖な霊のため、三層石塔を建て（宗廟聖霊禅院伽藍）…、聖徳王5年の706年に仏舎利4枚、純金製阿弥陀像1軀、無垢浄光大陀羅尼経1巻を石塔2層に安置する」とあることから、7世紀半ばにはすでに皇福寺が建立されていたと考えられている。

2016年より狼山整備事業の一環として皇福寺址三層石塔（国宝第37号）周辺の調査が開始され、2016年から（財）聖林文化財研究院により年次発掘調査が推進された。2016年には、統一新羅時代の王陵の護石が発見された場所を中心に全面発掘調査が行われ、

図 19 皇福寺址（狼山の東北）

図 20 皇福寺址三層石塔

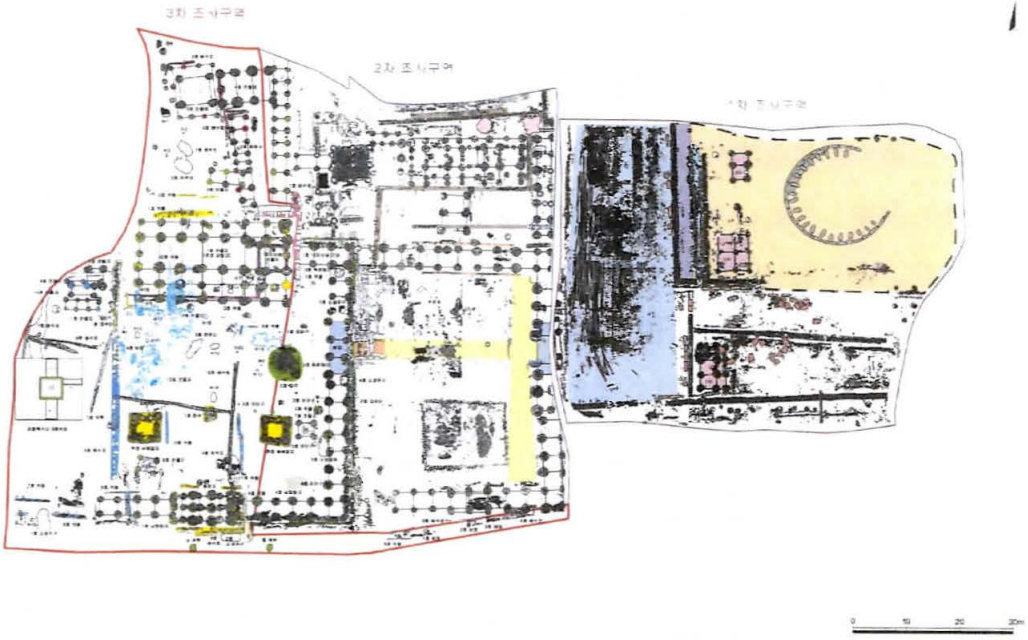


図 21 皇福寺址發掘調査平面圖（1～3次）

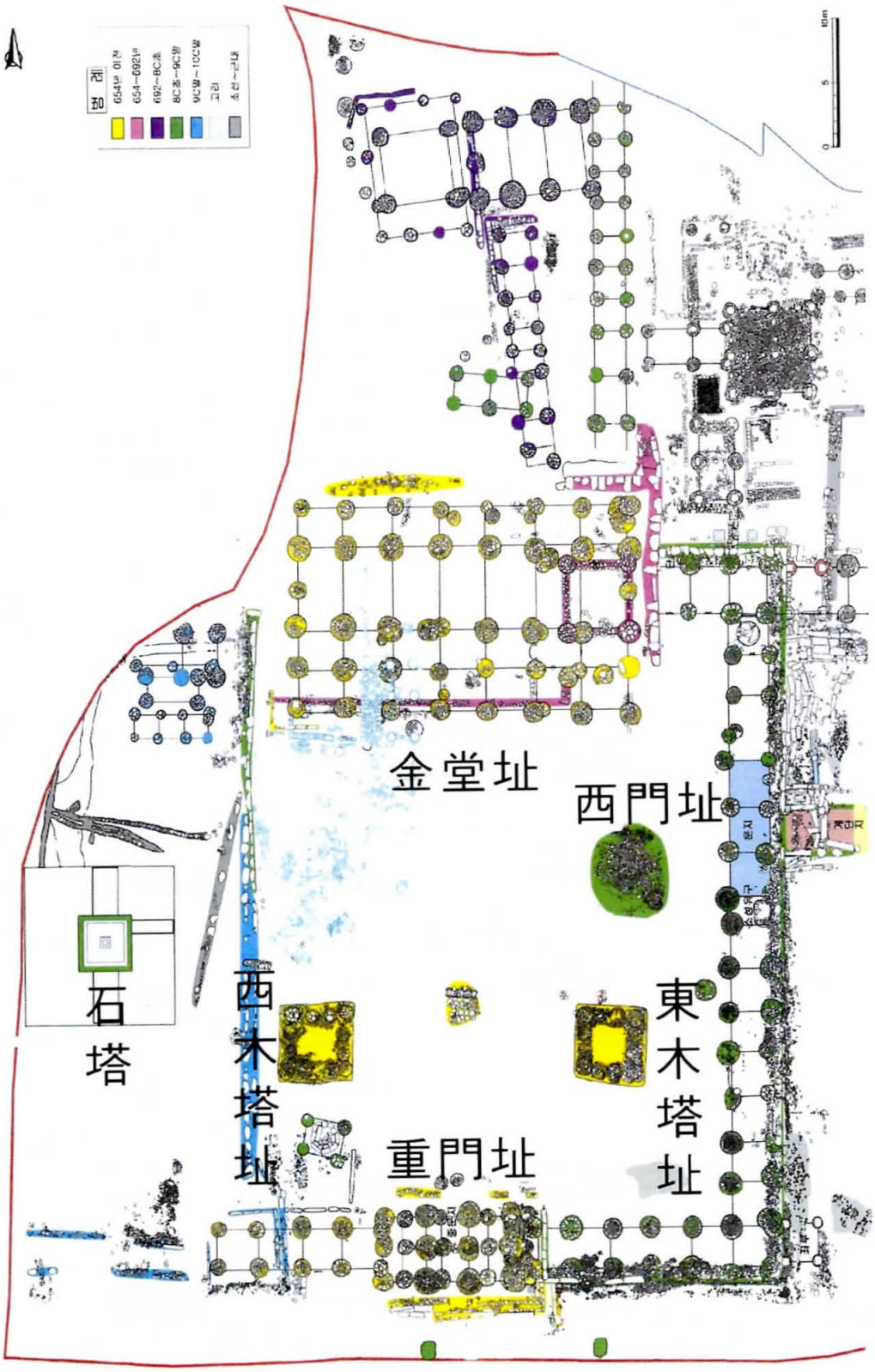


図 22 皇福寺址中心寺域平面圖

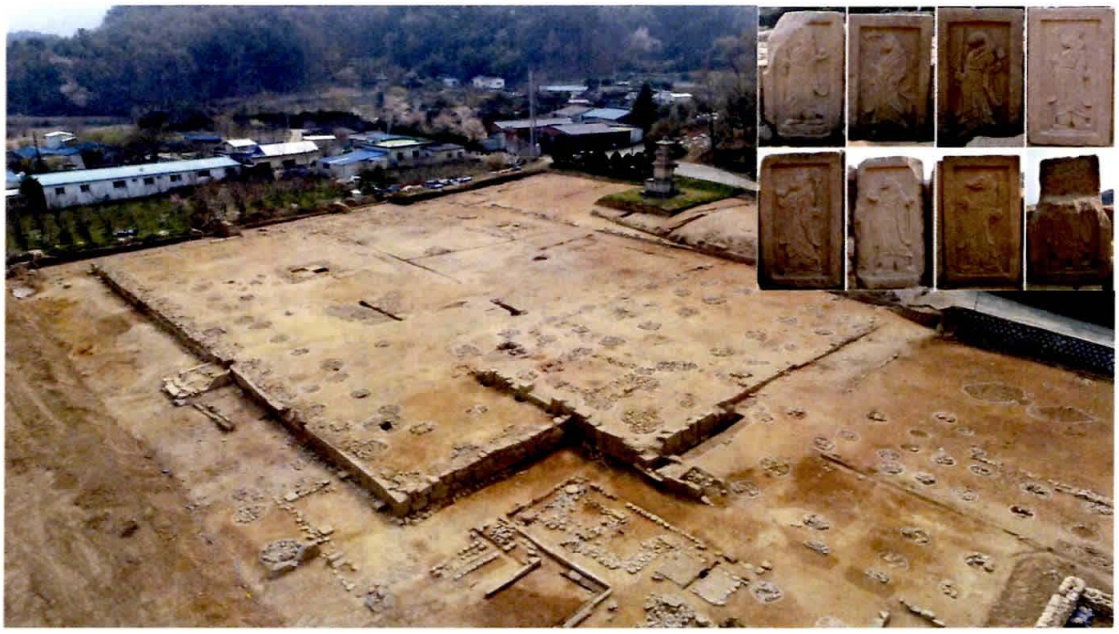


図 23 皇福寺址中心寺域（東北から、上: 十二支像金堂基壇石）

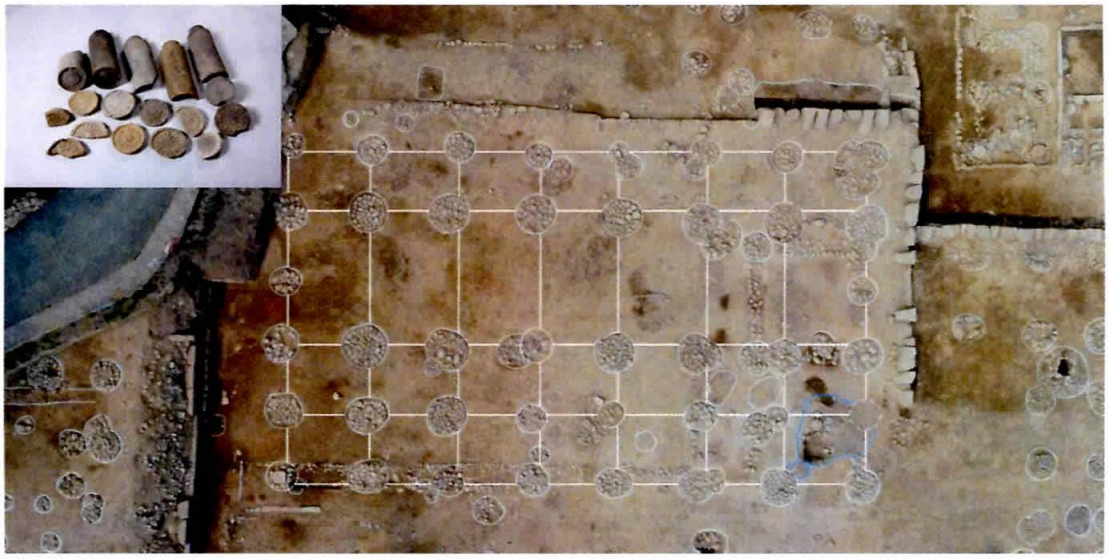


図 24 皇福寺址金堂址

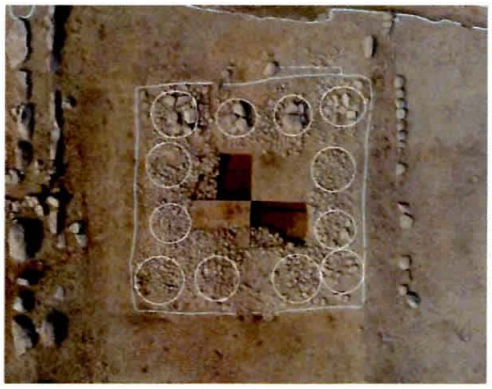


図 25 皇福寺址西塔址

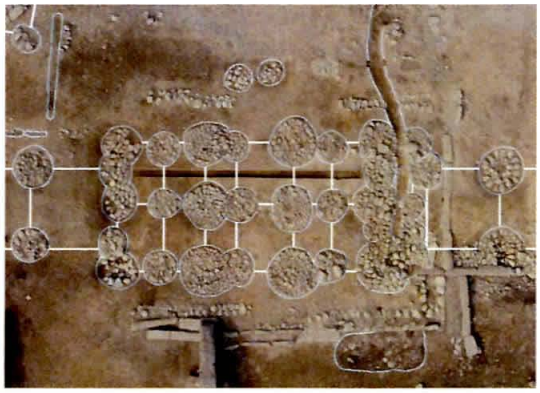


図 26 皇福寺址西塔址

未完成の石材および建物跡と道路遺跡が確認された。2017年には、塔のある西側に拡張して、皇福寺金堂基壇と十二支神像、付属建物址と回廊遺構などが発見された。さらに、2018年から2019年5月まで、統一新羅時代の十二支神像基壇建物址、大型金堂址、回廊址、排水路、方池などの遺構と金銅仏立像など1,400点余りの遺物が収集された[45]。その後、2019年から2021年までに実施された、第4次調査（金堂北側）および第5次調査（金堂南側）によって、寺域の範囲が確認された[46]。本章では、寺院に関連する内容を重点的に取り扱う。

図23によれば、7世紀初頭に大型の金堂、木塔、および中門が建てられたが、7世紀後半には金堂などが滅失し、小型の建物址と東側の回廊が築造されて復元された。現在、8世紀半ばに製作された十二支像（図24上:未、午、巳、丑、子、亥、戌 ： 東南から北西に順に配置）は、金堂建物の重創基壇として活用されているが、この建物の時期は9世紀と考えられている[47]。

しかし、発掘されている金堂1、2号建物址の構造において、内部の基壇石列や他の根石などが残されており、少なくとも3回以上の改築があったことが分かる。ただし、調査団が根石の前後関係のみを考慮し、初築年代に合わせようとしたため、全般的な問題が生じている。年代を特定しても、金堂内部に残されている一部の東西基壇石列は先に築造されたものであるが、その解釈が逆になっている。

また、金堂である1号建物址は、内部に仏壇と仏像を安置するための減柱（柱を省略）処理が施されており、奥行が5間の規模と見なされる。2号建物址は間口1間、奥行1間で主間距離が500cmに達すると報告されており、1号建物の廃棄後は、2号建物のみが残り、存続していたと報告されている。つまり、略報告書によると、金堂の役割をもつ大型の建物が消え、1間の建物のみが塔と回廊とともに存在したということであるが、綿密に検討する必要がある。1号建物址内部には、別途の礎石をもって1間で造られた建物が存在するが、これと比較できるものが9世紀代の王京S1E1地区の第1家屋（寺院構造）でも見られる[48]。

この家屋は皇龍寺址東側の王京都市遺跡内に位置しているが、木塔の横に小型石塔が配置され、その北方に金堂が造られる。講堂や回廊が伴わない構造から、貴族の願刹と推定される。これについては第6章で詳しく言及する。

金堂と東回廊については、時期が異なると解釈されているが、このように考える場合、東側の階下の建物とも一致しないため、東回廊は金堂の築造後すぐに付加された

ものと考えるべきである。そして、南側の中門と共に、西門も同時期に築造、使用されたと考えられる。中門も初期の回廊と同様に、使用後に西側に改築されたことが確認されるが、その順序の解釈が逆になっている。

また、東西木塔址とされる場所は宗廟の祭儀施設である可能性も指摘されているが、中央に心礎が置かれていない点や、下部の根石に切り合いが確認される点から、その時期は統一新羅時代より前には遡らない点を考慮する必要がある。中門入口に位置する亀趺は原位置とどめていないが、寺域内部の各種建物と相應しい構造物として、統一新羅時代より後の遺物であることを考慮しなければならない。

図 27 四天王寺址（狼山）

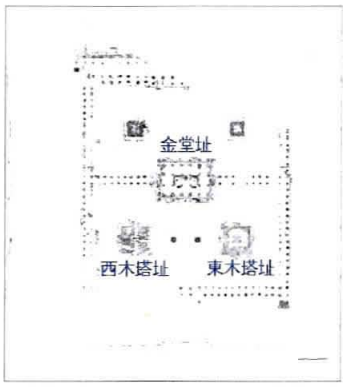


図 28 四天王寺址平面圖

くわえて、7世紀後半から8世紀代前半に建てられたと考えられる皇福寺三層石塔の現在位置もまた、初期の伽藍配置とは全く合致しない。つまり、この時期に慶州で築造される寺院、四天王寺、感恩寺、望徳寺と仏国寺などによるならば、一金堂二塔の型式が最も一般的である。発掘略報告書には、土層調査をもとに現在の石塔の位置が初築の場所であるとしているが、石塔が位置する地点は、もともと建物の造成が困難な丘陵地であるので、他の場所から現在の場所に移設されたとしても、土層調査で確認されるのは初築の痕迹のみである。このような石塔の配置状態は慶州南山や丘陵地で造られる望塔－金堂や寺院の他の付属施設より高いところに位置-あるいは舎利塔の概念を反映している。最近発掘された昌林寺址と比較すると、山麓に位置する構造が同じであることが分かる。

昌林寺は南山の丘陵の頂上に石塔を築造し（8世紀後半）、寺院が造営された。報告書によれば、Ⅰ区域が先に築造され、講堂と石塔の間にあった金堂が後代に廃棄されたとし、周辺の建物址はすべて残っているが、金堂址は跡形もなく完全に消えたとす

る。しかし、この「完全に消えた」という解釈には賛同しかねる。周辺の建物はすべて残っているのにもかかわらず、金堂の痕迹を残さず後世に失われたいう解釈は誤っている。頂上部に塔が造営され、山地伽藍の性格をそのまま反映し、上記の望塔の概念をもちながら、しだいに下ってきて、講堂と石塔などの付属建物が下部に配置され

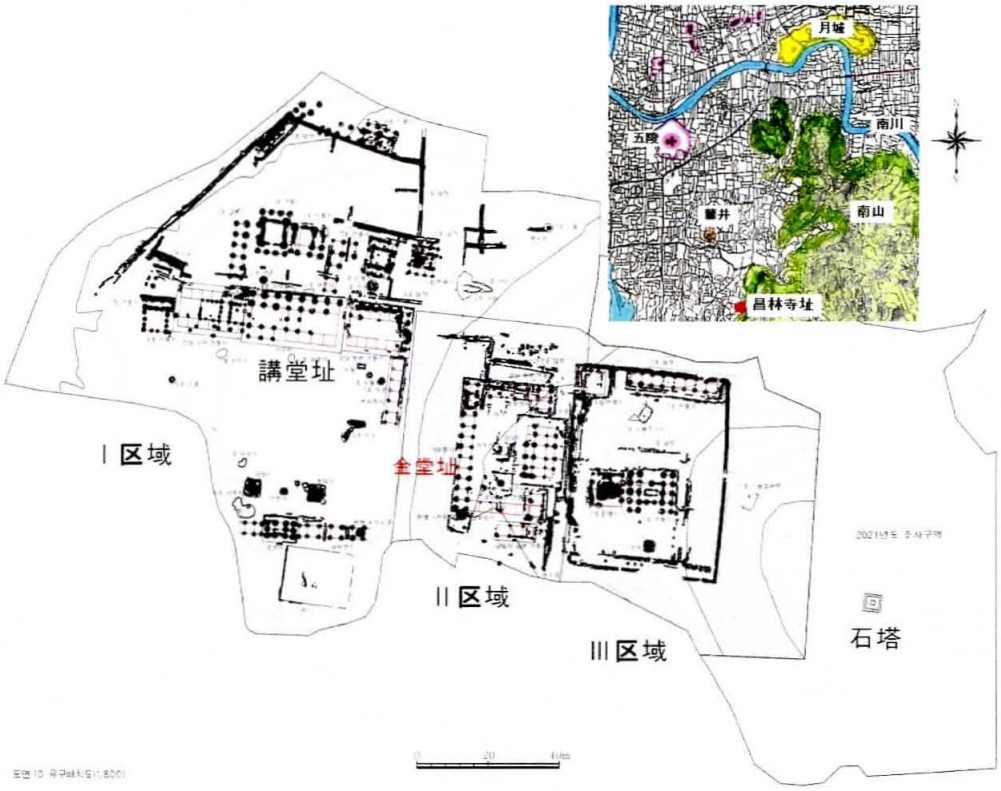


図 29 昌林寺址伽藍配置平面圖

たと解釈すべきである。

このような伽藍配置は、8世紀後半から9世紀を中心とする天官寺址も同様で、西南部に石塔が配されており、9世紀の王京S1E1地区の第１家屋（寺院構造）においても、石塔を木塔の東横に配置する点と類似する。味呑寺址の場合、金堂と塔の中心軸が異なる。慶州南山に多くの寺院が造成される時期が8世紀後半から9世紀であることから、仏教の思想的な変化とともに塔の配置も変わったことが分かる。

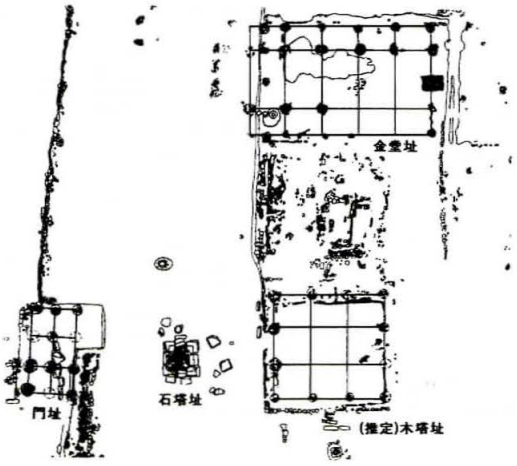


図 30 天官寺址金堂･木塔･石塔配置圖

皇福寺址発掘調査略報告書によれば、中門址などから6世紀代の土器が出土するので、上限時期を遅くとも7世紀と考えているが、全般的に出土する瓦の中心年代は9世紀代であることを考慮する必要がある。

このように、これまで調査された遺跡の例と合わせて検討した結果、皇福寺は8世紀末から9世紀代にかけて大規模な重建事業が行われたものと推定され、この際に、石塔も現在の位置に新たに移転された可能性がある。重建された中門、回廊、金堂の構造を見ると、全体的に変化した伽藍で造営された可能性が高い。つまり、現存する遺跡は皇龍寺-芬皇寺の系譜を受け継ぐものではなく、8世紀後半以降に造成された貴族寺院のような構造と類似していることを認識するべきである。

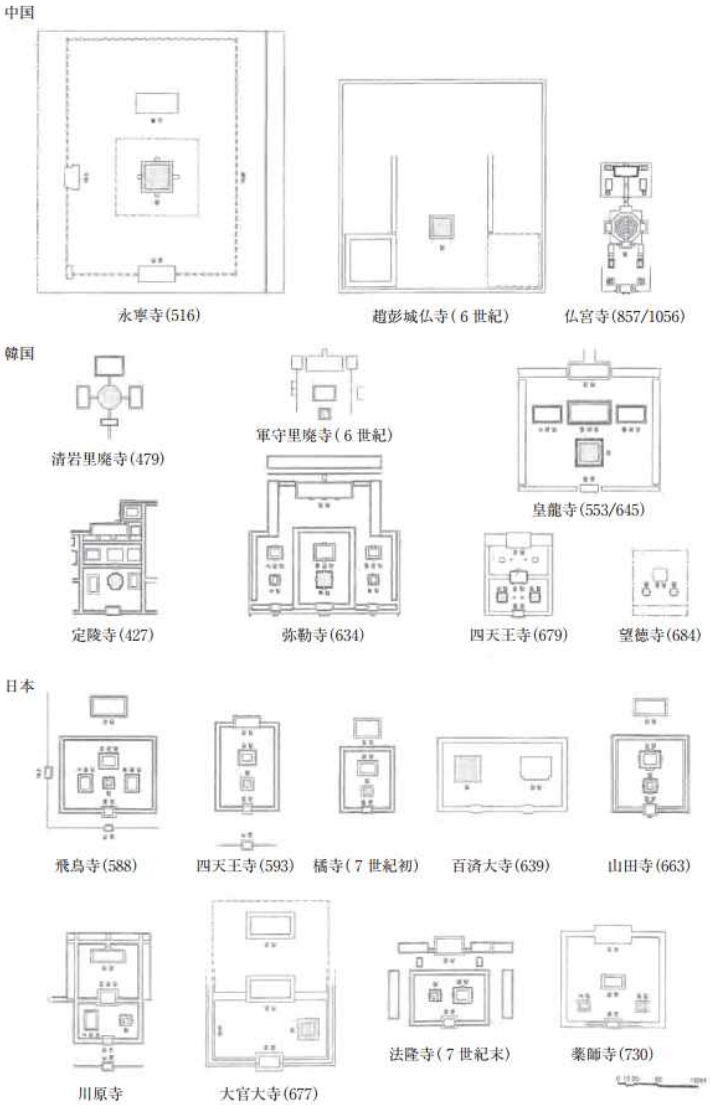


図 31 中国･韓国･日本の古代伽藍比較図（縮尺同一）
（皇龍寺復元考證研究2011）

結　語

以上、真興王が新宮の地に造営した皇龍寺は、意図的な計画の下で「王即仏」という概念によって三金堂を配置したものであり、これは真平王と善徳女王、真徳女王の系譜まで続いたことを論じた。善徳女王も釋迦族の王女であり、聖骨系統を受け継いで即位すると、すぐに芬皇寺三金堂を造成したが、女性であるという限界から「品」字配置型式、釈迦牟尼仏を安置した中金堂よりは一段階下がる東西金堂を造成する形となり、その後このような三金堂配置は新羅社会において造営されなかった。また、数百年間維持されてきた最も高い聖骨系の身分も子孫がなく幕を閉じた。この時期は唐の体制を受け入れ、三国を統一し、国家の枠組みを整える段階であり、権力の分散と王権の弱体化を示している。685年、神文王が遷都を図るも、貴族の反対により失敗に終わったのである。

真興王から約100年もの間、絶対王権の象徴であった皇龍寺は、中央金堂に丈六尊像、東金堂に塑造丈六尊像（あるいは薬師如来仏像）、西金堂に天賜玉帯を配置し、「王即仏」を示していった。その絶頂として、善徳女王の時代の645年に築造された九層木塔は、新羅三宝として皇龍寺の完成を示し、新羅都城においてもっとも重要な王権と国家の権威を象徴する場所であったことが証明されている。

加えて、史料に記録されている「龍の出現」という表現は、慶州で実際に竜巻が吹いたことを意味し、6世紀半ば以降、皇龍寺と都市が整備される後、龍に関する記録は減少した。龍は従来、王や王権と関連づけて象徴的に解釈されてきたが、本稿では「竜巻」という自然現象の存在を取り上げ、新たな解釈を試みた。

---

1)　新羅最初の伽藍とされる興輪寺は527年に創建され、544年に完工したという記録があるが、現在は善徳女王代（7世紀代）に建立された霊廟寺跡と推定されている。本来の寺院は慶州工業高等学校敷地内に位置しており、試掘調査時に6世紀前半の瓦と土器片が出土し初期寺院跡と認定されているが、まだ伽藍配置や構造は把握できない。国立慶州博物館 2011『慶州工業高等學校内 遺構 收拾調査』

2)　西側の廃寺跡は1984年から1986年まで発掘されたが、報告書は未刊である。両寺院の関係を把握するためには、車道として利用中の空間についても発掘が必要である。

3) 2005年から国立文化財研究所建築文化財研究室で進められている。

4) 梁正錫 2004『皇龍寺의 造営과 王権』書景文化社

5)　ここは回廊の西側地域で、約8,700㎡の未調査区域に対して調査中であり、統一新羅から高麗にかけての

建物跡と共に、金銅製の鳳凰錠などが出土し、重要な遺物が保管されていた場所であると推定される。
国立慶州文化財研究所 2021『慶州 皇龍寺址 西回廊 西便地区 発掘調査Ⅰ』

6) この区域が低湿地であることが明らかになった（第2章図32参照）。6世紀半ば以降、新たな都市建設のためには、皇龍寺を含む周辺地域に大規模な覆土作業が行われていたことが分かる。

7) 古代新羅の自然現象についてまとめた論文として、金鎬詳 ・皇甫垠淑 2006「新羅 王京에 나타난 自然現象 -『三国史記』新羅本紀 記録을 中心으로」『新羅文化祭 學術論文集』27 慶州市・新羅文化遺産調査団がある。

8) 朴赫居世は、治水という超越的な能力を龍女閼英を通じて得たとされ、これにより新羅初期王権の正当性を獲得したとする指摘もある。
ソ・サンギュ（서상규）2007『新羅上古期の龍神仰』韓国教員大学 碩士論文

9) 新羅時代、慶州地域各地に造成された天鏡林などが風を防ぐための施設である可能性を提示した論文がある。
黄相一 2007「古代 慶州地域의 洪水可能性과 人間活動」『大韓地理学会誌』123 大韓地理学会

10) 以下の内容はDaum百科から引用したものである。
1964年9月にソウル漢江で発生した竜巻を記録して以降、30回以上の竜巻（龍オルム）が発生している。鬱陵島近海では1985年以降2021年までに7～8回、慶尚北道や蔚山近海で4～5回、済州島近海で 5～6回発生した。2022年7月30日には済州島西帰浦付近の海域でも龍オルムが観測された。近年、内陸では2014年6月10日に高陽市の一山地域と6月12日に光州で、龍オルムによる被害が発生し、2019年3月には忠清南道唐津でも発生し、製鉄所や民家、自動車数台が破損するなどの被害があった。朝鮮時代の1440年には、済州島で龍オルムが発生し、その記録が「世宗実録」に残っている。当時は、「丙辰年8月に五龍が海の中から湧き上がり、四龍は天に昇った」として、龍の昇天と見なされていたことが分かった。

11) 真平王50年（528年）の夏、大干ばつが続いたため市場が移され、龍を描いて雨を降らせる祈りが行われたという記録が残されていた。
『三国史記』巻4 新羅本紀4
夏 大旱 移市 畫龍祈雨

12) 魚が空から落ちたということは、竜巻の影響で海から空中に巻き上げられ、落下したと判断される可能性がある。最近、オーストラリア砂漠近くの村（ラジャマヌ）で数百匹の魚が空から落ちたという報道があった。この事件は、500km離れた川で強い暴風雨により数万メートル上空に吸い込まれ、地面に落ちたという事件である（出典：2023年2月24日付朝鮮日報の記事）。
一方、土砂については火山噴火との関連可能性も推測できたが、764年に鹿児島の桜島、864年に富士山、874年に鹿児島の開聞岳などで発生した火山噴火とは関係がないものと見られる。

13)『三国史記』巻43 列傳3 金庾信 下
夏四月 旋風坌起 自庾信墓至始祖大王之陵 塵霧暗冥 不辨人物

14) 『三国史記』巻13 高句麗本紀1
始祖東明聖王 三年 春三月 黄龍見於鶴嶺（紀元前35年）
『三国史記』巻24 百濟本紀2 比流王
十三年 春旱 大星西流 夏四月 王都井水溢 黑龍見其中（316年）

15) 『三国史記』巻4 新羅本紀4
十四年 春二月 王命所司 築新宮於月城東 黃龍見其地 王疑之 改爲佛寺 賜號曰皇龍

16) 『三国遺事』塔上 皇龍寺丈六
新羅第二十四眞興王卽位十四年癸酉二月 將築紫宮於龍宮南 有黃龍現其地 乃改置爲佛寺 號黃龍寺 至己丑年 周圍墻宇 至十七年方畢

17) 申東河は、皇龍寺が築造場所が、新羅人の龍信仰の地であったとする。
申東河 2001「新羅仏国土思想と皇龍寺」『新羅文化祭学術発表論文集』22
皇龍寺と芬皇寺の間の龍宮の位置問題については第4章で取り上げる。
李恩碩 2012「皇龍寺 北便 龍宮에 관한 一考察」『仲軒 沈奉謹先生 古稀記念論選集 東アジアの 文物』

18) 朱甫暾は、真興王が新宮を建設することはできなかったが、皇龍寺に変更することを僧侶の恵亮から諮問を受けたとする。
朱甫暾 2016「皇龍寺 創建과 新羅 中古期 皇龍寺의 位相」『皇龍寺址発掘調査 40周年紀念 国際学術大会 發表資料集』文化財庁・国立慶州文化財研究所

19) 新宮または皇龍寺の建立が王権強化という意味に解釈することには異論がない。

20) 初期伽藍配置図は次の論文で引用した。
金淑瓊 2020「皇龍寺建築과 南쪽広場」『慶州 皇龍寺址 南쪽広場』整備 및 活用을 위한 学術大会 慶州市・新羅文化遺産研究院

21) 中国における仏教寺院配置構造に対する理解のため、本文中の内容と図面は、いずれも以下の論文から引用した。隋唐代仏教寺院の全般的な変化の様相が詳細に記述されており、三国との比較に大変参考になる。
王貴祥 2013「隋唐時期仏教寺院」『百済寺刹研究』国立扶余文化財研究所

22) 趙由典 1994「皇龍寺 三金堂考」『石堂論叢』20

23) 錢国祥 2022「漢魏帝都洛陽の空間構造」『古代東アジア都市の構造と変遷』p92

24) 519年に高句麗の文咨王が亡くなって、北魏の霊太后が東堂で哀悼したという記事がある。
『三国史記』高句麗本紀 7
王薨 號爲文咨明王 魏靈太后擧哀於東堂 遣使策贈車騎大將軍

25) 国立扶余文化財研究所 2010『東アジア 古代寺址 比較研究（Ⅱ）-金堂址編-』p86

26) 太極殿と東・西堂に関する内容は以下から引用している。
梁正錫 2008『韓国 古代 正殿의 系譜와 都城制』書景文化社 pp35-70

27) 梁正錫 1999「皇龍寺 中金堂의 造成과 丈六尊像」『先史와 古代』12 p293

28) 皇龍寺址の発掘された資料を新しく解釈し、西側建物（西金堂）が再建金堂以前に造成された可能性があるとして、中金堂が丈六尊像を安置するともに、東西の建物（東西金堂）が縮小されたとえられている。梁正錫、2004前掲 pp55-93

29) 崔善子 2013「新羅 皇龍寺의 創建과 眞興王의 王權 强化」『韓国古代史研究』72 韓国古代史学会

30) 後趙では、建武元年（335年）に東宮と西宮が造営されると、石虎が横綱に遷都し、東宮は太子の居住地であり、西宮は皇帝の居住地をしたとする。
『資治通鑑』1976 巻95 成帝咸康二年（336年）11月條 北京 ： 中華書局 p3007
趙王虎作太武殿於襄国 作東西宮於鄴。東宮 以居太子邃 西宮 虎自居之
上記の内容は以下の論文から引用した。
崔宰榮 2017「隋唐長安城 東宮의 構造와 性格 - 魏晋南北朝 都城의 東宮과 関連하여 -」『歴史와 世界』51 효원사학회 p75

31) 中国でも581年に隋が建国、589年の統一まで王朝の正統性を強調した時期である。

32) 東宮が東方浄土の概念を象徴するのであるならば、ここには薬師如来仏と弥勒菩薩および地蔵菩薩を信仰する場所として、現世を変え、未来の世界を迎える意味で、当時真興王が夢見ていた仏国土の造成と現世における富国強兵を発願したと推論することができる。

33) 東西金堂の仏像安置については複数の見解があるが、最近東金堂で塑造仏の指が公開されたことから、574年から645年の間に建立された建物内に塑造丈六尊像が安置されていたと考えられる。
金東河 2018「中金堂은 青銅佛、東金堂에는 塑造佛仏-説明コラム」『特別展皇龍寺』p160

34) 『三国史記』新羅本紀12 景明王
五年 春正月…聞新羅有王三寶 所謂丈六尊像九層塔幷聖帶也…聖帶是何寶物耶 無能知者時 有皇龍寺僧年過九十者曰 予嘗聞之 寶帶是眞平大王所服也 歴代傳之 藏在南庫…

35) 南庫の正確な位置は確認されていないが、一般的には王宮内にあったと考えられる。従来は、王室と

深い関係のある皇龍寺内に位置し、金銅鳳凰装飾錠が出土した場所に存在した可能性が指摘されてきたが、これは西に位置するため、方向に問題があり、再考の余地がある。
李恩碩 2020「皇龍寺建立と運営に関する考察」『日韓文化財論集』Ⅳ 奈良文化財研究所・国立文化財研究所 p282

36) Daum百科から引用した。

37) 皇龍寺から正北に2km離れた、掘仏寺址の石造り四面仏像は、南には釈迦牟尼仏、東には薬師如来仏、西には阿弥陀如来仏、北には弥勒仏が刻まれである。また、この寺跡の東に位置する栢栗寺は、新羅における仏教の公認に寄与した異次郎の殉教（527年）と関連した場所であり、ここに造成された金銅薬師如来立像（国宝）は、国立慶州博物館で展示されている。

38) 永福寺は、戦争で亡くなった将兵の鎮魂のために建立されたものであり、毛越寺や中尊寺などを参考にして建てられたとされている。1405年の火災で焼失する前まで、酒宴、花見、歌会などが行われたとされている。国指定史跡 「永福寺跡」 案内資料。
その当時、高麗は「東南海都府署使営」を慶州（Ⅰ期:939～1078年、Ⅲ期:1190～1202年）と金海（Ⅱ期:金州）に交互に置き、日本との対外交流を担当していた。この時、日本人が入国時に慶州皇龍寺などを見たとすれば、永福寺の建立との関連性も推測される。対日関係資料については、次の論文が参照となる。近藤剛 2019『日本高麗関係史』八木書店

39) 国立慶州文化財研究所 2005『芬皇寺 発掘調査報告書 Ⅰ』
国立慶州文化財研究所・慶州市 2015『芬皇寺 発掘調査報告書 Ⅱ』

40) 兪洪植 2006「芬皇寺 伽藍配置와 変遷에 관한 考察」『特別展 芬皇寺 出土遺物』国立慶州文化財研究所

41) 306,700斤は、現在の重さに換算すると約61トン（皇龍寺長六尊像も約7トン推定）であり、建物の規模に比べて安置が不可能だと判断されるため、3万斤の誤記だと推定されている。
兪洪植 2005「考察」『芬皇寺 発掘調査報告書Ⅰ』国立慶州文化財研究所

42) 趙由典・南時鎭 1992「芬皇寺発掘調査報告」『文化財』第25号 p182

43) 『三国遺事』塔像 芬皇寺千手大悲 盲兒得眼。
景德王代…芬皇寺左殿北壁畫千手大悲前…
李康根 1999「芬皇寺의 伽藍配置와 三金堂 形式」『芬皇寺의 諸照明』 新羅文化學術発表会論文集 20

44) 註39の2015、p70引用

45) 皇福寺の調査結果は2020年に紙面で報告されており、その後の発表資料に一部引用されている。
李恩碩 2020「新羅都城의 構造와 城郭調査의 成果」『季刊 韓国의 考古学』周留城出版社

46) パク・ギヒョク（박기혁）2022「慶州 狼山 一円内 推定古墳址 整備（傳皇福寺址）遺跡5次発掘調査」『第1回 慶州地域文化遺産調査研究成果 發表資料集』国立慶州博物館・文化財庁新羅王京核心遺跡復元整備推進団・国立慶州文化財研究所

47) これらの十二支神像は、王の陵園に造営されず放置されていたものが、後代に建築部材として再利用されたと考えている。
チャン・ホジン・カン・ヤンジ（장호진・강량지）2020「新羅 皇福寺址 東便 廃古墳址의 性格」『文化財』 53-1

48) 国立慶州文化財研究所 2002『新羅 王京 発掘調査報告書』Ⅰ

第 4 章　計画都市の成立と発展

問題の所在

新羅の千年古都である慶州は、古代中国の都城概念に基づいて都市計画が始まったことが知られている。この都市計画は、東アジア三国の古代都城の発展と密接な関係がある。古代中国の都城概念は、『周礼』「考工記」の制度に基づいた理想的な王都建設を目指したものであった。北極星中心に構成された宇宙論に基づいて、宮殿を築造し、南北軸線上に合わせて格子型の道路体系を構築して都市を建設することは、王権の正統性を確立するだけでなく、外敵との差別性を通じて優越性を表現することも意味していた。

都城の制度には、宮城、廟社、市里、道路の概念が適用され、碁盤形態の坊制施行は、住民と被征服者の効率的な統制と管理ができる画期的なものであった。また、王宮の建立は、王権の神格化を意味し、真興王の正統性や儀礼による国家体制の確立など、複合的な発展要素が同時に進行していることが分かる。

前章で述べたように、紫宮の建設は新都市建設の中心となった。6世紀半ば以降、王陵級の古墳が外郭に造営されるようになったことは、4〜6世紀代を中心に積石木槨墳が築造されていた西の地域に開発可能な敷地が残っていなかったことを示唆している。無論、新都市建設も、都心の外郭に墓を築造することになる大きな要因となる。慶州は3つの河川に囲まれた扇状地であるため、都市の建設には優先的に覆土が供給される必要があった。特に、新宮の造営が計画されていた皇龍寺が位置する場所は低湿地帯であり、全面的な覆土作業が実施されなければ、建設が困難であったため、多大な人材と時間を要したと考えられる。

一方、8世紀代以降には、北川の北側である東川洞一帯の建設が始まったと見られるが、発掘の結果、都市計画は7世紀代に始まっており、拠点区域や境界地点にまず道路を区画する基本設計が進められていた可能性がある[1)]。

このような都市の段階的発展の様相は、20年余りの発掘結果によってかなり明らかになってきてはいるが、修正すべき点もあり、本章ではこれを全般的に再検討してみたい。

第 1 節　5～6世紀の官道

『三国史記』には、469年に京都に坊里名が定められ、487年に官道が修理されたとあり、5世紀後半から道路に区画される都市体制を整えたと推定されるが、計画都市の開始をさらに引き上げる見解もある。特に、道路下層から5～6世紀代の土器などが出土したことから、これに関連してすぐに道路が築造されたとする見解もあるが[2)]、これは認めがたい。慶州市内では坊里制の道路築造が6世紀代半ば以前まで時期が上がる資料は確認されておらず、道路下層遺構と道路築造時期とを正確に区分する必要がある。

この坊里名が定められるという内容は、中央部の王京に関する新たな企画であった可能性を示唆している[3)]。しかし、5世紀後半に官道を修理したということは、計画都市が造られる前に月城とその周辺で使用された道路を修理した可能性が高いと考えられる[4)]。都市計画が行われる前に、月城と明活城を結ぶ道路がすでに築造されていたことが確認されている。皇龍寺址東側の王京S1E1地区の大型排水路の底から、坊里制よりも時期が早い道路が検出された。道路は東に20°以上傾いており、車輪が通った跡の幅は1.6m以上であった。このことから、5世紀後半の官道という表現も理解できるだろう。なお、このような道路は都市区画の施行に伴い廃棄されたと考えられる。

1．王京S1E1地区北東-南西道路

この道路は、王京遺跡と皇龍寺の間にある大型排水路の底から検出された（図1・2）。位置は皇龍寺外郭の東南側地域で、自然地形の上に作られたと考えられる。皇龍寺一帯は低湿地帯であり、王京都市遺跡が形成される以前から、随所に水溜まりのような地形を呈していた[5)]。大型排水路も築造以前にこの一帯が全般的に築かれた跡が土層から確認され、皇龍寺だけでなくこの一帯に全般的な築土がされていたことが分かる。

この道路は、皇龍寺外郭東西道路から南に約50mの地点で軸方向が東に偏向し、約N-34°-Eに傾いて築造されている。両側に溝がある跡は車輪が通った跡と判断され、その間隔は160cmと非常に広い。道路の全体幅は排水路の下に残っているため確実には分からないが、7m以上であると考えられる。ここから、北には芬皇寺東南側地域と北川辺へと結ばれ、南は皇龍寺の前を横切って月城の北側へと続く道路につながる。

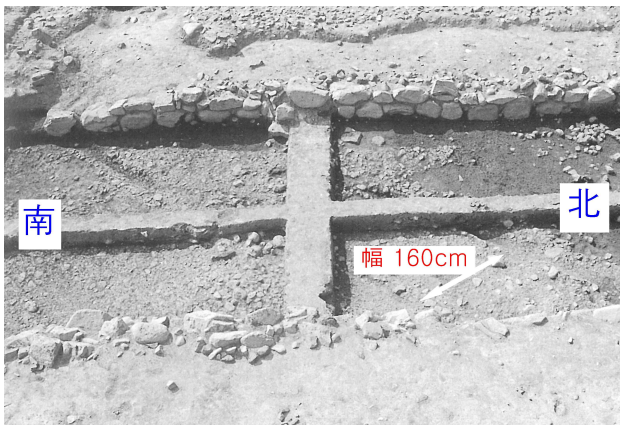


図 1 王京S1E1地区北東−南西道路（東から）

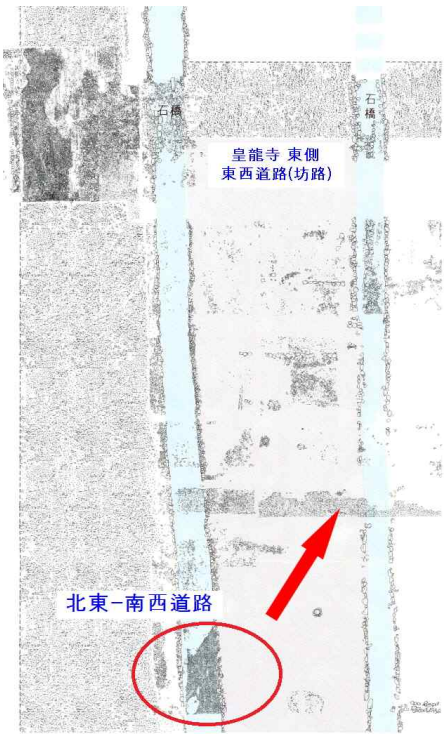


図 2 王京S1E1地区北東−南西道路

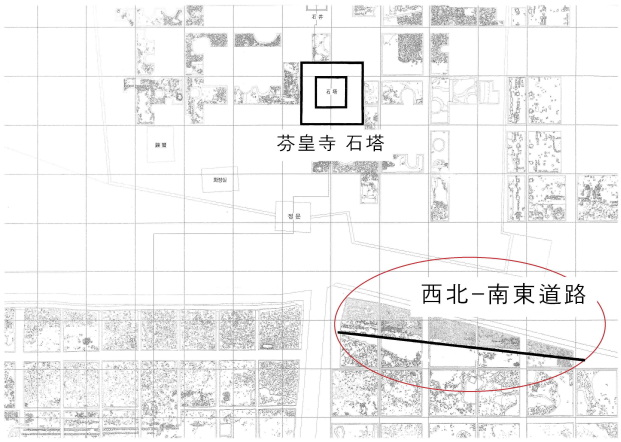


図 3 芬皇寺南側の西北−東西道路

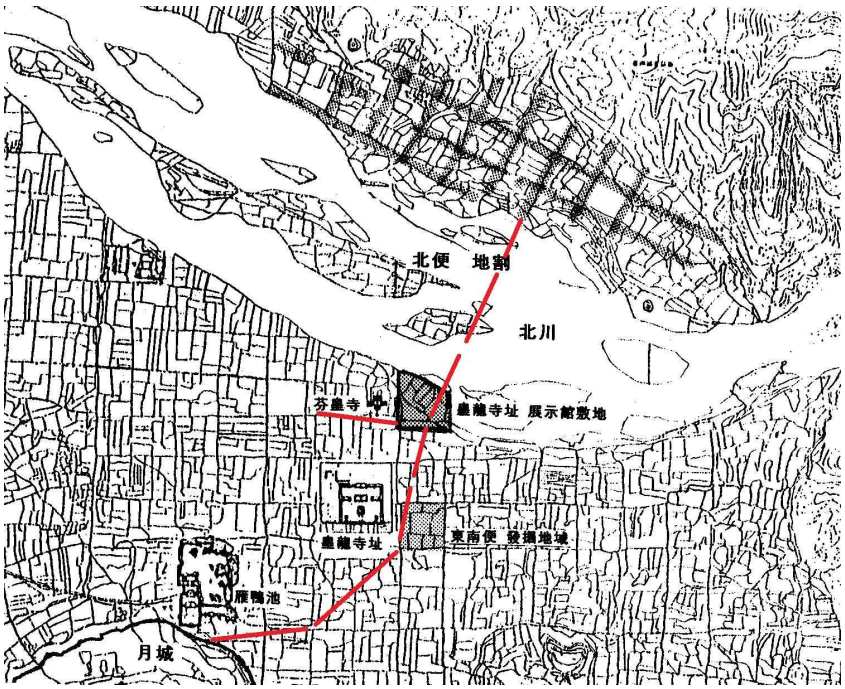


図 4 月城−皇龍寺−芬皇寺の連結推定官道（李恩碩2003図に表示）

2．芬皇寺の南側、西北-南東道路

芬皇寺の南側地域で発掘された道路は、石塔の南約60m地点で検出された（図3）。東西道路は、西北-東南方向にE-8°-S程度傾いており、やはり区画された坊とは合わず、坊と坊の道路距離も110～120mに満たないため、芬皇寺創建より以前に築造された道路と考えられる[6]。道路の幅は約9m、長さは約50mと確認される。芬皇寺伽藍内郭から検出され、芬皇寺と同時期に使用されたものではない。

王京遺跡の東北-南西の南北道路と芬皇寺の西北-東南の東西道路は、芬皇寺前方に連結される道路であり、この地域が都市区画以前の明活山および北川北側連結地域をつなぐ主要道路であったと推定される。また、王京遺跡北東-南西道路と芬皇寺の西北-南東道路は最下層で検出された道路であり、坊の区画とは異なる角度を帯びている。

以上から、月城と皇龍寺、および芬皇寺の前を、そして北川に沿って明活城までを結ぶ道路が存在する。この方向を復元すると、以下の（図4）のようになる。この道路は、都市計画が進む前の官道であった可能性を示している。

第 2 節　計画都市の背景と成立

1．思想的背景

皇龍寺の建立は、新羅社会における大変革をもたらした歴史的な出来事である。真興王は摂政から離れ、新しい王宮（紫宮）を建設することで強力な王権を構築し、自らが天帝の役割を果たすことを目指した。新羅は中国の都城体系を受け入れ、皇龍寺の敷地を中心に大々的な整地作業を進めた[7]。百済においても、都城を扶余に移転する前に外城を築き、準備したという過程を、新羅が参考にした可能性が高い[8]。

妹尾達彦氏は、唐時代の世界観が宇宙論に基づいて天命を受けた都を作ることを目的とし、王都を聖別化して支配の正統性を確立するものであると説明している[9]（図 5）。

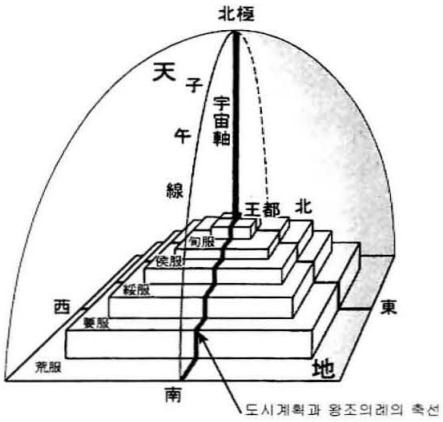


図 5 宇宙の都（妹尾達彦 2001）

このように、真興王の意図は、当時の中国を中心に周辺国で共通して発生していた王権強化と正統性樹立を目的としていた。4～6世紀半ばまで、積石木槨墓を築造した従来の道教思想（神仙思想）によって、一般人との差別化が可能な時代があったが、この時代は終わり、仏教の導入（528年）や中国から伝来する思想や文物が、社会的変化の大きな要因となっていた。

しかし、天帝が居住する紫宮の建立は、当時の聖骨貴族の反発が最大の障害となっていたことであろう。真興王が天子の概念を持つと、王権はその子孫だけで継承しなければならない問題が発生する。当時の貴族たちはこれを認めなかったと考えられる。そのため王宮として計画されていた場所は、黄龍の出現を機に寺院に変更されたが、転輪聖王を名乗って王権の世襲化を強固にしようとしたのである。これに加えて持続的な領土確保戦争も成功し、三国の中で最も遅れていた新羅が堅固な基盤を築くことができた。漢江地域進出（553年）、百済との戦争（554年、官山城戦闘で百済聖王の殺害）、大伽倻征服（562年）、咸興地域進出（568年）などが当代に行われた。

2．都市の成立

初期の都市計画は、皇龍寺を中心にどのようなモチーフを持って進められたのだろうか。驚くことに、皇龍寺の中心である金堂－木塔－中門へとつながる中軸線と都市区画の中心線と差があることが、発掘によって明らかになった。すなわち皇龍寺の塀区画内に全体的な伽藍配置が東側に若干偏っているのである。

都市計画の基本尺度は、高麗尺（35.6cm）を使用したことが1920年代の小川敬吉の研究で明らかにされている[10]。彼は金堂と木塔間の距離と木塔と中門の距離が140尺で同じであることを明らかにした[11]（図6）。長谷川輝雄、関野貞、藤島咳治郎などの日本人学者がこれを繰り返し引用し、皇龍寺址の発掘結果の分析においても、金堂、木塔、講堂、中門は高句麗尺が、経楼と鐘楼は唐尺が優勢であることが明らかにされた。したがって、研究者の大部分は宅地と道路の分割に高句麗尺を入れ、都市計画復元案を提示した[12]。

金淑瓊は上記の研究をもとに、皇龍寺の伽藍配置を高句麗尺として分析し、南北と東西塀がそれぞれ800尺であり、金堂中築線から東塀までは330尺、西塀までは470尺であることを確認し、東西金堂の中央から中軸線までの距離は160尺で同一で、三金堂が、

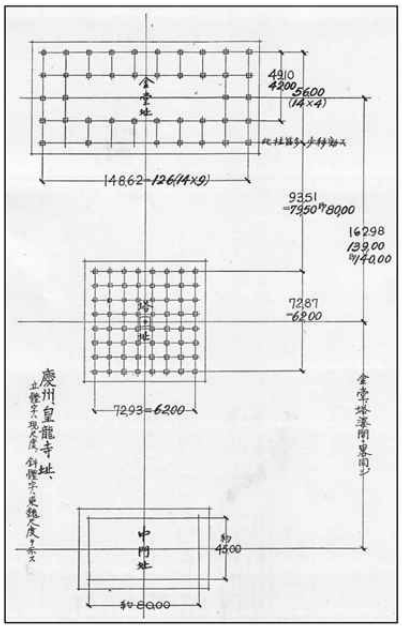


図 6
川敬吉の皇龍寺尺度（長谷川輝雄1924、金淑瓊 2016p66より）

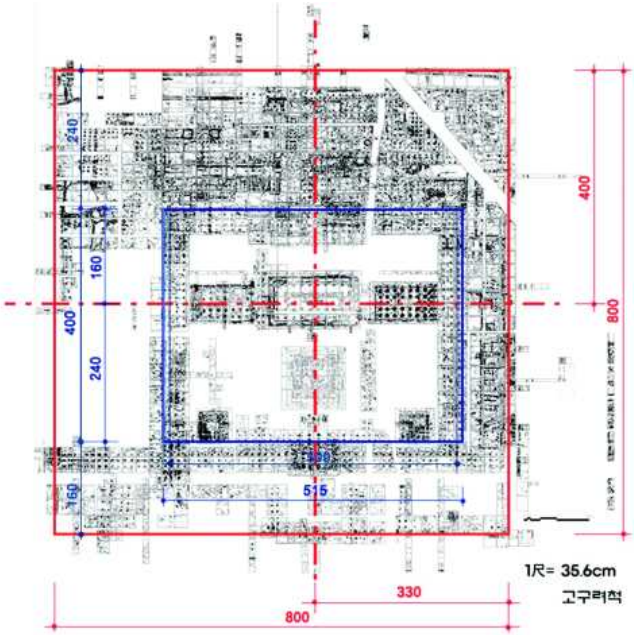


図 7 皇龍寺尺度（金淑瓊2016p71）

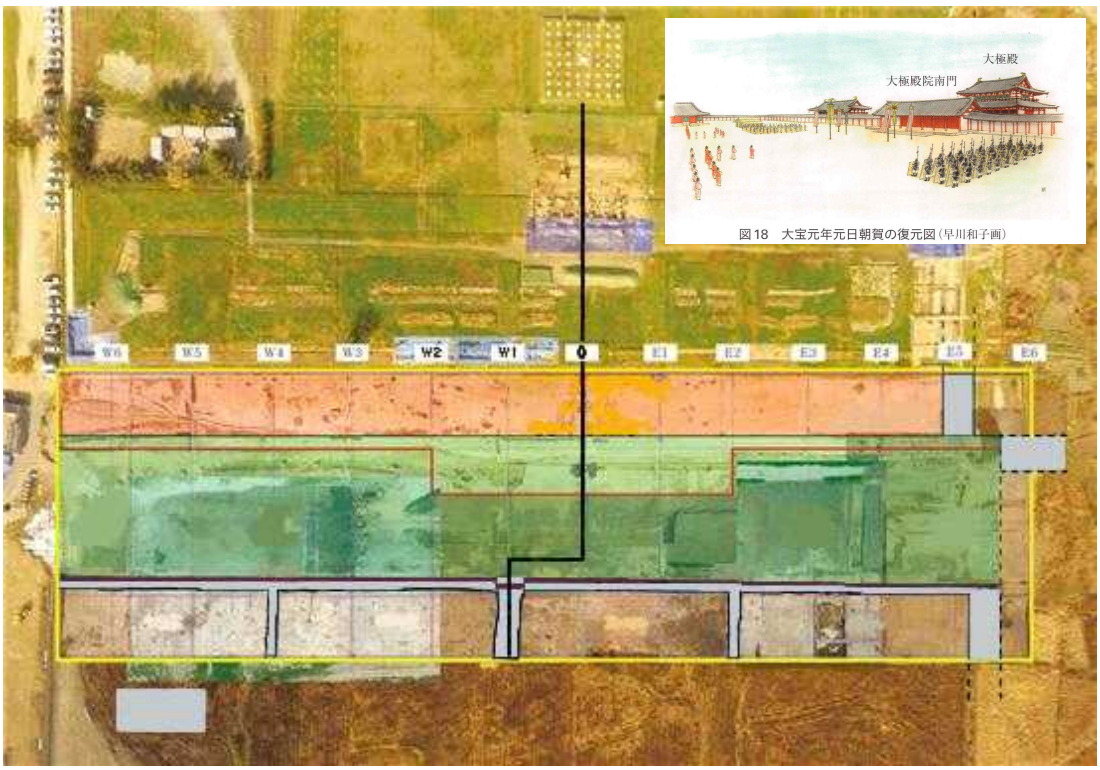


図 8 皇龍寺の中軸線と南北道路（上 ： 玉田芳英2019藤原京復元図を参考）

図 9 皇龍寺址南側南北道路

図 10 皇龍寺址南側坊と道路

図 11 皇龍寺の南側南北道路（幅13m、北から）

図 12 皇龍寺址南側東西道路と広場

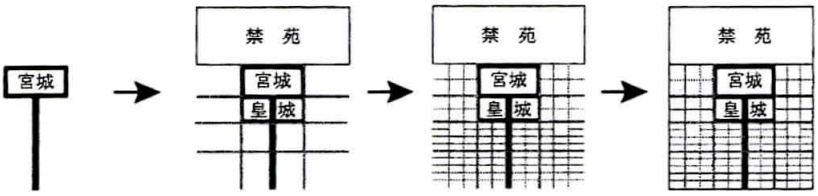


図 13 唐長安城の建築工程（妹尾達彦 2001）

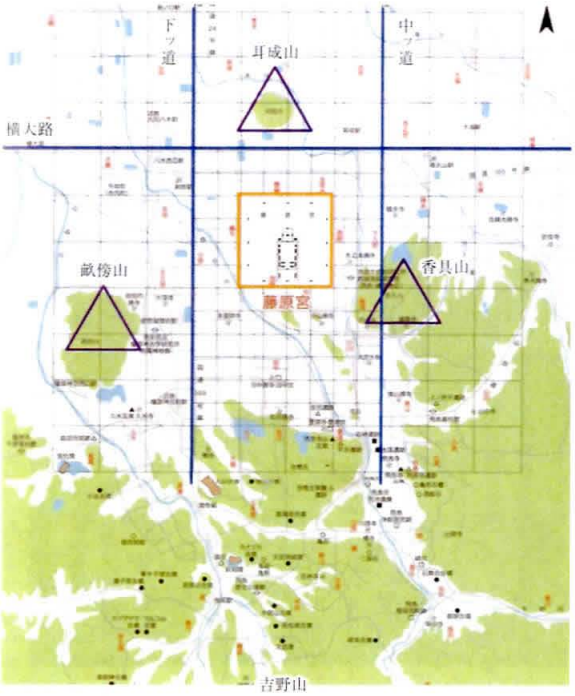


図21　藤原宮は「世界の中心」

図 14 藤原宮の配置（世界の中心、玉田芳英 2019「古代都市藤原京の実態」『藤原から平城へ 平城遷都の謎を解く』奈良文化財研究所）

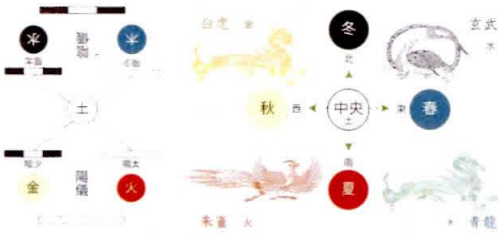


図19　陰陽五行説

図 15 陰陽五行説（玉田芳英 2019）

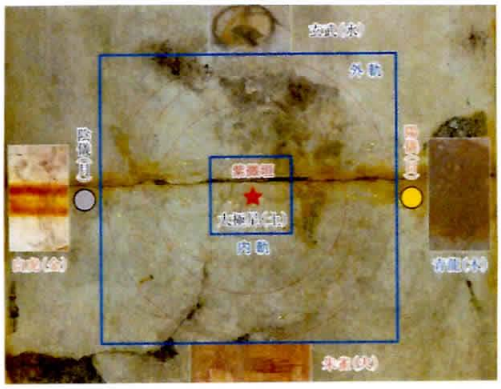


図22　キトラ古墳天文図と藤原京

図 16 キトラ古墳天文図と藤原京（玉田芳英 2019）

一番目（奥行）の柱間に連結されている建築の動線を探し当てる成果を収めた。また、中門と塔、塔と金堂の距離が50尺と均一であり、金堂と講堂の間は70尺と確認された。主要建物の営造尺を検討した結果、高句麗尺の1尺の長さは35.1～35.6cmであり、唐尺は29.4～29.6cmであることが明らかとなった。主要建物に高句麗尺の長さが異なるのは、各建物の造営に時間差があったためと判断された[13)]。

黄仁浩は、高句麗尺（0.355m）によって皇龍寺の一辺が800尺の正方形構造で計画されたとし、第1段階都市計画の宅地基本単位である400尺×400尺の4倍に当たることが分かった。そして6世紀中頃、皇龍寺を造成し、本格的に東西と南北道路に区画された

格子型住居空間である坊を中心とする都市計画とともに進められたと考えた[14]。

前述のように、都市区画において、皇龍寺を中心とするのであれば、東西800尺の中心分割地点である400尺に金堂の中央台座と木塔の心礎石である中軸線が通らなければならないが、中軸線は金堂中心台座から70尺（24.92m）西側に偏っている[15]。すなわち、金堂西側に南北中軸線が通ることから、皇龍寺塀内の建物群の全体配置は、東側にやや偏っていることになる（図 7）。

これは、既存の新羅都城の構造復元において常に問題となっていたもので、いわゆる朱雀大路の存在の有無を考える上でも重大な要素である。2015年から新羅文化遺産研究院が皇龍寺址の南側地域を発掘した結果、皇龍寺の中心軸線から西に約25m地点で皇龍寺の中央南北道路が検出された。道路の中央を通過するラインが70尺（24.92m）と一致しているという点－東西400尺の中心に位置するのである。すなわち、初めて都市計画で子午線が通る基準線が、皇龍寺の中心になったのである（図 8）。

この道路は4回（次）にわたって築造されたが、最下層の1次道路は幅13mに達するという。断面調査は一部にすぎないため、全体幅かどうかは不明だが、皇龍寺建設時に築造された南北道路である。700年前後期に皇龍寺南側広場が造成、道路を隔て、人だけが出入りできるようにした塀施設が築造され、この時から道路幅も非常に狭くなる[16]（図9～12）。

それでは、なぜ皇龍寺の中心軸線である中門－塔－金堂（仏殿）と合わせず、道路とすれ違うように築造されたのか。これは、思想的な側面から理解できる。中国においても、王宮を建設すれば、正南向きの正殿と大門は交錯して配置されている場合を理解しなければならない。つまり王朝儀礼の軸線（南北の子午線）上で、王が政事を行う正殿と正南向きに同一に配置すれば「神に逆らう」という意味合いをもつことになる。百済王城である王宮里遺跡においても、中門と正殿がずれて配置されており、注目する必要がある。初築当時に、すでにこのような構造を計画し測量しなければ実現不可能なのである。唐長安城の建築工程から見ると、宮城建築の最初から南北道路と軸を合わせるという構造と同じである（図13）。

皇龍寺と中心軸線を初めて計画する際、月城と狼山の中央を貫通し、左青龍、右白虎の概念で黄龍が中央に配置された。これは、日本の藤原京の構造と同様で、都城建設の共通した概念である（図14～16）。しかし、土地分割と航空写真で観測すると、軸が西側に若干移動していることが確認できる。ただし、当時の道路幅が不明であるため、道

路の中心をどこに置くかによって差異が生じる可能性がある。当時は、南北道路の中央に子午線を合わせた中心線を配置し、皇龍寺の中心に連結される基本設計が土台となった。

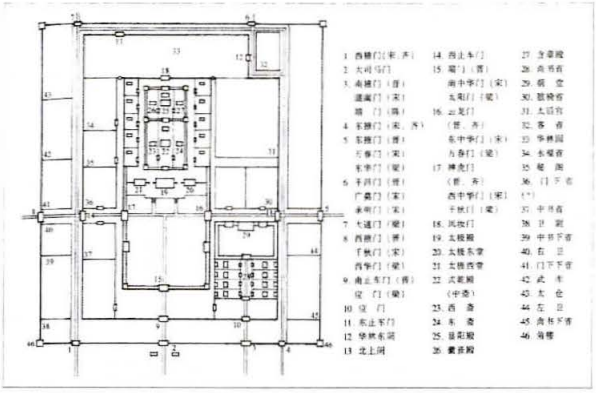


図 17 北魏洛陽の宮城復元図（傳熹年主編 2003、裵秉宣2014再引用）

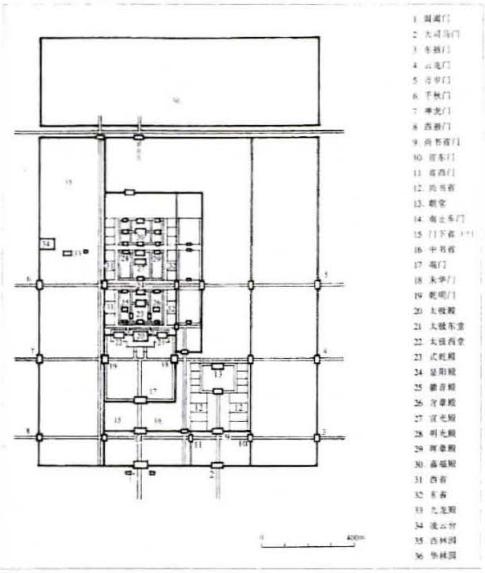


図 18 東魏･北齊鄴南城の宮城復元図（傳熹年主編 2003、裵秉宣 2014再引用）

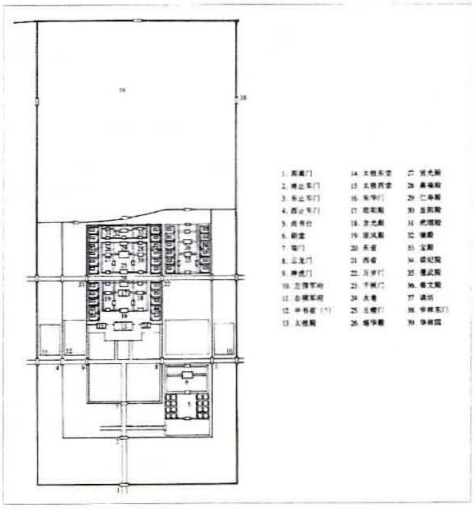


図 19 東晋･南朝建康宮城復元図（傳熹年主編 2003、裵秉宣 2014再引用）

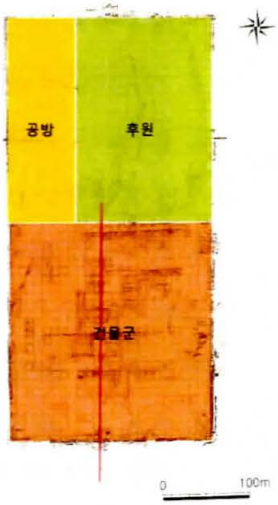


図 20 王宮里遺跡配置構造図（裵秉宣 2014）

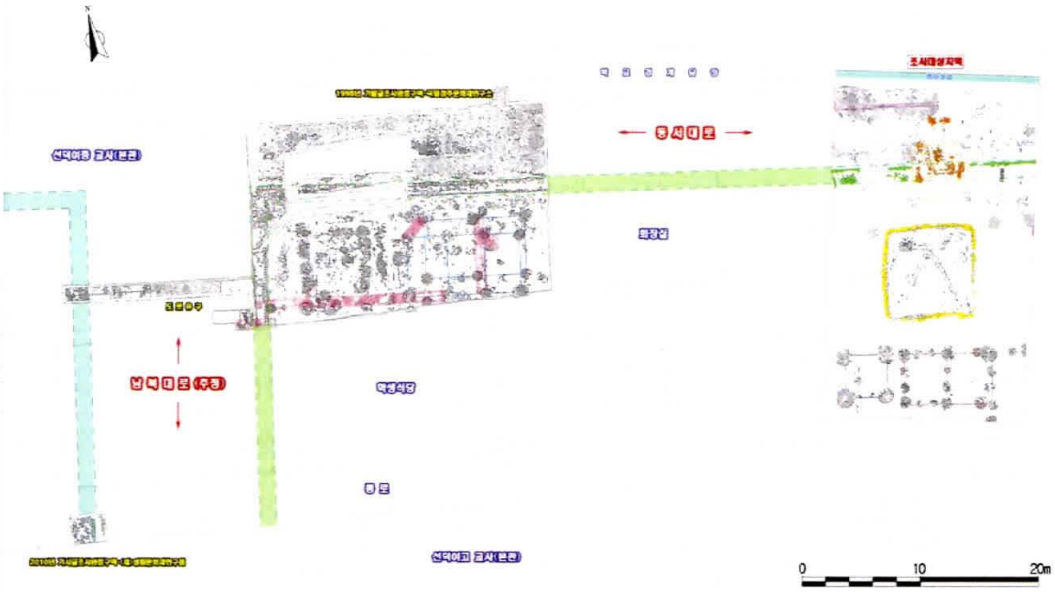


図 21 仁旺洞556番地遺跡（南北道路、東西道路）

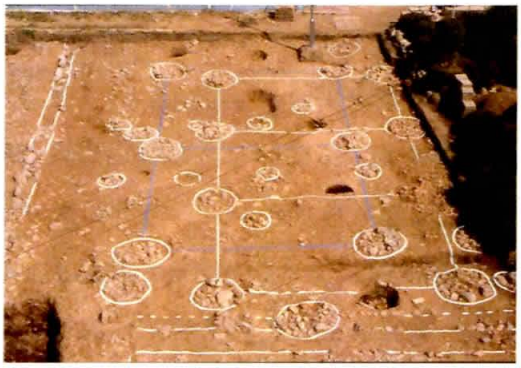


図 22 仁旺洞556番地遺跡（大形建物址2棟）
（柱間 5.5×4.7m，5.5×3.6m）

図 23 仁旺洞556番地遺跡（道路下層出土）

初めて都市計画を推進する際、月城中央北側を中心に城東洞殿廊址と中軸を合わせて設計が始まったと仮定すると、皇龍寺側に拡大する際には、坊と道路が交互に配置され、皇龍寺が築造される場所には中央に道路幅を追加する必要がある。つまり、400尺 + 道路幅 + 400尺で構成されなければならない。そして道路も皇龍寺の中心に合わせなければならない。しかし、月城中央北側の仁旺洞556番地から西側1坊の南北道路までは400尺の142mに計画されなければならないが、幅129mと狭くなっており、また既存の古墳群によって、拡張することも不可能である。したがって、月城中央北側は皇龍寺を中心に都市開発される第1段階の西端部であることが示される。

都市構造を大きな枠組みから見ると、新羅は当時の洛陽城あるいは建康城の概念を受け入れた可能性が高い[17]。

裵秉宣は、このような構造が7世紀に造成された益山王宮里でみられ、新羅都城も同様の概念を受け入れた可能性があるとしている[18]。月城と狼山の間に皇龍寺の中心基準をどこに設定するかによって差がある。すなわち、全体的に中軸線がやや西に偏っており、これを洛陽城や建康城とも比較できると考える（図17～20）。

以上、基本的な都市計画と皇龍寺の配置は、非常に緻密な測量を基本とし、思想的背景と理念を全て反映して築造されたことが分かる。朱雀大路の概念は南北道路が王朝儀礼の軸線に合わせて計画されたものの、王宮ではなく寺院になることで実質的に築造されなかったことが分かる。

このため、現在でも朱雀大路の役割を主張する3つの場所について再検討を試みる。

第一に、既存の学説において尹武炳などが図面復元時に、月城中央から北宮跡と推定される城東洞殿廊址と連結される、幅約120mの朱雀大路が存在したと仮説を立てた場所である。これについては、同地域の東に当たる仁旺洞556番地から南北には幅約10.2mの道路が検出し、朱雀大路が存在しなかったことが既に分かっている[19]（図21～23）。その後、同一軸線上で幅約15m程度拡張された南北道路が、この地域の南側で確認された。一部では、これこそが王京大路だとする意見もあったが、説得力に欠ける（図25-②）。月城から北側に延びる道路が最近発掘され、その幅が20mであることが判明した。この道路は、王京道路の基本分割である幅21m以内で1段階の時に築造された道路と考えられる（図25-③）。

第二に、国立慶州博物館から北へ登る道路が発掘された際、その全幅が23mであることが確認された。藤島亥治郎は、この道路を左京と右京に区分する際に「王京大路」と表現し、これを朱雀大路の一部と推測した。しかし、図25-①に示されるように、東宮と月池の発掘調査の結果、道路上に大型建物址が後代に建てられていることから、これは朱雀大路ではないと判断された。

妹尾達彦の宇宙論に基づく朱雀大路の概念は、図13で示されるように、皇龍寺の中心に沿って南へ下る所に位置するのであるが、その構造は妥当であると考えられる。都城建築の概念は理念に基づいて構成されるため、幅20m以上の南北道路を朱雀大路の概念に無条件に適用してはいけない。朱雀大路は概念上皇龍寺の南側に配置されなければならず、真興王が天子の概念を採用したが、王宮から皇龍寺に変わり、実現する

ことはなかった。統一段階以降、月城と皇龍寺周辺の都市が発展し、朱雀大路の役割が果たされなくなった。現在でも、研究者らは城東洞殿廊址との関連を持続的に試みているが、都城構造に関する思想的な意味ー城東洞殿廊址が王宮の中心であるという論が確立されない限り、月城と城東洞殿廊址の間から見える南北の都市区画道路が朱雀大路であると判断することは困難である。

このように、都城建設において中国から体系的な思想や理念が導入される際には、面殿後市や左廟右社など、王宮を中心とした基本的な概念がすべて導入されていることを把握しなければならない。

月城の西南側に位置する蘿井は、奈乙神宮のような宗廟の役割を果たすことができない[20]。一方、鶏林北側の建物址は、宗廟のような役割を果たすとも推定されるが、その位置は符合しないと考えられる。王宮がある月城を中心に、西北側に宗廟を配置することはできず、前述のようにこれらの建物は官庁施設とみる必要がある[21]。

第 3 節　都市の展開

1.都城内区画、坊と里

国立慶州文化財研究所は2002年までに、皇龍寺を中心に東南側のS1E1都市遺跡、仁旺洞556番地、慶州邑城地域である西部洞19番地を発掘し、その結果を総合することで、皇龍寺を中心に都市が整備されたことを明らかにした。

8世紀中後半まで南と北に市街地が次第に拡張される様相は継続的な発掘を通じて証明されている。王宮を新都市の中央に配置するのは、中国式都城制度に従ったものであるが、王宮の場所が皇龍寺に変更され、王宮は正宮である月城から動かせなくなったが、統一新羅時代（676年）を前後して都市の開発が大きく進められた。しかし、地域的・範囲的な限界を感じた神文王は685年、現在の大邱市にあたる達句伐に遷都を試みたが、貴族たちの反対により実現しなかった。そのため、都市は外側に拡張を続け、北川の北側や南川の南側に新たな市街地が形成された。

皇龍寺遺跡および東南部の都市区画（王京S1E1地区）の発掘により、都市構造の実際の姿が明らかになってきた。道路の配置や規模、宅地の分割構造から、最小行政単位区域である坊の存在が明らかになった。

規格化された都市構造を意味する「坊」の語は、『三国遺事』に登場する1,360坊と360坊、および様々な坊の名称が残っている。1990年代まで、日本の「条坊制」と同じ構造に従って、この用語が使用された。

しかし、日本のような「条」で区画する単位が全く見当たらず、代わりに「坊制」や、記録に登場する「坊里制」といった語が、研究者によって用いられた。しかし最近では、「里」単位がより大きな行政組織を表すことから「里坊制」を用いるべきとの意見もある[22]。『三国史記』には「京都の坊里名を定めた」という記録があり、この用語が妥当だと考えられる。また、『三国遺事』の辰韓条にも、新羅全盛期の178,936戸、1360坊、55里とされている[23]。坊と里が史料に明記されており、新羅の下代においては都城の中心地内である坊が中心となり、里は郊外地域として扱われる[24]。

では、坊の規模と都城の範囲はどの程度なのか。『三国史記』の地理条には王道の長3,075歩、幅3,018歩、35里6部があると記録されている[25]。1歩は6尺で高麗時代の尺度に換算すると、1尺が約30cm前後とすると、南北5,535m、東西5,432mで現在の慶州市街地（蘿井から統一新羅時代の龍江洞苑池遺跡まで約6km、明活山の下から舒川まで約5km）範囲に入っている。

現在、慶州市街地内の地割図面を見ると、皇龍寺を中心に月城東南側地域が約130～140坊、古墳群西側地域が約30坊、西北辺地域（慶州邑城を中心-8世紀以降造成）が約80～90坊、南川西南側（五陵周辺地域）が40～50坊、北川北側（東川洞地域）約40坊前後と推算され、360方前後と算定することができる。こうしたことから、1,360坊は360坊の誤記という主張が強くあった。一方、乾川芳内里一帯では、120m間隔で道路や住居遺跡などの坊が発掘された際、これらを王畿の範囲を含めるべきかどうかをめぐる問題が提起されたが、この時は坊里制による都市の造成を７世紀後半と理解されていた。このように見た場合、都城内には360の坊、王畿地域には1,000の区画が存在することになるが、芳内里以外にはこのような地割は検出されていないことから、周辺地域を含めた総称として判断すべきである。

『三国史記』には、坊に関する記録が残っておらず、そのため、都城が35里から55里に拡大したのか、あるいは35里内にすべて含まれたのかについては、未だ解釈の余地が大いにある。また、178,936戸という数字に関しては、人数なのか世帯数なのかをめぐって様々な解釈がされている。世帯数だとすれば100万人に達し、規模が4倍以上にもなる唐長安城に類似していることから、現在では人口数と判断する傾向が強い。

2.道路の設置と運営

2000年代までにS1E1地区などで発掘された道路の幅は、15m、12m、8.2m、6.5m、5.5mなど様々であった。新羅の都城は当初、中国や日本の平城京のような大路、中路、小路などに区分され、16坪制などの構造であると推測されたが、こうした城構造とは合致しないことが確認された。

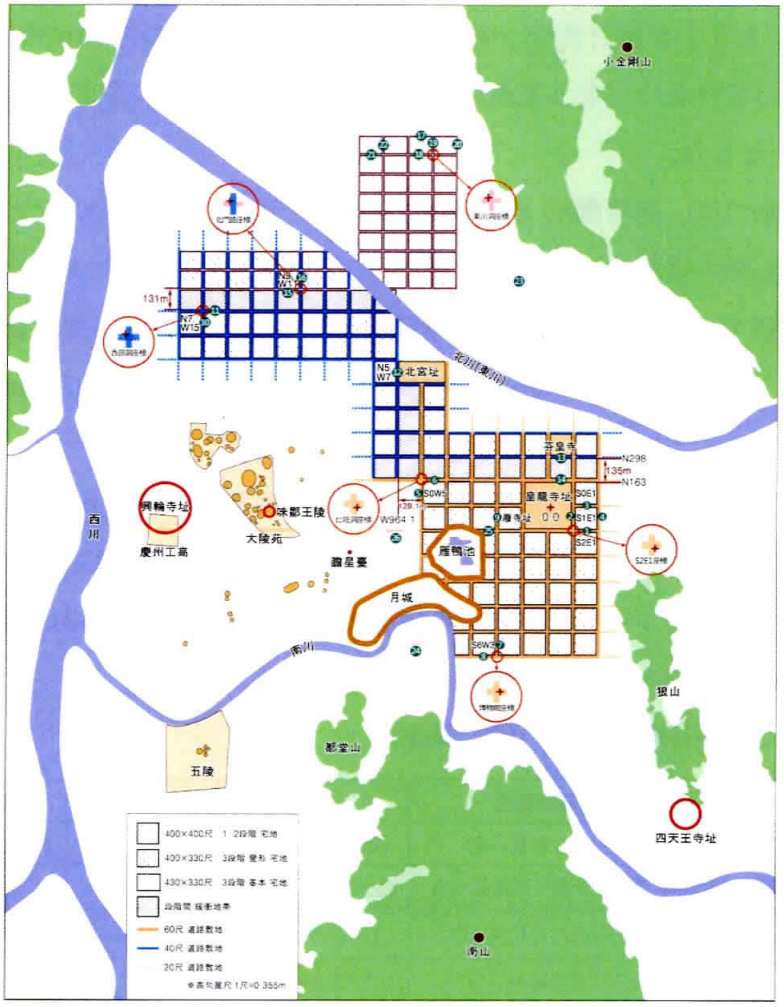


図 24 新羅王京の段階的市街地の区画模式図（黄仁鎬 2010）

黄仁鎬は、王京S1E1地区において、東西道路とその南側の東西道路間の中心距離が160m内外であり、道路を含めた場合160m×160mが1坊の規模であるとする。これは、既存の道路敷地を含むものであり、両側の道路敷地10mずつを除くと、実際に塀を巻いた1坊の大きさは140mになる。すなわち、1坊の最小単位が高句麗尺400尺（142m、1尺35.5cm）によって築造されたと判断した。皇龍寺は、4つの坊を組み合わせて築造さ

れ、1坊の周囲には道路敷地60尺（21.3m）を設定した基本的な都市計画構造を持っている。これを新羅の道路に代入してみると、大・中・小という区分の概念は、既存の計画された21.3mの道路敷地内であり、必要に応じて適当な幅の道路と排水路、および塀との緩衝区域が設置されることが確認できる[26]。

黄仁鎬は、真興王代に皇龍寺の創建当時、都市計画の第1段階が実施され、月城北東側の仁旺洞、九皇洞一帯を中心に格子状の道路網が設置されたと想定した。そして第2段階は文武王代であり、都市計画が一部修正され、核心部を囲む外郭に市街地が拡大し、第3段階においては北川以北と毛良里地域などを格子状の坊に基づいて都市化する作業が進められたとした。

第1段階都市計画では、高句麗尺（0.355m、142m）を単位として、400尺×400尺の宅地と60尺（21.3m）幅の道路敷地が組み合わさった、460尺（163.3m）×460尺を基本単位とした。第2段階では、推定北宮（城東洞殿廊址）を拠点とし、宅地の規模は第1段階と同じであり、道路敷地のみが40尺（14.2m）に縮小され、440尺（156.2m）×440尺を基本単位とした。

河川外郭地域に適用された最終3段階は、二つの様相が確認されるが、北川以北地域は東西430尺（152.65m）×330尺（117.15m）の宅地と20尺幅の道路敷地が組み合わさった450尺（約159.7m）×350尺（約124.2m）を基本単位とし、南川以南380尺（約135m）×380尺を区画の基本単位としたと見解を発表した。

表 1 段階別坊里区画の施行範囲と規格（黄仁鎬案）

	施行時期	施行範囲	坊の規格	道路敷地の規格
1段階	6世紀中半～7世紀前半	九皇洞、仁旺洞一帯	142×142m（400×400尺）	21.3m（60×60尺）
2段階	7世紀前半～7世紀後半	皇龍寺北側、西部洞一帯	142×142m（400×400尺）	14.2m（40×40尺）
3段階	8世紀以降	北川以北の東川洞一帯	152.65×117.15m（430×330尺）	7.1m（20×20尺）
		南川以南の塔洞一帯	135×135m（380×380尺）	7.1m（20×20尺）

日本の藤原京の場合、内部の条坊道路が16m、9m、7mのように設置されているのに対し、新羅では居住空間と道路空間を一律に400尺（430尺、330尺、380尺）、60尺（40尺、20尺）に等分割して造成された[27]。しかし、都市は約200年にわたって発展を続けたのであり、大きな画期によって変化していることが分かる。8世紀半ば以降も、春陽橋、月淨橋の建設（760年）とともに大規模な都市拡張が行われたことが発掘により明らかになっている。

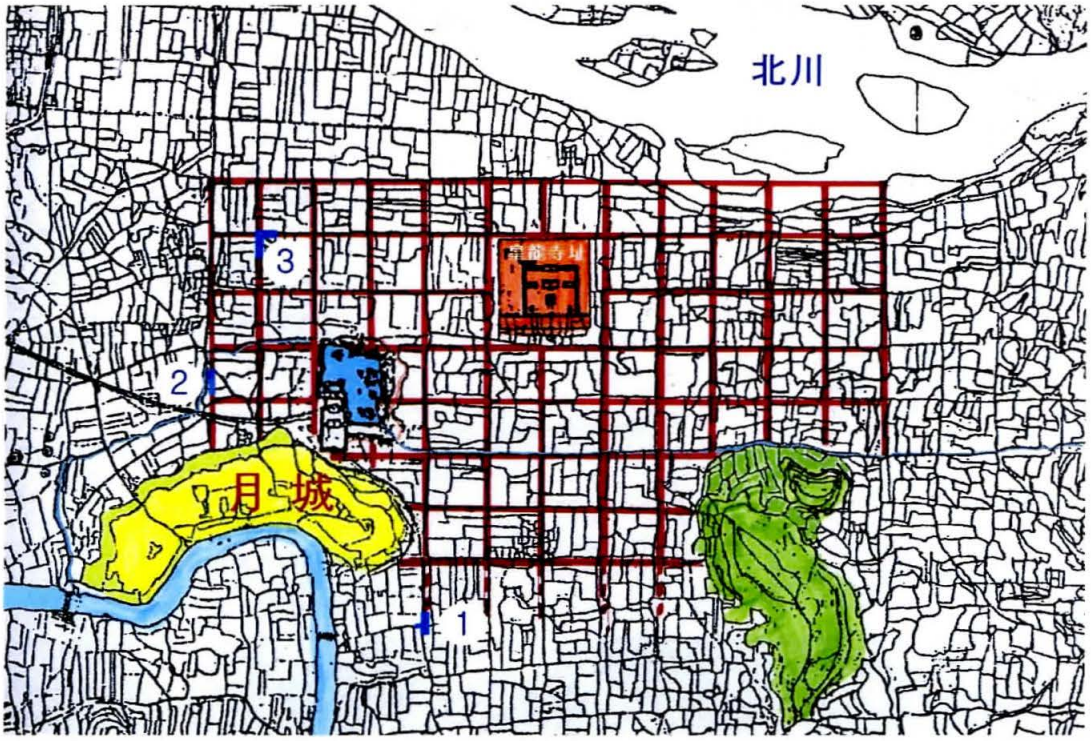


図 25 新羅王京の初期都城1次区画復元図（李恩碩 2010）

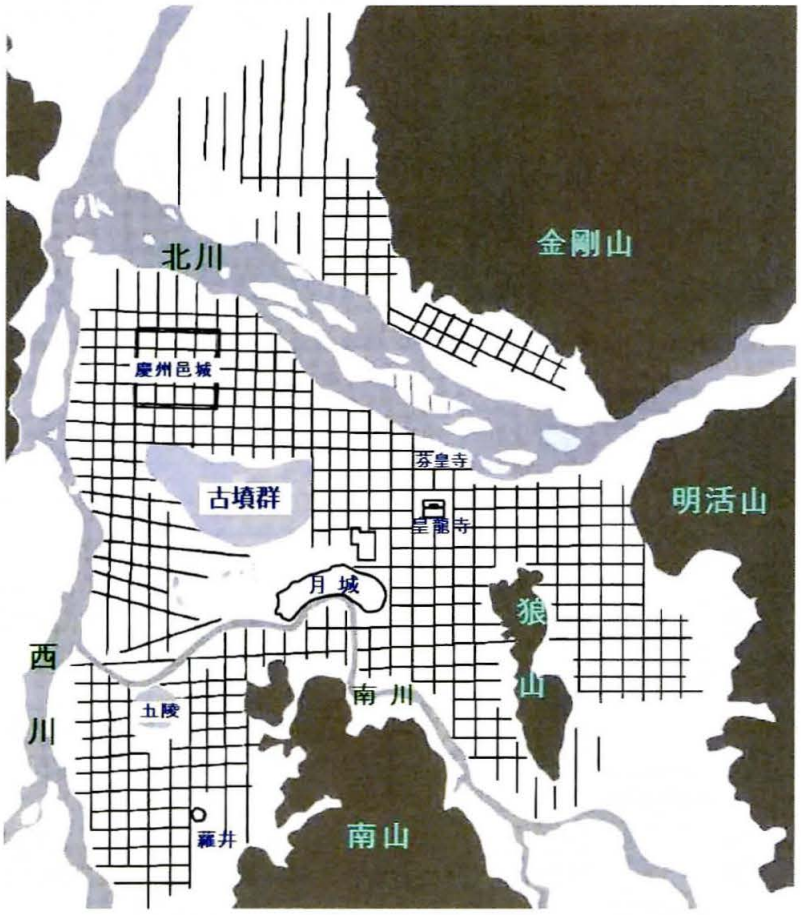


図 26 新羅王京の最盛期区画図（9～10C李恩碩 2004）

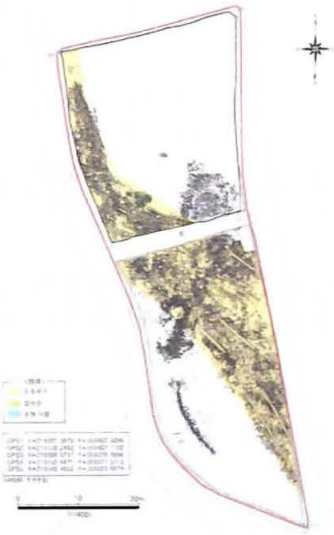


図 27 校洞82-2 'ʃ'形道路

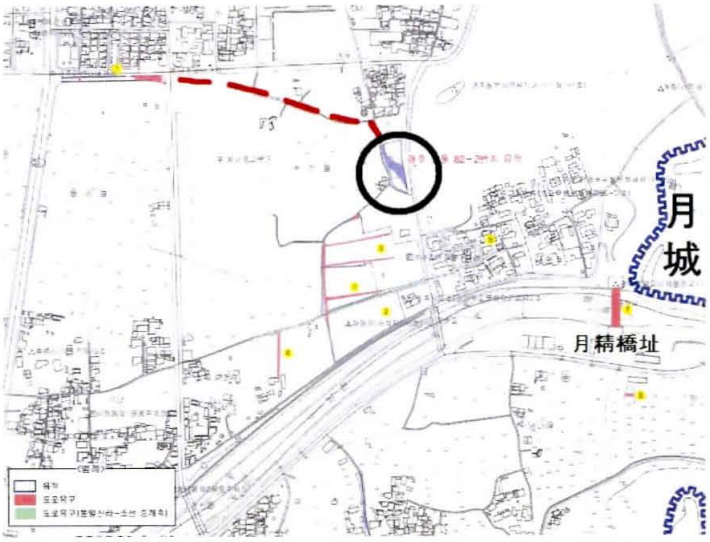


図 28 校洞82-2 'ʃ'形道路と周辺道路遺跡

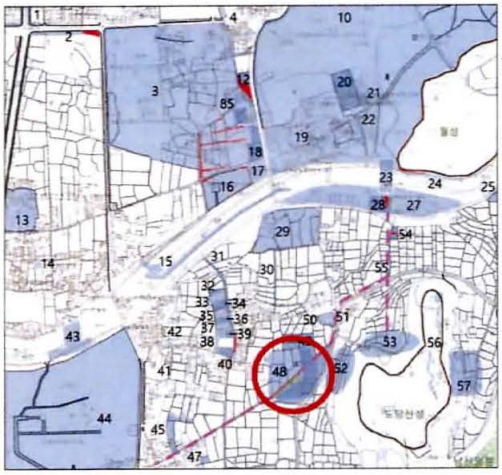


図 29 天官寺址南側道路（○北東-南西）

図 30 芬皇寺北側都市区画と遺跡（李恩碩2003より）
左:東川洞343-4　右:東川地区都市開発事業敷地

図 31 東川洞343-4 区画石垣

図 32 東川洞343-4古墳分布図

図 33 東川洞343-4区画石垣の北側石室墳

図 34 東川洞地域の古墳分布図（1930年代）

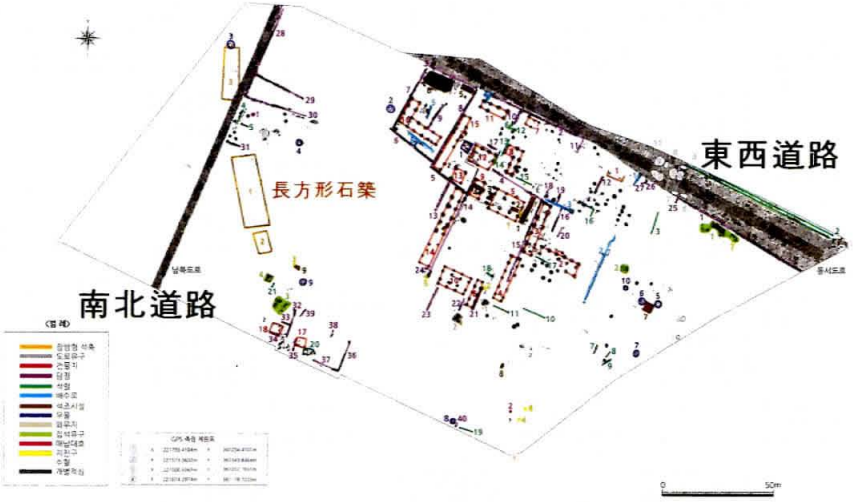


図 35 東川地区都市開発事業敷地（道路･建物址･長方形石築遺構）

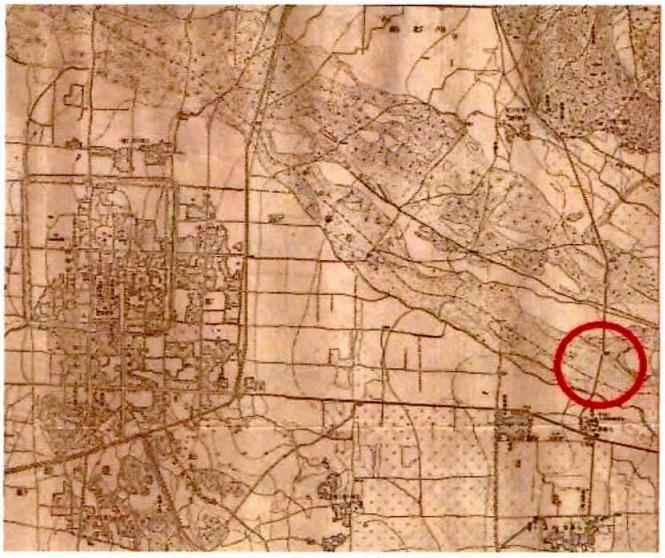


図 36 芬皇寺北側の下川橋梁（1920年代以後地圖 ○）

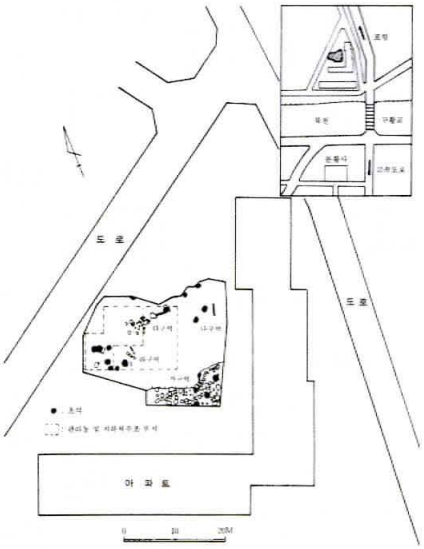


図 37 芬皇寺北側の東川洞三星APT遺跡

図 38 東川洞三星APT遺跡の出土石材

図 39 九黄洞苑池出土
「官瓶」銘土器

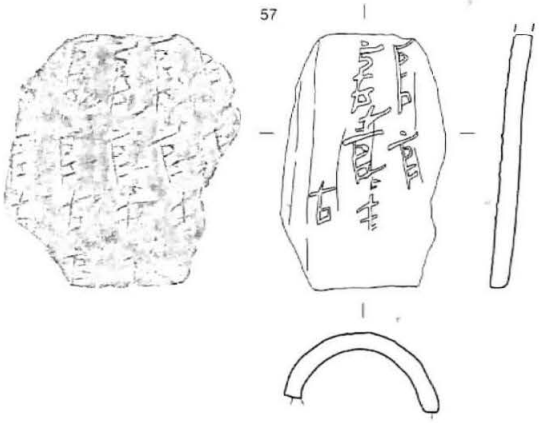


図 40 校洞158-2方池出土「右官」銘文瓦

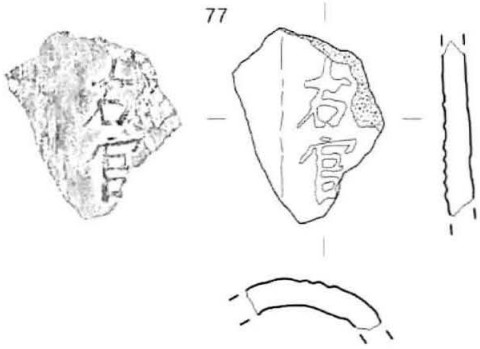


図 41 校洞158-2旧河道出土「右官」銘文瓦

最近の研究により、北川の北側である東川洞一帯は8世紀代以降に発展したと判断されるが、東川洞696-2番地では7世紀半ばころに幅7～10mの東西道路が、7世紀後半には幅14mの南北道路が建設されたことが明らかになっている。ここは、先に言及した金城が位置したとされる皇城公園につながる道路であり、ここから北上して北川の南につながる地点でもあるため、7世紀代にすでに計画された道路であることが分かる。したがって、ここは拠点地域であり、7世紀代に基本計画が行われ、8世紀代に築造される道路はその計画に従って随時造成されたと推定される。

月城の西側である沙正洞459-9番地遺跡から露出された建物址は、東西長軸方向が11°ほど南に偏っている[28]。

現在、伝興輪寺址の西側には、建物址の角度が坊里制の区画角度とは異なることが確認される[29]。大陵苑の西南側地域が全てこのような体系を保っており、興輪寺から月城に連結する道路も既存の水路に沿って斜めに続くことが見受けられる。また、東

西道路が南に傾く道路も発掘され、このことを裏付けている[30]。

校洞82-2番地遺跡として知られる道路は、月城西側古墳群の外側に位置し、「ㄴ」の形を呈す。北側から湾曲し東側に連結されるこの道路は、長85.26m、幅14.20～18.05mで不規則な形状をなす。周辺が低湿地であり、規格化された坊の道路ではなく、地形に合わせて8世紀頃に築造された道路と推定される（図27・28）。天官寺址南側の傾いた道路も同様に、地形に沿って造成されている[31]（図29）。

新羅都城の都市計画の特徴は、新羅王京が唐長安城や日本平城京のような全体を含む総合計画として進められたのではなく、中心地から拡大していった点にある。そのため既存の小河川や地形を利用して道路が築造され、既存の施設を埋め込みながら市街地が拡大していったのであろう[32]。自然に道路が傾いたり曲がったりするのは、このような地形上の理由からである。

東川洞地域は、道路と宅地が南北方向に保たれている部分と、東側の丘陵地域で25°ほど傾く区画に分けられる。このような道路の傾きは、自然な地形によって引き起こされるものとして、2003年の論考で初めて図面復元しものを提示した[33]。これはその後の発掘調査によって証明されており[34]、芬皇寺東側の九皇洞苑池遺跡で現れる現象も、北側との連結線上にあることを検討した[35]（図30）。

2016年、東川洞343-4番地で墓区画と道路を区画する東西石垣列が検出された[36]（図31-34）。ここは東川洞一帯の区画が東に傾く地点であり、東川洞一帯の都市区画が開始された時期と古墳群が造成された時期との関係を把握するために非常に重要な資料である。すなわち、東川洞の小金剛山の麓に形成されていた石室古墳が7世紀代以降に形成される坊の境界北側に制限され、つまり道路によって区画される都市体系と古墳群領域を把握することができる。実際に、東川洞地域は8世紀代以降、都市構造が連結されたと推定したが、この古墳群の発掘により、もう少し早い時期に都市区画化され、古墳が形成される境界地点を設定するための重要な遺構であることがわかった。また、東川地区都市開発事業敷地遺跡からは、既存の真北軸を持つ長方形築石遺構が2基露出しており、都市開発前に行われた古墳群（343-4、373番地古墳群）[37]がこの洪水で埋没した時期以前（698または702年）に築造され、儀礼施設として使用されていたことが確認できた。そして、8世紀代以降は25度も傾いた道路に合わせて各種建物址とその内部に石造施設などが確認できるが、ごれを染色作業と関連性のある官庁建物と推定する見解もある[38]。

このように、角度が傾く北川北側の東川洞一帯と、芬皇寺との位置関係について理解

する必要がある。北側の東川洞は、自然地形によって道路と建物および塀の角度が25度前後に傾くのは自然であるが、北川南側の芬皇寺周辺の都市構造から見ると、中軸線で金堂と塔などとは全く噛み合わない理由について考察する必要がある（図30）。

1990年代後半に発掘が始まって以来、この地域の構造について明確な答えを出せず、引き続き疑問が提起されてきた。ここは芬皇寺域と接しており、寺院と関係のある区域であり、川を境に直交する同一の区画を持つ。それにもかかわらず、既存の皇龍寺と芬皇寺伽藍配置とは全く関係のない都市計画が進められた理由について考察を進める。

まず、橋梁ないしは交通路の役割をする施設が設置されたと推定できる根拠を以下に提示する。

1．橋梁は河川と直交するように築造されなければならない。橋脚と上板の角度が変わる橋梁は存在しない。したがって、北川の南と北に同じ橋臺施設または橋梁を備えた施設が建設されなければならない。それにともなう地割の角度は、北を基準とする王京地割とは異なるものになる。

2．ここに橋梁が設けられる理由は、現在東から流れている北川が芬皇寺の東側から湾曲して西北側に出る地点で、地形的に最も幅が狭い場所に属するためである。古地図を見ると、この地域には橋のような構造物が残っており、橋渡しの役割を担っていた場所である。図36に示される1920年代の地図でも、この川を渡る場所が確認でき、1960年代に至るまで存在していた。現在、北川の北側に位置するサムスンアパート敷地での発掘調査により、重要な礎石と石材が集中的に出土しており、堤防の内側から建物跡が検出された。これらの石造物は発掘終了後、全て大陵苑に移転され、野外展示された[39]（図37・38）。

筆者は、三星(サムスン)アパート敷地の発掘調査中に、多様な石材、堤防、建物跡などの重要性についての認識が不十分であり、出土した40点以上の石材の意味について答えを出すことが困難だった。しかしながら今回、再検討を試みる過程で、同地域が芬皇寺と関連する地域であることが明らかになった。

3．月城の西側に位置する月淨橋（760年築造）南側の校洞158-2番地遺跡からは、「右官」の銘文瓦が多数出土された（図40・41）。方池や旧河道から出土したこれらの瓦から、月淨橋の出入りを管理する右官がいたことが想定できる。月城から見ると、月

淨橋は右側に位置し、ここに右官がいたとすると、春陽橋の前には「左官」がいた可能性が高い[40]。九黄洞苑池遺跡からも「官瓶」銘文土器が出土した[41]（図39）。この地域にも橋の施設が存在し、その出入りを管理する官庁があったと推定される。『三国遺事』の元聖大王条において、金周元の家が北川の北側にあり、洪水で水が増えて渡れなくなったため、上大等の金敬信を王に推戴したという記録がある[42]。北川（閼川）の下流部はますます広くなるため、水量が増加すると渡ることが非常に難しくなる。そのため、上流側で近くて狭い場所に橋の施設を設置することが、最も効率的であると考えられる。

現在、北川には古代の橋や浮橋などの施設が全く検出されていない。そのため、芬皇寺の北側に位置する北川沿いの都市区画と符合する東川洞地域には、三国時代から官道を連結するために、橋などの施設が設置された可能性が想定される。

また、都城内には国が管理する市場が開設されたと推定されるが、その位置については現在のところ不明である。『三国史記』によると、炤智王12年（490年）に市場が開設され、智證王10年（509年）には東市が、孝昭王4年（695年）には西市と南市が同時に設置されたと記されている。しかし、これまでの発掘調査では、このような遺跡は確認されていない。推定を加えるならば、東側には蔚山方面に出る四天王寺周辺、西側には南川と西川と連結される五陵北側地域の霊廟寺（現在の興輪寺）周辺などが、西市の候補地と考えられる[43]。

3.宗廟と社稷

もし皇龍寺が都城の中心に紫宮として建立されたのであれば、『周礼』「考工記」の制度を基に、王宮の南側に官庁、廟（宗廟）、社（社稷）が配置されてこそ基本構造を整えたことになる。しかし、結局のところ、新しい王宮は建てられず、月城から抜け出せなかったため、国家儀礼で最も重要な宗廟と社稷壇の位置（配置）に関する問題が提起される可能性がある。王の始祖墓を祀る奈乙神宮、すなわち「朴赫居世の誕生地である現在指定されている蘿井が果たしてその位置が妥当なのか」という問題は、第1章で南郊と推定されたため、成立しないものとする。

したがって、宗廟の位置は月城の東にすでに建設されているか、あるいは新たに建設される必要があると考えられる。このことは都城制の基本的な要件であると言える。狼山一帯は、月城や皇龍寺の東側であり、新羅の中岳と呼ばれるほど重要な地域

である。ここが、宗廟が位置していたところだと推定する。

665年には、就利山同盟で劉仁軌が書いた誓約文が宗廟に保管されたという記録がある[44]。神文王（682～692年）の時には、五廟制が整えられた宗廟の祭祀を運営したという。

先に述べた、皇福寺塔から発見された金銅舎利函の「宗廟聖霊禅院伽藍」は、この狼山の麓に宗廟があることを示唆する。文暻鉉は、狼山が中岳であることを指摘し、また司馬遷の『史記』に「東有大星曰狼」（東に大きな星があるので狼という）という一節があることから、朴赫居世が誕生した陽山が狼山と同じ名前である可能性があると指摘している。また、善徳女王は白淨王（真平王）と摩耶夫人の娘であり、釈迦牟尼父王と母親の名前が同じであった。また、彼女の名前「善徳」は、『大方等無想經』に登場する善徳曼婆羅門から採られたものであり、彼女自身もまた、忉利天主になることを祈願した。善徳女王は忉利天に埋葬されるよう遺言し、忉利天は帝釈（阿修羅軍隊を征伐するという天の王で、四天王と十大弟子がそばで祀る）を意味する点で四天王寺がここに建立されたと見ている[45]。

李根直もまた、狼山一帯に蘿井があったと考えており、親祀始祖廟がここで執り行われたと考えた[46]。

狼山一帯が閼川楊山村と考えられると、ここが朴赫居世の誕生地であると推定でき、奈乙神宮の位置も狼山にあった可能性がより高いと考えられる[47]。さらに、善徳女王が自分の陵が狼山に建てられるように遺言したこと、そして南山の最南端に位置する護国寺である四天王寺が造成されたことなどは、重要な意味を含んでいると考えられる[48]。したがって、陵只塔のあるこの一帯が、新羅初期から蘿井あるいは始祖墓と宗廟が設置された可能性を示唆するものと考えられる[49]。

図 42 陵只塔

では、社稷壇の位置はどこであろうか。新羅で社稷壇が設置されたのは宣徳王（780～785年）の時期であると記されている[50]。唐代においては、中祀であり、社稷に似た性格の方澤は、大祀として採用され重視されたという。新羅は、八禘祭祀と先農、中農、後農の祭祀は新城北門などに祭祀を行ったという記録があり、八禘祭祀が当時最高の祭祀であるため宗廟制が施行された時から社稷壇祭祀が導入されたわけではなく、宣徳王の時に祀典が整備されたと見ている[51]。

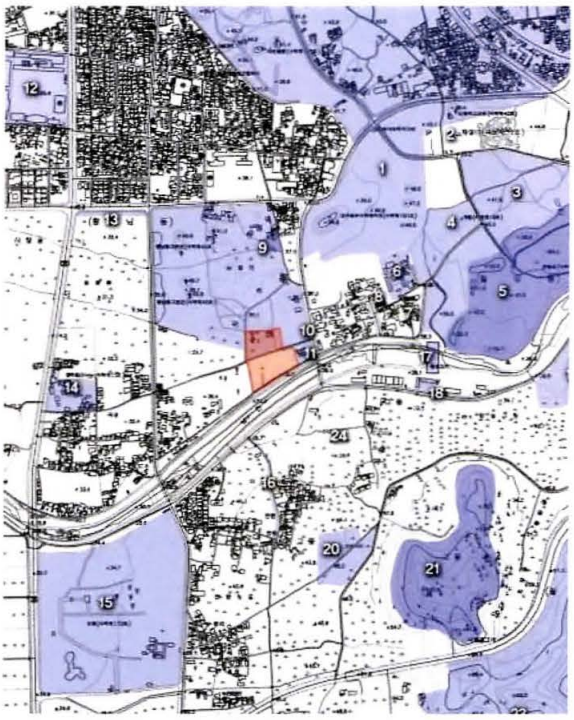


図 43 月城西側の財買井址

図 44 財買井址発掘全景

図 45 財買井址井戸 1

図 46 財買井址井戸 5

図 47 財買井址北坊井戸 2

新羅の社稷檀の位置はいまだ確認されていないが、あるべき場所として挙げられるのは、月城の西側あるいは西南側であろう。現在まで、8世紀後半に都城が拡張されたことにより、月城北側地域には礼制建物あるいは官庁型の長舎建物である皇南洞123-2番地遺跡があり、この場所に社稷壇があった可能性が考えられるが、王宮（月城）の北西側に位置しているため、この場所を社稷壇とするのは難しい。

図 48 財買井址建物址1（東西長舎）

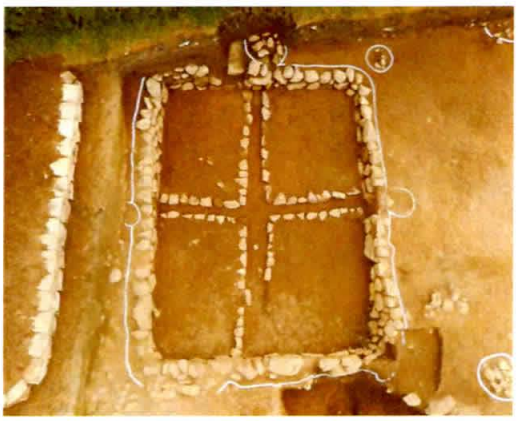


図 49 財買井址氷庫

図 50 皇南洞477番地遺跡瓦積基壇

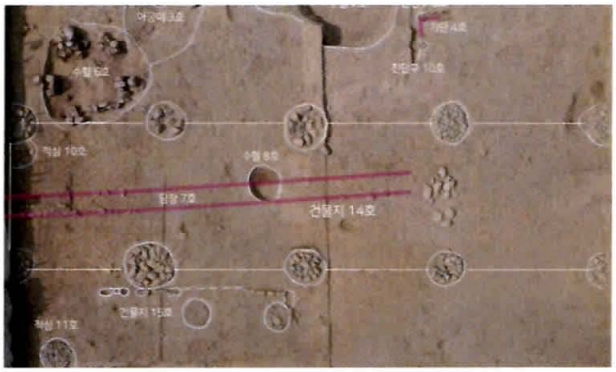


図 51 皇南洞477番地遺跡長舎建物址

月城の西側地域には、大社（社稷）と推定される場所がある。同地域には、現在金庾信（595～673年）の宗宅として知られる財買井址が存在する（図43～49）。月城の西南側に位置し、発掘調査により、東西や南北の長舎建物が多数検出されている[52]。検出された井戸からは、各種祭祀土器や馬頭蓋骨などが出土し、南側には石築氷庫がある点から一般家屋とみることは難しく[53]、また7世紀代の遺跡がないため、金庾信家屋とは考えにくい。だが朝鮮時代後期に、月城の近くに石造井戸があり、金庾信の宗宅として指定され、1872年には金庾信遺許碑が立てられた。

ここから西に約130m離れた場所にある皇南洞477番地の発掘調査で、8世紀以降の瓦礫や基壇の建物跡と東西の長舎建物跡が検出された（図50・51）。このような建物跡が見つかる場合、この地域に官庁や例祭建物が存在した可能性が高いと推定できる[54]。

社稷壇が設置できる空間は、井戸の南にある平地地帯と推定できる。ここには青銅器時代の住居跡が見つかっているが、歴史時代の遺跡は見つかっていない。つまり、ここには統一新羅時代の祭壇が築造されていたが、高麗時代以降に民家が建てられ、

全て消えてしまった可能性がある。

結　語

真興王は貴族の牽制と百済との対立と競争、中国への交通路確保、領土拡張など数多くの難題を解決し、優れた力量で新羅を導いていった。しかし、息子の銅輪太子の死亡が多大な影響を及ぼし、結局、王位を譲って僧侶として一生を終えたと記録されている。

新羅における新都市建設の特徴は、低湿地が多いため大部分築土をし、建物の基礎を、石を用いて強固にした点にある。特に、百済とは異なり、道路築造時には大きな砂利を下に敷き、小さな砂利を上に固めた後、上部に磨砂を敷き、側溝も石材で築造するという方式を固守した。こうした方法によって道路は堅固になったが、建設に莫大な時間を要し、費用も大幅に増加するため、都城の移転に対する貴族の反対は当然であったと推定される。

国際的にも、8世紀代以降、唐・渤海・日本などと平和な時代を迎え、交流を通じた文化の発展と産物の増加は、出土遺物からもうかがい知ることができる。また、地方の各中心地である9州5小京にも都市計画が推進され、坊構造が整備され、その他の地域にも方格道路を備えた村落が出現する。

現在、新羅都城の中心地区域は、多くの発掘調査の成果を受けて、ある程度の把握が可能となったが、細部においては多様性が見られ、断定しづらい部分が多く残る。例えば、道路の幅も4.5mから23mと、時期や場所によって差があり、7世紀代には道路区画のみが存在していたが、9世紀代に築造され、使用されたものもある。また、統一後には、百済の要素が加わった各種の建築物が存在し、多様な姿へと変容、発展した。

このような多様性は、千年の時の流れが一つの場所にとどまり、営まれた、中世ヨーロッパの都市が今に至るまで運営されているのと同じである。ただし、発掘された遺跡の大部分は基礎のみが残っており、解釈が難しいのも事実もある。従って、客観的な観点からアプローチし続けることが不可欠である。

1) 筆者がかつて示した年代観（李恩碩2003・2004）では、皇龍寺の築造と共に都市建設が6世紀半ばから進み、西側や北側の隍城洞、東川洞一帯が7世紀代と8世紀代初めに進められたというものであった。しかし、その後の発掘の結果、584年、皇龍寺の金堂が完工された頃に、6世紀後半から7世紀初めにかけて、1次的な都市が形成され始め、以後統一期段階まで次第に拡大し、東南側には狼山の下まで、西には西川辺まで、西南側は蘿井南側一帯、そして北川側には隍城洞と東川洞一帯まで、8世紀中後半まで持続的に拡大・発展する。また仁旺洞556番地一帯から見える大型建物址を6世紀半ば程度と想定したが、時期がもう少し下る可能性がある。
韓国文化財保護財団 2010『慶州 東川洞 696－2番地 遺跡－共同住宅新築敷地発掘調査報告書－』

2) 朴方龍 1999『新羅 都城 研究』 東亞大学校 博士学位論文
車順喆 2019「新羅 王京의 道路와 都市構造」『新羅 王京과 月城의 空間과 機能』国立慶州文化財研究所・嶺南考古学会 学術大会資料集

3) 朱甫暾 2020『新羅王京의 理解』 周留城
2021「新羅王京과 王宮，그리고 撥川」『撥川，新羅王京의 옛물길』学術大会資料集 新羅王京核心遺跡復元整備事業推進団・慶州市・慶北文化財団文化財研究院 p25

4) 最近、全国各地で新羅中古期の道路遺跡が発掘され、慶尚道地域でも80カ所以上の道路が確認されている。また、交通路に関する学術大会が開かれ、全国的に内容を整理した経緯がある。
朴晸煥 2013「三國・統一新羅時代 道路築造에 관한 研究－慶南地域 資料를 中心으로－」『中央考古研究』13
韓国考古学会 2018 「交流와 交通의 考古学」第43回 韓国考古学全国大会

5) 慶州地域で低湿地など荒地があったところを6世紀代以降、住居領域だけでなく農耕地としても開発したと考えられる。
金在弘 1995「新羅中古期 低層地開発과 村落構造의 再編」『韓国古代史論叢』第7集 pp65－70

6) 金錫煥 1996「慶州地域道路施設에 관해서－発掘調査된 地域을 中心으로」徐羅伐 5
国立慶州文化財研究所 2005『芬皇寺発掘調査報告書Ⅰ』pp103－106

7) 皇龍寺の面積は約78,000㎡で、低湿地（泥土層）である場所に約2m程度の覆土をするには、計156,000㎥の土、砂利、石材が必要である。砂利は北川から、黄土は明活山から採取されたと推定される。1日1人の作業量を算出すると、1000人が皇龍寺敷地の停止作業に約150日以上を要した。皇龍寺南側や王京S1E1地区や皇龍寺南側の調査により、低濕地（泥土層）の上には、黄色い粘土と砂利が交互に傾斜して盛り上げられていることが分かった。
慶州市・新羅文化遺産研究院 2018『慶州 皇龍寺広場과 都市Ⅰ－皇龍寺台地와 後代遺構－』

8) 6世紀半ば代の百済泗沘城である、扶余の初期都城の構造については確認されていない。なぜなら、当時の都城の中心地は、西には現在の国立扶余博物館があり、東には現在の扶余郡庁、南には花枝山と初期寺院である軍守里寺址がある周辺一帯であった可能性が高いためである。ここはやや丘陵のように周辺地形より高く、川の氾濫に影響されない場所であったと考えられる。したがって、現市街地の下に残っている可能性が高い。一方、7世紀代以降は唐長安城構造の影響を受け、扶蘇山一帯に変化したとされる。扶蘇山には、古代都城の遺構が残っていることが知られており、扶余都城の構造に関する研究においても、扶蘇山周辺の調査が重要とされる。

9) 都城の建立概念を理解するために、妹尾達彦の論を引用した。長安城の太極殿の「太極」は混濁した宇宙の涙しい状態を意味し、太極殿北側に位置する両儀殿の「両儀」は太極から生まれた万物の根源である陰と陽、あるいは天と地を意味している。太極は天文占星思想では北極周辺の星座を意味し、「紫微宮」の中核を成す位置であり、天帝が常に居住する場所だと考えられていた。
このように、太極殿は天帝の代行者として天下に臨む、天子の居住地を意味しており、宇宙の中心に直結する場所として認識されてきた。昔から中国の王都建設は、北極星を観測して都市の南北軸線を決定し、南北軸線上の宮殿は北極星を象徴する位置となっていた。天の中心が北極城であり、王都宮城の正殿としての太極殿という名称が魏から現れ、地上の太極殿は天　上の北極城を中心とする天帝の居住地に直接つながり、宇宙軸の不動の中心に位置していた。また、宇宙最高の神である天帝は道教で最高神となり、天上の神仙界が地上に投影されたことが建築群に反映され、唐代の663年大明宮の宮殿配置に反映され、蓬萊宮と呼ばれるようになったのも天上の神仙界に従ったためである。

妹尾達彦 2001『長安の都市計画』講談社

10) 高麗尺は35.6cmであるが、1930年代に中国学界で唐尺が30.05cmであることが明らかになったことから、高句麗尺の起源を東魏尺と見るのは無理があり、その後の用語は高句麗尺に統一することにした。以下の論文は金淑瓊（2016）から引用した。
朴贊興 1995「高句麗尺에 대한 研究」『史叢』第44集
李宇泰 2007「高句麗尺 再論 －高句麗尺과 高麗術의 関係를 中心으로－」『東北亞歴史論叢』17

11) 長谷川輝雄 1924「四天王寺建築論」『建築3誌』第47号

12) これは研究史に詳しく言及されている。

13) 金淑瓊は皇龍寺復元研究を深化させ、尺度関係を明快に解釈した。
金淑瓊 2016「皇龍寺 伽藍計画 尺度研究」『建築歴史研究』25 pp109-124

14) 黄仁鎬 2015「新羅 王京中心部의 都市化 過程 및 坊里 構造 考察」『韓国上古史学報』90

15) 金堂と木塔中心の南北中軸線と木塔と金堂の東西横軸線 － 中央台座から23.5m南側に地点が新羅王京発掘基準点である0地点に設定し、皇龍寺周辺地域は全てこれを基準点として使用する。真北の北極星基準で、磁北とは約8°の差がある。

16) 新羅文化遺産研究院の発掘結果から見ると、周辺道路遺構が皇龍寺築造以前より時期をさかのぼらないことから、皇龍寺が都市区画の始まりだったことを証明するものである。
慶州市・新羅文化遺産研究院 2020『慶州 皇龍寺広場과 都市Ⅱ』

17) 新羅と北魏との交流関係の記録が全くないことから、これを否定することもできる。しかし、新羅古墳から出土する数多くのペルシャガラス製品などは、中国や海路を通さずには入ってこなかったと考えられる。

18) 裵秉宣は、建物の中軸線が西に振れる状況は益山王宮里遺跡でもみられ、洛陽城では太極殿と東西堂、寝殿などの中心建物群が南北中軸線上に一列に配置するが、中軸線はやや西に偏っており、南朝の建康宮城とも類似すると指摘している。
裵秉宣 2014「益山 王宮城과 百済建築」『古代 東亞細亞 都城과 益山 王宮城』国立扶余文化財研究所 pp155-156

19) 国立慶州文化財研究所 2003『慶州 仁旺洞 556・566番地遺跡 発掘調査報告書』

20) 李根直は、蘿井が現在の位置ではなく、月城の東側にある狼山一帯と推定した。
李根直 1997「新羅 三姓始祖의 誕降址 研究」『慶州史学』16

21) 祭儀施設と推定する見解は、都城の基本構造を理解する必要がある。

22) 朴方龍は「坊制」、全德在や李賢泰は「里坊制」を、李恩碩や黄仁鎬は「坊里制」を主張している。

23) 新羅全盛之時 京中十七萬八千九百三十六戸 一千三百六十坊 五十五里 三十五金入宅（富潤大宅）

24) 坊里制の時期と関連して、王京がそれ以前とは異なる行政的な単位区画の一端が始まったことは明らかである。最近の里坊制として使用される用語にもそれなりの意味をもつが、郡県制式の上位行政区域による造語的なニュアンスを除去することは難しい。また、全体を盛り込めないという限界を示している。
イ・ドンジュ（이동주）2017「新羅王京의 定義와 그 範囲」「文献에서 본 新羅王京과 月城」国立慶州文化財研究所 pp105-111

25) 王都長三千七十五歩 廣三千一十八歩 三十五里 六部

26) 黄仁鎬が発表した皇龍寺と宅地および道路配置に関する研究について、全面的に同意することを明らかにしておく。
黄仁鎬 2004「慶州 王京 道路를 통해 본 新羅 都市計劃 研究」東亞大学校 碩士学位論文
2015「新羅 王京 中心部의 坊里 構造와 変遷」『新羅王京 中心區域 坊整備 및 活用을 위한 学術シンポジウム』

27) 金淑瓊は、皇龍寺中軸線の東側区画が330尺に分かれていたことが、黄仁浩が試みた都市計画にも反映

されたことと相互関係があると判断した。金淑瓊 2016 前掲。

28) 慶尙北道文化財研究院・慶州市 2001『慶州市 沙正洞 459－9番地 收拾発掘調査報告書』

29) 藤島亥治郎の王京復元図（1930）には、南北の道路が傾いて描かれているが、当時の地割に沿って描かれたもので、発掘された遺跡の角度と軸が同じであることが判明している。以後、多くの学者がこの地域の復元図を提示しているが、藤島亥治郎と同じように区画した場合と、地籍図に沿って描いた場合があり、地形を無視して正方型の条坊制と同じ角度で描いた場合もある。

30) 聖林文化財研究院 2011『慶州 沙正洞 175－5番地 王京遺跡』

31) この道路は、既存の築造された北東－南西軸の道路が8世紀後半に天官寺址が築造された後、再び使われたという。

32) 扇状地の地形によって長年削られていくため、遺跡が床だけ残存することや、高さ1.5m以内に約700年以上の建築文化層が同時に存在し、市街地発掘解釈で最も難しい部分の一つである。そのため、解釈の見解が変わったりすることもある。現在ソウルで発掘される遺跡の場合、14－15世紀の遺構層は4－5m下にあり、およそ100年単位で1mずつ覆土され、層上から時期区分が可能である。

33) 李恩碩 2003「新羅王京の都市計画」『東アジアの古代都城』創立50周年記念 奈良文化財研究所学報 第66冊 研究論集XIV
2004「王京의 成立과 發展」『統一新羅時代考古学』第28会 韓国考古学全國大会発表集

34) 東川洞地域で小金剛山と垂直に地割が25°程度東に傾く遺跡が多数確認されている。
聖林文化財研究院 2012『慶州 東川洞 826－7番地 遺跡』
新羅文化遺産研究院 2012『王京遺跡XXI－慶州 東川洞 72番地 単独住宅築敷地内遺跡』
東国大学校慶州캠퍼스博物館 2013『慶州 東川洞 834－5番地 遺跡』
新羅文化遺産研究院 2014『慶州 東川洞 510－1 遺跡』
金鰲文化財研究院 2020『慶州 東川洞 343－4番地 遺跡』
徐羅伐文化財研究院 2020『慶州 東川1洞 都市計画道路（小2－117）敷地内 遺跡発掘査報告書』
2020『慶州 東川洞 都市計画道路（小2－120）開設敷地内 遺跡発掘調査報告書』
2022『慶州 東川地区 都市開発事業敷地内 遺跡発掘調査報告書』

35) 李恩碩 2011「尙州 伏龍洞 遺跡과 慶州 王京」『嶺南文化財研究』24
2016「皇龍寺의 建立과 新羅 王京의 造成」 皇龍寺址 発掘調査 40周年記念 國際学術大会 発表資料集 国立慶州文化財研究所

36) 金鰲文化財研究院 2016前掲

37) 韓國文化財財団 2021「慶州市 東川洞 373番地 遺跡」『2019年度 小規模 発掘調査報告書 IX』

38) 車順喆 2022「IV遺跡・遺物에 대한 検討」『慶州 東川地区 都市開発事業敷地内遺跡 発掘調査報告書』 徐羅伐文化財研究院 pp319－329

39) 慶州文化財研究所 1994『慶州 東川洞삼성아파트 新築敷地 緊急発掘調査報告書』

40) 慶州から出土した「右官」の銘文瓦が見つかった遺跡は、ここから南に約800m離れた四祭寺址で収集された。金昌鎬は、これらの瓦から推定される官庁が、統一新羅後期に存在したものであると考える。
金敬東 2017「考察」『慶州 校洞158－2番地 遺跡』鷄林文化財研究院 p129
金昌鎬 2001「慶州에서 出土된 後三國 기와의 歴史의 意味」『慶州文化』7 慶州文化院 pp265－281

41) 国立慶州文化財研究所 2008『慶州 九黄洞 皇龍寺址展示館 建立敷地内 遺跡－九皇洞 苑池遺跡－』

42) 『三國遺事』 卷二 元聖大王
未幾 宣德王崩 國人欲奉周元 王將迎入宮 家在川北 忽川漲不得渡 王先入宮即位

43) 李根直 2010「新羅 王京의 形成過程과 寺院」『東岳美術史学』11 p111より引用
高麗末 禑王（1379年）…市邊永興寺至…
盧明鎬他 2000「慶州倭寇撃退事實記」『韓国古代中世古文書研究（上）』（校勘譯註篇）ソウル大学校出版部 p346

北見俊夫 1985「市とその生態」『日本民俗文化大系』11

44) 『三國史記』 新羅本紀 文武王條。
… 劉仁軌之辭也 埋牲幣於壇之壬地 藏其書於我之宗廟 …

45) 文暻鉉 2004『新羅王京五岳研究』慶州市・慶北大学校人文科学研究所 pp108－120

46) 李根直、註20前掲

47) 李恩碩 2002「王京의 形成과 背景」『新羅王京 発掘調査報告書』国立慶州文化財研究所

48) (親) 祀始祖廟 (朴赫居世祭祀) に関する歴代新羅王の記録は、南解3年 (西暦6年) から炤知2年 (480年) まで計20回に及ぶ。その後、智証3年 (西暦502年) から (親) 祀神宮に関する記事は、55代景哀 (西暦924年) まで21回に及ぶ。

49) 陵只塔は、文武王 (661～681年) の火葬跡として知られているが、1979年に12支神像が基壇面石に挿入し復元された後、各面に設けられた龕室に大型塑造仏が奉安されたことが明らかとなった。このことから、陵只塔の原型と性格に関する議論が続いている。塑造仏は7世紀後半のものとされている。

50) 『三國史記』雑志 祭祀
…至第三十七代宣德王 立社稷檀 又見於祀典…

51) 蔡美河 2003「新羅 宣德王代 社稷壇設置와 祀典의 整備」『韓国古代史研究』30 韓国古代史学会

52) 新羅文化遺産研究院 ・慶州市 2016『財買井址 発掘調査報告書』

53) 日本では、古代雨乞いの際に「牛馬を殺して諸社の神を祭ふ」と皇極元年 (642年) の記録があり、奈良時代の後半、吉野の丹生川上神社への雨乞いに際しては黒馬を、長雨が止めさすためには白馬を奉ったという記録が伝わるという。
和田 萃 2000「古代の祭祀空間」『祭祀空間・儀礼空間』國学院大学日本文化研究所編 雄山閣 p172

54) 発掘された瓦積基壇建物は慶州でも非常に珍しく、重要建物である可能性がある。
カン・ジェヒョン、イ・ウンジン (강재현・이은진) 2022「慶州皇南洞 (477番地) 単独住宅新築敷地 遺跡」『第1回慶州地域調査研究成果発表会」国立慶州博物館・文化財庁新羅王京核心遺跡復元整備推進団・国立慶州文化財研究所

第Ⅲ部　宮・殿と都城民の生活

第 5 章　生活空間の宮と政治空間の殿

問題の所在

676年に三国を統一した新羅は、都城内に各種施設と宮殿を新たに建設し、全国の治地の中心都市である九州五小京に計画都市を建設するなど、体制整備とともに古代国家の枠組を整え始めた。都城内には、王宮である月城を中心に池が設けられ、東宮が造成された。また、多数の仏教寺院が建設され、貴族と一般人の住居空間が複合的に構成され、都市が拡張されるにつれ、平地は飽和状態になっていった。

唐の都城構造に沿って東宮が建設され、北宮・南宮などをはじめとする様々な宮殿や正殿、朝元殿、崇礼殿、臨海殿などの政治空間の場所が史料に多数登場し、その位置に関する研究が多岐にわたって行われている。しかし、研究者間の意見は様々であり、最近発掘された月城内の建物についても、正殿構造と見るには問題が多いとされている。そして朝鮮時代以降、「東宮と月池」という歴史的名称の変更に伴う様々な意見が提起され、既存の北宮と推定される城東洞殿廊址も、建物の構造と性格に関する疑問が提起されている。国立慶州博物館の敷地発掘で「南宮之印」という瓦片1点が出土し、南宮と認識する意見もあるが、東川洞でも同一銘文瓦が出土し、位置や解釈に問題があると考えられる。

新羅は新たな都市概念に基づいて低湿地を全て覆土し、多くの建物を造成したが、王宮である月城は南に偏っており、北へと拡張せざるを得ないという特異な構造に発展した。これに伴い、各種の宮殿・官衙も北に築造されることになったが、それらの相互関係に対する解釈もまた、多くの問題を抱えている。

このような構造上の問題から、東宮と月池に指定された範囲が広すぎるという指摘があり、東宮の正殿と認識された建物址が、王が使用した「殿」として解釈される傾向がある。さらに月城の北にある城東洞殿廊址を北宮とみなし、統一期段階における月城との二元体制と解釈されることもあるが、建物の性格については明確な解釈と定義を下せずにいる。

本章では、このような既存の位置比定を見直し、東宮と北宮・南宮の位置について新たな解釈を試みると共に、龍宮の意味とその位置についても新しい視点からアプローチし、解釈したい。

第 1 節　東宮・月池と臨海殿

1.東宮の位置再考

三国を統一した新羅は、王宮をはじめとする様々な施設を新たに建設し始める。679年は東宮が建立される年でもあるが[1)]、「義鳳四年皆土」（679年）の銘文瓦が慶州の重要地域からすべて出土していることからも、大規模な建設事業が行われたと推定される。

東宮は漢代以降、魏晋南北朝時代に入って太子が滞在する宮の意味で用いられるようになり、隋唐代の大興城や長安城には、各種付属建物などを備え、宮殿の東側に配置されるようになった（図 1）。

現在「東宮と月池」に指定されている場所は、朝鮮時代の記録である『新増東国輿地勝覧』(1530) や『東京雑記』(1666) によれば、新羅時代の池を雁鴨池と記録し、臨海殿址が横にあることからそのまま伝えられるようになった。そのため、1963年には「慶州臨海殿址」という名称で史跡に指定された。

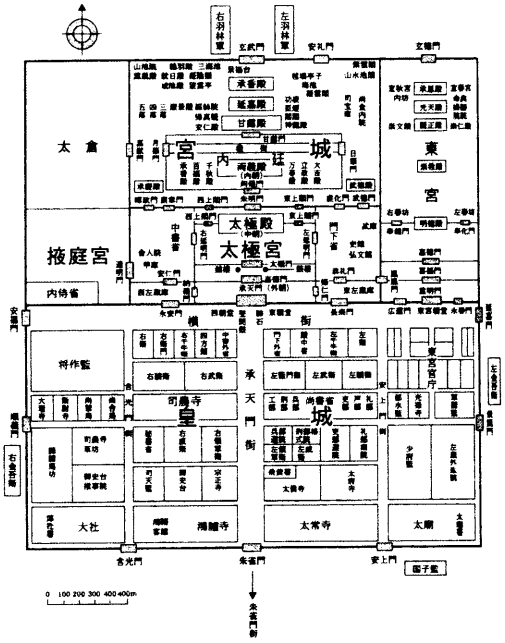


図 1 長安の宮城･皇城(妹尾達彦2001p123)

その後、太子宮である東宮官に洗宅、月池典、僧房典、龍王典などが所属しているとする『三国史記』の職官志に基づき、東宮に月池が含まれていると認識され、「憲徳王14年（822年）春正月に王の実弟である秀宗を副君として月池宮に入れるようにした」という記事から、月池宮を東宮と見なす解釈が登場した。さらに1975～1976年の間に、「洗宅」、「龍王」銘土器、「東宮」銘鉄製錠、「太子」銘木器、「太子君」木簡などが出土し、東宮の根拠を裏づけた。以上のような成果により、2011年に史跡の名称が臨海殿址から「東宮と月池」に変更された。しかし、東宮については多くの異見が示されており、最近の発掘結果からも、様々な状況が確認され、注目されている。

2014年から始まった月城C地区発掘（第2章第3節参考）の結果、正殿があると予想された場所で、関係のない建物址が確認されると、再び東宮の正殿型建物地に対する関

心が高まった。また、整備のために既に発掘されていた雁鴨池A建物址の再発掘により、正殿構造の内陣柱建物と回廊が確認された[2)]。

2009年～2017年までの月池東北編地区の発掘では、6世紀中後半から9世紀にいたる5段階もの建物址の変化と、皇龍寺につながる門址、トイレ遺構などが確認され、東宮関連遺跡の重要性が認識された[3)]。

東宮の位置をめぐっては、2010年代以降再び争点となり、様々な意見が提起され、これに対する研究史は最近の発表文で詳しく言及されている[4)]。まず、これまで提起された問題の所在を示した6つの見解を、発表文から引用して、どのような点が争点化されるのか確認したい。

① 憲徳王の代に限って、東宮の区域内に太子宮と月池宮が併存したという見解
② 史跡に指定された「慶州東宮と月池」及びその東側地域まで太子宮（東宮=月池宮）の領域と理解し、太子が居住する中核区域は雁鴨池西側の建物群であり、太子宮に所属する官府などが雁鴨池東側地域に位置しているという見解
③ 東宮は太子が住み王位継承を準備していた空間であり、国王の空間である臨海殿と萬寿坊などが併存する複合的な性格を持っているという見解
④ 雁鴨池の西側建物群は月池宮であり、太子宮としての東宮は月池東側のカ・ナ地区に位置しているという見解
⑤ 新羅の東宮が月池宮であり、「東の宮」としての性格と太子宮としての性格を複合的に持っていたという見解
⑥ 雁鴨池の西側建物群と南側の建物群、駐車場敷地、雁鴨池東側のカ・ナ地区、雁鴨池北側地域を包括した空間が月池宮の領域であり、太子宮は雁鴨池西側建物群の西側地域と推定した見解

この外にも、A建物址が再発掘された後、正殿-便殿-寝殿の概念を西側建物址群に適用し、B・C建物址と共に権威的な建物群の性格を、王が使用する空間として理解する傾向が次第に深まっている[5)]。同じ論旨で、月池南・西の一郭は正宮あるいは王のための空間、東のナ地区一郭は東宮あるいは太子のための空間と見る見解がある[6)]。

2.宮と殿の意味と位置

東宮と月池、臨海殿に関する具体的な事項を把握するためには、『三国史記』に登

場する宮と殿および関連官庁などに対する史料から整理する。

表 1『三国史記』新羅本紀「宮」主要記事

王名		年度	解釋	原文
30代	文武王	13年(673年)	虎が大宮の庭に入って殺された。	虎入大宮庭 殺之
		14年(674年)	宮内に池を掘って山を造成し、珍しい獣や鳥を育てた。	宮內穿池 造山種花草 養珍禽奇獸
		19年(679年)	宮殿を建て直し・・・東宮をはじめて建て、内外諸門の額号を定めた。	重修宮闕 頗極壯麗・・・創造東宮 始定內外諸門額號
31代	神文王	3年(683年)	王宮の北門に到着すると、馬車から降りて宮殿内に入った。	至王宮北門 下車入內
33代	聖德王	16年(717年)	新宮を創建した。	創新宮
		26年(727年)	永昌宮を修理した。	修永昌宮
35代	景德王	7年(748年)	太后が永明新宮に移居した。	太后移居永明新宮
		11年(752年)	東宮衙を設置し、上大舎1人、次大舎1人を配置した。した。	東宮衙 置上大舎一人次大舎一人
		19年(760年)	宮の中で大きな池を掘り、宮の南側の蚊川の上に月淨、春陽の二つの橋を建てた。	宮中穿大池 又於宮南蚊川之上 起月淨 春陽二橋
36代	惠恭王	4年(768年)	虎が宮殿の中に入ってきた。	虎入宮中
40代	哀莊王	3年(802年)	臨海殿を建て直し、新たに東宮萬壽房を建てた。	重修臨海殿新作東宮萬壽房
41代	憲德王	14年(819年)	弟の秀宗を副君として月池宮に入らせた。	以母弟秀宗爲副君入月池宮
44代	閔哀王	2年(839年)	王があたふたと離宮に逃げ込んだが・・・	時王顚沛逃入離宮
49代	憲康王	11年(885年)	虎が宮殿の庭に入ってきた。	虎入宮庭
51代	眞聖王	11年(897年)	王が北宮で亡くなった。	王夢於北宮

表 2『三国史記』新羅本紀「殿」主要記事

王名		年度	解釋	原文
26代	眞平王	7年(585年)	王が正殿を避け、南堂に進み自ら罪人の世話をした。	王避正殿減常膳 御南堂親錄囚
27代	眞德王	5年(651年)	朝元殿に進み百官たちから新年の賀礼を受けたが …	春正月朔 王御朝元殿 受百官正賀 賀正之禮
32代	孝昭王	6年(697年)	大臣と臨海殿で宴会を開いた。	宴君臣於臨海殿
		7年(698年)	日本の使臣が到着すると、王が崇礼殿に呼んで会った。	日本國使至 王引見於崇禮殿
36代	惠恭王	5年(769年)	臨海殿で大臣達に宴会を開いた。	燕君臣於臨海殿
39代	昭聖王	2年(800年)	暴風で木が折れ、瓦礫が飛ばされ臨海門と仁化門が破壊された。	暴風木折蜚瓦臨海仁化二門壞
40代	哀莊王	3年(802年)	臨海殿を建て直し、新たに東宮萬壽房を建てた。	重修臨海殿新作東宮萬壽房
		7年(806年)	日本国の使臣が来て、朝元殿で親見した。	日本國使至 引見朝元殿
		8年(807年)	王が崇礼殿に御座して奏楽を鑑賞した。	王座崇禮殿觀樂
41代	憲德王	3年(811年)	初めて、平議殿に行って政務を進めた。	始御平議殿聽政
		6年(814年)	崇礼殿で君臣たちと宴会を開いた。	宴君臣於崇禮殿
46代	文聖王	9年(847年)	平議殿と臨海殿を改築した。	重修平議臨海二殿
47代	憲安王	4年(860年)	王が臨海殿に大臣を集めた。	王會群臣於臨海殿
49代	憲康王	7年(881年)	臨海殿で大臣たちと宴会を開き、酒宴が熟すと、王が琴を弾きながら左右の人たちと歌を歌い、とても楽しく過ごした。	燕君臣於臨海殿酒酣上鼓琴左右進歌詞極歡而罷
55代	景哀王	5年(931年)	宮に入って互いに対面し、情と礼を手厚くして臨海殿で宴を開き…	王與百官郊迎入宮相對曲盡情禮置宴於臨海殿

新羅の例を唐長安城の宮殿構造を比較すると、王が政務を行う太極殿をはじめ、便殿や寝殿など、外裏と内裏を含む構造を「王宮」と呼ぶ。しかし、『三国史記』に見られる「宮」の語は、王（人）が居住する場所を指すものと考えられる。宮内に池のある庭園が存在し、月池宮に居住し、あるいは北宮で王が亡くなったという表現から、これは居住する場所(residence)であると考えられている。

一方、「殿」とは、王が政務を執った建物として描かれる。宮内で政治的、権威的な行事や新年行事が行われる場所は朝元殿、崇礼殿、平議殿であり、臨海殿は宴会場であることが分かる。これらが『三国史記』が編纂された12世紀当時の基準で区分されたのかは不明であるが、月城である大宮内の建物に関する記録は乏しい[7]。朝鮮時代には、王が直接居住し政務を行った5つの大宮（景福宮など）に加え、王族や関連者の家屋、祠堂、潜邸（王になる前に住む家屋）などが30カ所以上あるが、これらは主に大邸宅の規模であった。これらの場所は、一般的に「宮」と呼ばれている。

表1に示されている宮は、王と直接関連がある場所で、王あるいは王后が起居する、池と住居家屋が造成される場所として注目したい。現在「東宮と月池」と呼ばれるこの地域は、図2から分かるように「殿」と「生活空間」が共存する場所である。前述のように、A建物址がある場所は政治的な空間と見なされている（図5・6）。だとすれば、その建物の名称は何と推定できるだろうか。

記録に見られる新年賀礼が行われた朝元殿は651年に、平議殿は9世紀に登場する。651年に登場する建物が679年に大々的な重修あるいは新しく築造されたと仮定すれば、王の政務空間である朝元殿がA建物址区域と推定できる[8]。月池の南側には、674年に築造されたと推定される東西の長舎建物址（回廊型）と方形の建物址がある（図3の1次）。これらは臨海殿と関連した建物であり、数年後に朝元殿もこの建物に連接して新築されたと考えられる。そして、東北側の建物址は東宮の生活区域とする見方がある[9]（図4）。既存の臨海殿と月池一帯がいずれも東宮の範囲と考える場合、面積が広すぎるという問題が提起されている。特に、太子の生活空間と考えられている9号建物址には、トイレ遺構と貯蔵用土器があるため、問題となっている（図7・9）。太子が起居する東宮内にトイレや倉庫を築造することは、礼法上適切ではないためである。むしろ王族などが泊まる王宮と考えるのが適切かもしれないが、建物構造的には建物址1号は「殿」に分類されるため、「宮」として再考する必要がある[10]（図7の建物址1）。

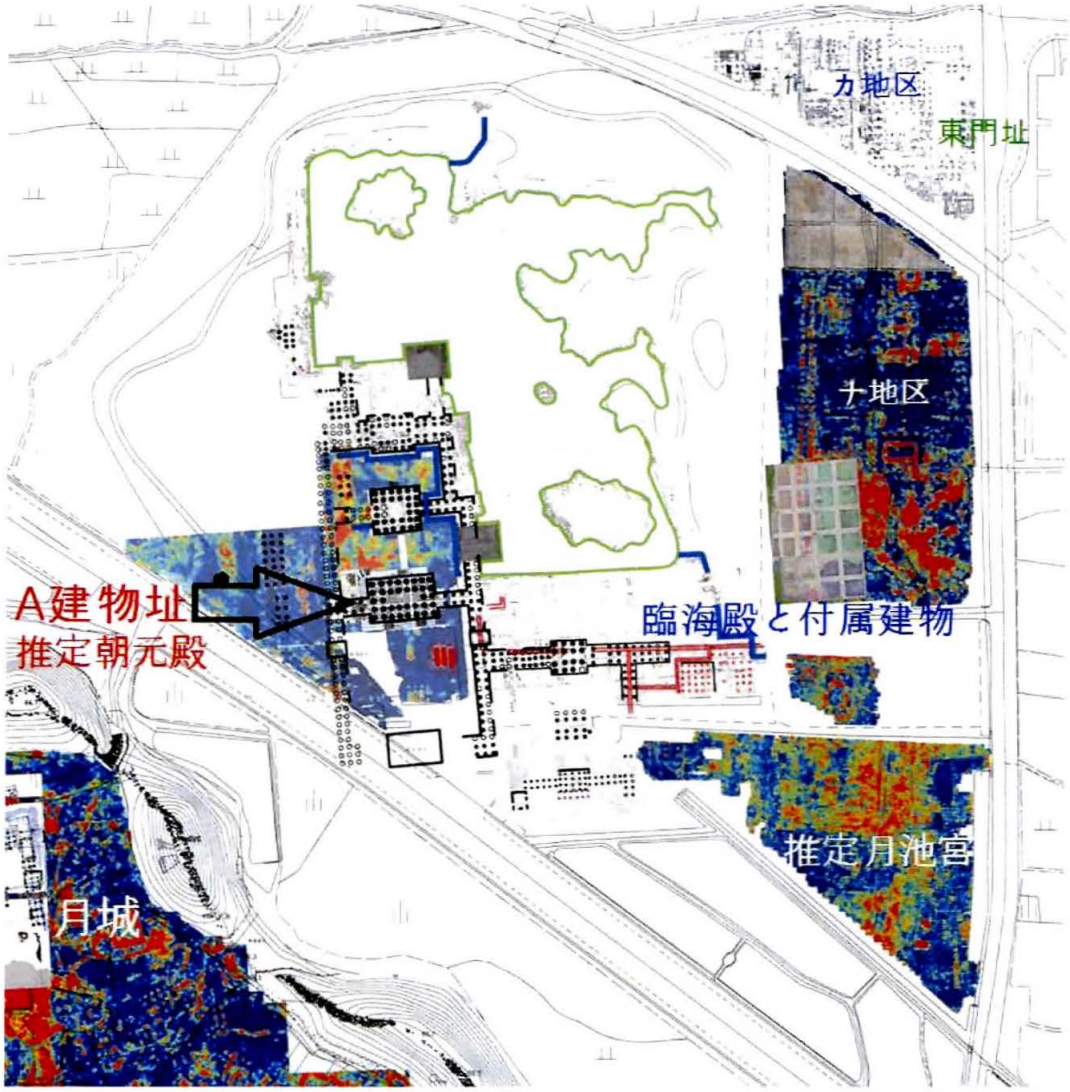


図 2 東宮と月池の遺構配置図(未発掘地域 ： 地下レーダー探査図面)

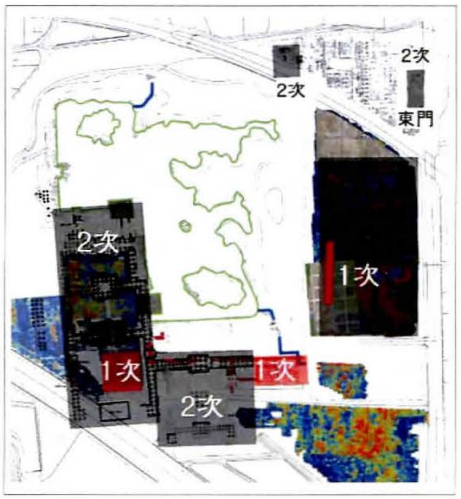


図 3 遺構築造時期(金敬烈2022)

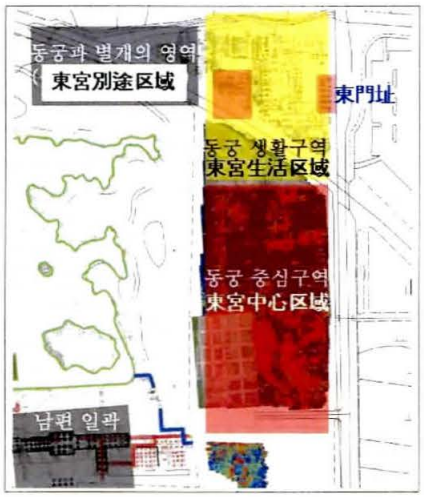


図 4 東宮配置案(金敬烈案2022)

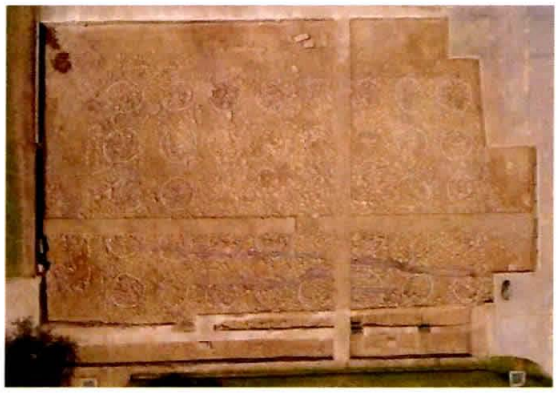


図 5 A建物址の露出

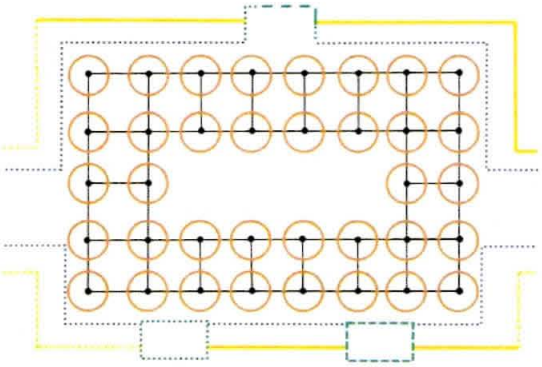


図 6 A建物址の構造模式図

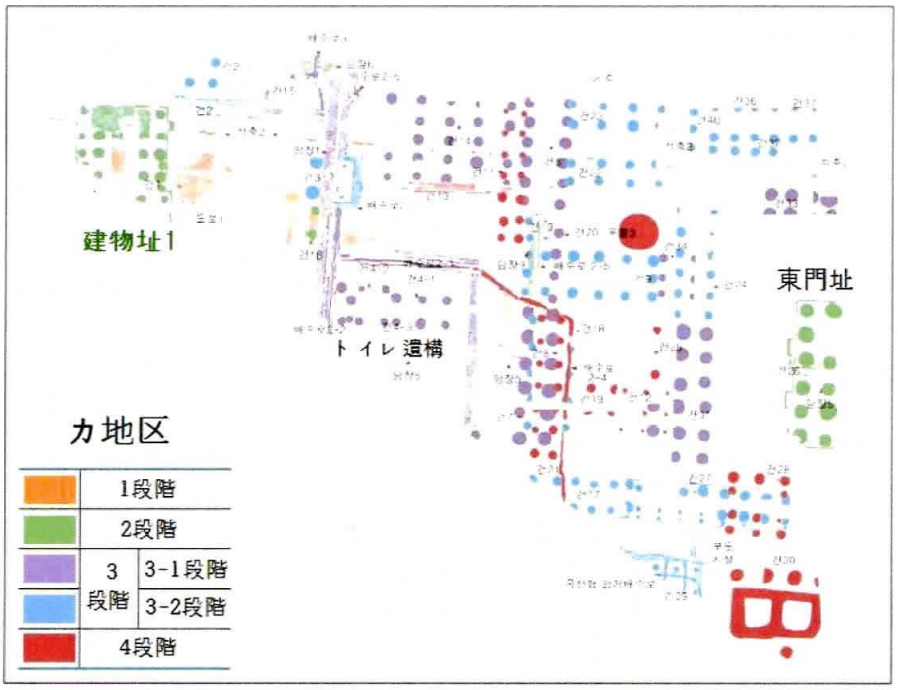


図 7 東宮の東北側建物址(「カ」地区)の段階別(時期)模式図

図 8 東門址(建物址26)

図 9 トイレ遺構

それでは、カ地区とナ地区の建物の用途は何か。使臣に対する迎接など儀礼が行われる臨海殿と関連した生活建物が、この周辺に多様に配置されたものと見られる。外国使臣が来た場合は、宿泊場所や馬や馬車の保管庫など、様々な空間に多様な建物が配置され、運営されたと考えられる。また、行事が行われるときには、料理を準備する厨庫や関係者の宿舎などを全て備えた複合施設が不可欠である。行事を開催するための建物のみが存在していたと考えるべきではない。使臣や官僚のためのトイレもこれに関連した施設と見なさなければならない。したがって、ここは太子のための建物ではなく、臨海殿の付属建物と考えられる。

以上のことから、819年の記録に見られる月池宮は、臨海殿の南側または東南側に位置していた可能性があると考えられ、複合タウン建物内に位置する王族の住居空間あるいは饗宴の空間と推定される。

現在、月池として指定されている大型の池は、その大きさから海を連想させる規模であり、これまで臨海殿の池と認識されてきた。しかし、月池の名称をめぐる議論が起こり、760年に景徳王が宮内に大きな池を掘ったという記録があるため、月池が別途に存在したという主張も提起されているが、まだそれを裏づける遺跡は確認されていない。今後、この周辺の発掘調査から新たな発見が期待される。

3.東宮の位置

次に、679年に築造された東宮はどこに位置していたであろうか。

国立慶州博物館敷地内を発掘した際、井戸址から「南宮之印」という瓦片が１点出土した（図11）。これにより、月城の東南側にある場所が南宮と認められ、既存の事実として考えられている。この場所は王宮ではなく、官庁などと解釈されることもある[11)]。

この瓦は、井戸の祭祀と関連した動物の骨が共伴していた。もし南宮が祭祀の主体であったとすれば、瓦片を井戸に入れたであろうか。むしろ木簡に祭祀内容を記録し、他の方法で表示したものと推定される。意図的な行為なら、南宮で供え物を捧げたこと、すなわち祭祀行為の客体として参加したという意思を示していると解釈できる。

井戸に落ちていたことが意図的なものでないとすれば、南宮という推定には再考の余地がある。「南宮之印」銘文瓦が国立慶州博物館内または南側区域の発掘で、数点が出土した場合には認められる。しかし、東川洞においても1点の「南宮之印」瓦が出土しており、瓦は何度も再利用できる点を認知しなければならない。現代瓦建物の築

造の際、1坪当たり300枚前後の瓦が必要であることも参考とすべきである。また、南宮内に道路遺構があり、区画されているため宮の建物とは見なせないとする意見があるが、前述したように新羅都城の特徴は、道路として区画した場所に建物が建てられたり、再建されたりしながら道路が使われない事例が多い。東宮のカ地区（発掘区域）でも、道路が廃棄された場所があり、王京S1E1地区では道路敷地として区画した後も活用されなかったが、9世紀代以降新たに道路を造った例も登場する。すなわち都市計画は変更困難なものではなく、時代や条件に合わせて変化が可能だった。このような点から、国立慶州博物館の敷地がかつての東宮であった可能性があると考え、以下のように整理してみたい[12]。

図 10 推定東宮の位置

図 11 「南宮之印」銘文瓦

図 12 國立慶州博物館の推定苑池関連遺跡

図 13 國立慶州博物館南側敷地「東宮衙」土器

王宮である月城の東南に、現在北東である月池周辺よりも南東側位置する場所で、すなわち北極星を基準にして、王の空間よりも低い位置である（図10）。

2012年、国立慶州博物館の南側敷地発掘から、建物址基礎部から「辛審東宮洗宅」銘文青銅皿が出土し、井戸内からは「東宮衙」銘文が刻まれた土器が出土した[13]（図13～15）。月池の内部からは、「東宮衙鎰」という銘文が刻まれた遺物が出土しており、この場所が東宮という見解を裏付けている。しかし、池の内部にあるものは、行事などで流動的に使われ、本来の使用場所と異なる場所に置かれたと考えることもできる。土地と井戸への祭祀を行う地鎮具は、その位置を証明している。

唐長安城も、東宮関連の付属官庁は南側に築造された（図1）。博物館南側は、東宮と連携する地域であり、多様な建物址が確認された。長舎建物址が多数存在し、倉庫建物である掘立柱建物や氷庫推定石造遺構もあり、位置は異なるが、地下につながる氷庫排水施設（瓦）も確認されている（図16～22）。

760年には、月城の東側に春陽橋、西側には月淨橋が築造され、それぞれ陰陽五行に合わせた名が与えられた[14]。唐長安城の東宮内に設置された左春坊と右春坊は、太子の命を司り、門下省と中書省の機能とも非常に似ているという[15]。新羅にはこのような官庁は存在しなかったが、景徳王の時代である752年に東宮南側に東宮が設置され、760年に建設された春陽橋という名称は、春坊と同じ陰陽五行に則ったと考えられる。東は本来、万物が成長する春に当たり、太子は常に東宮に居住するため、太子宮は春宮または青宮とも呼ばれた。872～873年に著された「皇龍寺九層木塔刹柱本記」の書者である姚克一は、東宮の異名である「春宮中事大臣」の職責を務めたこともあり、異次頓に関連する「春宮内養」などの記録も残されている[16]。これから見て、春陽橋の東側一帯が東宮であると考えられる。そして、禅宗思想が台頭する8世紀中後半から南山に150カ所余りの寺院が造営されるが、南山側に行くには東宮側や王宮である月城側の月淨橋を通過しなければならない象徴的な意味が明確にあったと判断される。

居住の意味から鑑み、宮には苑池と寝殿建物が築造されていったと考えられる。現在、国立慶州博物館の入口には小さな小山があり、苑池と関連したところとして知られている。北宮のところでも触れるが、最も高貴な者の居住地にかかわる建築には、全て苑池があるという点には注目すべきである。日本における平城京の東院も太子のための庭園であり、池施設がある。つまり臨海殿が王のための、国家的行事場所として大型の池を築造したのとは違う構造である。

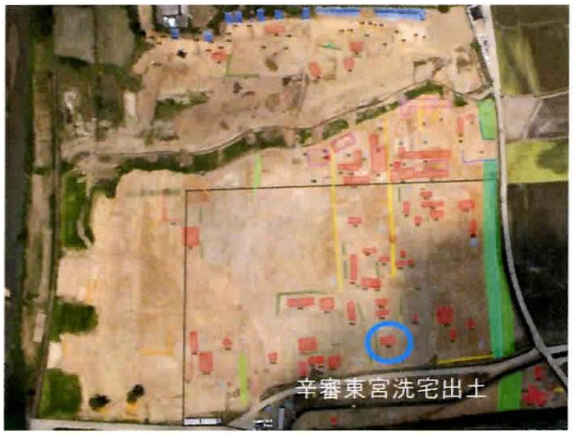


図 14 國立慶州博物館南側敷地「辛審東宮洗宅」出土位置

図 15 國立慶州博物館南側敷地「辛審東宮洗宅」青銅容器

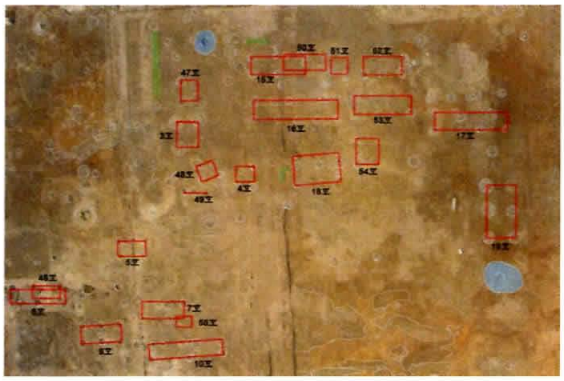


図 16 南側敷地の建物址

図 17 南側敷地の掘立柱建物址

図 18 南側敷地の掘立柱建物址

図 19 南側敷地の竪穴(推定貯蔵施設)

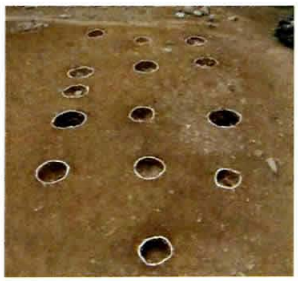


図 20 南側敷地の掘立柱建物址

図 21 南側敷地の推定氷庫(氷室)

図 22 南側敷地の推定氷庫瓦排水路

図 23 西部洞19番地出土「東宮官瓦」

図 24 西部洞19番地出土「東宮官瓦」

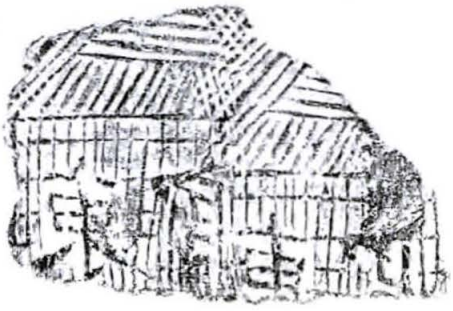


図 25 王京S1E1地区出土「東宮官瓦」

日本でも藤原京の東南側に位置する嶋宮が皇太子（中大兄皇子、大海人皇子、草壁皇子）の居所であり、『万葉集』の「鳥の宮勾池」（170）と「嶋の宮上の池」（172）に現れる石積の護岸を持つ方形をした大池が、東宮と認識された[17]。また、平城京の東宮南側の東院（苑池）や、773年に造営された楊梅宮（南池）など、池を備えた施設と比較すると、新羅の東宮も大きな苑池が造営された太子のための宮殿が別途造成され、南側には東宮衙などの関連官庁が位置していた。後述の北宮も池を備えている。

また、西部洞19番地と王京S1E1地区南側東西大路では「東宮官瓦」の銘文瓦が収拾

された[18]（図23～25）。統一新羅時代後期に製作されたことから、802年に東宮の萬寿房を新築する際に使われた可能性もある。ここは皇龍寺の東側と慶州邑城内の西北側に、瓦を再利用するために移動したものと判断される。「南宮之印」銘瓦１点についても、北川の北側にある東川洞から出土したものも再利用されたものと考えれば、当時瓦の再利用が頻繁に行われたものと推定される。

第 2 節　北宮と南宮の位置

1.北宮の位置

『三国史記』に登場する北宮は、897年に真聖女王がここで亡くなったという記録が残されている。また、北宮公主（後の真聖女王）が財物を戯写した記事と、恵恭王の際の767年には北宮庭園の中から星が落ちたという記事がある[19]。王と関連した宮で、真聖女王は在位前と死ぬ際に北宮に居住していたことが分かる。

このような点から、北宮は政務を行う場所ではなく、王族の居住地として意味を解釈すべきである。従来は、1937年に発掘された城東洞殿廊址が北宮であり、近年においても、北宮は都城の正宮の役割を果たしたとする見解が提起されている[20]（図26）。ところが、ここは中央に間口3間×奥行3間（17×17m）の建物、31×23m規模の殿堂址を南北長さ75.4mの長舎型建物址が「ㅁ」の形で取り囲んでいる構造と規模から、李康根は明堂のような礼祭建築物である可能性を示している[21]。

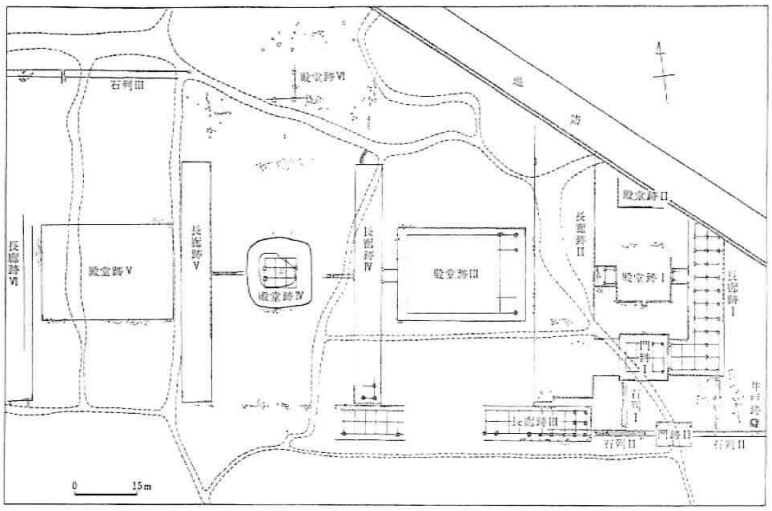


図 26 城東洞殿廊址の建物配置図

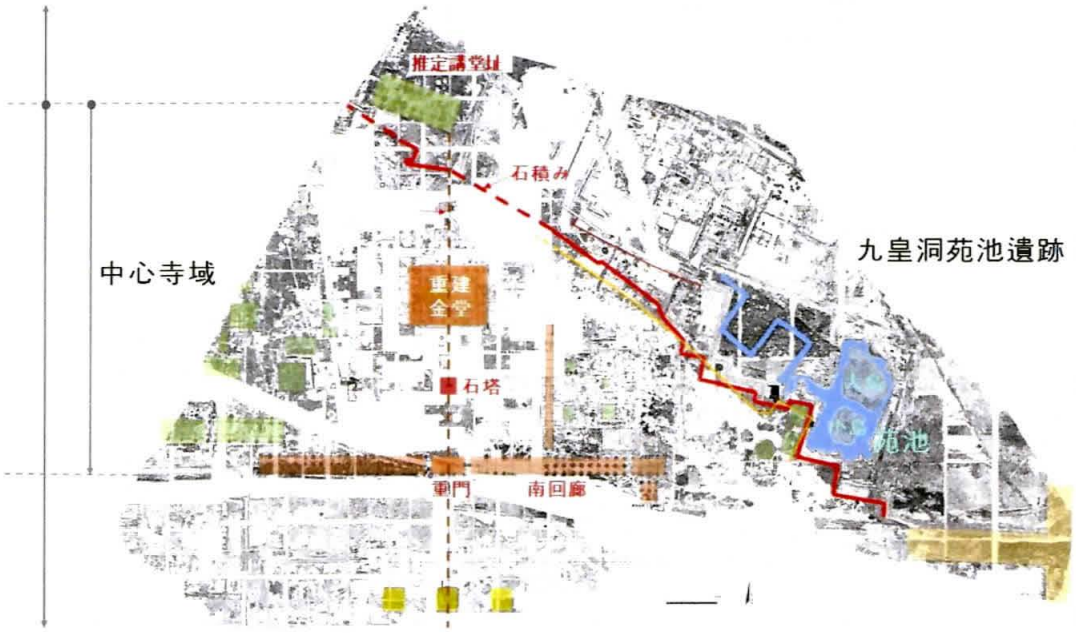


図 27 芬皇寺重建伽藍と九黃洞苑池遺跡(金淑瓊作図)

図 28 芬皇寺と九黃洞苑池遺跡

図 29 九黄洞苑池

図 30 苑池大島

図 31 苑池小島北(西から)

図 32 苑池小島北(東から)

図 33 苑池小島(南から)

図 34 建物址(苑池北側の推定官庁)

図 35「王」銘文瓦(芬皇寺出土)

図 36「王」銘文瓦(細部)

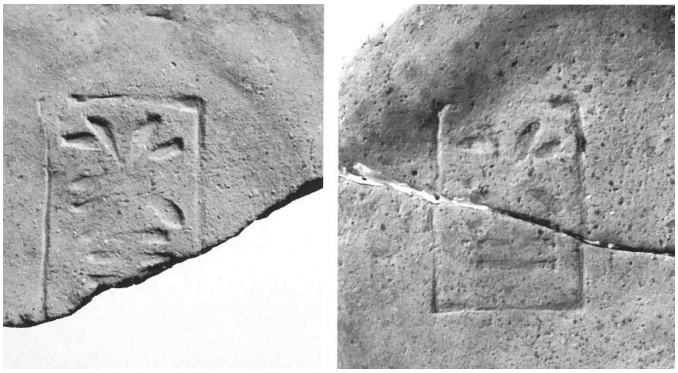


図 37「芬王」銘文土器

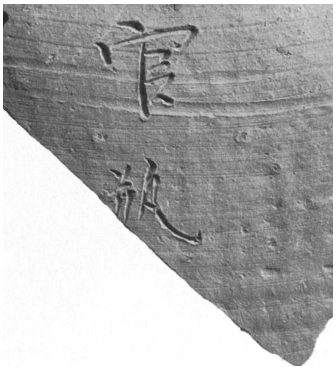


図 38「官瓶」銘文土器

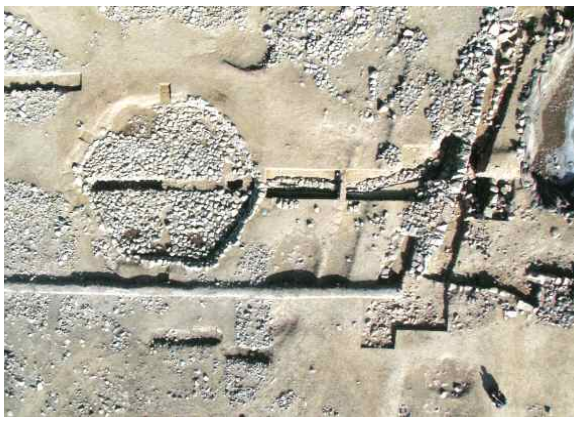


図 39 六角型氷庫

図 40 地鎮具(10世紀)

図 41 金屬遺物

図 42 鴨型盃

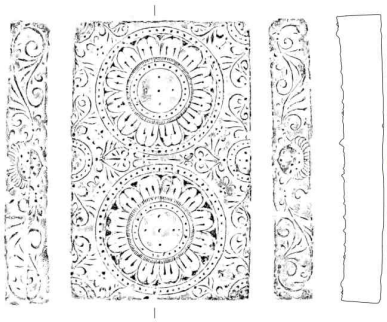


図 43 蓮花文塼

図 44 青銅香椀

ここは月城の北端に位置し、王族が居住する宮殿、もしくは礼祭にかかわる建築物と考えられる。特に中央に間口3間×奥行3間（17×17m）の建物があり、左右に7×5間と推定される大型の建物と、75.4m（25×4間）の長廊がある。中国や日本でもこのような構造を持つ建物は確認されておらず、新羅における用途もはっきりしない。従来は、唐の体制に倣って北側に王宮を配置する構造と認識されていたが、月城が新羅滅亡まで王宮としての役割を果たしていたことが史料から確認できるため、正殿の役割を果たしたとは考えられない。また、構造的な面でも中央にある3間の建物は、礼祭建築の形式が強く、政務を執るための構造とは考えにくい。

この建物の調査は一部にのみとどまっており、全面的な調査が行われない限り、用途については推論の域を出ない。北側には塀が囲まれており、その内部に「凵」形態の長廊型建物址があるが、人が居住する構造の建物ではない。北川を境に王が祭祀を行う方丘とか、北郊である可能性も検討する必要がある[22]。

城東洞殿廊址と月城の中間地点である仁旺洞556番地遺跡発掘では、間口4.7×奥行5.5m、間口3.6×奥行5.5m柱間の大型建物址が確認され、官庁建物の一部とされている[23]。月城の北にある瞻星台と周辺、そして北側に全般的な官庁配置が行われ、北側の城東洞殿廊址まで続く一つの「官庁タウン」構造に発展・維持されることとの関連性が見出されなければならない。

それでは、北宮はどこに位置しているのか。善徳女王が創建した芬皇寺の東側には、前述した九黄洞苑池遺跡が存在している[24]（図27・28）。芬皇寺の創建と陰陽五行に基づく皇龍寺の北側に位置し、苑池など基本的な宮の条件を全て備えていることから、一般の建物とは見なされない[25]。芬皇寺の伽藍配置とは異なり、各種住居建築や苑池の造成、北側の東川洞につながる橋施設に連結された構造、氷庫の設置など、王宮の要素を有していることが確認されている（図29～33）。特に、善徳女王が創建した芬皇寺の隣に位置し、女王の滞在場所として利用された可能性があると考えられる。真聖女王も王位に就く前にここに居住しており、「曼」という名も善徳女王の本名に因んで命名されたため、3人の女王には多くの共通点がある。北宮は女性が滞在する「陰陽五行」に合致する場所であったと推測される。

ここは、7世紀半ばに築造された大型の築台の下に2つの島を持つ大型の苑池がある。大型築台は2次にわたって築造され、周辺には多様な建物址が確認された。特に、ここから出土した土器の中で「芬王」と解釈される土器と芬皇寺からは「王」銘の瓦

が出土した[26]（図35～37）。ここでは様々な形の建物址とともに六角形氷庫の建物も確認された[27]（図39）。東宮所属地域でも、推定氷庫や地下に抜ける排水施設があるだけに、東宮の施設とよく似ている。

建物は長い塀で4つの区画内にあり、歩道、広場、大小の建物などが全て確認される。特に9～10世紀代の中国陶磁器や各種重要遺物はこの建物の水準を示しており、苑池に用いられた各種の造景石は小規模ながら出土した金銅版菩薩坐像は7世紀末～8世紀初めであり、月池の出土遺物と類似しており、蓮華文塼や高級遺物と金銅神将像が出土するなど遺物の水準が一般家屋よりはるかに高い（図40～44）。また前述したように、「官瓶」銘文土器も（図38）、ここに北宮と北の橋を管理する官庁があった可能性を示唆している[28]。

前章で示した内容とともに、ここは芬皇寺の寺院領域ではなく居住空間である場所、善徳女王と真聖女王に関する記事と北側に位置している点、苑池と氷庫、出土遺物などから見て、王や王族が居住する水準の大邸宅である北宮と推定される[29]。また北東側に位置する離宮の役割も考慮する必要がある[30]。

2.南宮の位置

国立慶州博物館敷地の井戸から「南宮之印」が出土したが、ここは東宮と推定された。それでは、果たして南宮は存在したのであろうか。記録によると、憲康王の弟を指す「南宮相（以後、正康王）」という語だけが登場しているが[31]、これは宮ではなく官府や教育関連官庁の可能性も提起されている[32]。

月城を基準にすると、南宮は南に位置しなければならない。南川の南には仁旺洞寺址と都市区画道路などの施設があり、南宮のあるべき場所として注目されてこなかったが、8世紀後半に建立された仁旺洞寺址発掘の結果、三国時代から様々な遺構の重複がひどく、また、9世紀代の越州窯・邢窯・長沙窯など多様な中国磁器が多量に出土し、青銅光明台のような重要遺物から、非常に格調が高い寺院であったことが分かる[33]（図45～49）。

特に、長舎建物址と大型建物址、特殊な「┤」建物址、そして庭園造園石が138個も出土された。池と井戸からは、鹿、馬、牛、イルカ、雉、鶏、サメ、ヒラメ、フグなどの哺乳類15種、魚類13種、鳥類10種、爬虫類1種の計39種が確認され、様々な祭祀が行われたことが分かる。寺院の築造前から重要な建築物などが存在しており、また、寺院の建立後にも様々な行事が行われた可能性が想定される。

図 45 仁旺洞寺址と推定南宮址

図 46 仁旺洞寺址建物址平面図

図 47 仁旺洞寺址創建以前の建物配置図(6～8世紀)

図 48 瓦積基壇建物址14

図 49 光明臺

図 50「左」銘文土器

井戸から出土された木簡からは「大龍王中白主民渙…」という内容で、大龍が王に人を推挙したことが確認された。これらの木簡は、王と関連した施設が存在した可能性を示している 34)。

一方、調査では瓦積基壇の建物址も確認されており、注目される。これらの建物は、官庁あるいは礼祭関連建物と見られ、月城の北にある皇南洞123-2鷄林北便建物址と類似していると考えられている35)。

南側では地下排水路が確認されたが、未発掘地域には氷庫が存在したものと推定される。また、坊路と関係なく南北道路で寺域と分離されているが、坊の内部で区画されたものと考えられる。

8世紀後半に月城のすぐ南に建てられた寺院は、王室の支援なしには実現不可能であったと考えられる。そのため、ここは月城の南側庭園のような場所であり、防備のためにも一般人の出入りは難しかっただろう。南川をすぐ渡れば月城に入ることがで

きるため、寺院周辺は厳重な警備が必要であったと推測される。

また「左」銘文土器1点が出土し（図50）、先に述べたように「右官」銘文瓦が月淨橋出入りを担当する場所である橋の南側から出土したことから、春陽橋の前に「左官」が存在したと推定される。仁旺洞寺址の南側には、春陽橋と月淨橋を連結する東西道路が通っており、この道路の北側には月城の南側（南川）まで、全てが王室と関連する施設が存在したと推定される。ただし、寺址の東側地域である仁旺洞412番地遺跡で南北道路遺構が確認され、ここには宮とは無関係であるとする見方もある[36]。しかしながら、前述のように新羅の道路は敷設と廃棄が頻繁に繰り返されため、道路の存在が、宮の築造が不可能であった根拠とはなり得ない。

南宮の位置はまだ明らかになっていないが、月城南側の宮庭に相当するこの地域には5世紀代中後半以降、確かに重要な施設が存在していたはずである。寺院創建前の6～8世紀代には、長舎建物と造景石、瓦積基壇建物址、氷庫などが存在しており、これらは官庁または王室関連の建築物であったと考えられる。その後、統一期には、東宮などを含む月城周辺全域が新しく整備され、南宮も築造されたと推定される。南宮に所属する建物は、8世紀後半に南山入口側に建設された王室寺院に変更されたと考えられるが、南宮自体は存在した可能性が高い[37]。

以上のことから、満月城は月城を中心に東宮と南宮の両方を含む、いわゆる王宮タウンであると推定される。王宮の北側には、城東洞殿廊址まで行政中心タウンがあり、皇龍寺の北側にある北宮は、別宮または離宮と解釈することができる。

第 3 節　龍宮の位置

1.皇龍寺井戸と龍宮

2011年、国立慶州博物館敷地で発掘された井戸の出土遺物と人骨が公開され、新羅時代の井戸祭祀に関する資料を新たな視点から見ることができるようになった[38]。東宮と月池の井戸からも4人の人骨が出土している。このような行為が祭祀と関連性があるのか、今後の研究が注目される[39]。また、財買井址からも井戸に馬頭蓋骨3点が、その他井戸からも各種祭祀と関連した土器などが多量出土し、祭祀と関連していることが分かった[40]。慶州地域内で発掘された井戸の多くは、生活用水の供給を目的するも

のであったが、仁旺洞寺址の井戸などでも各種遺物が出土し、井戸の役割に関する多様な解釈が必要となった。

図 51 皇龍寺址内井戸の位置(○)

特に、皇龍寺址内の講堂北側に位置する大型井戸については、これまで一部の研究者が言及してきたが、皇龍寺での役割と意義に関する具体的なアプローチは行われてこなかった（図51）。慶州で確認された新羅最大規模の井戸ではあるが、皇龍寺の飲用水供給のための井戸と認識され、発掘当時から現在まで「井戸の役割」という部分は考慮していなかったためである。さらに、1980年代の調査時には上部だけを露出して調査したが、1992年の整備過程における下部の収拾作業が公開されておらず、当時の関連研究者も認知できなかったため、その重要性に言及されることもなかった。現状のごとく整備されたことに対しては、これといった異議も提起されていない。

その後30年もの間、慶州地域で王京都市遺跡に関する調査が多数行われ、井戸の調査と研究がかなり進められ[41]、構造や築造方法だけでなく、性格や象徴性に関する研究も同時に進展してきた。そこで、皇龍寺井戸に関する新しい解釈を試みたい。

慶州地域で行われてきた井戸や池などの発掘については、まず崔珉熙（2011）が新羅

の井戸を全般的に取り上げ[42]、金昡希（2011）は具体的に祭祀との関係を分析しており、注目される[43]。また、歴史や民俗に基づいた様々なアプローチが行われている[44]。このように、井戸の研究が活性化し、筆者もこれまで皇龍寺址内で調査された井戸に関する新しい視点で接近することが必要だと考えるに至った。その理由として、この井戸は内部直径2.6～3m、深さ12～13m以上という、新羅の井戸の中でも深さが最大であるにもかかわらず、きちんとした公開がされないまま、王京遺跡と関連した井戸との比較もできなかったためである。

筆者は1992年、皇龍寺井戸整備工事の際、地表から最大で15m程度まで内腐土を除去し、地表から12～13mほど下まで降りて現場確認を行った。その後、この井戸の重要性について把握していなかったのである。しかしながら、遺物に見られる「龍王」と、記録に登場する「龍宮」や「龍王典」の位置に関する新たなアプローチが必要だと考えるようになった。したがって、皇龍寺址の発掘調査内容と井戸調査内容を検討しながら、皇龍寺での井戸とその周辺遺構の性格の把握を重点的に進めてみたい。

2.皇龍寺井戸の概要

皇龍寺址内で講堂北側地域の発掘と井戸に関する調査は、1981年に実施された。当時は、東回廊址東側の建物址と、講堂址北東側および北側の建物址10棟に対する調査が行われた、6次（年度）の調査であった[45]。

北側では、創建当時の東西排水路を確認し、芬皇寺と皇龍寺の北側塀の間の空間に対する探索発掘を通じて、多数の根石群や石列など、皇龍寺址北側外郭に残存している遺構の一部を確認した。そして1983年の発掘調査では、北東側の建物址に対する調査を行い、皇龍寺址井戸周辺で建物址5棟に対する調査を行った。ただし、当時は井戸に対する露出調査が進められず、1983年以後、井戸について別途の調査が進められた[46]。1990年代に入り、第2次調査において全面的な整備が進められ、1990年には用水路整備を、1991年には南門址など建物地整備が進められた。

井戸の整備は1992年、講堂址北側の建物址と塀などとともに行われた。その際、この井戸の整備工事のために内部を全て浚渫しており、井戸の下まで直接降りることができ、築造状態や内部の直径などを直接確認する機会を得た[47]。

この井戸は、直径が約2.7m以上あるが、完全な円形ではない。発掘当時の資料が公開されておらず、正確な規模は不明であるが、下部の内径は3mに達している。写真に

よると、石積の状態において、上部と下部には差があるように見られる。上部は割石と川石で再改築されており、下部は割石系で緻密に築造されていることがはっきりと見える。図52・53から見ると、上部約1.5～2mあたりは、数回の改築の跡が確認される[48]。

図 52 皇龍寺址井戸発掘(1980年代)

図 53 1992年の皇龍寺址井戸(崔珉熙 2011)

図 54 井戸整備(1992年、直径約 3m)

図 55 井戸整備(1992年、表土下2.5m)

図 56 井戸出土瓦(地表下7.5m)

（図54・55）によると、上部の石垣が全て除去された後に整備作業が進められたことが分かる。写真からも、内径が非常に大きいことが分かる。現在は、上部の表土から2.5mほど下にある。整備当時は、考古学的調査を考慮せず、底が深くないと判断し、引き続き下部土などを汲み上げながら進められた。しかし、井戸が次第に深くなっていき、筆者の記憶では、埋没した各種瓦片などが多数出土し、鴟尾片のような大型遺物も出土していた。しかし、整備会社が進めた遺物の分類作業は行われず、軒瓦類のみ別途の収集品として処理され、国立慶州文化財研究所が整理・保管することになった（図56）。

これらの遺物は、表土から深さ7.5mの地点で出土したと報告されているが、全体の深さは15m以上で、築造以後持続的に使用され、遺物や土砂が継続的に流入したと考えられる。したがって、軒瓦の時期を見ると、統一新羅時代の唐草花文と高麗時代の鬼目文が一緒に出土していることから、深さ7.5mの堆積時期が13世紀程度までと推定される。このことから、井戸は大きく深く、近代まで継続的に使用されていたと考えられる。

では、最も重要な点である井戸の築造時期について、どのように判断すべきであろうか。現在、この井戸の築造時期が客観的に判明している資料はない。また、床面が確認されておらず、築造当時の祭祀遺物も出土していない。築造時期を考えるにあたっては、築造の方法が参考となる。

皇龍寺址東側の王京S1E1地区で発掘された井戸は通常、統一期後期頃（上層遺構）に築造されたもので、主に河原石で築造され、一部山石である割石が混ざって築造されたことが確認された。ほとんどが円形であり、深さは3m以下である。しかしながら、割石だけで築造されたのは、全体47カ所の井戸の中で1カ所のみである。この井戸は内部直径が60cm、深さが約160cmであり、排水施設も備えていない特異な構造を持っている。内部には瓦片がぎっしりと詰められており、ほぼ完形に近い平瓦数枚が床に置かれて、浄水機能を持っていたと判断される。割石のみで築造され、都市遺跡から見える一般的な井戸とは異なると考えられる。

慶州地域において、8世紀から9世紀代以降の井戸の大部分は河原石で築造され、一部に割石が混用されている。通常、この地域では井戸を深さ2～4m掘ると地下水が出てくるため、それ以上の深さで井戸を築造する必要はない。

しかし、皇龍寺址の井戸は、下の水が満たされる高さの初築と見える部分は、図52・53に示されるように、全て治石された割石で築造されている。深さが15m以上で内

部直径が3m以上の場合は、城郭の築造方式のように緻密に築造しなければならないだろう。これは、6～7世紀の新羅城郭築造方式と比較する必要がある。井戸の内部に降りて直接観察したところ、築造石材の隙間がほとんどなく、緻密に合わせて組まれていることが確認された。結論から言えば、皇龍寺址井戸の初築年代は、少なくとも6～7世紀代と見ることができる。ただし、表土と接する部分は、初築後に数回再改築されたものと判断される。

3.皇龍寺井戸の意味と龍宮

皇龍寺における井戸の意味とは何なのか。真興王が紫宮を築造しようとした際に黄龍が現れ、寺院に変更されたことには、大きな意味がある。王を中心とした都城の築造、すなわち天子中心の古代都城制の導入は、真興王が王権強化と古代国家の枠組みを整えようとしたものである。このように、宮殿の造営場所を寺院に変更するほどのことであれば、黄龍が現れた場所に祭祀を行うための施設や、黄龍を祀るための龍宮は皇龍寺内部または寺院と関連した場所に必ず設けられていたと考えるべきである。そこでこれと関連した龍宮の位置に関する記事をまとめることにする。

表 3『三国遺事』龍宮記事

卷第三	解　釋	原　文
興法第三 阿道基羅條	三日 龍宮南(今の皇龍寺…) 四日 龍宮北(今の芬皇寺…)	三日 龍宮南(今皇龍寺… 眞興王癸酉始創) 四日 龍宮北(今芬皇寺… 善德甲午始創)
塔像第四 皇龍寺丈六條	龍宮の南側に紫宮を建てようとしたところ、皇龍が現れた。	將築紫宮於龍宮南 有黃龍現其地…
塔像第四 皇龍寺九層塔條	龍宮の南側に皇龍寺九重塔が…	若龍宮南 皇龍寺九層塔…
塔像第四 迦葉佛宴坐石條	新羅月城の東側、龍宮の南側には迦葉佛宴坐石条がある。今皇龍寺	新羅月城東 龍宮南 有迦葉佛宴坐石條 今皇龍寺之地 則七處伽藍之一也

『三国遺事』には、皇龍寺と芬皇寺の間に龍宮が位置していることが記録されている。これに対し、皇龍寺講堂址と西側塀との間の集水施設である可能性を示したり、または講堂址西側の集水施設（池の規模で直径20m、深さ3.2m、面積90坪）を龍宮と見る見解もある[49]。龍宮をめぐるこれらの解釈は、史料に登場する井戸と龍が互いに関連しているとは考えておらず、龍宮の位置に対してのみ解釈を加え、別の宮殿や建物が皇龍寺と芬皇寺の間にあると推定し、皇龍寺塀の外側や回廊外郭に築造していると見ている。『三国史記』本紀などに見られる数多くの井戸と龍の関係を調べれば、井

戸が龍や龍宮に関連していることがすぐ分かる。次に、先頭に出てくる龍の出現内容に関連して、再度簡単に言及したいと思う。

「閼英井に龍が現れ」（紀元前53年）、「金城井に龍が現れ」（西暦3年）、「夏の4月、金城井に龍が現れ」（461年）、「鄒来井に竜が現れた」（490年）、「金城井に竜が現れた」　（500年）、「陽山井に龍が現れた」（516年）、「王宮井に龍が現れ」（875年）などの記事から明らかになるのは、井戸から龍が現れたことに注目する必要がある。第3章では、龍の出現を竜巻現象であると解釈したが、雨、井戸、池などはすべて龍と関連しており、竜巻のほとんどが井戸から始まることから、互いに密接な関係があることが示唆されている。また、632年に明朗法師が唐に留学して帰国する途中、龍宮に入って秘法を伝え、地中を通じて自分の家の井戸から出てきたという記事にも注目する必要がある[50]。

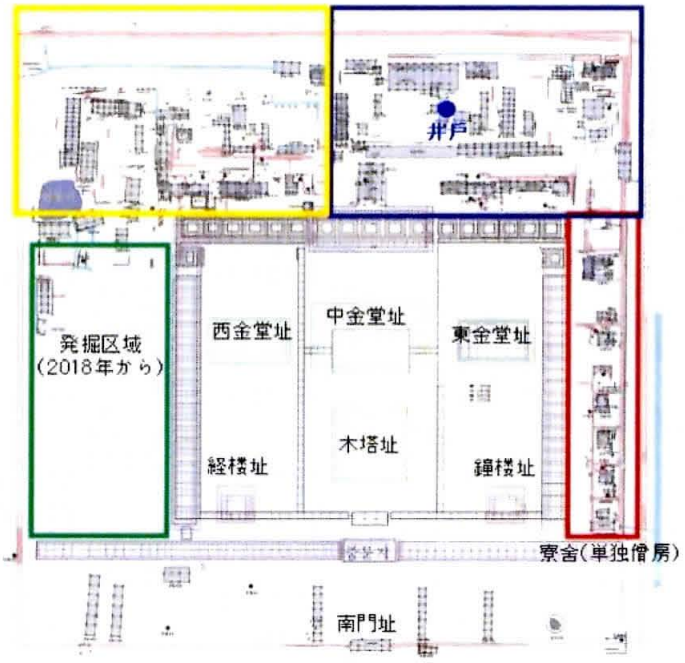


図 57 皇龍寺址建物配置図(金東河 2022編輯)

新羅だけでなく、高麗時代の建国説話にも王建の祖母にあたる龍女（以後、元昌王后）は西海龍王の娘であり、開城に大きな井戸（大井−春秋に祭祀を行い、干ばつに遭うと朴淵・徳津と共に雨乞いを行った。これを三所龍王という）を掘って、水を汲んで使っていた。また、松岳の寝室の外にも井戸を掘って、その井戸から西海龍宮に出入りしていたとされた[51]。

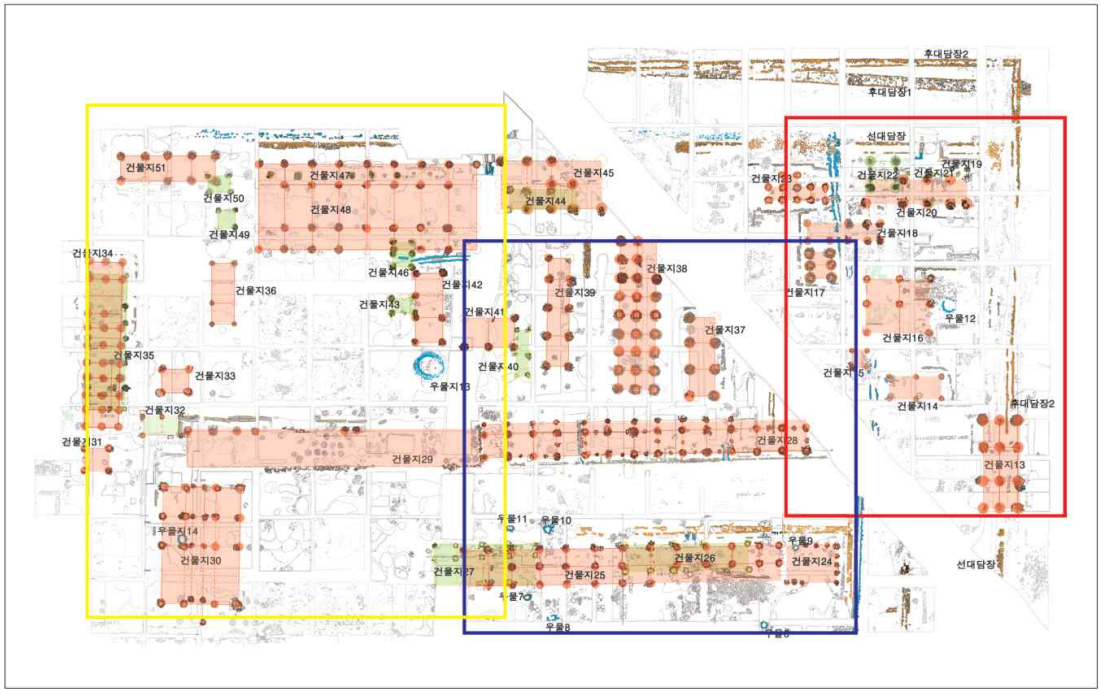


図 58 皇龍寺址講堂の北東側井戸と周辺建物(金東河 2022)

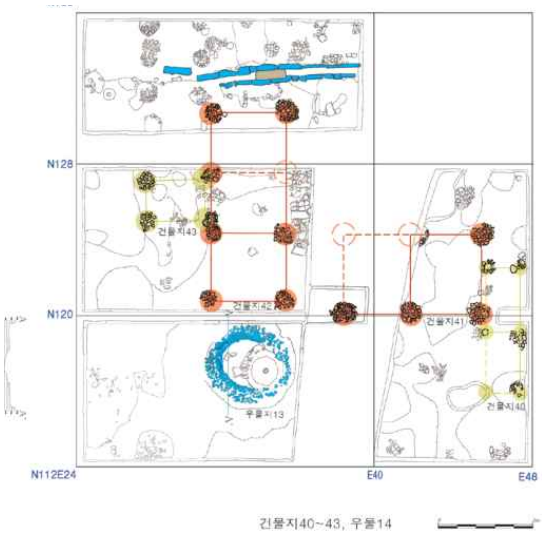


図 59 北東側井戸と周辺建物(金東河 2022)

図 60 講堂北側醬庫建物址29(金東河 2022)

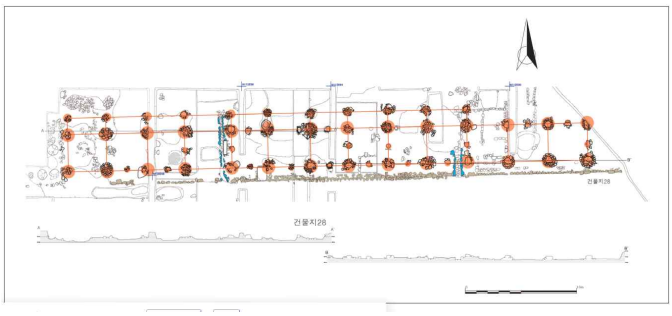


図 61 講堂北側醬庫建物址28(金東河 2022)

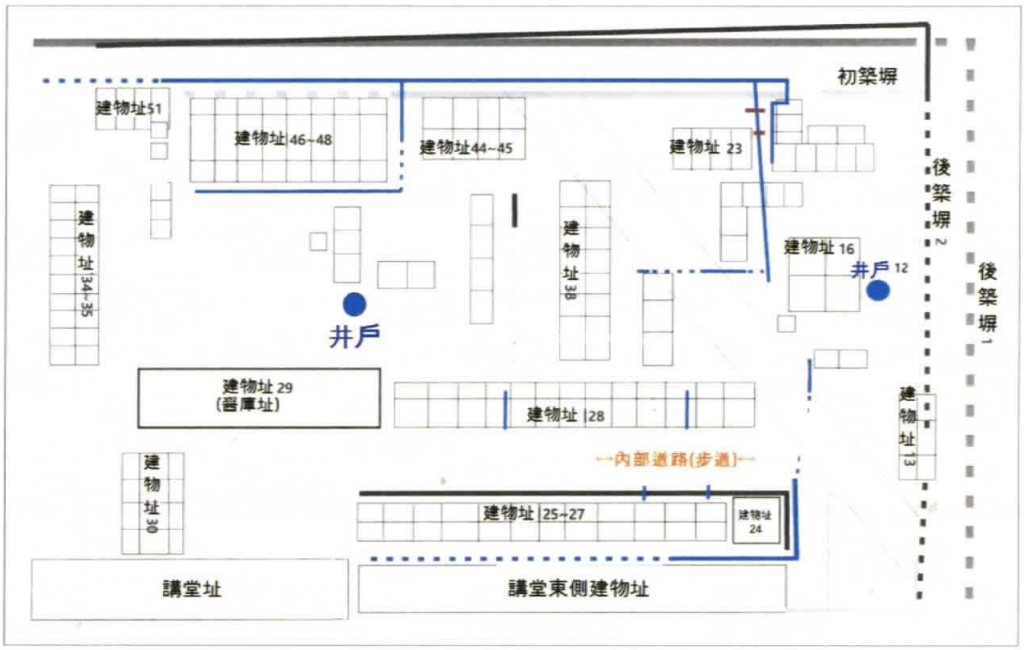


図 61 講堂北側建物址模式図(金東河 2022)

以上から見ると、井戸は龍が住む場所、あるいは龍宮に通じる道であることが示唆されている。

皇龍寺の井戸が龍宮と関係があるとすれば、その位置と周辺の遺構について検討する必要がある。図51の皇龍寺全景から見ると、井戸の位置は芬皇寺の正南へと直接つながっており、皇龍寺講堂北側に位置している。図57～59からその位置が明確に把握できる。

まず、大型の井戸を中心に、北には建物址48が8×3間規模の内陣減柱型大型建物址があり、このような規模は仏像や他の施設に匹敵し、また構造からは僧房や寮舎とは考えがたく、法堂のような役割を果たすものと考えられる。西側には建物址34,35が10×2間、建物址38が8×2間規模で長舎建物として、その配置構造が官庁あるいは礼祭建築と見ることができる。講堂の北側には、僧地の領域で建物址29から大甕50個体分が出土し、庫房あるいは食堂施設が井戸と関連しているとする見方がある[52]（図60）。金東河は建物址25～27、建物址28、建物址29から見て、井戸と関連した僧侶の生活空間と認識しているが、このような構造が、建物の性格や機能と関連してまた別の性格や意味を持つものであるのかについて、疑問を呈している[53]。

これらの見解が登場し得るのは、553年に皇龍寺が建設され1238年に焼失するまで数回重複築造されたことが認知されず、平面的に全て同時期に築造され運営されたと判

断していることによる。建物址25-27、建物址28、建物址29は発掘図面を見ると、全体的に北東-南西方向に傾いている（図61）。慶州市内の都市遺跡を発掘すれば、統一新羅時代の後代と高麗時代には建物の軸方向が同じに傾いていることが分かる。

月城内のタ地区でも、8世紀以降建物址はこのように傾いている様相がうかがえる。すなわち、真北軸から磁北軸への変化である。したがって、創建期には存在しなかった建物が、時代が経つにつれて新しく建築されたことが分かる。6～7世紀代に築造された井戸を中心に建物を再配置すれば、次の図面のように龍王殿または龍宮と認識できる（図62）。

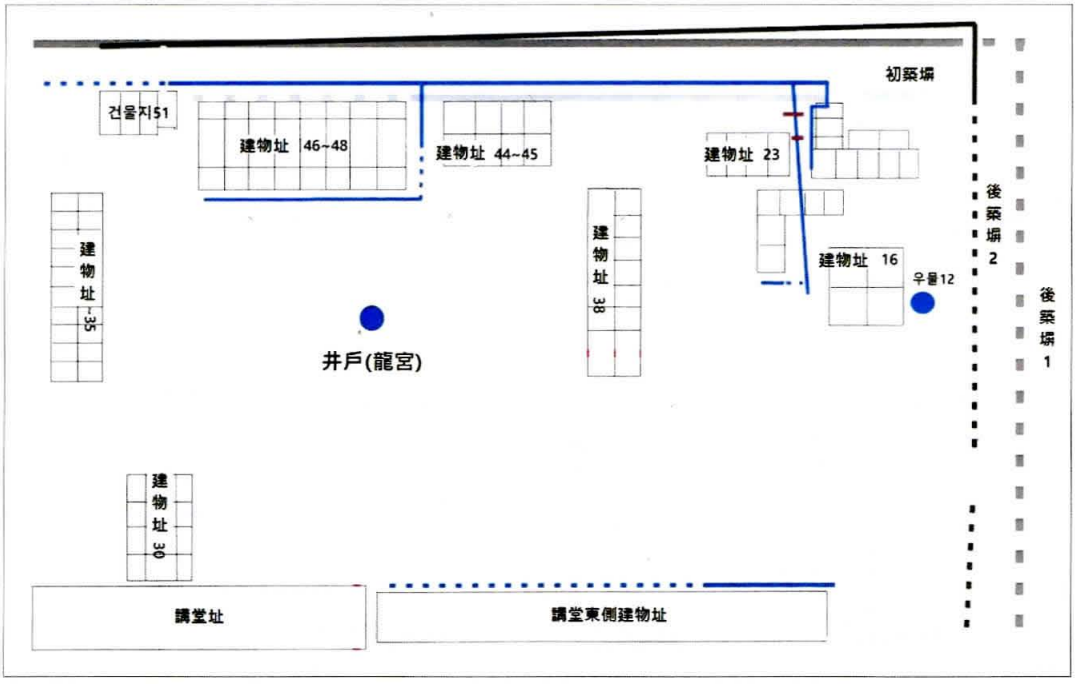


図 62 龍宮と関連する初築建物配置推定図（李恩碩推定図）

ここは井戸を中心に見れば、金堂や講堂とは区分されるところで、別途の祭礼が行われる空間である。南北の長舎建物は、第4章で官庁建物と推定された月城北側の建物址と類似している。『三國史記』雑志第八「職官」によると、東宮官の所属官府の中には「龍王典」があり、担当官吏が大舎二人、舎二人がいると記されている。これまでは、すべて東宮官の中に設けられていたと考えられてきたが、別の建物にあった可能性も十分あると考えられ、龍王典が皇龍寺の北側にある龍宮を管理していた可能性も推定できる。統一新羅時代には龍宮として管理されていたが、935年の新羅滅亡後には管理されなくなり、寺院の建物が新たに建てられるようになった。

寺域内では、1238年に焼失するまで付属建物が継続的に建てられたり、廃棄されたりした。長舎建物は、僧房または寮舎に改築され、各種関連施設も新たに配置されたはずである。

以上のように、記録に示されている龍宮の位置、関連建物、井戸の機能と規模を考慮すると、皇龍寺井戸は「龍宮」と見なければならない。当時、人力で10m以上の深さを掘り出し、内径3m以上に築造できるというのは、土木技術の頂点にあったと見ることができ、象徴性についてはこれ以上言及する必要はない。

韓国では現在も、一部の寺院において金堂または大雄殿の裏手に別途の「龍王殿」を設け、龍王を祀る伝統を受け継いでおり、皇龍寺の伝統が継承されていることを十分理解できる。

結　語

本章では、東宮、臨海殿、北宮、南宮、龍宮に関する史料、既存論文、および発掘結果を参照し、その位置について再検討を行った。その結果、これらの場所の位置は全て新たに解釈されることになった。

東宮は、679年の建立記録による位置と構造について様々な意見があるが、まだ指定できるところが確認されていない。「南宮之印」銘文瓦1点の出土により南宮址と認識された国立慶州博物館敷地については、新たに東宮であると解釈し、東宮は月城東南側に存在したと判断した。ここには現在、国立慶州博物館と駐車場敷地内に苑池が残っている。南側には、東宮関連の遺物が出土しており、各種倉庫と官庁関連建物から見て東宮を管理する東宮衙と判断される。これは唐長安城の東宮配置を模倣したものと推定される。

臨海殿は、既存の雁鴨池と呼ばれた月池の南側に大型の回廊型建物であり、西側の正殿型建物は、王が政務をしていた朝元殿であると推定される[54]。

北宮は、月城の北側に位置する城東洞殿廊址ではなく、善徳女王が創建した芬皇寺の東側にある九黄洞苑池と付属建物と推定されている。「芬王」銘文土器、「王」銘文瓦と「官瓶」土器などと各種高級遺物が出土し、六角形の氷庫を備え、真聖女王が居住していた場所と考えられている。

南宮は、まだ発掘されていないが、月城の正南側の仁旺洞寺址と、この一帯の中央区域に位置していたものと推定される。寺院が築造される以前から庭園石や各種建物、そして井戸から出土した銘文木簡は「王」と関連した遺物であることを示唆している。したがって、月城のすぐ南にあり、春陽橋と月淨橋につながる東西道路の北側に存在していたと判断される。

龍宮については、皇龍寺の北側、芬皇寺の南側にある直径3m、深さ10m以上の新羅最大規模の井戸の可能性を指摘した。龍宮の存在は皇龍寺と芬皇寺の間に別途の建物群が存在するという漠然とした推定や大きな池が存在した可能性について期待したが、これまでの発掘調査ではそうした痕跡は確認されていない。文献史料に登場する井戸は、龍の住処であると共に龍宮へとつづく道として認識されており、皇龍寺の大型井戸に対する具体的な考察から、龍宮と推定した。周辺の建物も龍王典と関連し、別途の祭礼が行われた場所と考えられる。

『三国史記』職官志には、宮の名称と業務を担当する官僚の数のみ記されており、具体的な内容がなく多様な解釈がされている。発掘でも決定的な銘文資料が出土していないため、既存の史料と発掘遺構に対する新しい解釈を試みた。今後も多くの議論があるだろうが、都城研究に関する様々な方法から、いくつかの見解を示せたのではないかと考える。

最近、百済都城の東南側にある扶余・花枝山で7世紀代の大規模な建物址と竪穴氷庫遺跡が発掘された[55]。離宮址と推定される場所で、宮内に氷庫を配置する新羅と類似していることが分かる。

---

1) 2月に宮殿を重修し、非常に雄大で華やかだった…、秋の8月に…東宮を初めて建て、初めて内外の様々な門の名前を決めた。
『三國史記』新羅本紀 7 文武王19年條
二月 … 重修宮闕 頗極壯麗 …秋八月… 創造東宮 始定内外諸門額號

2) 國立慶州文化財研究所 2018『慶州 東宮과 月池 復元整備事業 発掘調査報告書 -A建物址-』

3) 金敬烈 2017「Ⅴ.考察 東宮과 月池「カ」地区建物址 및 排水体系検討」『慶州 東宮과 月池Ⅲ』 國立慶州文化財研究所

4) 東宮に関する問題や争点について詳しく言及しており、体系的によく整理されている。
李賢泰 2022「慶州 東宮과 月池의 性格을 둘러싼 論議와 爭点」『2022 新羅学学術大会「慶州東宮과 月池」研究의 現段階와 爭点』国立慶州博物館。

5) 尹善泰 2019「新羅 東宮의 位置와 '東宮官' 機構」『新羅史学報』46 新羅史学会

イ・ドンジュ（이동주）2020「新羅 東宮의 構造와 範圍」『韓国古代史研究』100 pp145-178
李賢泰 2020「新羅 月池宮의 性格과 太子宮의 位置」『韓国古代史研究』100 pp179-222

6）金敬烈はA建物址と東側地区の発掘を直接遂行し、研究結果を発表した。
金敬烈 2022「東宮과 月池 周辺建物群의 構造와 機能에 대한 考古学的 検討 -A建物址 発掘調査 成果를 中心으로-」『2022 新羅学学術大会「慶州東宮과 月池」研究의 現段階와 争点』国立慶州博物館

7）『三国史記』と『三国遺事』には、楊宮や沙梁宮など27の宮殿が登場する。金炳坤は南宮や北宮は満月城の領域に属し、東宮は別の太子宮と見ている。また、月池の名称についても再考が必要であり、東宮と月池宮を同一視することはできないと見ている。
金炳坤 2013「雁鴨池の月池改名에 대한 再考」『歴史民俗学』43 歴史民俗学会
2015「新羅東宮의 役割과 領域」『韓国古代史探求』20 韓国古代史探求学会。
2017「新羅王城의 変遷과 居住集団」『文献으로 보는 新羅의 王京과 月城』国立慶州文化財研究所

8）7～8世紀代の日本の飛鳥宮と平城宮は、大極殿と朝堂院が基本構成である。『三国遺事』によると、景徳王19年（760年）に、天の日が二つに現れる異変があり、朝元殿に祭壇を設け「兜率歌」を歌ったという記事は、ここが正殿の建物を意味すると見られる。もちろん、651年に見える朝元殿と680年頃に築造されたこの建物と同一視できる根拠がなく、問題が提起されることもある。

9）金京烈 2020「慶州 東宮과 月池遺跡 建物址 配置 및 空間区画 検討」『韓国古代史研究』100 韓国古代史学会

10）註5の前掲。尹善泰は隅宮と見ている。隅宮北門逕 …向…才者在 『雁鴨池出土186号木簡』

11）南宮が手工業官府や王室儀礼、教育などに関連する官庁とする意見もある。
李賢泰 2011「新羅 南宮의 性格 -南宮之印名 기와의 出土地 分析을 中心으로-」『歴史와 現実』81
2019「1974年 国立慶州博物館敷地의 発掘調査와 成果 -道路遺構를 中心으로-」『東垣学術論文集』20

12）東宮については、太子宮ではなく東に位置する宮とする解釈もある。
チェ・ヨンソン（최영성）2014「月池宮 関連資料 再検討 - 東宮은 太子宮이 아니다 -」『東洋古典研究』55 東洋古典学会

13）新羅文化遺産研究院・高麗文化財研究院・ハヌル(한울)文化財研究院 2012 『国立慶州博物館南側敷地文化財発掘調査』第1次現場説明会資料集

14）金台植 2005.9.13.日付「西王母と燈王公、月清橋と春陽橋」連合ニュース

15）下記の論文から引用した。
崔宰榮 2017「隋唐長安城 東宮의 構造와 性格 - 魏晋南北朝 都城의 東宮과 연관하여-」『歴史와世界』51 효원사학회 p90-91

16）金炳坤は、月池宮を東宮の改名や異称とは見られないと主張する点に同意し、春宮関連の辞書引用と記事は次の論文で全て引用した。
金炳坤 2013「雁鴨池의 月池 改名에 대한 再考」『歴史民俗学』43 歴史民俗学会 pp17-19
諸橋轍次 著 1957『大漢和辞典』6 大修館書店 p178

17）小澤 毅 2003『日本古代宮都構造の研究』青木書店 pp94-100

18）国立慶州文化財研究所 2003『慶州 西部洞19番地 遺跡発掘調査報告書（統一新羅 道路・建物址，朝鮮 獄址）』

19）崔致遠「上宰國戚大臣等奉爲獻康大王結華嚴經社願文」『崔文昌候全集』
『三國遺事』惠恭王條
是年七月 北宮庭中先有二星墜地 又一星墜 三星皆沒入地

20）最初に提起したのは齋藤忠であり、以後田中俊明・東湖（1988）などが、壤宮（吳英勳1992）と永昌

宮（全德在 2009）と見る見解もある。
齋藤忠 1978「慶州城東洞遺蹟再考 -新羅都京内の宮城的性格をもつ遺蹟とする考について-」『古代東アジア史論集 上巻』末松保和博士古稀紀念会編 東京 吉川弘文館

21）1937年の調査後、1993年西側の長廊地と南古壘一帯を再調査し、一部規模を確認した。
齋藤忠（朝鮮古蹟研究會）1938「城東里の遺構址 -慶州に於ける統一新羅時代遺構址の調査」『昭和十二年度古蹟調査報告』pp81-83
國立慶州文化財研究所 1995『殿廊址・南高壘 発掘調査報告書』
李康根 2013「城東洞 殿廊址의 性格에 대한 再照明」『先史와 古代』38

22）北郊は帝都の北方に築かれ，夏至の日に祭祀が行われることが多かった。北郊，泰折，方丘，方壇，方沢などの別称がある。日本世界大百科事典より引用

23）国立慶州文化財研究所 2003『慶州 仁旺洞556・566番地 遺跡』発掘調査報告書

24）呉承燕は善德女王（芬王）に関連した宮苑池と見ており、崔光植とキム・ヒョンソクは青淵宮と推定している。金東河は芬皇寺上坊の板積宅である可能性も提示している。
吳承燕 2004「韓国 古代 宮苑池의 全開様相과 思想的 背景에 관한 研究」『文化財』37 pp65-87
2011「新羅의 宮苑池 -九黄洞苑池의 性格을 中心으로」『百済研究』53 pp57-87
崔光植 2021「芬皇寺와 九黄洞苑池 遺跡의 性格과 歴史的 意味」『先史와 古代』67 p229
金東河 2021「新羅 芬皇寺 歴史・文化的 價値와 意味」『新羅王京의 寺刹과 庭園』新羅文化遺産研究院 p223
キム・ヒョンソク（김형석）2022「慶州 九黄洞園池遺跡 創建 및 変化時期의 造営과 性格変化」『文化財』55-3 pp102-118

25）北魏の霊太后（孝明帝の生母）は、520年政変で北宮に幽閉されたという記事がある。北宮は女性と関係がある。『魏書』巻13 皇后列傳1 宣武靈皇后

26）報告書では、「芬王」と解釈しているが、「茨」、「茶」などの文字でも見られる。
國立慶州文化財研究所 2008『慶州 九黄洞 皇龍寺址展示館 建立敷地内 遺跡 -九皇洞 苑池遺跡-』

27）地下につながる排水路があり氷庫遺構であることが分かるが、当時は遺構が把握できず、仏教関連施設と見る見解もあった。
朴玧貞 2007「韓日 古代苑池의 変化를 통해 본 九黄洞苑池의 性格 研究」『韓日文化財論集Ⅰ』国立文化財研究所・奈良文化財研究所

28）宮殿や金入宅、王京の家屋などに倉庫があり、物品の種類によって保管したと見ている。
金在弘 2014「新羅王京出土 銘文土器의 生産과 流通」『韓国古代史研究』73

29）発掘者は東池と見ているが、王宮並みの大邸宅の苑池と見るべきであろう。
『三國遺事』第2 元聖大王條
妾等乃東池青池（青池卽東泉寺之泉也寺記云泉乃東海龍往來聽法之地寺乃眞平王所造五百聖衆五層塔納田民焉）二龍之妻也

30）ここに六角形の氷庫が設置された点において、夏の宮殿である唐含涼殿の役割も考慮する必要がある。

31）保寧 聖住寺址 朗慧和尚塔碑（890～897年）
太傅王（49代憲康王）が会い、弟君である南宮相（50代定康王）に語って言うには…。
太傅王覽 謂介弟南宮相曰 「三畏比三歸 五常均五戒 能踐王道」

32）李賢泰、註11の前掲論文

33）大板金太郎は金仁問（694年卒）のための仁容寺と推定したが、発掘の結果、その根拠を確認できなかった。1916年には仁旺寺址と記録されているが、近年名称が変更された。
国立慶州文化財研究所 2013『傳仁容寺址 発掘調査報告書Ⅰ』

34）権宅章、註29の前掲 pp461-465

35）チェ・ソンウ（최성우）2013「考察3.傳仁容寺址 遺跡의 変遷過程과 周辺遺跡과의 関係検討」『傳

仁容寺址 発掘調査報告書Ⅰ』

36）新羅文化遺産調査団 2009『王京遺跡 -慶州 仁旺洞 412-2番地 遺跡』

37） 8世紀後半から禅宗の流行などにより、慶州南山には多数の寺院が建立された。特に、貴族寺院は高麗時代まで続き、最も代表的な寺院は天龍寺である。『三国遺事』によれば、崔斉顔（?～1046）が娘の天女と龍女の娘のために1040年に重建された寺院であり、その起源については7世紀の唐の大臣・樂鵬亀が訪問しており、その重要性が強調されている。
国立慶州文化財研所 1998『天龍寺址 発掘調査報告書』。2004『慶州南山 精密学術調査報告書』

38）古代の井戸と祭祀の象徴性について詳しく整理し、深く分析している。
金昡希 2011「第1章 古代의 우물과 祭祀」『國立慶州博物館内 우물（井）出土 動物遺体』国立慶州博物館

39）國立慶州文化財研究所 2017『慶州 東宮과 月池 Ⅲ』

40）新羅文化遺産研究院・慶州市 2016『慶州 財買井址 発掘調査報告書』

41）新羅井戸の考古学的発掘結果を基に進めた研究の先鞭は金昌億によってつけられた。
金昌億 1996「三國時代 井에 대한 檢討」『碩晤尹容鎭教授停年退任紀念論叢』
2004「우물에 대한 祭儀와 그 意味」『嶺南文化財研究』17 嶺南文化財研究院

42） 慶州扇状地に築造された井戸と池について総合整理し、新羅史から見える井戸と龍に関する資料を総集成して提示し、筆者の許可を得てこれを一部引用することにした。
崔珉熙 2011「慶州 扇状地와 新羅史에서의 井 및 池에 관한 考察」『慶州文化論叢』14 慶州文化院附設 郷土文化研究所

43）金昡希、註38前掲論文

44）イ・ジェファン（이재환）2011「傳仁容寺址 出土 '龍王' 木簡과 우물・연못에서의 祭祀儀式」『木簡과 文字』7 韓国木簡学会
イ・ピルヨン（이필영）2008「우물 信仰의 本質과 展開 様相:民俗学資料를 中心으로『歴史民俗学』26 民俗苑
クォン・テヒョ（권태효）2012「우물의 空間的 性格과 象徴性 研究」『民族文化研究』56 高麗大学校民族文化研究院 pp253-292

45） 本調査の内容は、次の冊子に要約および記述されており、整備内容もすべて含まれているため、これを引用する。国立文化財研究所 2007『皇龍寺基本計画』pp33-48

46） この井戸については、発掘当時には表面的な調査が行われたものの、1984年に皇龍寺址の発掘が完了した後に再調査されたという。

47） 1992年、王京遺跡発掘に参加したの際時、井戸に対する直接的な調査を行って、皇龍寺井戸の構造と床施設の類似点があるか確認するために降りて遺構を観察することができた。

48）言い伝えによると、この井戸は近年まで使用されていたという。

49）金正基と韓正浩の論文は、朴方龍の論文から引用した。
金正基 1980「皇龍寺址 発掘과 三国遺事의 紀錄」『新羅文化祭学術發表會論文集 -三国遺事의 新研究』1 新羅文化宣揚会 pp35-45
韓政鎬 1997「皇龍寺의 諸照明을 위한 試論」『東院論集』東国大学校15代總学 pp144-145
朴方龍 2001「皇龍寺와 新羅王京의 造成」『皇龍寺와 綜合的 考察』新羅文化祭学術論文集 22

50）『三國遺事』巻 5 神呪 6 明朗神印條
…因海龍之請 入龍宮傳秘法 施黄金千兩（一云千斤）潛行地下 湧出本宅井底…

51） クォン・テヒョ（권태효註44の前掲）は、井戸を7つの意味に分類した。生命の胎空間として認識される点である。また、井戸は祭儀処として空間的機能をする点でもある。創建時調や新しい世界を治める人物が王になるために準備する空間である点や、護国神が宿っている空間であり国運を占う空間である点もある。さらに、病の治療と再生の空間である点や、龍神または水神の居住地であり、龍宮世界への通路であることもある。女性が王や高貴な身分の存在に出会う場所と認識される点もある。これ

らの記録に基づき、井戸の象徴的意味と性格を明確に分類した。高麗時代の建国説話は、p259（大井関連）、p266（龍宮関連）で再引用されている。
世宗大王記念事業会1972『世宗長憲大王実録』 p22
東亜大学出版部 1971 註釈『高麗史』第一世家一「高麗世界」pp11-12

52）崔兌先 2016「新羅寺刹의 伽藍構造와 皇龍寺 伽藍配置」『皇龍寺址 発掘調査40周年記念 国際学術大会発表資料集』国立慶州文化財研究所 pp77-79
金東河 2022「皇龍寺 回廊外郭 空間의 区画과 性格」『新羅王京의 都市構造와 月城』国立慶州文化財研究所・韓国古代史学会 p126

53）金東河、前掲p124

54）唐長安城の北東側にある禁苑である太液池と含元殿は、初めは離宮として築造されたが、高宗年間に正宮となって、新羅宮殿の配置において、このような変化状況を考慮する必要がある。

55）扶余郡・百済古都文化財団 2022「扶余 花枝山遺跡 9次発掘調査 - 2次現場説明資料」

第 6 章　都城民の生活

問題の所在

新羅の都城である慶州は、三つの河川が流れる扇状地に位置しており、紀元前後の時期には主に南山、狼山、隍城洞一帯などの丘陵地を中心に居住した。しかし、4世紀からは積石木槨墳を平地に築造し始め、6世紀中後半以降は全域を覆土するようになり、都市化が進んた。その結果、住居の中心も平地に移動することになった。

慶州の都市遺跡を発掘すると、主に礎石（根石）構造の建物基礎が残っており、これらの基礎は新羅時代の建物が地上に建てられる際に使用された基壇を形成していることが確認されている。ただこのような遺跡は主に8～10世紀、またはそれ以降の高麗時代の建物に関連している。通常、6世紀半ば以降に建設された皇龍寺を含む一般の住居は、瓦屋根を持つことが想定されているが、これに関連する遺跡の発掘結果はいまだ確認されていない。5～7世紀に確認される構造は、主に掘立柱建物または竪穴住居址であるとされている。また、慶州財買井址（史跡第246号）では、金庾信の住居と推定される場所でも、7世紀に関連する住居建築物は見つかっておらず、この点から遺跡の正確性だけでなく、当時の建築物の構造や形式に関しても疑問が投げかけられている。

慶州では、6世紀半ばから7世紀までの一般住居建築物はほとんど見つかっていない。これは、統一時代の8世紀以降に新たに築かれた礎石建物の基礎がその上に建てられ、多くの部分が失われたり、下層に一部の遺構が残ってたりしているためである。このため、地域で見つかる7世紀の住居家屋を調査し、百済の遺跡と比較することで、住居建築の構造や年代差、および関連する問題点について考察してみたい。

新羅時代の都城内には、多くの寺院が存在したと考えられる。記録によれば、寺院は空に輝く星のように多く、塔は雁の群れのように多かったというが、実際の発掘調査によって明らかになった寺院は30カ所余りしかない。この関連性を考慮しながら、新羅時代後期に現れる「金入宅」という言葉の意味について分析してみたい。

都市の最も中心部においては、坊と道路の配置を通じて統制され、管理の効率性が追求されている。そのため、道路と関連施設に関する資料を整理し、当時の生活の様

子を理解することを試みる。

新羅の記録に登場する氷庫と氷庫典は、祭祀や夏の生活に必要な施設として慶州各地で確認されており、百済地域でも発掘が続けられている。統一新羅時代以降、この形式が高麗や朝鮮時代においてどのように変化したのかを比較することを考えてみたい。

新羅時代の建物では、礎石構造からはオンドル（暖房設備）の存在が確認されておらず、具体的な暖房方法はわかっていない。一方、日本では奈良時代から江戸時代まで、個人用の暖房器具である「温石」が広く製作され、使用されていった。新羅時代の住居遺跡から出土する楕円形の滑石製品は温石であると判断されるが、この遺物についても詳細に研究してみたい。

第 1 節　竪穴家屋、貴族寺院と金入宅

1.5～7世紀代の新羅住居遺跡

1) 慶州地域

新羅の首都である慶州の市街地内では、道路に区画された坊内部の生活住居遺跡が100カ所以上発掘されている。これらの遺跡からは、主に8～9世紀の建物の基礎や井戸、塀、道路などが大量に確認されている。最近発掘された財買井址遺跡は、主に8世紀以降の礎石建物の基礎や井戸、道路などが中心的な要素である[1)]。これらの遺跡の年代については、住居建築物の持続的な改築により先行する遺構が完全に破壊された可能性もあるが、7世紀代には「基壇を備えた礎石建物」が存在しなかったのではないかという見方もある。これまで慶州市街地の中心部では、寺院や大型官庁建物址として分類されることが一般的であったが、6世紀代から統一新羅時代の7世紀代に関連する住居の礎石建物址は確認されず、そのような議論すら行われていなかったことが理由である[2)]。寺院建築や都市区画、そして慶州全域から出土する「儀鳳四年皆土」（679年）銘瓦により、大型建物の築造にのみ関心が集中しており、住居建築物の水準も同様に考えられている。しかし、これを裏付けるような遺跡は発掘されておらず、皇龍寺や仁旺洞の官庁規模の遺跡が住居建築と同一視されることが認識されている。

都城の中心である月城周辺において、1～3世紀代の遺構が確認されることは稀であ

る。この時期の居住地域は、隍城洞地域や南山、狼山、明活山の麓などの丘陵地を中心に形成された。4世紀以降、皇南洞と月城の北側を中心に古墳群が現れ、平地の生活領域が拡大し始めた。皇龍寺を中心とした新都市は、6世紀半ば以降、段階的に発展していった。

月城濠の北西側では、3世紀代の住居址2棟が発掘されたことがあるが、これまでの土層調査によると、3～4世紀代の遺物や墓のみが確認されている。5世紀代以降、月城濠の防御施設と判断される掘立柱建物址23棟が発掘された[3)]。これらは濠の存在時期における防御を目的とした施設であることが明らかであり、構造からみて濠の廃棄時期である統一新羅時代の段階まで存続したことを示している[4)]。

ここで確認されている建物址は、1×1間や2×2間の規模の掘立柱建物址が確認されたが（図1）、竪穴内に柱穴を並べるように配置されたものや、外部に2列で柱穴を配置したもの、外1列で柱穴を配置した後（外柱式）、内部には「井」型で柱穴を配置したもの（4柱式+壁柱式）などがあり、さらには隅丸方形を帯びる7.3×7.5m規模で柱穴を細かく配置し、壁体を立てて内部に南北-東西各1間の大型住穴が配置されたものもある（図2～4）。

そのほか、月淨橋址の南側農地地域で3～5世紀代の竪穴式住居址が確認され、6世紀代以前の竪穴式住居址の性格を一部把握することができる[5)]。慶州競馬場敷地で発掘された土器製作関連の掘立柱建物址は、5世紀代後半以降から7世紀まで現れている[6)]。また一部の根石建物址2棟が同時期に現れていると考えられたが、同伴された出土遺物から判断すると、7世紀代後半から8世紀にさかのぼる遺物と推定される。

東川洞838-18番地遺跡からは、かまどと煙道施設を備えた竪穴住居跡2基が確認された[7)]。この一帯では統一新羅時代の竪穴住居址が多く確認されている（図6・7）。慶州東川洞7B/L遺跡の中心年代は8～9世紀であり、根石建物址の他にも竪穴住居址が多数確認された。約20坪の面積内には1棟の竪穴住居址とかまどまたは野外炉址型式の遺構が都市遺跡の北側末端地で検出されており、下層民の居住地と考えられている。4章で触れた国立慶州博物館の南側敷地発掘においても掘立柱建物跡が多数確認されたが、8世紀代以降の住居建築物と東宮官の倉庫建物が混在している。天官寺址においても、礎石建物址の下部に柱穴などが確認されたが、構造は把握できなかった。

したがって、7世紀以降も竪穴住居址が慶州でも築造・使用され、主に中下層民の空間であったと考えられる。貴族の住居空間は4柱式+壁柱式のような地上式構造であり、百済地域の建物址とも類似するようであるが、現在のところ月城周辺でのみ確認されている。

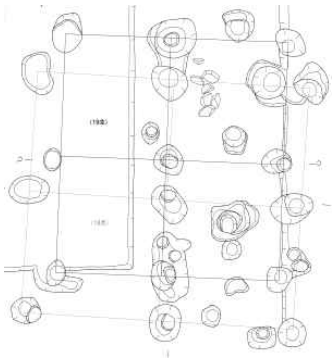


図 1 月城濠掘立柱建物址18·19

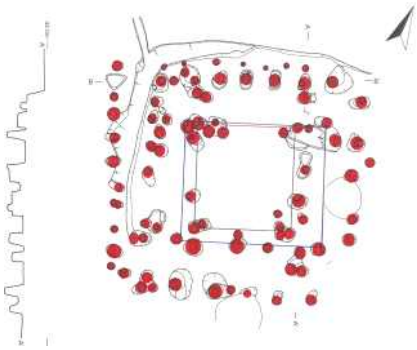


図 2 月城濠掘立柱建物址12

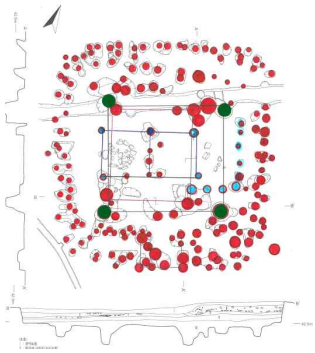


図 3 掘立柱建物址5

図 4 月城濠掘立柱建物址5

図 5 月城濠北西側(○)掘立柱建物址

図 6 慶州東川洞833-18竪穴住居址1

図 7 慶州東川洞833-18竪穴住居址2

図 8 尚州伏龍洞256竪穴住居址12

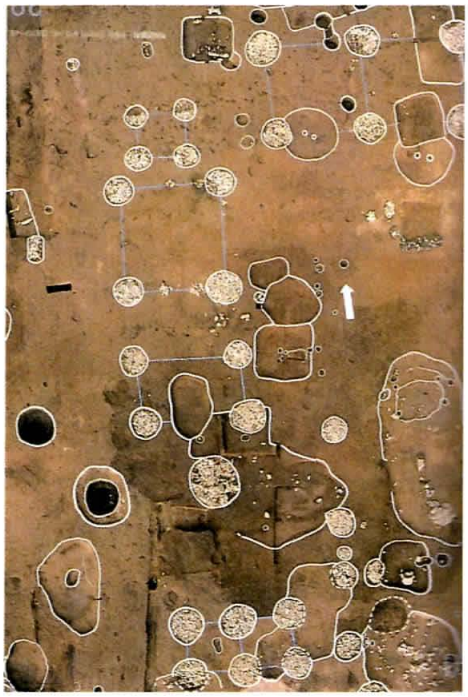


図 9 尚州伏龍洞256住居址の重複

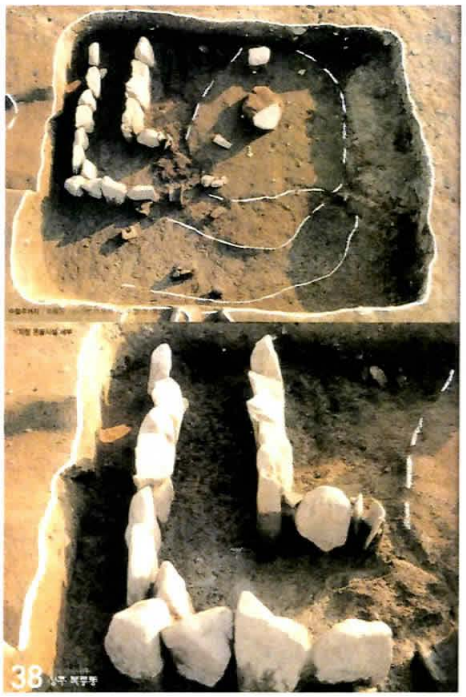


図 10 尚州伏龍洞230-3竪穴住居址10

図 11 咸安槐山里竪穴住居址1·2

図 12 咸安槐山里竪穴住居址3

図 13 咸安槐山里竪穴住居址4

図 14 咸安槐山里竪穴住居址5(煙道)

2) 慶尚北道・慶尚南道地域

三国時代の集落遺構が多種多様に確認された代表的な場所は大邱時至遺跡である。同遺跡は慶州から西に50km離れた場所にあり、4世紀後半から7世紀まで形成された。出土遺構は竪穴住居址30棟、掘立柱建物址12棟で、形状は円形、方形、長方形などがあり、規模は長さ3〜8m、幅3〜7.4mに達する。また、57棟の高床式建物址も確認されており、柱穴配置によって4柱、6柱、9柱、12柱に区分されている[8)]。ここでも遺跡が廃棄された後、道路遺構と統一新羅時代の瓦葺屋根の建物が建てられたと判断されている。

統一後のものとしては、沙伐州である尚州から道路に区画される坊内遺跡において、統一新羅時代の竪穴住居址101棟と楚石建物址62棟が確認された。年代は8世紀以降であり、共存して築造されたと考えられている[9)]（図8〜10）。

慶尚北道地域においても、礎石建物址は8世紀以降に築造されており、それ以前の住居関連施設は竪穴住居地あるいは掘立柱建物址である。もちろん、掘立柱建物址はその位置や用途によって倉庫や工房の付属施設などに分類される。慶尚南道地域でも4〜7世紀代の高床式建物址が昌原、梁山、蔚山、金海などで確認されており、段階的に竪穴式建物址も現れている。咸安槐山里では統一新羅時代の8世紀以降の道路遺跡と礎石建物址、竪穴住居址が共存して確認されている[10)]。

3) ソウル・京畿・忠清地域

新羅は漢江流域へと進出する過程において、古代交通路を含む重要拠点地域に山城を築造したが、新羅の支配階層の墓が各地で調査されてきた[11)]。ソウル・京畿地域に所在する6〜7世紀代の生活遺跡としては、ソウル市衿川区禿山洞遺跡、華城南陽洞遺跡、安寧洞と安寧村遺跡、龍仁馬北洞遺跡などがあり、統一新羅時代の生活遺跡として華城清渓里遺跡などが確認されている[12)]。ソウル禿山洞遺跡では、発掘の結果、最も多様な遺構と道路遺構が確認され、注目されている（図15）。ここでは東西・南北方向につながる道路遺構と竪穴建物址24棟、掘立柱建物址101棟、礎石建物址1、井戸址4、集水施設2など、様々な遺構が確認された。6〜7世紀代の新羅の遺物も大量に出土しているが、道路には砂利が敷かれず、両側に竪穴側溝（排水路）を持つもので、百済系統と考えられている（図16・17）。

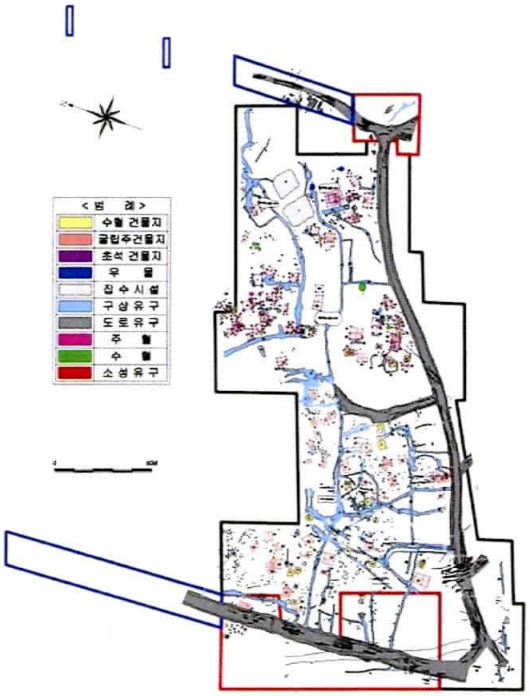


図 15 ソウル禿山洞遺跡

図 16 ソウル禿山洞遺跡道路遺構

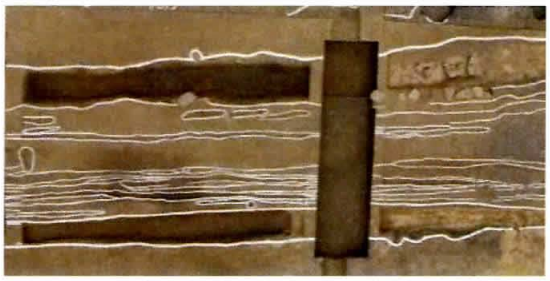


図 17 ソウル禿山洞遺跡道路遺構(車痕跡)

図 18 ソウル禿山洞遺跡掘立柱建物址

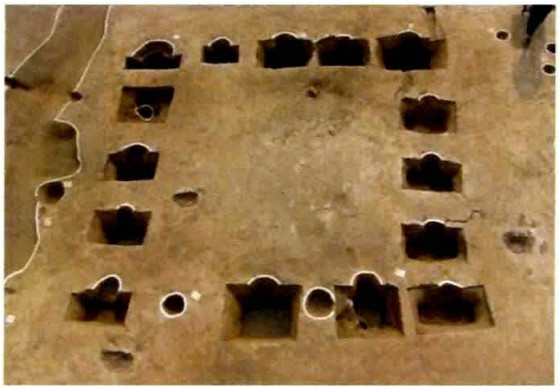


図 19 ソウル禿山洞遺跡2区域掘立柱建物址36

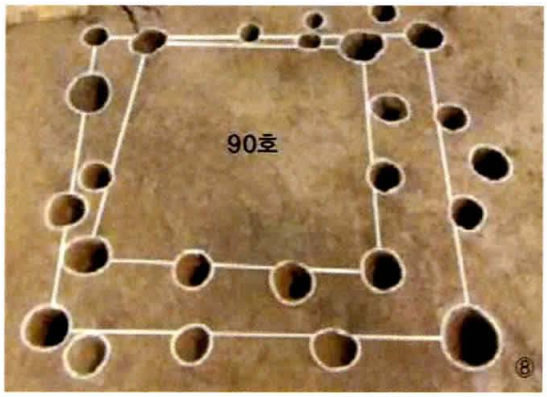


図 20 ソウル禿山洞遺跡掘立柱建物址90

図 21 ソウル禿山洞遺跡2区域竪穴住居址2

図 22 華城安寧洞遺跡

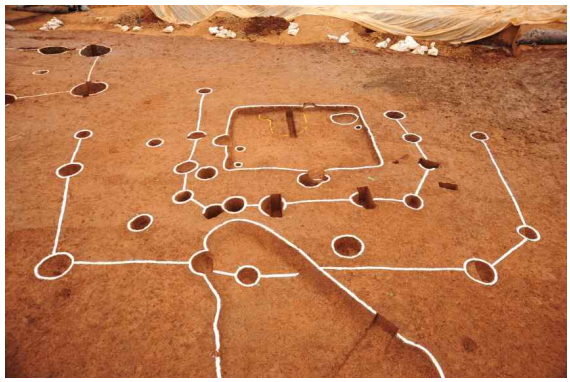


図 23 華城安寧洞遺跡竪穴住居址6

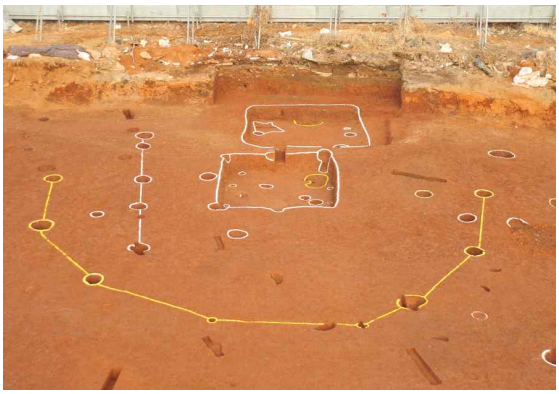


図 24 華城安寧洞遺跡竪穴住居址3·4

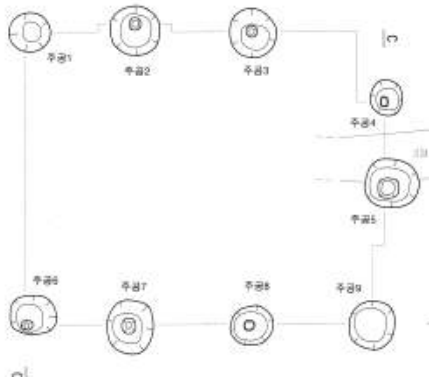


図 25 華城安寧洞遺跡掘立柱建物址

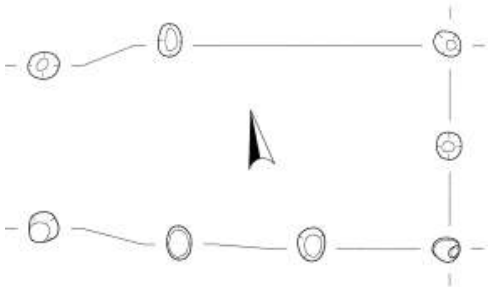


図 26 龍仁麻北洞遺跡掘立柱建物址

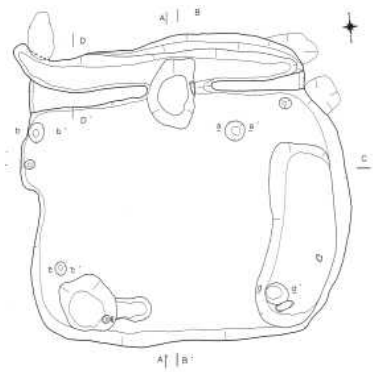


図 27 清州五松竪穴住居址

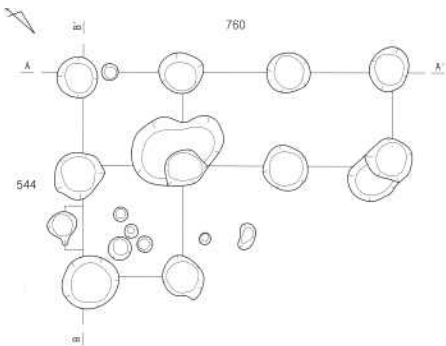


図 28 牙山新法里土墨1掘立柱建物址

道路遺構については、漢江進出時に百済地域の人材を動員して築造したという意見や、新羅軍進出時に一時的に使用された橋頭堡のような遺跡であるため、施設的な投資が行われなかった可能性など、多様な意見が提示されているが、新羅・伽耶によるものと考えられる道路の築造方式が、砂利を敷かずに両側に側溝を掘って築造されたものであることが明らかになっている。つまり砂利を敷いて築造するという、新羅における在地方式とは異なる特徴が見られるのである。ただし、出土した遺物は新羅のものだけであり、百済系の遺構や遺物は確認されないため、6〜7世紀代の新羅の掘立柱建物の形式を示す代表的な例とされている。

華城安寧村遺跡では、統一新羅時代の住居址2棟が確認された。また、2012年から2013年にかけて調査された安寧洞遺跡では、統一新羅時代の耕作遺構をはじめ、掘立柱建物址30棟、竪穴建物址18棟などが確認された。同遺跡では、柱穴が塀の役割を果たす竪穴式住居址も確認されている（図22〜24）。掘立柱建物址は間口3間、奥行1間の形態を持ち、東側中央に別途の補助柱が設置される形式がある（図25）。

龍仁馬北洞遺跡では、三国時代後半期の掘立柱建物跡と道路遺構が確認された。報告書では、掘立柱建物址が1×2間で構成された長方形と説明しているが、図面には全体的に東西3間、南北1間規模であり、東側が若干狭くなる形態が示されている（図26）。

忠清地域では、統一新羅遺跡がよく残っている場所を選定し、以下に示する。五松では、統一新羅時代のかまどと煙道を備えた住居集落遺跡が、牙山新法里土塁遺跡では各種住居遺跡が確認された[13]。

五松地域では、統一新羅時代の住居地には竪穴住居址が54棟確認され、大部分は煙道とかまどが設置された構造である（図27）。牙山新法里では掘立柱建物址と木槨庫が確認された（図28）。

以上見てきたように、7世紀代の竪穴式住居址は、時期的に見るとかまどや煙道施設が築造され、4柱+壁柱式などの建物が流行していた。統一新羅時代になるとかまどや煙道の位置が少しずつ変わるものもあるが、ほぼ似たような構造である。このような型式変化について、4〜7世紀代の竪穴住居址をまとめた論文が存在し、引用されている[14]。

鄭珉圭は、嶺南地域における竪穴住居址約2200カ所を時期別および段階別に分析した。その結果、7世紀代までに外柱式かつ「ㄱ」型のかまど構造を持つ方形竪穴住居址が築造されていることが分かる。しかしながら、これまでの統一新羅時代の発掘調査に基づく構造の見ると、「—」型のかたちを持つ構造も築造されていることが分かる。この

差は地域や住居址の長さと関連があると推定される。すなわち、細長方形と方形の違いによって構造にも差異があり、これは暖房効率を向上させるための構造と考えられる。

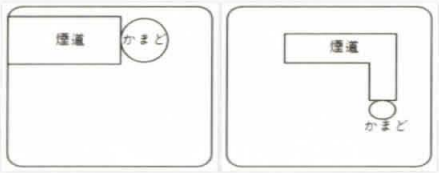


図 29 かまどと煙道配置の構造

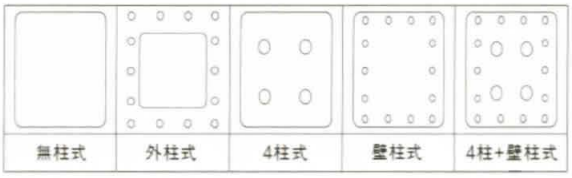


図 30 掘立柱建物址の型式

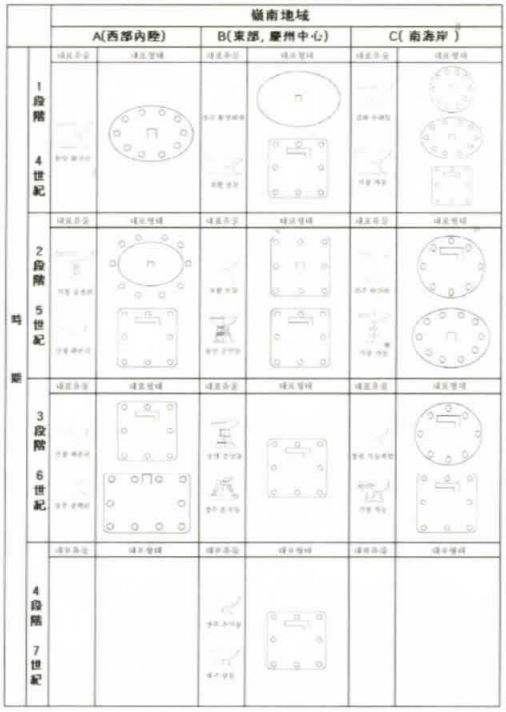


図 31 竪穴式住居址の嶺南地域型式(鄭珉圭 2020)

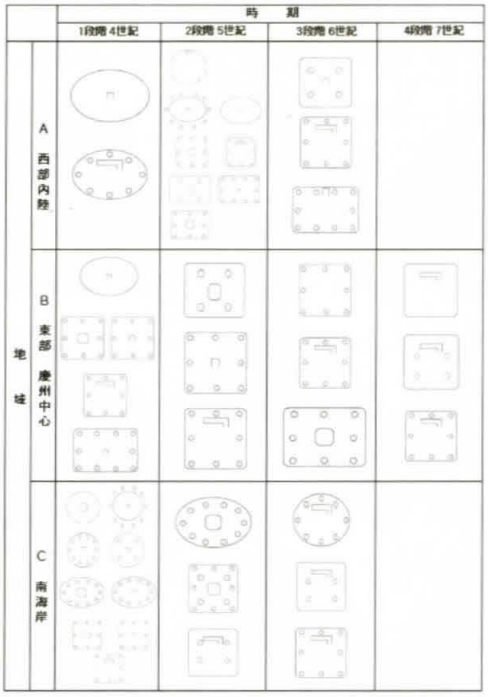


図 32 竪穴式住居址の型式分類(鄭珉圭 2020)

2.百済遺跡と比較

これまで、新羅地域における6~7世紀以降の統一新羅時代に編年される住居址を具体的に提示した。新羅遺跡では、よく見られるのは礎石建物址や砂利が敷かれた道路などである。しかしながら、先に挙げた遺跡はいずれも百済遺跡、特に泗沘地域に主に現れる7世紀代の遺跡との類似点が見られる。ここではその差を比較・検討してみたい。

百済泗沘都城の扶余の建物遺構は、竪穴住居址、掘立柱建物址、周溝付きの掘立柱建物址、壁柱建物址、瓦葺き屋根建物址などに分類される[15]。

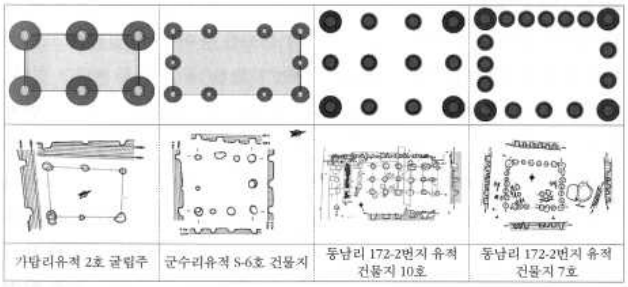


図 33 扶余掘立柱建物址の長方形構造模式図(林鍾泰 2015)

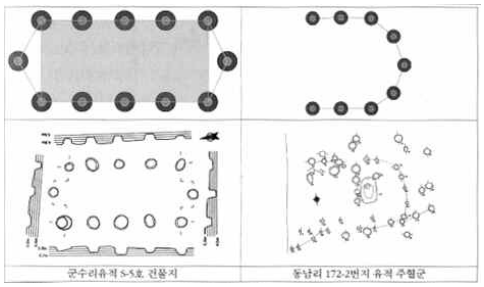


図 34 扶余掘立柱建物址の異形構造模式図(林鍾泰 2015)

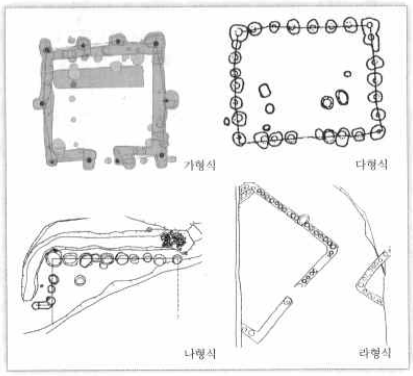


図 35 壁柱建物址型式(沈相六 2015)

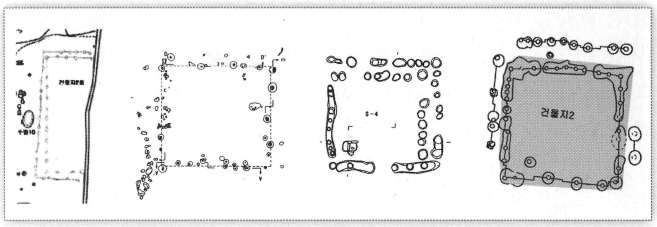


図 36 壁柱建物址「タ」型式(沈相六 2015)

図 37 梁山機張佳洞出土家屋形土器

図 38 金海鳳凰洞出土家屋形土器

図 39
金海鳳凰洞家屋形土器(側面)

図 40
金海鳳凰洞家屋形土器(背面)

図 41
金海鳳凰洞家屋形土器(X線)

扶余地域では、泗沘遷都以前に築造された竪穴住居址が、佳塔里や錦城山ドシロクゴル遺跡などで確認されており、538年の遷都以後には方形や長方形、また異形の構造を備えた掘立柱建物址が最も多く確認されている。

慶州月城北西で確認された5号および12号の掘立柱建物址などは、5世紀後半に編年され、統一時代の7世紀中後半まで使用されていることが分かる[16]（図1～5）。これらの建物址は重複が激しく、少なくとも同一地域で3回以上築造され続けたことが明らかとなった。これらの建物址は、濠の内側に位置し、濠に近接しており、軍事防御施設（軍人宿舎や関連施設）と推定されている。外濠に面した掘立柱建物址は、警戒所または望楼のような構造を持ち、南側には住居建物として解釈されている。

扶余東南里172-2番地遺跡の7号（図33右）とソウル禿山洞遺跡（図19）は、あまり差がなく、6～7世紀の百済と新羅の掘立柱建物跡が相互に類似するものと考えられる。また、月城北西の5号と12号建物址には、内外2列に連なる柱穴と別途の4本の柱が内部にある（図2～5）。これは壁を設置する方法において、両側の柱の間に壁体が埋め込まれていることから、百済の壁柱式建物址（図35・36）と新羅の壁柱式築造技法との比較が可能である。再度述べるが、中央に柱を立てるか否かという構造の差が、百済と新羅の屋根構造の差に現れると考えられる。

竪穴式建物址は泗沘期の都（扶余）ではほとんど現れないが、統一新羅時代になると遺跡から引き続き確認され、朝鮮時代まで続いている[17]。築造方式は統一期になっても大きな変化は見られない。先史時代から持続的に続く住居形態であり、泗沘期の扶余で現れない点を考慮する必要がある。これは、低湿な扶余地域の土質と竪穴式の構造が合わない可能性があることを示唆している。注目すべき構造としては、華城安寧洞遺跡での塀の掘立柱と竪穴式住居址の組み合わせがある。この構造では、塀が掘立柱として作られ、その内部に竪穴式住居址が配置される。このような2つの方式を組み合わせたものであり、漸進的な発展段階とみなすことができる。

安寧洞遺跡のように、竪穴式建物址が掘立柱建物址と同時に作られる場合は、その違いは用途によるものと考えられる。しかしながら、泗沘地域で築造される掘立柱建物址は、草屋型であるから見て、壁柱建物址とは用途が異なることが分かる。

三国時代の家屋の構造を類推できる家屋形土器は、これまで20点余りが発見されており、その中で出土地が明確なものが6点、伝来品が6点、残りの8点は出土地不詳の収集品である[18]。ほとんどは5世紀から統一新羅時代までの住居家屋を表現したものであ

り、代表的なものは板葺もしくは瓦葺である。高床家屋を表現した土器が多く見られ、特徴的なのは屋根に誇張された煙突の表現である。瓦屋根を表現した土器は、高床家屋のものは確認されておらず、構造が異なることが分かる。通常、5〜6世紀代の土器が主であり、瓦屋根を確実に表現したものは、慶州普門洞の出土品と湖岩美術館所蔵品が代表的であり、8世紀代以降に編年されるものである。

梁山機張佳洞古墳群は慶尚南道の東部地域に位置し、最高位階の古墳群とされている。6世紀代前期のⅠ地区2号石槨墓からは、12本の四角柱を半円形に配置した板葺または藁葺の特徴的な家形土器が出土した（図37）。この土器と比較可能なのは、扶餘東南里172-2番地の柱穴群である（図32）。発掘資料と土器が似ており、証明はできないが、大黒柱を設けない南方系の建物構造である可能性が高いと考える。最近では、金海鳳凰洞から出土した土器にもこのような型式が確認された[19]。出入り口を縦に高く作り、奥壁は曲面で処理された建築構造と把握され、掘立柱建物址の復元研究に非常に重要な遺物と評価される（図38〜41）。

慶州東川洞でも統一新羅時代後期まで竪穴住居址が築造され、城乾洞でも統一新羅時代の礎石建物址の下の泥層から6〜7世紀代の遺物と共に木柱が残っている柱穴が確認されている[20]。

以上からわかるように、慶州地域や6〜7世紀の新羅が支配した地域では、住居生活用の礎石建物が確認されていないことが分かる。注目すべきは、すべての礎石構造が統一新羅時代以降に出現することである。

一方、軒丸瓦の編年などによれば、慶州では5世紀後半から6世紀前半にかけて軒丸瓦が製作されたという見解がある[21]。しかしながら、軒瓦を葺いた建物が確認されない点が依然として課題である。慶州競馬場敷地では、6世紀半ばごろに土器製作方式で生産された瓦が発見されており、これが新羅地域で最も古式の瓦であることが知られている[22]。

現在、新羅瓦の編年において最も重要な画期は、皇龍寺の創建期の瓦が6世紀半ばであることであり、この時期を基準にすべての考古学的基準を合わせている。例えば、ソウル・京畿地域において新羅が支配していた山城などから出土した瓦の最も早い編年は、6世紀半ばからと認識されている[23]。官用建物に瓦が葺かれたのか、またどのような構造の建物がそれに該当するのかを把握する必要があるが、現状ではその解釈がまったくできていない状況である[24]。新羅の古式瓦が出土する慶州芳内里古墳の場

合、古墳の年代が7世紀代以降に下ってくることを考慮する必要がある[25]。もう一度整理すれば、新羅の遺跡や遺物の既存の編年観は、6世紀半ばに合わせて分類・編年されているが、新羅地域、特に慶州での生活遺跡は7世紀代にほとんど現れないという点で、整合性に問題が生じている。

皇龍寺址の東側に位置する王京S1E1地区や仁旺洞556番地の発掘調査でも、下層の遺物の出土編年を考慮して、6世紀に都市が築造されたと主張したが、7世紀へと続く遺跡が正確に把握されていないのも事実である[26]。皇龍寺の創建は553年であり、その後90年後の645年ごろに、九層木塔が建てられた。この645年頃の軒瓦をどのように分類・編年すれば良いのか、百済系との類似性や相違点をどのように見出すことができるのかが重要な課題として浮上している。6世紀代中後半の百済系瓦の文様から新羅系に発展する6葉の軒瓦から段階的に7世紀代へと続く編年観の設定作業が必要である。これに伴う土器の編年も見直さなければならない。龍江洞古墳から出土した土器は、研究者によって7世紀初半ばあるいは8世紀初めに分けられるが、追加で改築されていない構造であることが確認されたため、古墳の編年は7世紀末あるいは8世紀初めに分類できると考えられる[27]。つまり、ここから出土した土器と瓦の編年にも、再調整が必要である。

古代史において最も重要な統一前後時期では、考古学的な編年が6世紀後半以前と統一期に大別されており、いわゆる過渡期において数十年から約100年にわたる空白が生じてしまっている。慶州地域の礎石建物址初期遺跡の編年では、すべてが6世紀半ばに設定されており、その後の遺跡とは一致しない空白期間が残っている。

すなわち、統一段階である7世紀後半まで50年から100年程度の編年差が発生する点を深刻に検討する必要がある。考古学的編年観は、歴史的な事件の絶対的な基準に合わせて設けられるが、遺物遺跡との年代と差が発生した場合、空白期が生じる。例えば皇城洞遺跡は、紀元前1世紀から9世紀まで様々な遺跡と時代の変遷が持続的に確認されるが、既存の編年観に合わせると、常に4世紀代や7世紀代に空白が生じるという問題点がある。

図 42 益山王宮里の1棟2室家屋模型

結局、慶州地域における7世紀代の居住空間の形態は百済の大壁建物や掘立柱建物跡

とかなり類似した形で築造されたものと推定され、上流層は益山王宮里から見える建物を築造して生活したものと考えられる。

3.貴族寺院と金入宅

現在、慶州地域で発掘された新羅寺院の構造は、中門と塔（双塔）、回廊、金堂、講堂などが基本的に配されている。第3章で述べた皇龍寺を含む寺院は、これらの構造をすべて備えている。しかし、金堂と塔だけが存在し、中門、回廊、講堂がなく、一般の家屋の隣にある遺跡も確認されている。王京S1E1地区の第1家屋、味呑寺址、天官寺址は、従来の寺院構造とは異なることが明らかになり、注目されている。

王京S1E1地区は、道路で区画された坊塀の内部に、小塀で区切られた個別の家屋が確認されており、8〜10世紀代の民家の構造を理解することができる。その中でも、西南側の第1家屋には、中央に方形の3×3間（83.7㎡/25.3坪）の木塔址が残っているが、石列の内側に重ねて積み上げた瓦積列が特異である。東側には小さな石塔が配置されており、北側には内陣減柱構造の6×4間（3.7、3.2m×2.6〜3.0m）の金堂型建物（209.2㎡/63.3坪）が造営されている[28]（図43・44）。南には、道路から出入りできる門址があり、内側の東には祭礼関連施設と推定される方形の石壇が残っている。四方には塀があり他の家屋とは区別されている。また、石塔の基礎は木塔の基礎よりも高く、築造角度が傾いており、木塔と金堂よりも後に建てられたものと考えられる。王京S1E1地区内には合計18カ所の家屋があり、47カ所の井戸が存在するが、この場所にはいない。

天官寺址には石塔が残っており、「新増東国輿地勝覧」（1530年）では慶州府古跡条において、天官寺址の位置が「在五陵東」という記録がされており、史蹟第340号に指定されている[29]。金庾信（595〜673年）と関係のある天官女の冥福を祈るために金庾信が建てたと伝わる寺であるが、塔と建物の中心の年代は8世紀後半以降である。ここの石塔の基壇は一般的な形式であるが、塔身部分は八角形で江原道の陣田寺の浮屠に似た特異な形式である（図45〜47）。この石塔の東側には、推定される3×3間（3.55×3.3m）の木塔址があり、根石の間に瓦積列が配置されており、第1家屋と類似している。北側には、14m離れた位置に5×3間（3.5×5.7m、2.2m）の金堂型建物（178.5㎡/54坪）があり、また東北側には4×3間（3.5×4.3m、2.0m）の用途不明の建物（87.1㎡/26.3坪）がある。塔の西側には門址と推定される遺構がある。

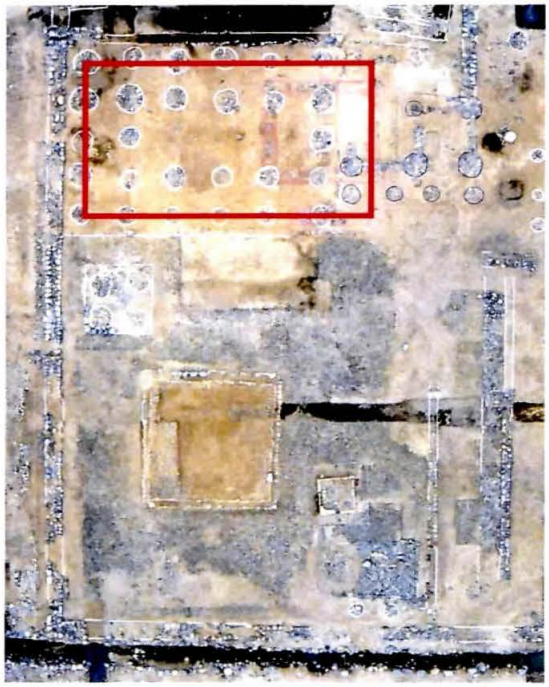


図 43 王京S1E1地区第1家屋

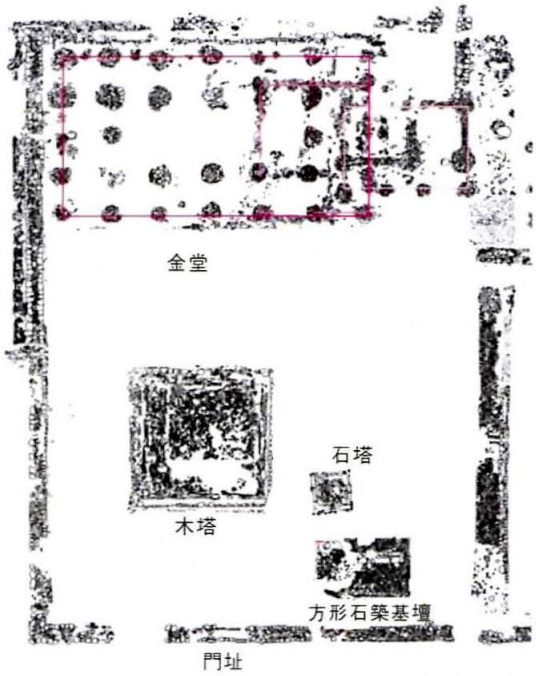


図 44 王京S1E1地区第1家屋

図 45 天官寺址伽藍配置

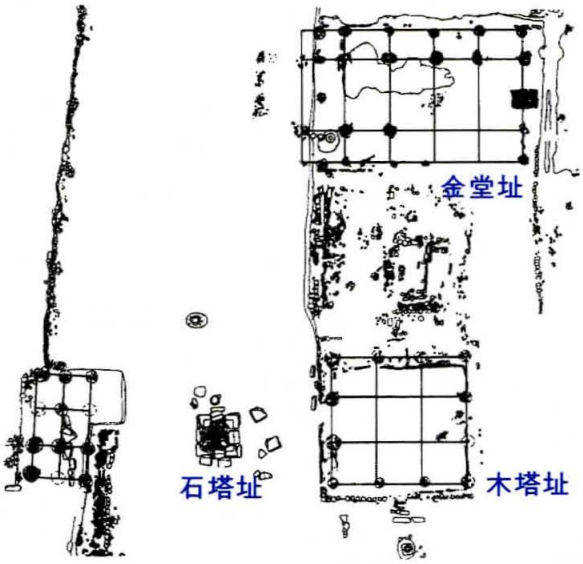


図 46 天官寺址伽藍配置

図 47 天官寺址石塔

図 48 味呑寺址建物配置

図 49 味呑寺址位置と石塔

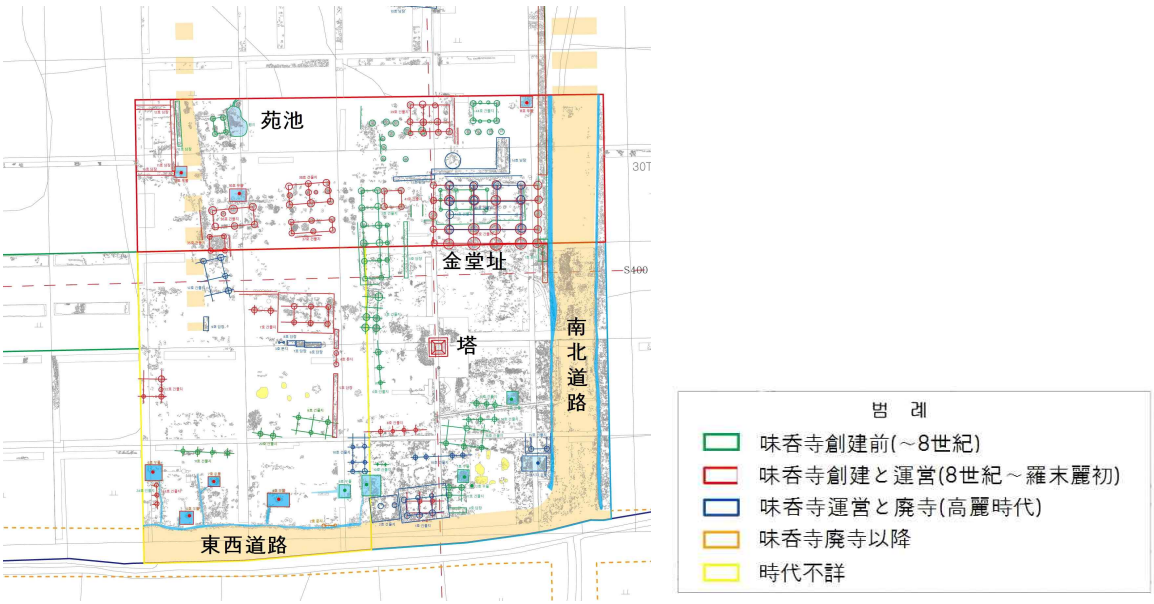


図 50 味呑寺址(坊道路と建物)

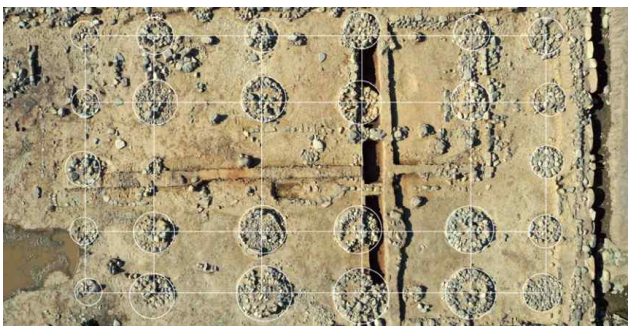


図 51 味呑寺址金堂址

図 52 味呑寺址苑池

味呑寺址は、『三国遺事』によれば皇龍寺の南側に位置し、崔致遠の古宅が南側にあると伝えられる廃石塔が残っていた場所である（図48～52）。1980年に国立慶州博物館によって発掘が行われ、その後石塔が復元された[30]。2013年から整備のための発掘が進められ、金堂と周辺の家屋、苑池などが確認され、また「味呑」の銘文が刻まれた瓦も出土した[31]。

ここは、皇龍寺址から2坊南側（S3E0地区）に位置し、道路で区画された坊の内部には金堂と塔が中心軸線に合わせずに築造された。既存の家屋などがあったところで、中門はなく、東側と南側には坊路がある。S1E1地区の第1家屋のように、坊の角に位置している。塔は8世紀後半に築造されたものであり、他の地域で確認される8世紀後半の寺院建立時期と類似している。金堂（42号建物地）は、内陣減柱型の5×4間（4.8、3.0m×3.0m）の構造を持ち、面積は256.8㎡/77.6坪である。北側には講堂が存在せず、西側には南北の塀で生活空間と区別されており、その外側に苑池がある。ここは、統一新羅時代には個人の願刹であり、高麗時代まで金堂が縮小再建されて運営され、高麗時代に味呑寺となった可能性が高い。

以上のような寺院では、講堂や回廊、中門のような構造は築造されず、個人の願刹のような構造であるため、富裕な真骨以上の邸宅と関連があると推定されている。新羅後期の最盛期には贅沢が激化し、貴族の家や所有物を制限するための記録を検討する必要がある。

『三国史記』の雑志屋舎条に示された真骨の家屋に対する規定は次の通りである。

> 真骨。部屋の長さと広さが24尺を超えることはできず、軒瓦(唐瓦)を覆ってはならず、飛尖ができず[32]、懸魚を彫刻できず、金・銀・鍮石・五彩で飾ってはならない。階段石を変えられないし、3重の階段を置くことができない。塀には梁と棟梁を設置できず、石灰を塗ることができない。簾の縁には錦、桂樹、野草羅を禁じ、屏風に刺繍することを禁じ、床を大母や沈香に飾ることはできない[33]。

24尺は1間の長さであり、12尺/12尺規模の大きさは、当時の唐大尺（29.5×12尺＝3.54m）あるいは高句麗尺（35.5×12尺＝4.26m）に基づく場合、1間の長さの合計が7.8mから8.52mになる。S1E1地区の第1家屋の金堂の最大間は6.7m、天官寺址は6.35m、味呑寺址は7.8mである。いずれも唐大尺の範囲内に収まっている。当時の規模を制限

した理由は、より広い間数の建物を作る場合、木材だけでなく必要な各種部材も増え、社会的・経済的な問題が生じるためある。そのため、規模を制限することが判断されたと考えられる。

それでは、『三国遺事』に見える35金入宅と、個人の願刹との関係について把握してみよう[34]。

「金入宅」とは、富裕で豪華な家屋を指し、その名の通り「金(gold)」が出入りする家、あるいは「金(gold、または鉄=財貨)」が入ってくる家の意味で、論文が発表された後、学界では「金入宅」の社会的性格と経済力について特に異論はないと認識されている[35]。

このように、記録に基づいて「金入宅」の意味を富裕な者の家屋と解釈する場合、当時の富裕な者の基準をどのように設定できたのだろうか。記録を見ると、南宅、北宅、上坊、下坊などの記述があり、これらは当時の位置情報を含む住居と見なすことができ、その規模はおそらく大規模な家屋であったはずである。

では、大宅の基準とは何か。まず、大宅と言われるための基準はさまざまである。第一に、広い敷地に多くの建物を所有する朝鮮時代の99間の家屋程度の規模を持つことが挙げられる。第二に、苑池や付属建物を有していることもある－当時の北宮や東宮のように苑池を所有するほどの住宅とも考えられる。第三に、特定の建物を保有することで、当時の富の基準となる建物を所有した住宅を指すと解釈できるだろう。

これまで、第一と第二の解釈が試みられたが、発掘調査からは明確に判別されず、一部の情報が得られても、宮殿との区別が可能であるかどうかは疑問視されている。そのため、本論文では特定の建物を所有した意味で「金入宅」の解釈に接近しようと試みた。

当時、坊の家の敷地内に大規模な金堂で仏像を祀っていた場合、外観上で明確に区別できるだろう。つまり、皇龍寺や興輪寺、芬皇寺のような国寺の規模とは異なり、自身の住居内に木塔と金堂を建設する程度であれば（王京S1E1地区の第1家屋の6×4間の金堂址が坊内で最大規模の建物）、相当な財産を所有する貴族と言えるだろう。また、金堂と木塔、石塔を持つ住宅は当時の王京内の位置を簡単に把握できる基準となる[36]。

すなわち、一般的な寺院とは異なり、中門、回廊、講堂を持たない構造であり、木塔と並列に配置されている第1家屋は貴族の願刹であると判断される。天官寺址も同様に石塔と木塔の配置構造が見られる。さらに、最近発掘中の味呑寺址も初期には個人の家屋内の願刹として築造されたと考えられる。

その他にも、東川洞(7B/L)発掘地域の南側の坊では廃寺址が調査された[37]。塔身石には四方仏が彫られており、周囲は現代の家屋があって寺域を確認することができない。ただ注目すべきは、寺域は広範ではなく、塔の規模も比較的小さいことである。このような特徴から、この寺院も個人の願刹と推定される。

したがって、「金入宅」を「金堂（仏像）と塔を持つ住宅」と解釈し、それを「金堂入宅」または「金人入宅」と略称する可能性を提示した。これにより、都城内の貴族が願刹を持った住居として解釈することができる[38]。また、「金入宅」は富裕な者の住居を指すだけでなく、当時の地理的な位置の基準役割も果たしていると考えられる[39])。

『三国遺事』には「寺寺星張、塔塔雁行」という記事があり、これは都城内に多くの寺院と塔が存在したことを意味している。現在、市街地内で確認されている寺址の数では、このような表現は似合わない。都城内には現在までに約30ヵ所の寺院跡が知られているが[40]（図53）、金堂と塔を有する35金入宅も含まれていると推定するのである。

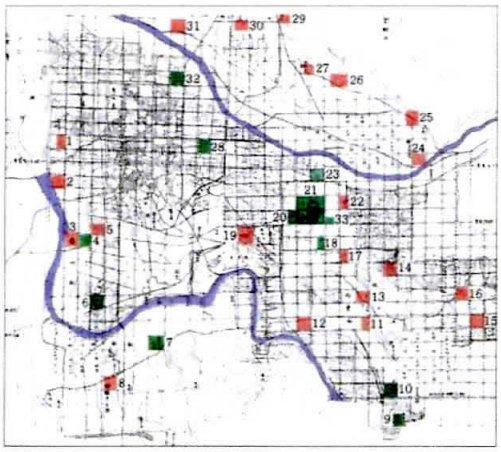


図 53 慶州寺院分布現況(朴贊文2021)

「金城」や「金京」など、「金」の意味は都城ないしは最上の意味を示すもので、『魏書釋老志』には、後漢の明帝が夢に「金人」を見て使臣を送って、仏を訪ねさせ、後に洛陽に白馬寺を建立したという記録がある。「金人」は仏像を意味している。金入宅とは、金が入ってくる家という「富潤大宅」の意味だけで解釈するのではなく、再考の余地があると言えよう。

4.一般家屋

王京S1E1地区で調査された一般家屋は、第2家屋から第18家屋まで17軒あり、坊塀内の小塀で区画されている（図54）。住宅の基本的な構造は、坊塀に門を設置し、その内側には井戸が築造されている。使用された汚水は小型の排水施設を通じて塀を抜け、道路の両側溝に連結される。また、門の内側には小さな中庭があり、中心には建物が配置され、両側には倉庫や小屋などが配置されている。これらの特徴をもとに、最も典型的な居住型の民家構造が検出された。

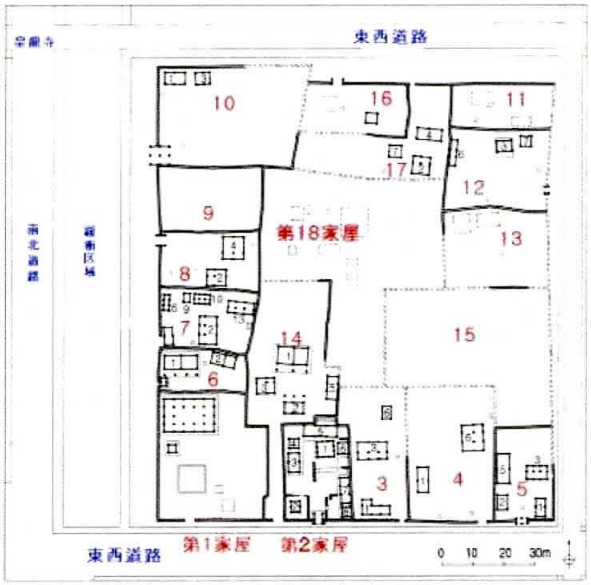


図 54 王京S1E1地区家屋配置図(李楨美2021)

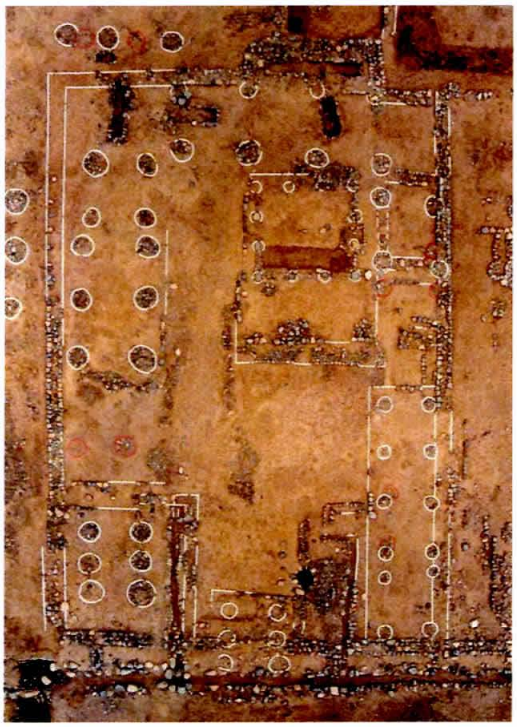


図 55 王京S1E1地区第2家屋

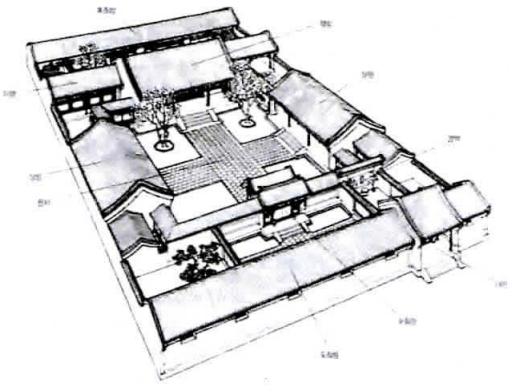


図 56 中国四合院構造模式図

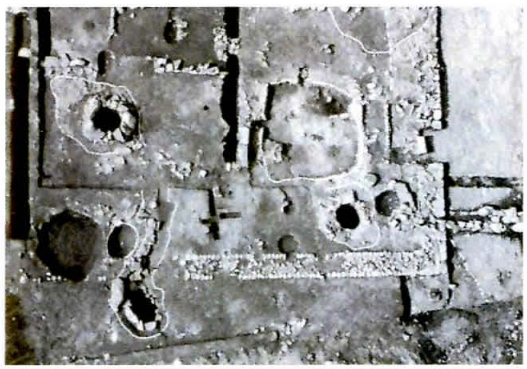


図 57 東川洞7B/L(住居址と井戸)

第2家屋は、住宅の全体の広さは南北30m、東西20mであり、面積は600㎡（約200坪）である（図55）。個別の家屋内では、建物の築造時に小壺や土器盒内にガラス玉などの地鎮具が確認されることもある。また、北側の郊外地域である東川洞7B/L遺跡では、20坪の範囲内に1棟の建物と炊事施設が確認され、地域差と身分差を明確に示している（図57）。

坊の内部には道路から分かれる路地が存在し、中央には建物が造成されていない広

場のような空間が存在することは、国立慶州博物館の南側敷地でも確認されている。この意図的な空間は、1坊内部の中央庭園の役割を果たすだけでなく、統制手段としても利用できる場所であると推定される。

第2家屋の構造は、中国の四合院（伝統的な家屋建築様式）と比較することができる（図56）。もちろん、構造的な違いははあるが、基本的には参考になる要素がある[41]。道から門をくぐると、狭くて長い前庭がある。この前庭の北側壁面、つまり影壁の中央には中庭に通じる垂花門がある。垂花門をくぐると、内庭を中心に家族の生活空間である正房や廂房が配置されている。正房は家長が居住する場所であり、東西両側には他の家族が居住する廂房などが対称に配置されている。四合院は、周代にその基本形が現れ始め、漢代には富裕層の住宅形式として定着し、明・清代まで至ったとされているが、一般の住宅だけでなく、宮殿や祠堂の建物配置にも現れることが知られている[42]。

第2家屋にある中央の建物の構造は、瓦葺屋根ではないと判断される。東には台所と見られる施設があるが、礎石も根石のない単純な構造であり、西側に配置される礎石建物とは異なる特徴が見られる。これを月台附加建築物と解釈することもあるが、実際にはまったく別の構造である[43]。

現在の礎石の高さを見ると、非常に低く、南側の出入口の床には大きな砂利が敷かれた施設であることがわかる。このような構造は、日本の江戸時代の民家構造に似ている。低い礎石と建物内部にかまど、馬舎を備えた構造は、似たような特徴を持っており、近世までの建物構造に大きな変化がなかったと考えられる。ただ防寒のため、建物の規模面には差がある。新羅の礎石建物にはオンドルが設置された例が検出されていないため、建物構造については日本の建物を参考にする必要がある。

坊と家屋の規模を具体的に考えると、『三国遺事』の178,936戸が世帯数か人口数のいずれであるのか、解釈が必要である。新羅都城全域に1,360坊の規模と、17万戸を主張する場合もある[44]。しかし、17万戸なら都市が飽和状態になり、多様な問題が発生する可能性があり、人口数と推算するのが最も妥当な見解である[45]。

第 2 節　都市基盤施設

1.道路と橋

1)道路の構造

第4章では、道路区画に関連する都市計画について取り上げた。本章では、都市基盤施設の1つである道路と橋の築造方法に焦点を当てる。

新羅時代の道路の基本構造は、砂質土と粗質土を太い砂利と混ぜて基礎部を築き、その上部に細かい砂利や真砂土を敷き詰めて固める方法で構築された。そして、路面の最上部には磨沙土や風化岩盤土などが敷かれ、人や牛馬車の通行を容易にするようにできている。長期間の使用や雨水の影響で路面が流失する場合には、部分的な修復の痕跡も確認された。このような構造は、新羅地域の地方道路にも見られるものである。

この道路の両側には、雨水と住居からの汚水を排水するために、石垣または竪穴式の側溝が平行に築かれた。このような築造方式は、様々な論文で言及されており、新羅の道路の調査や研究によっても確認されている。

慶州地域での道路遺構の精密調査が王京S1E1地区で行われてから20年が経過した（図60-63）。現在、約100カ所の道路遺構が確認されている[46]。両側あるいは片側や中央に砂利を敷いて側溝の役割を持たせたことも確認できる。地方道路の場合、築造形式に基づいて5つのタイプに分類することができる[47]。

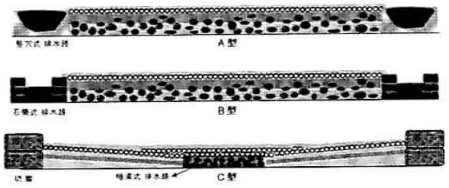


図 58 新羅都城道路遺構の型式(黃仁鎬 2006)

구분	단면형태	특징	사례
Ⅰ형 (경사가 심한 구릉 도로)		-경사가 심한 곳에 조성 -노면이 지면보다 낮다 (굴착노면식a) -단면'ㄴ'자형	-0개구간(부산 기장 고촌유적 서쪽지능북 구릉 구간)
Ⅱ형 (경사가 약한 구릉 도로)		-경사진 곳에 조성 -노면이 지면보다 낮다 (굴착노면식b) -단면'U'자형	-22개구간(김해 관동리 1호 간선도로 A구간, 창원 사림동, 김해 어라리 등)
Ⅲ형 (평지 도로)		-평지에 조성 -노면과 지면의 높이가 같다 (지면노면식a) -단면'一'자형	-5개구간(진주 옥천리, 부산 기장 명례 등)
Ⅳ형 (저지 도로)		-저지에 조성 -노면이 지면보다 높다 (성토노면식) -단면'ㅁ'자형	-6개구간(김해 관동리 1호 간선도로 C구간, 울산 굴화리 등)
기타 (수레바퀴흔만 잔존한 도로)		-자연발생적으로 생성 -노면과 지면의 높이가 같다 (지면노면식b)	-6개구간(울산 상하동, 창원 마전1·2호 도로 등)

図 59 慶南地域の古代地方道路型式分類(朴晸煥 2013)

新羅都城内では、これまで周辺地域よりも低い道路が確認されていなかった。前章で紹介した王京S1E1地区などの5～6世紀の推定官道は、自然地形の上に築造されており、両側に側溝が存在しない形式であった。坊区画道路は市街地の整備を目的として、覆土し砂利を敷いた構造であり、人為的な排水施設として側溝が設けられていた。最近、慶州校洞158-2番地遺跡において、両側の地面よりも低い地方道路に弱い傾斜を持つ丘陵道路（Ⅱ型、朴晸煥2013）の形式が確認された[48]。

図 60 王京S1E1地区東西道路(両側溝)

図 61 王京S1E1地区東西道路(5次重複)

図 62 王京S1E1地区東西道路(7～10世紀)

図 63 西部洞19東西道路(3次重複)

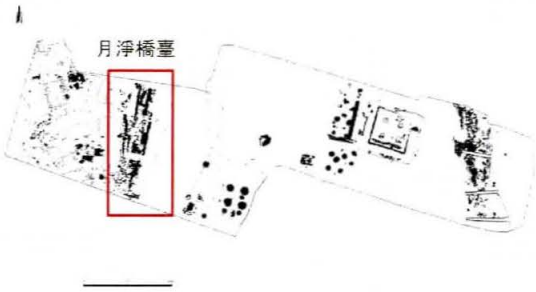


図 64 校洞158-2道路遺構

図 65 校洞158-2道路遺構

ここは、南山から月淨橋に至る丘陵地の末端部に位置し、自然な排水処理と底面から砂利を利用した南北方向の道路が検出された（図64・65）。この道路の主軸は北東から南西（N-15°-E）方向で、長さは24.7m、幅は11.8mである。道路遺構の床面は直

径10cm程度の砂利によって築造され、車輪の跡が確認された。また、道路遺構の北西側には、直径20cm程度の河原石を利用した築台が築かれたが、これは道路遺構の流失を防止するために設けられたものと推定される。このような道路は、雨水処理が迅速に行われると同時に、月淨橋から南山に移動する際に傾斜した丘陵地帯に築造された道路であることが分かる。

皇龍寺址南側の南北道路の1次時期においても側溝が確認されなかったことから、初期の区画計画には含まれていなかったと考えられる。後に効率的な排水処理を目的として、大型の排水路が築造され、道路の側溝と接続される構造が備えられた。過密な都市構造においては、自然的な排水処理の限界が明らかになったと推定される。

新羅の道路の特徴は、砂利を混ぜて築造する方式であり、これは百済や日本とは異なる。この方式では多くの時間と人材を要するため、都市化が長期にわたる必要がある。このことは、都城の移轉が実現しなかった最大の要素の一つと考えられる。

2)橋の施設

『三国遺事』には、現在の南川が蚊川、沙川、牟川、蛇等伊川などと記録されている。月城の南側の濠もその機能を兼ねており、591年には南山新城が築造され、都城と南山を迅速に連結するために橋梁が必要であったはずである。6世紀代には橋梁に関連する記録が確認されていないが、7世紀代に活躍しが元暁法師に関連する記録において楡橋の名が見られ、7世紀代半ば以前には既に橋梁が築造されていたことが分かる。その後、春陽橋と月淨橋が760年に架設され、南山への往来が非常に容易になった[49]。

記録には青橋、春陽橋、月淨橋、楼橋などの橋が言及されており、これらの橋の構造と規模が発掘によって確認された。

月城の西南側に位置する月淨橋址は、全長が60.57mであり、河床には4カ所の橋脚基礎と長さ13.5mの橋台が存在し、最近になって復元された（図66）。橋脚間の中心間距離は12.55mであり、3間が等しい間隔となっており、また、両側の橋台と橋脚址の間隔は11.4mであり、2間が等しい間隔となっている。橋脚の基礎は方形石材を「田」字形に配置し、その中央には長台石が設置され、その上には高さ6.8mで六角形の舟形橋桁が4つ積み重ねられている（各橋桁の長さは12.5～13.6m）。基礎の上には「◇」型の船首形の水割り石と長台石を用いて舟形の橋脚が築かれた。

図 66 月淨橋と楡橋

図 67 楡橋橋脚

図 68 月淨橋橋脚

図 69 春陽橋橋脚

『三国史記』には「元聖王14年(798年)3月に宮の南側の楼橋が火災に遭った」という記録がある。楼橋とは橋の上を楼閣や廻廊のような建物で覆った構造で、宮の南側でありながら、時期が798年以前の橋は春陽橋、月淨橋、月淨橋西側の木橋である。月淨橋址から出土した木材片と石部材などから推測すると、石材橋脚に木造の梁で構成された橋梁と推定される。また、各種瓦類、特に椽檻などが出土し、橋梁上部構造は瓦を覆った楼閣のように作った廊橋と判断され、月淨橋の別称だった可能性が高いと言える。

2基の石橋建立以前には、元暁法師(617～686年)と関連した楡橋と推定される木橋があった。月精橋址西側約19m地点で、南北中心距離4.9mの等間隔を置いて8つの木造橋脚（長さ7.7m、幅1.64m)が確認された。橋脚は全部で12本であったと見られ、橋の全長は63mと推定される（図66・67）。橋脚は20～30cmの大きさの角材を使用し、上流側は「X」字型に、下流側には直線状に結口し、全体形態は「∩」のような構造をなして

いる。『三国遺事』には、元暁法師が水に落ちて宮で留宿したという記録があり、月浄橋が築造される以前から橋梁があり、宮に通じる位置から判断すると、この木橋は楡橋と推定できる。

春陽橋は月城東側の推定東宮址から南山側につながる橋で、日精橋と呼ばれることもある。橋の全長は約55m、幅は12mで、月城東南側の南川上に3つの橋脚および橋台の一部が残っている（図69）。橋脚基礎部は方形ないし長方形の板石を基礎台石で築造したが、全長は 13.5～14.4mで、幅は3.5～5.4mであり、月浄橋に比べて大きい。この基礎台石の上には舟形橋脚を載せたが両端部には「∧」型の船首形水切石が置かれ、その形状は、月浄橋のように完全な「◇」型とは異なっている。柱形橋脚の長さは13.5～14.3mで、橋の全長は約55mで、幅は12mと推定される。各橋脚の間の中心間距離は14.4mおよび14.5mであり、東側の橋台と橋脚の間の距離は14.1mであるが、西側の橋台との間の距離は10.4mであり、東側がはるかに長いことがわかる。

春陽橋は、南北方向に流れる南川に対し東西方向と直交する位置に掛けられ、長さ14m、幅3.5m前後の橋脚が3つ設置されている。一方、月浄橋は南北方向に長さ13.5m、幅2.8m前後の橋脚が4つ配置されている。橋脚の数が異なる理由は、月浄橋の架かる川幅が約7m広いからである[50]。

以上のように、月浄橋の幅は約12mであり、校洞158-2番地で確認された南側の南北道路の幅は約11.8mである。これを考慮すると、8世紀中後半に設置された道路は幅が40尺（約14.2m）以内に縮小され、その範囲で築造されたものと推定される。南川の南側には一部道路の遺構が確認されているが、全体の地割を把握できる道路はまだ見つかっていない。これについては、南山から都城に出入りできる交通路であり、統制できる主要地点であることも考慮に入れる必要がある。

2.氷庫（氷室）

中国では商代から氷の採取と管理が行われ、『周礼』には春秋時代から専門的に氷を管理する官氷機構である「凌人」が設置されたという[51]。三国時代においては、智證王6年（505年）に初めて氷を貯蔵することが記録されており、氷庫典には大舎1人と舎1人の管理が配置され、その運営が確認された[52]。

朝鮮時代において、漢陽では祭祀や供養(仏)に使用される氷は東氷庫に、王室用や客接待、役人支給用には西氷庫が使用された。また、地方の郡県では河川沿いに氷庫

を建設し、運営された。慶州、安東、昌寧、清道、玄風、霊山石氷庫は18世紀に建設されたものであり、これらは国家指定文化財の宝物として指定されている。

韓国において初めて氷庫に関する研究を行った金吉植は、喪葬礼との密接な関係性を重視した[53]。最近の研究では、百済と新羅地域で確認された約30カ所の氷庫を円形と長方形系に型式分類することにより、民間でも十分に製作および使用可能であるとの判断がなされている[54]。しかしながら、これらの研究は竪穴式氷庫に限定し、新羅都城内で確認された石垣氷庫と高麗・朝鮮時代に続く氷庫築造の伝統を結びつけることはしていない。

慶州では、竪穴式氷庫をはじめとする方形石垣氷庫や六角形氷庫など、多様な形式の氷庫が確認され、さらにその規模も大型化していることが分かる。このことから、当時の慶州において氷庫典の設置が非常に重要であったことが示唆される[55]。

氷庫の構造の最大の特徴は、内部で氷が溶ける際に外部に水を排出するための排水路が下部に配置され、外部から温もりが入らないように常に地下に設置されていることである。この構造は、氷庫の製作における基本的な手法である。また、冬季の氷の採取、運搬、保管を目的として、氷庫は全て河川に近い位置に築造された。

慶州では、記録と一致する6世紀前半の氷庫はまだ確認されておらず、6世紀後半から7世紀初に築造された円形の竪穴氷庫が確認された[56]。都城の外郭地域である蓀谷洞A地区で確認された氷庫は、低い丘陵の下に配置されており、下部は石垣で築造された後に瓦で作られた排水路が設けられた[57]（図70）。

慶州の外郭地である蘆谷里(南川から9.5km南)からも氷庫が検出された[58]。氷庫の上部は7.1×7.0m、底面は5.1×5.0mであり、深さは約1.2mである。底面は中央部と排水穴のある西に向かって低くなっている。排水施設の長さは約4.4mである。出土遺物には統一新羅時代の瓦と土器が含まれている（図71）。

新羅地域である釜山楽民洞の東萊川沿いで確認された円形の氷庫には、内部に方形の区画の痕跡がある[59]。この構造は、財買井址遺跡に見られる構造と類似している。長い石垣排水路または瓦排水路が地下深く埋められ、丘陵上部から東萊川まで続いている。出土した蓮華文軒瓦から、この遺構が7世紀代のものであると推定される（図72・73）。このように円形で作られた氷庫は、尚州屏城洞・軒新洞遺跡と星州柳月里遺跡でも見られる[60]。

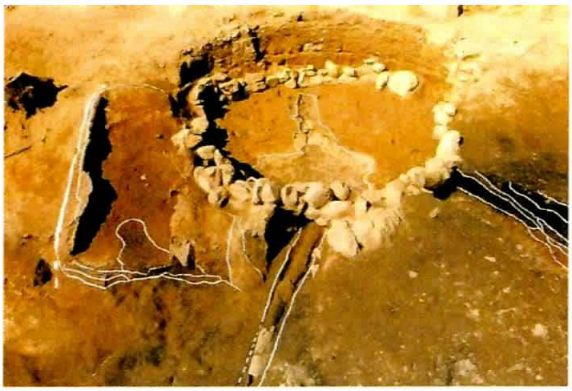


図 70 慶州蓀谷洞A地区氷庫

図 71 慶州蘆谷里氷庫

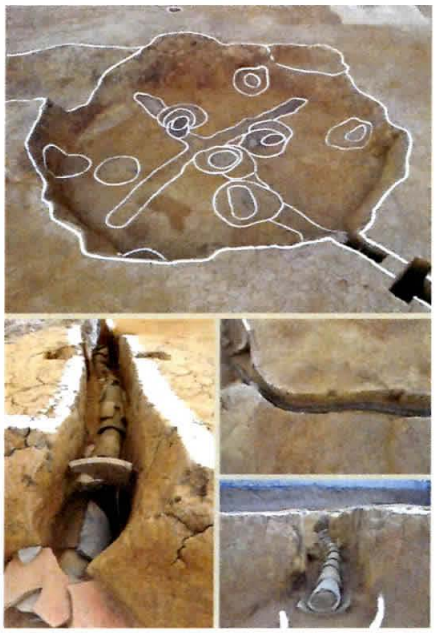


図 72 釜山楽民洞11号氷庫

図 73 釜山楽民洞12号氷庫

図 74 国立慶州博物館南側敷地推定氷庫

図 75 慶州東川地区都市開発事業敷地推定貯蔵庫

図 76 慶州財買井址氷庫

図 77 慶州財買井址氷庫の出水口

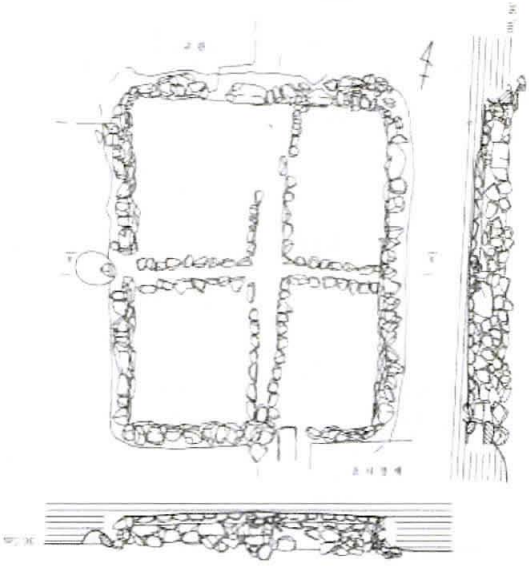


図 78 慶州財買井址氷庫図面

図 79 慶州九黄洞苑池遺跡六角形氷庫平面図

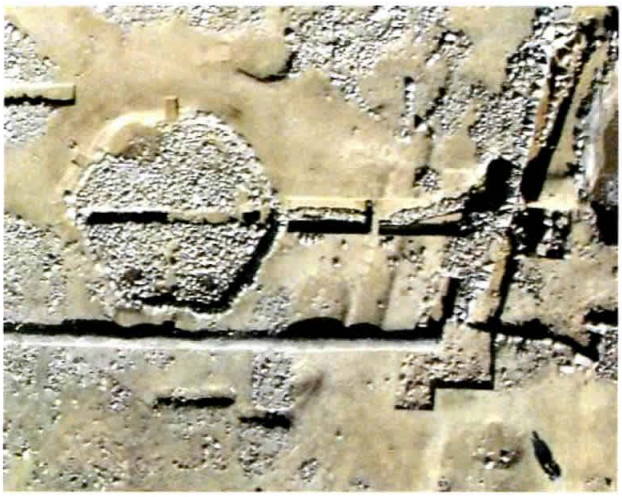


図 80 慶州九黄洞苑池遺跡六角形氷庫

図 81 芬皇寺西側氷庫(石造遺構)

統一新羅時代の氷庫としては、国立慶州博物館南側敷地からは五角形の石造遺構が確認された[61]。第4章において東宮と関連した施設である東宮衙がある場所としたところである。この遺構は貯蔵庫の形状をしており、位置的には南川と近く、丘陵のような地形に築造されている。北側には急な段差がある。床全体は確認していないため、排水路施設は見つかっていない。この遺構は氷庫と推定され、貯蔵庫の可能性も考えられる（図74）。北西方向の100m地点では、氷庫施設は確認されていないが、地下式の瓦排水路が検出された。また、東川地区都市開発事業敷地では、大型の石造施設（A区域6号）が貯蔵庫と考えられており、内部の長さは9m、幅は4.8m、最大深さは1.3mである[62]（図75）。この施設は、最近益山で確認された貯蔵庫と比較する必要がある。

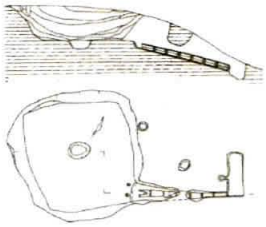
財買井址では、6.1×4.7m大きさの方形石造遺構で、地下排水路が中央下段に築造され、床面には「十」型に区画されており、中央から水が排出されるようになっている[63]（図76～78）。統一新羅時代の石造氷庫の構造は、高麗・朝鮮時代まで続く伝統と考えられる。この遺構は月城に近接しており、南川と排水口を連結しているため、南川沿いでの調査が進めば、さらなる発見が期待される。第5章では、この場所は祭儀施設と関連した社稷壇と推定した。

九黄洞苑池遺跡では、六角形建物址の用途については、排水施設が連結され、水と関連した施設と報告された[64]。内部の六角形地点に木柱が立てられるため、上部にはあずま屋が作られ、その下に水が満たされていたと報告されているが、地下に排水施設が続いていることから氷庫構造であることは確実である（図79・80）。各辺の長さ3.4～4.1m、内幅は6.8～7.1mである。上部に行くほど内径が狭くなり、上段部分は基底部と比べて約50°の傾斜がある。内部に6柱の木柱が立ててられる構造は、朝鮮時代の氷庫で天井を支えるための施設と同じである。発掘当時はその用途が特定できず、仏教儀式にかかわる遺跡の可能性も提示された[65]。芬皇寺西側地域で確認された楕円形の石造遺構も水と関連した施設と考えられ、氷庫の可能性が高まっている（図81）。慶州の北宮、東宮、現在の財買井址（推定社稷壇）などから判断すると、河川沿いの格式高い建物には全て氷庫が築造され、使用されたものと推定される。

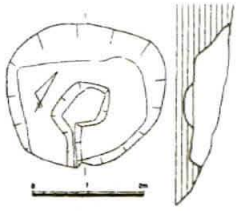
氷庫の構造を理解するために、百済地域と朝鮮時代の氷庫を比較して検討したい。百済地域で発掘された4～5世紀の氷庫の構造は円形を帯びていることが示されている（図82）。2015年、扶餘旧高校里クドゥレ一帯で百済時代と朝鮮時代の氷庫が確認された[66]。

화성 향남 2지구 동서간선도로 문화유적 F지구 1호 수혈

연기 나성리유적 저습 8구역 C지점 내 KK-077



공주 정지산 유적 1호 수혈



공주 정지산 유적 6호 수혈

図 82 百濟氷庫（華城·燕岐·公州）

図 83 扶余旧校里氷庫

図 84 扶余旧校里氷庫

図 85 益山氷庫

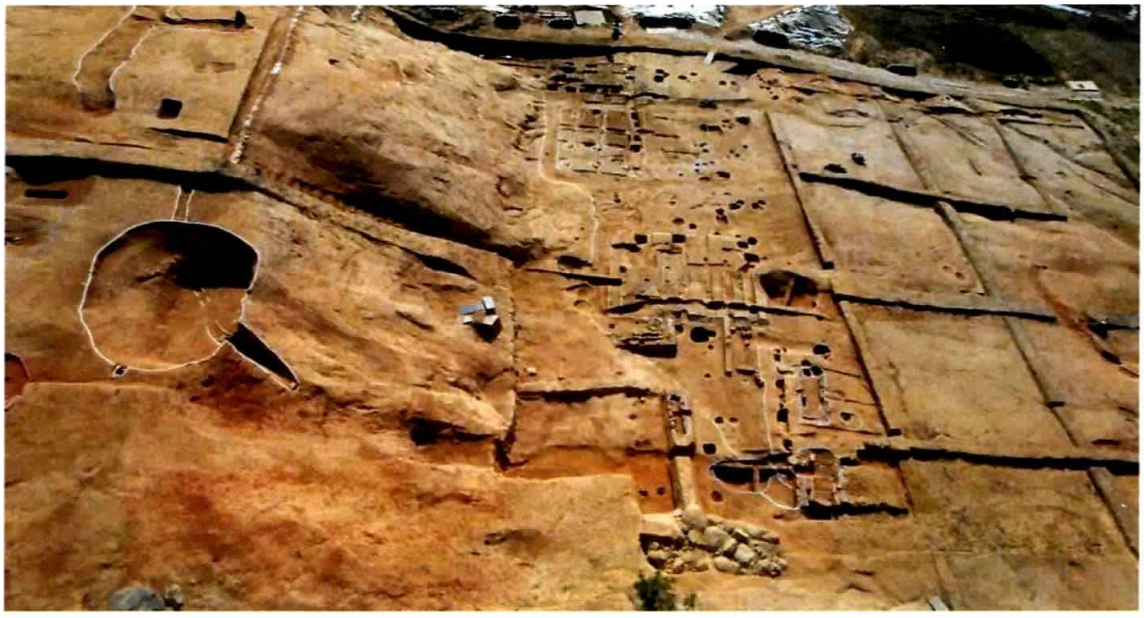


図 86 扶餘花枝山氷庫と建物址

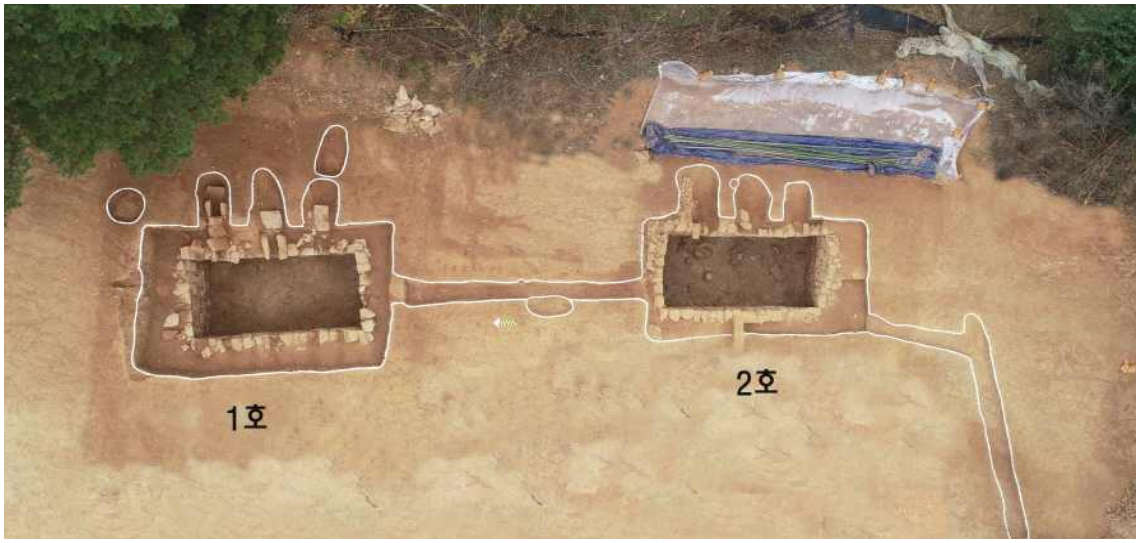


図 87 益山低溫貯蔵庫1·2号

図 88 益山低溫貯藏庫1号

図 89 益山低溫貯藏庫2号

図 90 益山低溫貯藏庫土器·穀物類種実遺体

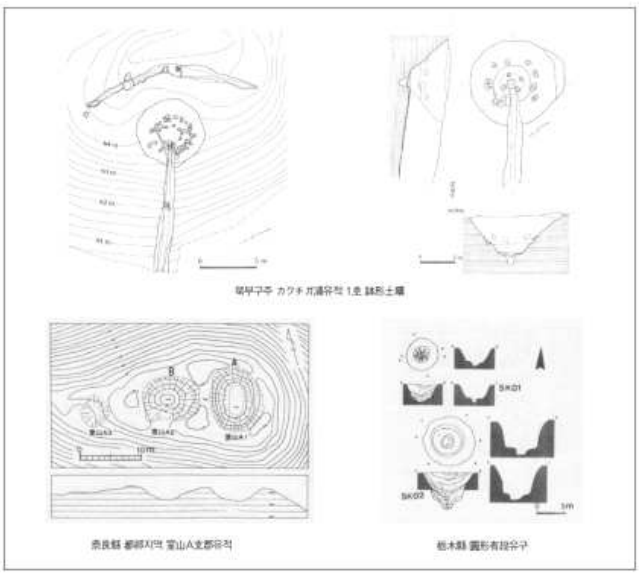


図 91 日本氷庫(ユ·ビョンロク外2022)

図 92 扶余官北里「マ」地区木槨庫
(推定氷庫)

図 93 扶余旧校里朝鮮氷庫

図 94 洪城五官里朝鮮氷庫

図 95 安山氷庫(3次)

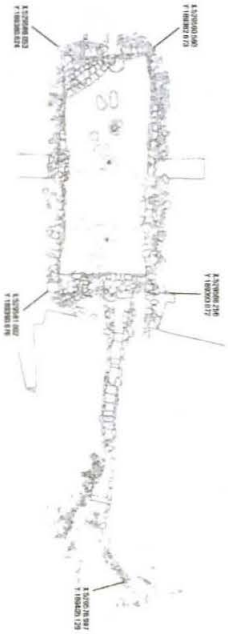


図 96 安山氷庫(1次)

図 97 玄風石氷庫内部

図 98 石氷庫内部壁石構造

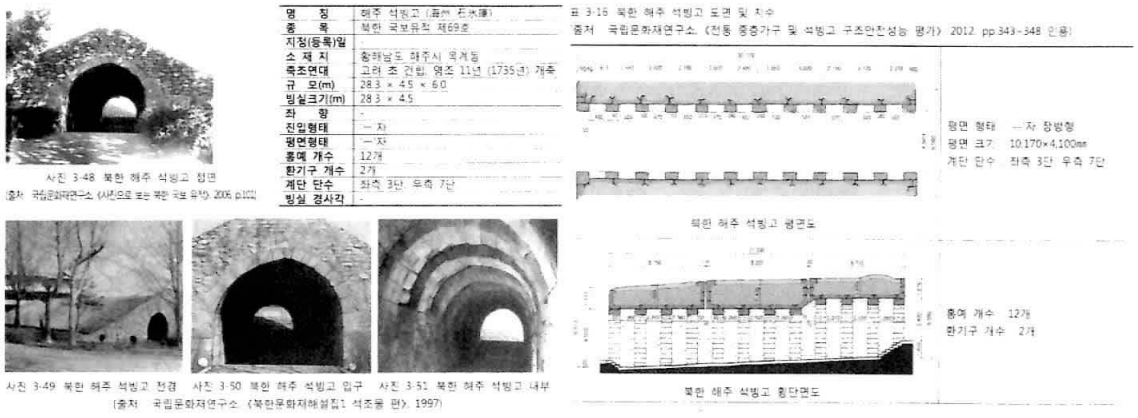


図 99 北韓海州石氷庫

図 100 北韓海州石氷庫構造図

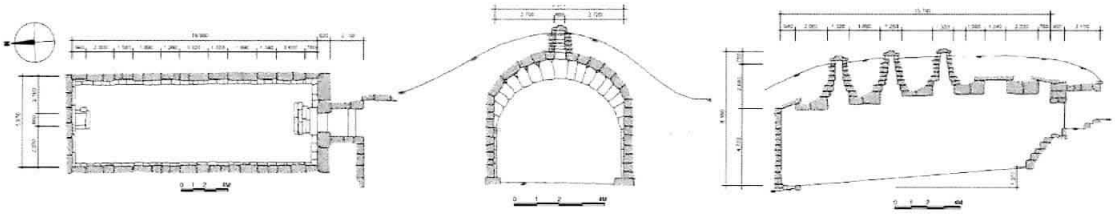


図 101 慶州石氷庫図面(文化財管理局 1994『韓国의 石氷庫』)

この氷庫は、長方形の竪穴と、水を排出するための排水路で構成されている。その規模は平面7.2×4.7m、深さ1.9mである。竪穴の底は中央部が低くなるように造成され、中央にはT字型の水流入部があり、排水路と連結されている。地下排水路の現存長さは4.6mであり、幅は0.7m、深さは0.7mである（図83・84）。

益山でも発掘された泗沘期の氷庫も同様に、隅丸方形の構造をしており、規模は4.8×3.6×2.5mである。竪穴排水路の長さは8.6mである[67]（図85）。このほかにも、益山王宮里遺跡からは瓦排水路が検出しており、氷庫と関連する遺跡と推定される。

既存の扶餘官北里発掘調査では、「マ」地区で3基の木槨水槽と導水管が発見されたと報告されている[68]（図92）。しかし、瓦で製作された地下式排水路の構造から見て、東莱楽民洞と非常に類似していることが分かる。このことから、氷庫に関して再検討が必要である。扶餘官北里「タ」地区では木槨庫3基が低温倉庫と推定され、「ラ」地区では石槨庫2基と木槨庫2基、さらに長方形と方形の貯蔵竪穴が発掘された。また、2022年11月には扶餘花枝山でも大型竪穴氷庫が発掘された。この氷庫の大きさは7.4×5.5×2.1mであり、出水口は2mが残っている。この場所は離宮址と推定されており、壁柱建物址や楚石建物址群も同時に確認された[69]。これまでに9回の調査が

実施され、八角井戸などさまざまな遺構が調査された（図86）。

最近、益山で発掘されたのは外部空気の出入り口が3つ備えられた百済時代の大型石垣低温貯蔵庫2基である（図87～90）。ここでは風化岩盤層を掘削した後、石壁で築造された。1号の貯蔵庫は4.9×2.4×2.3m、2号の貯蔵庫は5.3×2.5×2.4mの大きさである。通気口は約50cmの間隔で配置され、外側から内側に向かって19°～23°の傾斜がある。これにより、貯蔵庫内部の熱い空気が自然に外部に排出されるように設計されている[70]。

統一新羅時代から石垣氷庫が築造され、その伝統は高麗時代まで受け継がれていることがわかっている。高麗時代の氷庫は北朝鮮の海州で確認されており、韓国の最大規模で、大きさは28.3×4.5×6.0mである。ただし、1735年に改築されたため、高麗時代の姿が維持されているかは確認できない。このような石壁で構築される氷庫の構造は、朝鮮時代まで続いている（図99・100）。

朝鮮時代中期までは、石壁を築き、天井を土や木で覆う構造である。扶余旧校里の朝鮮時代の氷庫は16.4m×6.0mの大きさで、両側の壁は石槨型で築造されている（図93）。内部には掘立柱穴があり、天井を支える構造と推定されている。地下排水路は残存する長さが17.3mであり、深さは0.4mのみ残っている。朝鮮前期の氷庫は石壁で構築された氷庫であり、洪城五官里遺跡から確認された氷庫と形状や構造の面で非常に類似している[71]。洪城五官里の氷庫の場合、長方形で幅が狭く、内部に木柱が立てられ、その規模は23×5.5×1.5mである。これは朝鮮前期の典型的な築造方法である[72]。

安山邑城の氷庫は初期の築造後に使用され、その後再び内部が縮小された痕跡が確認された[73]。初期の石壁施設の規模は10×4.0×1.4mであり、6段の階段施設がある。床には屋根を支えるための掘立柱の木柱が残っている。出水部には大型の板石が使用されており、石垣地下排水路は最大で11mまで確認されている。この施設は一度改築され、その後内部の規模は7.3×4.0mに減少し、短軸が更に2.5mに減少した（図95・96）。

18世紀に築造された慶州、安東、昌寧、清道、玄風、霊山の石氷庫は、ほぼ同じ構造をしている。慶州石氷庫は、1738年に木製の氷庫を石で作り直し、4年後に現在の位置に移動したと記録されている。下部は全長約16.5m、幅5.87mである。全高は排気口を含めて8.16mであり、氷の貯蔵可能な高さは4.7mである。入口部と排水口の高さの差は1.37mで、安山の氷庫よりも深い。

安東石氷庫（1737～1740年）、青道石氷庫（1713年）、霊山石氷庫（朝鮮後期）、昌寧石氷庫（1742年）、玄風石氷庫（1730年）を見ると、これらの氷庫の構造はすべ

て慶州の氷庫と同様であり、18世紀からは天井まで石で作られていることが分かる。

以上のことから、4〜5世紀の百済地域では円形の竪穴が氷庫として製作されており、6〜7世紀までは新羅地域と類似していることが分かる。しかし、7世紀の泗沘地域では長方形の構造の氷庫が製作されており、統一後の7世紀後半からはこの氷庫が新羅に影響を与えた可能性がある。さらに、8〜10世紀には財買井址と九黄洞苑池遺跡から方形と六角形の石築氷庫が初めて現れ、この伝統は高麗・朝鮮時代の細長方形の氷庫へと発展していった。18世紀以降、石で完全な氷庫が築造されるようになった。南部地方では氷庫の長さが短くなっているが、海州では依然として細長方形の形状を維持していることが分かる。新羅都城内で築造された氷庫は、当時の上流層の祭祀に関連するだけでなく、生活水準を考える上で重要な資料となる。特に石で築造された様々な石造遺構の用途も明らかにする必要があり、重要な課題である[74]。1970年代までは、釜山地域においても河川が凍って氷採取が可能であったが、日本の場合、山岳地帯で古代の氷庫（氷室）が確認されている[75]。

第 3 節　溫石の伝来と使用

1.温石の定義

溫石は「燒いた軽石を布などに包んで身体を温めるもの、または塩を固めて燒いたもの、瓦などに塩をまぶして燒いたものを用いる」と広辞苑に説明されている。熱した石を体に当てて暖を取る暖房器具であり、韓国では病人の懐に入れて体を温めるのに使われると定義されている[76]。

滑石は彫刻が容易であり、日本では滑石製の勾玉や武器模倣品、頸飾りなど祭祀用や副葬用として古墳時代に多く製作された。また、奈良時代以降、生活遺跡の発掘においては方形や長方形の滑石に紐を吊るせる円孔が穿たれた遺物が出土している。報告書では、これらの形状の遺物をすべて温石として記載している。これらは大宰府、奈良、鎌倉、江戸時代にかけての生活遺跡から出土している。

韓国では、初期鉄器時代に銅鏡の鋳型として滑石が出土した例があるが、6世紀まで滑石で製作された遺物はほとんど出土していない。百済の場合、6世紀末から7世紀初めにかけて、軍守里寺址から出土した蠟石製の如来坐像が代表的である。また、仏像

の破片なども紹介されている[77]。滑石よりも柔らかい材質である蠟石は、黄緑色や茶色をしている[78]。 7世紀代の住居遺跡などから少しずつ出土している。

新羅では、6～7世紀代の遺跡では滑石や蠟石の遺物がほとんど出土しなかったが、統一新羅時代の遺跡からは多様な形式の遺物が大量に出土している。墓に副葬される舎利壺や十二支神像、仏像、装飾品や装身具、様々なサイズの容器ややかん、錘など、生活用品全般に使われていった。高麗時代以降は、仏像や釜、やかん、錘などがあり、近代製品としても伝来している。ただし、統一新羅時代以降の遺物は種類が多様でない傾向がある。

慶州では統一新羅時代の都市遺跡から扁平で楕円形の滑石製遺物が多く出土している。これまでの研究では、正確な用途が分かっておらず、滑石製の楕円形石製品に円孔があり、錘と類似した形状も錘型石製品などと報告書に記載されている。また、尚州伏龍洞の統一新羅時代の住居遺跡からも紐を連結するための円孔があり、文字が書かれた滑石製品が出土したが、これらの正確な用途はまだ把握されておらず、錘と関連した遺物と推定されている。

このような形状の統一新羅時代の遺物を日本の遺物と比較した結果、温石として使用されたことが分かる。韓半島で温石がいつまで使用されたかは明確ではない。朝鮮時代中期以降、オンドル暖房施設が全国に普及し、個人の暖房器具は使用されなくなり、温石の用途も忘れられるようになった。近代化以降、温石は日本から伝わり、主に病院で使用されることが知られている。

日本で出土する温石の最大の特徴は、紐をつなぐための円孔を穿っているものである。一方、慶州で出土する遺物の中には円孔がないものが多く見られる。また、中国唐から伝来した滑石製の遺物も多数存在している。これらの遺物がどのように伝来し、どのように使用されたのかについて、日本で出土した温石の型式との相互比較を行い、考察してみたい。

2.中国滑石遺物

中国で製作された滑石製の遺物は、所蔵に至った経緯は不明であるが、唐時代の墓から出土した可能性が高いと推定されている。日本で所蔵品として紹介されている遺物を確認してみよう。

図 102 滑石製盒(京都市橋本関雪記念館)

図 103 滑石脚杯(奈良大和文化館)

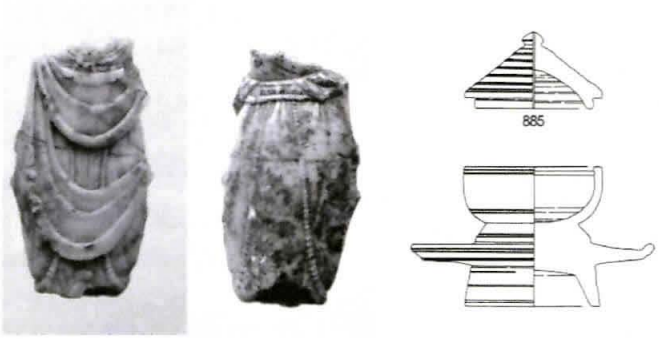
図 104
扶余軍守里石造如來坐像

(国立中央博物館)

図 105 扶余半跏思惟像(中博)

図 106 扶余旧校里百済建物址の石製遺物

図 107 雁鴨池出土滑石獅子像
(国立慶州博物館)



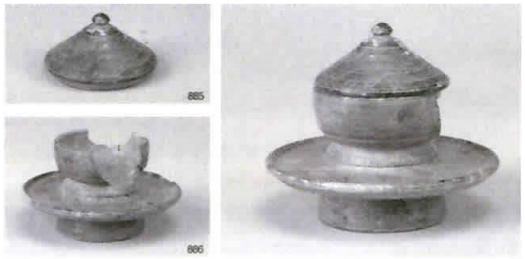


図 108 九黄洞苑池出土滑石菩薩像と托盞

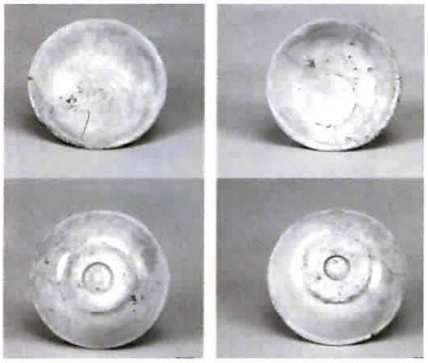
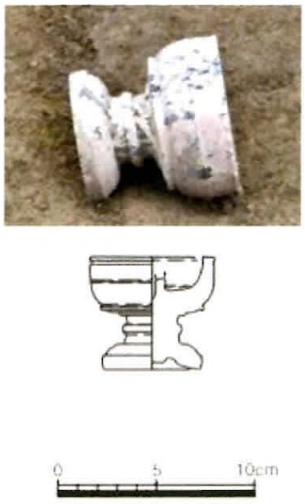


図 109 九黄洞苑池出土中国白磁

図 110 王京S1E1出土滑石装飾

図 111 慶州東川洞798出土滑石遺物



京都市橋本関雪記念館が所蔵する唐代（7～8世紀）の遺物は、滑石製の盒と碗のセットで、合計7点である。盒は高9.2cm、口径25.6cmで、碗は高5.5cm、口径7.9cmである。いずれも灰色系で、濃い青色の点がある原石から製作された。実際に使用された場合、色が変わる可能性があるが、写真上ではその変化は確認されておらず、古墳からの出土品と推定される（図102）。大きさから見て、茶碗として製作されたものと思われる。奈良大和文化館が所蔵している唐代の遺物は、滑石脚杯で、高6.2cm、口径6.8cmである。原石の色合いは黄色で、黒い線がある。これらの遺物は世界美術大全集でも紹介されている[79]（図103）。

中国の遺物については、まだ調査が進んでいないため、図録に掲載されているものをまず紹介した。韓国では、滑石製の遺物が主に7世紀の百済時代から出土しており、産地の存在が指摘されているが、百済や統一新羅時代の遺物の産地は明らかにされていない。最近、韓国で開発が進んでいる鉱山と製作地は、全羅南道の蘆花島と海南など全羅道一帯にある。これらの遺物の色調はグレーから青灰色系である。韓国では、ピンク色や黄色に黒い線を持つ原石は産出されていないため、これらは中国製品の可能性が高いと考えられる。したがって、この点を念頭に置いて比較してみようと思う。

3.百済滑石遺物

扶余軍守里寺址から出土した石造の如来坐像は、高さ12.5cmである。これらの像は6世紀代に北魏の様式の影響を受けて百済で製作されたものと考えられている。もう一つの扶余出土半跏思惟像とも共通しており、色合いは褐色を帯びている。ただしこれらの原石の産地についてはまだわかっていない（図104・105）。

7世紀代、百済建物址の瓦の堆積層から、石材質は異なるが、温石と推定される遺物が出土した[80]。報告書ではこれらを砥石として紹介しているが、温石に見える。長さ12.7cm、幅7.1cm、厚さ3.0cmである（図106左）。

この遺跡の道路遺構の側溝内から出土した滑石製蓋（高さ2.7cm、口径8.4cm）は、統一新羅時代の遺物と類似しており、その後流入した可能性も考えられる（図106中下）。このような容器は、統一新羅時代に製作された遺物が百済地域の公州などでも出土している。さらに、長さ11.2cmの錘、および温石と推定される滑石製の石板（104中上、長さ32.9cm）や方形石製の盒などもある。また、高麗時代の遺物包含層からは、焼けた石材も出土し、温石として利用された可能性が想定される。7世紀代の温石

と推定される遺物は、特定の形態を示すものではないが、これらの遺物が温石として使用されたものと推測される。

4.統一新羅時代の滑石遺物

慶州では、様々な滑石製遺物が出土している。まずは、唐から流入されたと推定される遺物を紹介する。雁鴨池（月池）出土の石製獅子像は2点あり、香炉の蓋として使用された。この遺物は、唐の滑石脚杯と同じ色であり、獅子の姿も634年の芬皇寺模塼石塔や 737年の聖徳王陵、750年の仏国寺多宝塔の獅子像とは異なる特徴が見られる。遺物の類例はほとんどない。この遺物は7世紀代に新羅で製作されたものと考えられたが[81]、色と型式から見て、唐におけるから製作・輸入されたものと推定される（図107）。

九黄洞苑池遺跡から出土した滑石製の観音菩薩像と羊型装飾は、黄色を帯びている。托盞は茶を飲む際に使用されるもので、11世紀以降の高麗時代には青磁として製作されたが、10世紀の出土例としてはこれが初めてである。この托盞と共に鎮檀具として出土した中国白磁は、唐以降の五代十国から宋時代の遺物であり、一緒に輸入されたものと推定される[82]（図108・109）。

王京S1E1地区から出土した羊形装飾や装身具も黄色とピンク色をしており、異質な姿をしている。これらはやはり唐の輸入品と推定される[83]（図110）。

東川洞798番地から出土した燭台は、黄色の色に黒色の紋様があり、台脚部と連結する部位にある1組の突台は奈良大和文化館の滑石脚杯と非常に似ている。高さは5.8cm、口径は6.2cmである[84]（図111）。

慶州で出土したこれらの遺物は、すべて新羅遺物とは異なる要素を有しており、唐の遺物に似ているため、輸入品とみなすことができる。これまではすべて新羅製品と認識されていったが、新たな比較資料としての検討が必要である。

次に、温石形遺物について見ていくことにする。慶州の都心地または近郊に位置する統一新羅時代以降の生活遺跡からは、多くの出土例がある。寺院の場合、寮舎のある地域や皇龍寺の北側の付属建物などからは、円板型の滑石製品が出土することがある。しかし、これらの滑石製品の用途については、これまで知られていなかった。王京S1E1地区から出土した温石形遺物は、大きさと形が多様である。その中でも円形または半円形

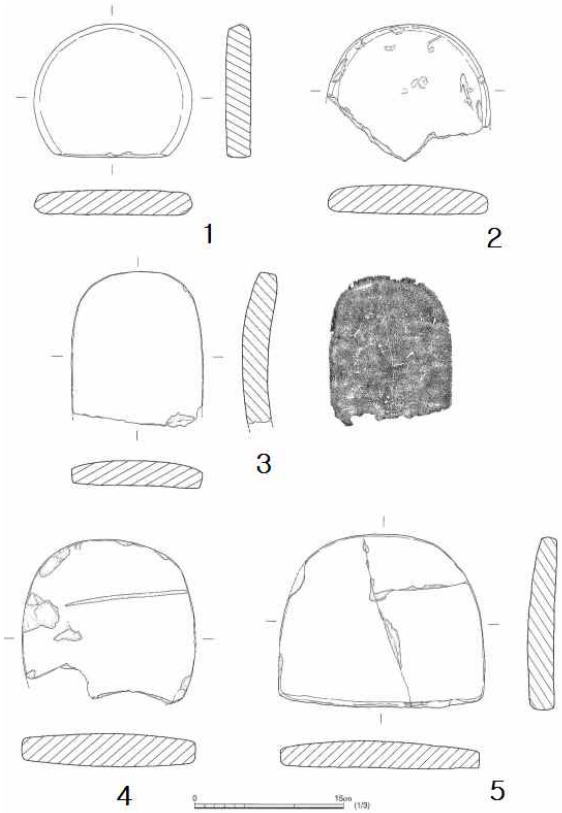


図 112 王京S1E1地区出土溫石

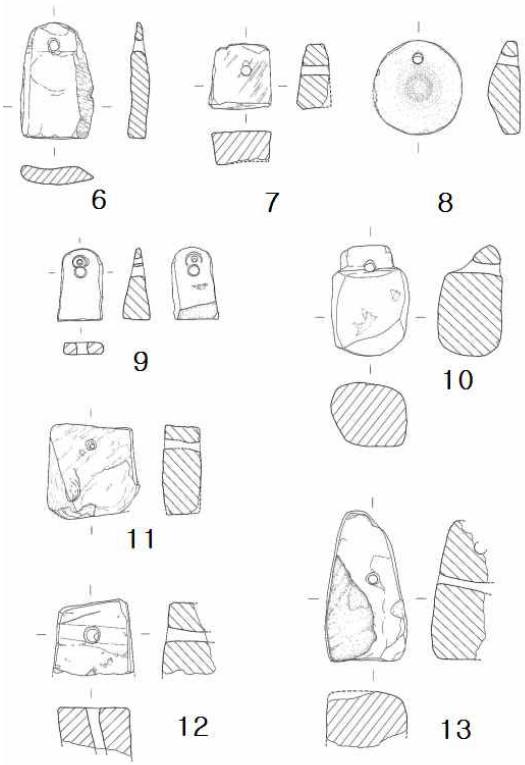


図 113 王京S1E1地区出土溫石(10:錘)

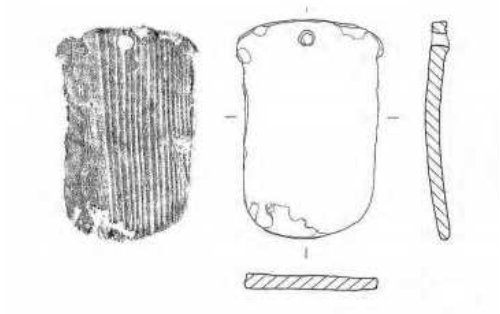


図 114 王京S1E1地区出土溫石型土製品

図 115 仁旺洞寺址出土溫石

図 116 芬皇寺出土溫石

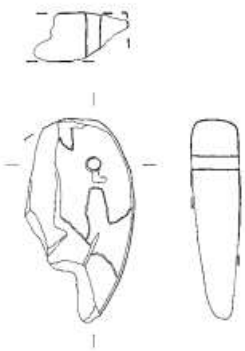
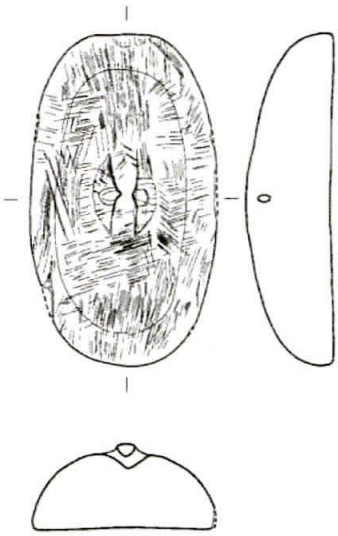


図 117 皇南洞123-2
建物址10出土溫石

のものが出土することもあるが、一般的には（図112-3）や（図115）の形式が最も多く出土している。これらの遺物には中央に円孔を穿つための跡が見られる。大きさが15-20cm程度であり、厚さは3cm以下である。これらの遺物は一部が若干の曲面を呈し、片面は平らに仕上げられ、上面は曲面で作られたものも多く出土している。長期の使用により、破損した遺物も多数見受けられる。図113は方形、円盤形、長方形ですべて有孔形である。錘のように円孔があるが、用途が分からず、錘形石製品と呼ばれたりした。特に（図113-10）の錘は形がはっきりしており、百済遺跡である扶余旧校里から出土した品と類似している。これらの遺物は全体的に小型で、厚みがある。一方、図114は土製品であり、円孔があり、温石の用途に使用されたことが確実である。慶州では、瓦または滑石を直径約10cmの円形に整え、中央に円孔を穿つ形状の遺物が非常に多く出土している。このような遺物も温石の用途に十分に使用できる可能性があり、これについての検討が必要である。



（図116）は、芬皇寺の東側から出土したもので、隅丸長方形をしており、長さは13.6cm、厚さは4.1cmで、このような型式はそれほど出土していない。第4章で、官庁の建物と推定された皇南洞123-2建物址10から出土した遺物は、円孔のある温石である（図115）。ところが、建物址10は西側の長舎建物の裏側、すなわち外側建物で宿舎だった可能性を示している。寺院でも温石が出土するのは、寮舎や付属建物が位置する場所である。

統一新羅時代には、全国各地で滑石の遺物が出土している。中には銘文の刻まれた舎利壺もあり、都市遺跡では主に生活遺跡から出土している。特に尚州の伏龍洞では、坊の住居空間周辺で特異な温石の出土が注目されている[85]。

図 118 尚州伏龍洞256出土温石

この遺物は、竪穴遺構から出土した

もので、長さ18cm、幅10cm、高さ4.5cmの長楕円形である。断面は半円形で、底面は平らで上面は曲面で製作されている。上面には紐を通すための円孔がある。報告書では、文鎮や蓋と推定されている。遺物の全面には多くの文字が見られ、「沙伐州姫萬(?)韓公」、「沓里娘」、「知乃巴里娘」、「定(?)爲里娘」、「叱爲里娘」、「白刀里娘」、「古比石乃爲里(?)」といった地名や女性の名が判明している。沙伐州は統一新羅時代の9州5小京の一つの都市であり、現在の地名は尚州となる（図118）。

統一新羅時代の各遺跡から出土した滑石製温石は、8世紀から10世紀までの時期にわたり、さまざまな大きさと形状がある。しかし、これらの遺物の型式分類は非常に難しい。慶州では、最も多く発掘されている都市遺跡では、通常、発掘地域の文化層が1-1.5m以内に少なくとも300年以上の遺跡が重複して密集しているため、石製品が層状に区分されることが困難である。また、これらの石製品は土器のように大量に出土するわけではなく、長期間にわたって使用されるため、形態の分類のみが可能である。

以上から、15～20cmの大きさを持つ半円形または楕円形の型式と、10cm以内の方形または長方形の温石に分類される。半円形や楕円形の遺物は大きくて重いが、方形や長方形の遺物はそこまで大きくなく、円孔があり、紐を通して持ち運ぶこともでき、携帯用としても利用できる。これらの遺物は防寒用として多種多様に作られたことが分かる。

表1 慶州地域出土温石

図	遺跡	出土遺構	規格(cm)	特徴
112-1	王京S1E1地区	18家屋	13.5×15.7×2.5	円形
112-2		北側東西道路	13.8×16.1×2.9	
112-3		13家屋	15.4×13.1×2.6	
112-4		北側緩衝区域	16.5×17.3×3.4	
112-5		18家屋	17.4×19.8×2.7	
113-6		4家屋	8.0×4.9×1.3	
113-7		11家屋	4.5×4.2×2.2	
113-8		3家屋	6.5×6.0×2.2	
113-9		18家屋	4.9×2.7×1.7	
113-10		7家屋	7.7×4.1×4.4	錘
113-11		其他地域	6.5×6.1×2.6	
113-12		9家屋	5.2×5.4×3.4	
113-13		南側東西道路	10.3×5.5×3.7	
114		13家屋	16.6×11.0×1.2	円孔土製品
115	仁旺洞寺址	西回廊址東側	19.8×14.1×3.0	
116	芬皇寺	東側地域	13.6×8.6×4.1	長方形
117	皇南洞123-2	建物址10	6.0×3.2×1.6(破片)	有空

5.日本滑石遺物

日本から出土した滑石製の遺物のうち、温石に焦点を当てて、主に大宰府、奈良、鎌倉などで報告書に掲載されたものを中心に紹介する。温石には多くの出土例があり、その大きさも様々である。江戸時代には滑石だけでなく他の石材も使用された。これらの遺物が共通して持つ特徴は、全て紐を通すための円孔がある点である。

7世紀代に築造された対馬金田城跡では、新羅土器などとともに出土している。これらの遺物は、8世紀に使用された可能性がある（図119）。

九州では、国際交流を担当していた大宰府で生活用の滑石製温石が多量に出土している（図121～124）。これらの遺物は、中国陶磁器とともに隅丸形や方形、長楕円形など、多様な形式がある。図123は報告書では磨石と表現されているが、その形状や大きさから温石と判断され、長沙窯の青磁片と一緒に出土した。この遺物は長さ15.1cmで、長く厚い特徴を持ち、慶州で出土した温石と類似している。

大宰府周辺の都市遺跡からは、滑石ではないものの、用途不明の円形石製品が多数土坑から出土している。これらの遺物は温石として使用された可能性が高いと考えられる。8世紀や9世紀の大島御嶽山遺跡や満宝山祭祀遺跡からも円孔がある遺物が出土している。これらは航海のための祭祀などに使われた遺物である。

奈良では、山田寺跡の出土品と平城京からの出土品があり、これらは8～9世紀に使用されていたことが確認されている。山田寺跡の遺物は蛇紋岩製で、上面はやや曲面を呈しており、底面はほぼ平坦である（図128）。一方、平城京からの出土品は方形で、サイズが小さく、携帯用としても利用可能である（図127）。

表2 日本出土温石1(対馬・九州・大宰府・奈良)

図	遺 跡	規格(cm)	出 典
119	対馬金田城跡	6.5×4.5×2.7(円孔) 9.4×7.5×4.0	対馬博物館 平常展示図録 2022 (博物館協助)
120	36SK010	5.8×6.4×1.8	大宰府市教育委員会 2020『大宰府条坊跡 』50 p17 p88
121	109次堆積層	6.6×3.5×2.0	
122	236-1SD360	5.1×3.5×1.6	大宰府市教育委員会 2008『大宰府条坊跡』36 p91 p93 p84
123	236-1SD786	15.1×10.0×5.4	
124	236-1SX722	8.0×4.7×2.7	
125	大島御嶽山遺跡	長14.2	九州歴史資料館 2018『大宰府史跡発掘50周年記念特別展 大宰府への道 -古代都市と交通-』
126	宝満山祭祀遺跡	長5.2	
127	平城京	7.3×7.6×2.5	奈良県教育委員会 1985『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』
128	山田寺跡	12.1×16.5×4.0	奈良文化財研究所 2002『大和山田寺跡(本文)』

図 119 対馬金田城跡

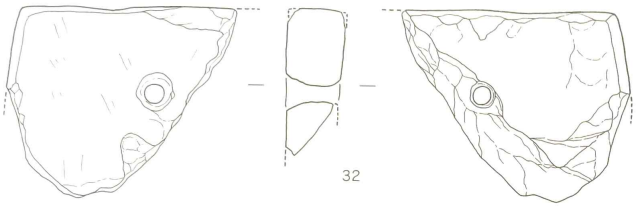


図 120 大宰府市36SK010

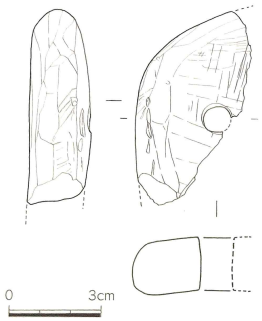


図 121 大宰府市109次堆積層

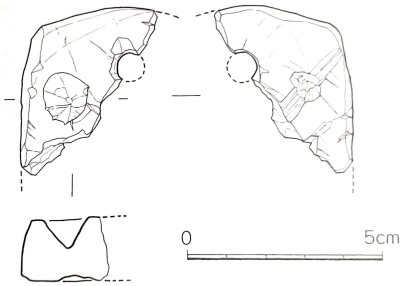


図 122 大宰府市236-1SD360

図 123
大宰府市236-1SD786

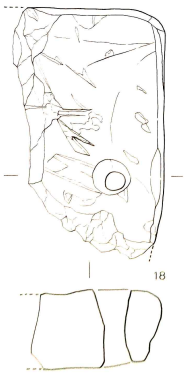


図 124
大宰府市236-1SX722

図 125 大島御嶽山
遺跡(9世紀)

図 126 宝満山祭祀遺跡
(8世紀)

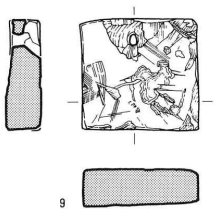


図 127 平城京

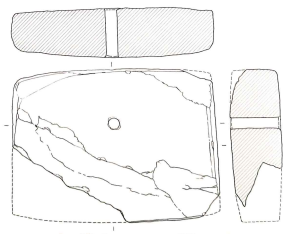


図 128 山田寺跡

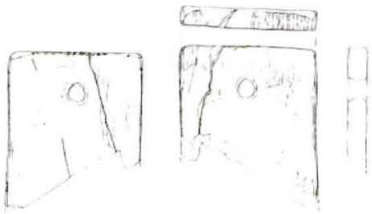


図 129 鎌倉市研修道場用敷地 1

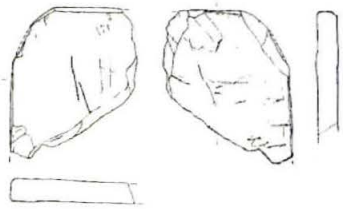


図 130 鎌倉市研修道場用敷地 2

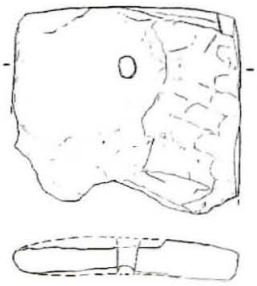


図 131 鎌倉市研修道場用敷地 3

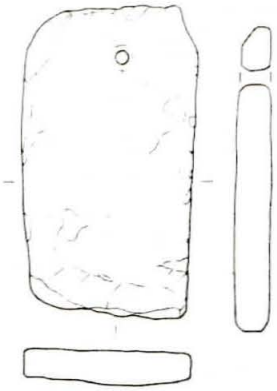


図 132 鎌倉市若宮大路周辺遺跡

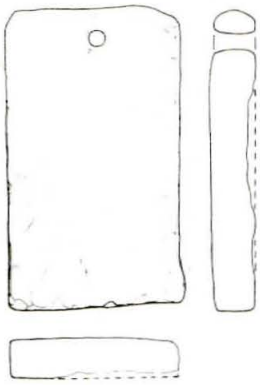


図 133 鎌倉市若宮大路周辺遺跡

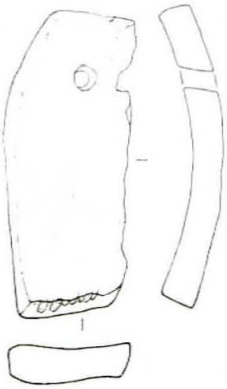


図 134
鎌倉市若宮大路周辺遺跡

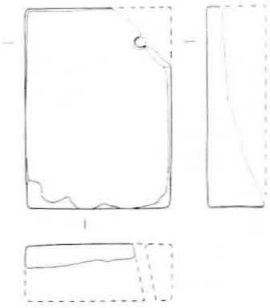


図 135 鎌倉市清涼寺跡

図 136 鎌倉市

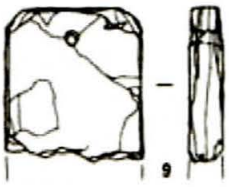


図 137 平城京(江戸土坑)

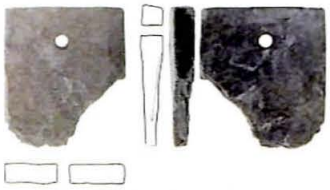


図 138 東京都文京区大塚遺跡

図 139
東京都センター

鎌倉時代においても、多くの滑石製遺物や温石が出土している。長崎から東日本へ船で供給された[86]。都市住居遺跡の発掘からは、多くの滑石製遺物が出土している。形態別に異なるものを代表的に紹介する（図129～136）。隅丸方形や、やや曲面を呈するものもある（図130・131）。また、石鍋片を再加工して作られた遺物も存在する（図134）。鎌倉時代の温石は、長さ15cm、幅8.5cm、厚さ1.7cm前後の長方形と、長さ13cm、幅10.5cm、厚さ2.1cm前後の方形とに大別される。清涼寺から出土した温石は円孔の位置や長さも異なり、小型で短い特徴を持ち、江戸時代の遺物である可能性も考えられる（図135）。

表3 日本出土温石2(鎌倉)

図	遺　跡	規　格(cm)	出　典
129	鎌倉市 研修道場用敷地	9.1×11.7 ×1.3	鎌倉市教育委員会・鎌倉市考古学研究所 1995 『集成鎌倉の発掘4』 鶴岡八幡宮他編(1)
130		7.5×9.1×1.8	
131		10.7×10.4×1.7	
132	鎌倉市 若宮大路周辺遺跡	15.0×8.7×1.7	鎌倉市教育委員会 2020 『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告報告書』36 令和元年度発掘調査報告(第1分冊)
133		15.0×8.7×2.1	
134		14.7×5.8×1.8	
135	鎌倉市清涼寺跡	6.3×8.8×2.4	令和元年度発掘調査報告(第4分冊)
136	鎌倉市	中 14.5×8.5×1.7	鎌倉市教育委員会(資料提供)

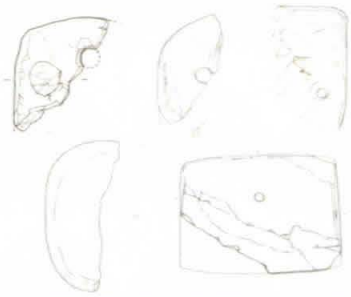
江戸時代の温石は、日本各地から出土しており、奈良から出土したものは18世紀の土坑出土遺物である（図137）。一方、東京都文京地下室遺跡から出土したものは19世紀の遺物である（図138）。江戸時代には砂岩製の温石など、石材の種類も多様化した（図139）。

表4 日本出土温石2(江戸時代)

図	遺跡	規格(cm)	出 典
137	平城京(江戸土坑)	6.8×7.6×1.7	奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 1996 奈良市教育委員会
138	東京都文京区	6.2×7.2×1.0	東京都埋蔵文化財センター 2019 『文京区大塚遺跡Ⅱ』 347集
139	展示品		東京都埋蔵文化財センター（資料提供）

以上から、7世紀からは温石が百済から出土しているが、定型性を帯びたものは見つかっていない。一方、統一新羅時代の8世紀以降からは新羅都市遺跡で多様かつ多量の温石が出土し始めた。なお、これまでの調査では、慶州でオンドル遺構は見つかっていない。第1節で紹介した竪穴住居址には暖房施設が存在したが、百済時代の7世紀の建物

表 5 溫石比較(縮尺不同)

	百 濟	新 羅	日 本
7世紀			
8-10 世紀			
11-13 世紀			
14～1 9世紀			

から見える側壁面の「L」型の暖房構造はまだ確認されていない。瓦葺き屋根の礎石建物址でも、それらの遺構は確認されていない。8～9世紀の建物の台所については、外部に設置される構造から判断すると、近代日本の家屋と類似した形態を持っていた可能性がある。つまり、別途の暖房施設がなく、温石などを使用してのみ暖房を行っていた可能性がある。なお、温石や滑石製の遺物が検出される家屋は、一般的には規模が大きく富裕な住居や宮殿、官庁関連の建物から中国陶磁器と一緒に出土する例も

多い。

すると、温石が導入される8世紀以降は、この材料がどこから来たのかを確認する必要がある。中国から舶載品として入ってきた各種の滑石製品は、統一新羅時代以降の8世紀に出現し、容器や注子などが液体と関連していることから、茶や薬などと一緒に導入された可能性が高いと考えられる[87]。これまで統一新羅時代の滑石の産地が明らかになっていないという点も考慮しなければならない。百済が産地の可能性もあるが、滑石は中国産である可能性が高いと考えられる。唐の商品とともに、船舶バラストのためには、滑石の原石も輸入されて加工されたと推定される。

中国側の調査は行われていないが、新羅と日本の両国から出土した温石は、千年間にわたって人々の生活嗜好品として流行した。遺物を比較すると、型式的に大きな変化は見られない。8〜10世紀には楕円形や長楕円形、隅丸方形から長方形や正方形に変化し、14世紀以降は若干の小型化の傾向が見られる[88]。通常、15cm以上の温石は家屋の寝室用に使用され、10cm前後の温石は携帯用と推定される。

日本の大宰府や奈良も同じ時期に交流が活発であり、多様な物品が輸入または輸出されたはずである。日本では、滑石製の温石は冬場の暖房用品として19世紀まで使用され続け、材質も多様化し重要な嗜好品となった。大島御嶽山遺跡や満宝山祭遺跡から出土する祭祀用の遺物は中央に円孔を穿つ形状であるが、祭祀用の遺物である。したがって、温石の起源に関しては別途の研究が必要とされる。

結　語

本章では、新羅人の生活に関する内容をまとめた。竪穴住居址と金入宅、道路、橋施設などと、特に、生活遺物である温石はオンドルを使わない家屋で暖房用に使われたことが分かった。

慶州では、7世紀代まで一般住宅は掘立柱建物と竪穴住居が築造され、8世紀代以降も倉庫施設などでは掘立柱建物が使用された。また、百済の壁柱式建物のような構造も築造されたが、現在では9〜10世紀代の遺跡の下に残っており、確認が容易ではない。竪穴式建物は泗沘期の扶余ではほとんど見られないが、統一新羅時代の遺跡からは引き続き発掘が行われ、下層民の生活空間として使用されていたことが分かる。地

方では塀は掘立柱で構築され、その内部には竪穴式住居が作られる構造も見られ、2つの方式を組み合わせて使用していたことも確認されている。

激変期である7世紀代の新羅住居建築方式や構造については資料不足という理由で、ほとんど言及すらされていない。しかし百済泗沘期の発掘調査では、全部で7世紀代の住居中心の遺跡が確認されている。百済の建物構造を参考にする必要がある。

新羅都城内には数多くの寺院と塔があったというが、実際に確認されたのは30カ所余りのみである。富裕層が住んでいた「金入宅」の意味については、貴族の個人寺院に仏像を祀った「金人入宅」あるいは「金殿入宅」と解釈した。金（gold）が入る家ではなく、当時都心内の個人の住宅の横に仏像と仏殿を築造する構造を指すと考えられる。

新羅の氷庫は、百済の土氷庫のように7世紀代まで築造されたが、その後、統一新羅時代には石室型の構造に変化し、宮関連施設にはすべて築造されたことが確認されている。505年の氷庫典の設置は、当時の氷を体系的に管理するためのものと考えられている。このような氷庫では冬季に保存し、夏の開放前までの間に損失率が約20%程度になると言われている。また、低温貯蔵庫も確認されている。

これまで、新羅生活遺跡から出土した滑石製遺物の中で、用途を知り得なかった温石は、日本の遺物との比較を通じて把握できるようになった。温石はさまざまな大きさがあり、寝室用と携帯用に区分することができる。これは新羅の家屋がオンドル構造ではないことを確認する上で重要な遺物である。慶州で発掘される礎石建物の中には、オンドル構造のものはこれまで確認されていない。また、百済式のかまどや煙道構造の建物も見つかっていない。調理用のかまどは礎石建物内には確認されず、別の場所に作られた台所か、他の施設内に設置されていた可能性が考えられる。この点において、日本の江戸時代の民家構造が参考にできそうである。

また、韓国では古代の滑石産地が確認されていない。唐から茶とともに滑石が導入されたのであれば、原石や加工品が舶載品として輸入された可能性がある。9世紀には唐宋八大家の一人である韓愈が石鼎についての詩を残しており、唐でも広く愛用されたと推定される[89]。当時、日本の貿易窓口であった大宰府でも石鍋や温石などの滑石製品が多量に出土しており、唐・新羅・日本の貿易と関連した物品である可能性をさらに高めているといえる。鎌倉時代の長崎県の西彼杵半島では、船のバラストとして滑石を積み込んで運搬しながら交易品として使用された例もある。具体的には、1323

年に沈没した新安船の中には銅錢27トンがバラストとして積まれており、交易品としての役割を果たした。このように、滑石は上記の条件を満たすことができる優れた材料であり、交易品の対象と考えられる。

---

1) 第1次財買井戸周辺の発掘（1991～1993年）では、7世紀代の遺跡は確認されていなかったが、追加の発掘（2013～2014年）において、6～7世紀初めの井戸1カ所以外には、金庾信の生存時期である7世紀代の遺跡は確認されなかった。したがって、前章で述べたように、祭祀井戸から見て8世紀代以降の大祀である可能性も推定される。
国立慶州文化財研究所 1996『財買井址 発掘調査報告書』
慶州市・新羅文化遺産研究院 2015『慶州 財買井活用方案을 위한 学術シンポジウム』
新羅文化遺産研究院 2016『慶州 財買井整備事業遺跡 文化財発掘調査報告書』

2) 学術大会においても、石造建築や7世紀代以降の礎石住居建物などに関する研究のみが行われてきた。
国立慶州文化財研究所 2022「新羅寺院의 建築技術과 生活文化」発表資料集
新羅文化遺産研究院 2021「慶州 皇龍寺址東便S1E1地区整備 및 活用을 위한 学術大会」
2022「新羅의 住居文化」『第15回新羅学国際学術大会』

3) 高床式構造は青銅器時代以降から三国時代～朝鮮時代まで全般的に確認されており、慶尚南道地域の発掘資料を分析して住居構造である可能性を提示している。裵德煥 2009 『聚落研究』 1 聚落研究会。一方、機能や用途に関係なく、地面構造物を造成して人が利用する空間を「家屋」と分類し、竪穴式と地上式の2つに分けて、住居と非住居に分類して分析することがある。また、家と宅を区別し、貴族の住居を「第宅」と分類する論文もある。
李建壹 2009 「百済住居址上化過程研究 - 湖西地域을 中心으로」忠南大学校 碩士学位論文
イ・スジ(이수지) 2014「燕岐羅城里遺跡の百済時代の祭宅」圓光大学校 碩士学位論文。

4) 国立慶州文化財研究所 2004『月城垓子 発掘調査報告書 Ⅱ』本文 pp489-497/ 571-572

5) 慶州文化財究所 1992「月淨橋址南便農業地発掘調査」『文化遺跡発掘調査報告緊急発掘調査報告書Ⅰ』

6) 国立慶州文化財研究所 2004『慶州 蓀谷洞・勿川里遺跡』
韓国文化財保護財団 1999『慶州 競馬場予定敷地C-1地区発掘調査報告書』pp434-467

7) 韓国文化財保護財団 2013『慶州 東川洞 833-18番地 文化遺跡発掘調査薬報告書』

8) 嶺南文化財研究院は、時至遺跡学術大会と研究論集を発刊した。
キム・ジェチョル(김재철) 2014「三国時代 時至聚落의 構造와 性格」『嶺南文化財研究』27

9) 嶺南文化財研究院 2004「尚州 伏龍3地區 住宅建設敷地内遺跡 文化財試掘調査 略報告書」
2006『尚州 第2건널목立体化施設工事敷地内 尚州 伏龍洞 397-5番地遺跡』
2008『尚州 伏龍2地区住宅建設敷地内 尚州 伏龍洞 256番地遺跡Ⅰ-Ⅳ』
2009a『尚州 伏龍洞아파트建設敷地内 尚州 伏龍洞230-3番地遺跡Ⅰ-Ⅱ』
2009b『尚州 中央路（第2鉄道）拡張区間内 尚州 伏龍洞 10-4番地遺跡Ⅰ-Ⅱ』

10) 東西文物研究院 2011『咸安 槐山里遺跡』

11) パク・ジョンソ(박종서) 2013「漢江下流古代交通路에 対한 検討」『겨레文化研究』第2号
楊州大坪里で大型の新羅石室墳が発掘された。7世紀代に築造されたものと判断され、漢江流域では最大の古墳に属する。中部考古学研究所 2015『「楊平 大坪里 2號墳』 : 2016 『楊平 大坪里古墳群』。6世紀後半、新羅が漢江流域に進出した後、9世紀まで造成された龍仁宝亭洞古墳群は忠清以北地域で確認された新羅古墳群の中で最も長期間にわたる遺跡（史跡第500号）である。忠清・京畿地域の新羅古墳群の中では忠州楼岩里古墳群、驪州梅龍里古墳群に匹敵するもので、発掘結果の遺構がよく残っており、遺物も多数出土しているため、歴史的・学術的な価値が優れている。京畿地域では新羅古墳が60カ所以上、460基以上発掘されており、現在も発掘が続けられている。

ファン・ボギョン（황보경）2013「新羅古墳出土 石枕考察」『考古学』12-1

12）ギョレ겨레文化遺産研究院 2016『ソウル禿山洞遺跡 -ソウル 衿川区心 都市開發事業区域内 遺跡試・発掘調査報告書-』
京畿文化財研究院 2009『華城 南陽洞遺跡』
嘉耕考古学研究所 2011『華城 安寧洞 安寧村遺跡』：2015『華城 安寧洞遺跡』
韓国考古環境研究所 2009『龍仁 麻北洞遺跡』

13）東邦文化財究院 2012『五松 統一新羅時代의 集落遺跡』
忠淸文化財究院 2010『牙山 新法里 土塁遺跡』

14）鄭珉圭 2020「4-7世紀 嶺南地域 竪穴住居址의 特性」東亞大学校 碩士学位論文

15）「建物の四つの壁に溝を掘り、柱穴を掘って柱を立てた後、その間に間柱をぎっしりと打ち込んで、壁体を作り、内部空間には柱がなく、壁体の力だけで建物を支えるようにした平屋建て」と表現している。
權五榮・イ・ヒョンウォン（이형원）2006「三国時代의 碧州建物 研究」『韓国考古学報』60
泗沘地域の建物址を整理し、扶余関連資料は次の資料から引用された。
李建壹・沈相六・林鍾泰・鄭勛晉・趙源昌 2015『建物址로 본 泗沘考古学』書景文化社

16）李相俊 1997「新羅 月城의 變遷過程에 대한 小考」『嶺南考古学』21

17）『隋書』の百済伝には、「土地は地帯が低く湿っており、人々は皆山に登って暮らす」、また、『北史』の百済伝には、「土地は低く湿っており、気候は暖かく、人々は皆山で暮らした」という記事にも注目する必要がある。

18）梁山機張から出土した家型土器を中心に全般的な分析と考察作業が行われ、図面と資料などは以下の報告書から引用された。
金柱昊 2014「家形土器로 본 古代 地域社会의 一面」『機張 佳洞 古墳群』中 pp625-641
釜慶文物研究院

19）文化財庁報道資料 2019年1月19日付

20）ハンギョレ한겨레文化財研究院 2012『慶州 城乾洞遺跡 - 慶州 城乾洞 緑地造成予定敷地発掘調査』

21）金有植 2010「新羅 瓦當 研究」東国大学校博士論文

22）韓国文化財保護財団 1999『慶州競馬場予定敷地 発掘調査報告書』

23）ファンボ・ギョン황보경）2012「漢江遺跡出新羅의 암막새 考察-서울・京畿地域出土 수막새를 中心으로-」『東洋学』第52集 pp130-138

24）『旧唐書』東夷列伝高麗朝には「住居は必ず山の谷間にあり、すべて帯草で継ぎを編んで屋根を覆い、寺院、神廟、王宮、官府だけが瓦を使う…（中略）…冬季にはすべてくぼみを長く掘って、下に火をつけて部屋を暖める」という記録が注目される。

25）国立慶州文化財研究所 1995・1997『慶州 芳内里古墳群』本文・出土遺物

26）従来の研究では、新羅王京都市遺跡の編年は6世紀半ばから始まったとされているが、王京S1E1地区の最下層からは6世紀末から7世紀代の土器なども出土しており、都市が築造された時期を皇龍寺の完成後の6世紀末以降に調整しようと考えている。

27）この古墳も6世紀末から7世紀初めに編年しているが、調整が必要だと考えられる。
中部考古学研究所 2015『楊平 大坪里 2號墳』：2016『楊平 大坪里古墳群』

28）報告書には5間と見たが、内陣減株構造を再点検した結果、6間に訂正した。
国立慶州文化財研究所 2002『新羅王京 発掘調査報告書』Ⅰ（第1家屋）
李恩碩 2021「皇龍寺 建立と運営に関する考察」『日韓文化財論集』Ⅳ 奈良文化財研究所・国立文化財研究所

29) 国立慶州文化財研究所 2004『慶州 天官寺址 発掘調査報告書』
『三国遺事』の元聖大王条には、金敬信が天官寺の井戸に入る夢を見た後、王位（元聖王785-798年）に登ることができたという記録があるが、発掘調査区域内では該当する井戸は確認されていない。この場所は金庾信の宗宅として知られる財買井から南へ500mに位置しており、両者の関係が推定されているが、いずれも朝鮮時代以降に指定されたものであることを認識すべきである。現在、この寺址を天官寺址と見なす理由は、五陵の東側にあるこの寺院跡が唯一であり、地表から「天」という銘文の瓦が採集された点などである。その可能性があるものの、「昌林寺」という銘文の瓦も同様に地表から採集されている。特に石塔は、当時の寺院所有者の浮屠と考えられ、木塔の横に並んで配置された場合、木塔よりも後に築造された可能性が高い。

30)『三国遺事』紀異卷第一 新羅始祖 赫居世王條
…致遠乃卒彼部人也 今黄龍寺南味呑寺南有古墟云是崔侯古宅也殆明矣
国立慶州博物館 2007『味呑寺址』

31) 朴贊文 2021「慶州 味呑寺址 3～4次発掘調査）」『第1回慶州地域文化遺産調査・研究成果発表会』
国立慶州博物館・文化財庁新羅王京核心遺跡復元整備推進団・国立慶州文化財研究所

32) 飛簷とは高い軒の意であるが、高い軒を構成する浮椽であり、日本で浮椽を飛檐椽と呼ぶことから明らかだという。
金正基 1981「三国史記 屋舍条의 新研究」『新羅文化祭学術発表会論文集』2 新羅文化宣揚会

33) 国史編纂委員会 韓国史データベース『三国史記』屋舍条（http://db.history.go.kr/）

34) 35金入宅と四節遊宅を合わせると、計39金入宅と見なされることもある。『三国遺事』辰韓條。
「京中十七萬八千九百三十六戸 一千三百六十坊 五十五里 三十五金入宅（言富潤大宅也）南宅-北宅-亐比所宅-本彼宅-梁宅-池上宅（本彼部）-財買井宅（庾信公祖宗）-北維宅-南維宅（反香寺下坊）-隊宅-賓支宅（反香寺北）-長沙宅-上櫻宅-下櫻宅-水望宅-泉宅-楊上宅（梁南）-漢岐宅（法流寺南）-鼻穴宅（上同）-板積宅（芬皇寺上坊）-別教宅（川北）-衙南宅-金楊宗宅（梁官寺南）-曲水宅（川北）-柳也宅-寺下宅-沙梁宅-井上宅-里南宅（亐所宅）-思内曲宅-池宅-寺上宅（大宿宅）-林上宅（青龍之寺東方有池）-橋南宅-巷叱宅（本彼部）-樓上宅-里上宅-椧南宅-井下宅又四節遊宅 ： 春 東野宅 夏 谷良宅 秋 仇知宅 冬 加伊宅」

35) 李基東 1978「新羅 金入宅考」『震檀学報』45 震檀学会

36) 例えば、当時「反香寺下坊にある南維宅の近くを訪ねよ」と言われた場合、その位置を知らない時には「南維宅」を探すのは困難だあるが、「反香寺下坊の金堂と塔がある家を訪ねよ」と言われたなら、探すことは容易だったであろう。このように、『三国遺事』では金入宅を通じて位置を明確に示すことが可能であり、寺刹との位置関係などに詳細に言及したのかもしれない。

37) ここは東川洞の廃寺として知られており、1982年に塔址周辺で発掘調査が行われた。
鄭永鎬 1977「慶州 東川洞 逸名寺址 石造物에 관한 考察」『文化財』11

38) 李恩碩 2003（前掲）

39) 一般的に金入宅については、1坊程度の規模を持つ住宅と認識しているかもしれない。しかし、S1E1地区遺跡から見ると、当時の中心地であるにもかかわらず、個々の家屋に分かれており、その規模は200坪内外でそれほど大きくない。この点に注目する必要である。

40) 慶州市全域には256カ所の寺址が確認されている。その中で147カ所が南山に含まれており、残りの寺址は市街地だけでなく慶州市全域に広がっている。藤島亥治郎の図面に基づくと、寺跡や塔、仏像なども含めても30カ所余りにすぎないこと（記録内容を除く）を考慮する必要がある。

41) ソン・セグァン（손세관）2002『넓게 본 中国의 住宅』悦話堂 p48

42) 鄭泰恩 2009「Ⅳ. 考察」『慶州 皇南洞 大形建物址 -皇南洞123-2番地遺跡 -』国立慶州文化財研究所・慶州市

43) 月台附加建築物と判断した理由は、前方にやや広い敷石施設があり、これを月台のような中大型基壇を備えたものだと考えたためである。しかし、実際にはこの建物には基壇は存在せず、単純な床面に礎

石が配置された構造である。
梁正錫 2013「皇龍寺址 東便 王京遺跡 月臺附加形 建築物에 대한 一考察」『新羅文化』42 東国大学校WISE캠퍼스新羅文化研究所

44) 李起鳳は、1,360坊が造営されたと見ている。
李起鳳 2002「新羅 王京의 範囲와 区域에 대한 地理的 研究」ソウル大学校 地理学科 博士学位論文

45) 1坊の規模は142×142mによって規模と人口数の推定方法を提示した。1坊内の住居可能な最大面積は、約20,164㎡（約6,099坪）であり、1つの独立家屋は200坪内外（20×30m範囲）に内部建物は平均4～5棟で、1棟に3人が居住するならば1つの独立家屋には約15人の居住が可能と推定される。そうすると、1坊内に約30軒の独立家屋（200坪×30家屋=6,000坪）で推算され、15人×30家屋=450人、450人×360坊=162,000人と計算する場合、近似値である17万戸は人数と見るのが妥当と判断される。東川洞などの外郭地域で一部確認される独立家屋の面積は10～20坪内外規模であることも確認されており、平均算術的に推算するしかない。
もし17万戸が家口数を意味するのだとすれば、1戸あたり4～5人と推算、70～90万人が慶州地域に居住したことになる。当時の唐長安城には、慶州市街地の4～5倍程度の面積に100万人が居住したという。慶州を中国と似た規模で見るには問題が多く、もし70～90万人が居住していたとすれば、都城運営に深刻な社会問題（食糧、燃料など生活必需品の供給と流通）が発生するだろう。
王京の範囲が拡大して北には安康、南には仏国寺まで含めても1,360坊が形成されたと見るには説得力に欠け、地割も確認されない。慶州西側である牟梁里の発掘で検出された都市構造から、約100坊の都市があったと推定されるが、この他に900坊以上が慶州周辺に都市として築造された姿は確認されない。なお、2023年現在の慶州市街地を中心に居住する人口は約15万人であり、市外郭地域の13万人を合わせて28万人になる。

46) 2016年までに69カ所が確認され、2021年末までに約100カ所と推算されている。
ウ・ハヨン・ファン・ウォヌ（우하영・황원우）2022「慶州 城乾洞 647-3道路遺構調査成果」『第1回慶州地域調査研究成果発表会』国立慶州博物館・文化財庁新羅核心遺跡復元整備推進団・国立慶州文化財研究所

47) 朴晸煥 2013「三国・統一新羅時代의 道路築造에 관한 研究 -慶南地域を中心으로-」『中央考古研究』13

48) 慶州市・鷄林文化財研究院 2017『慶州 校洞 158-2番地 遺跡』

49) 橋梁の説明は下記の資料から引用した。
南時鎭 2002「其他遺跡 4.橋梁址」『慶州南山 GYEOUNGJU NAMSAN』国立慶州文化財研究所

50) 国立慶州文化財研究所 2005『春陽橋址（日精橋址 史蹟475號）発掘調査報告書』

51) 趙胤宰 2017「中国 先秦・漢唐時期 藏氷、造氷 및 冷藏遺構 考古資料 考察」『先史와 古代』54 韓国古代学会

52) 『三国史記』新羅本紀 智證王條 / 職官 中。
六年 …冬十一月始命所司藏氷 / 氷庫典大舍一人舍一人

53) 金吉植 2001「氷庫에서 본 公州艇止山遺跡의 性格」『考古学誌』13
2002「古代의 氷庫와 喪葬禮」『韓国考古学報』47 韓国考古学会

54) ユ・ビョンロク、チン・ソンソプ（유병록・진성섭）2022「竪穴式氷庫の考古学的研究」『野外考古学』43

55) 朝鮮時代の安山氷庫の築造過程を調べ、新羅氷庫などの変化様相についても発表した。
李恩碩 2018「安山邑城氷庫」『第9回 全国海洋文化学者大会 発表資料集』

56) 金鎬詳 2009「新羅의 소금倉庫와 얼음倉庫」『慶州文化』15 慶州文化院

57) 国立慶州文化財研究所 2004『慶州 蓀谷洞・勿川里遺跡』
韓国文化財保護財団 1999『慶州競馬場予定敷地C-1地区』

58) 겨레文化遺産研究院 2017『慶州 堤内里・椧渓里・蘆谷里遺跡』

59) 氷庫形竪穴遺構については、整理された考察があり、それが工房と関連した施設であると判断された。
ソ・ヨンハ（서용하）2012『釜山楽民洞遺跡』東洋文物研究院 pp335-352

60) 韓国文化財保護財団 2001『尚州 屏城洞・軒新洞古墳群』
嶺南文化財研究院 2005『尚州 屏城洞・軒新洞古墳群』

61) 高麗文化財研究院 2014『慶州 仁旺洞王京遺跡-国立慶州博物館南側拡張敷地内遺跡Ⅰ』

62) 徐羅伐文化財究院 2022『慶州 東川地区都市開発事業敷地内遺跡 発掘調査報告書』

63) 慶州市・新羅文化遺産研究院 2016『慶州 財買井址 -遺跡整備를 위한 学術調査報告書』

64) 国立慶州文化財研究所 2008『慶州 九黄洞 皇龍寺址展示館 建立敷地内 遺跡-九皇洞 苑池遺跡-』

65) 朴玧貞 2007「韓日 古代苑池의 変化를 통해 본 九黄洞苑池의 性格 研究」『韓日文化財論集Ⅰ』国立文化財研究所・奈良文化財研究所

66) 一部の写真資料などは以下の資料から引用している。
百済古都文化財団 2015「扶余・旧校里一帯（名勝第63号）遺跡 発掘調査会議資料」
扶余郡・百済古都文化財団 2017『扶余・旧校里グドラ一帯の百済建物・道路・氷庫遺跡』

67) 慶尚文化財研究院 2016「益山IC～金馬間地方道拡大・包装工事敷地内文化財発掘調査略式報告書」

68) 国立扶餘文化財研究所 2009『扶餘官北里百済遺跡発掘報告Ⅲ -2001～2007年発掘区域百済遺跡-』

69) 扶餘郡・百済古都文化財団 2022「扶餘 花枝山遺跡 9次 発掘調査 2次 現場説明資料」

70) 文化財庁報道資料 2023年3月24日付「益山에서 百済의 大型石垣低温貯蔵庫2基 確認」

71) 扶余旧校里百済氷庫の容積は約48㎥、朝鮮氷庫は約100㎥である。

72) 忠清文化財研究院 2007『洪城 五官里遺跡』

73) 当初は安山邑城の集水施設として報告された。
安山市・漢陽大学校博物館 2017『安山邑城 및 官衙址Ⅴ』

74) 慶州地域の建物址の発掘調査において、最も多く確認される石造遺構については、集水施設、トイレ、貯蔵庫など様々な可能性が指摘されている。しかし、これらの遺構の用途を正確に把握することは困難であり、内部土壌分析など多角的な研究手法が必要であると判断されている。

75) 日本の氷庫図面は以下の論文から引用した。
ユビョンロク、チン・ソンソブ（유병록・진성섭）2022（前掲）p99

76) 高麗大学校民族文化研究院 2009『高麗大学校 韓国語大辞典』

77) 百済では6世紀後半に蠟石製の仏像が製作され、花崗岩製の石仏が登場する前段階に造成されたものと考えられている。金春實 2006「百済6世紀 後半 蠟石製佛像研究」『美術史学研究』250・251

78) 韓国では、蠟石と滑石の名稱区別なく使用されていることがある。滑石はマグネシウムを含むケイ酸塩鉱物であり、タルクム（Talcum）とも呼ばれる。一方、蠟石はピュオフィライト（Pyophyllite）であり、滑石と同じ鉱物群に分類されるが、蠟石はアルミナが満たされた二八面体の結晶構造を持ち、滑石はマグネシウムが満たされた三八面体に分類されている。株）韓国粉体蠟石説明資料

79) 『世界美術大全集』東洋篇第4巻（隋・唐）1997 小学館

80) 百済古都文化財団 2017『扶余・旧校里 구드래一帯의 百済建物・道路・氷庫遺跡』p45

81) 文化公報部文化財管理局 1978『雁鴨池 発掘調査報告書』p369

82) 国立慶州文化財研究所 2008『慶州 九黄洞 皇龍寺址展示館 建立敷地内 遺跡-九皇洞 苑池遺跡-』

83）国立慶州文化財研究所 2002『新羅王京 発掘調査報告書』Ⅰ

84）金鰲文化財研究院 2019『慶州 東川洞 798番地 遺跡』

85）嶺南文化財研究院 2008『尚州 伏龍洞 256番地 遺跡』

86）長崎県の西彼杵半島に一大生産拠点があった滑石製石鍋は，東日本では鎌倉で最も多く出土している。重量物であるため陸上輸送には向かない製品である一方、運ぶ船によって商品とバラスト（船底に積んで、船を安定させるための重量物）とを兼ねることができる。港から港へと渡る交易船の姿が浮び上がってきる。
神奈川縣教育委員会・平塚市博物館・神奈川縣立歴史博物館 2018『潮風と砂の考古学』平成30年度かながわの遺跡展 p23から引用

87） 唐でも煎茶の風習は、8世紀代半ばに盛んになったという。新羅では景徳王(742～765年)の際に、忠談師が南山の仏像にお茶をあげたという記事がある。日本におけるお茶の記録は、『正倉院文書』の天平六年（734年）から宝亀2年（771年）の書かれた『写経司解』という写経司の家計簿と同じものに「茶二十束直十四文」「次七把 価銭五文」という内容がある。
筒井紘一 1996「Ⅶ 飲茶の世界-茶以前から煎茶・点茶へ」『長安-絢爛たる唐の都』京都文化博物館編 角川書店 p233

88）日本全体が調査されていないため、断言することは難しいが、展示品などを観察した際には、江戸時代の温石の大きさは比較的小さいことが観察された。

89）韓愈（唐768～824）「石鼎聯句詩」巧匠斲山骨 刳中事煎烹 …」
東洋古典 http://db.cyberseodang.or.kr

終　章　総合考察

本論文では、新羅遺跡と遺物について、発掘資料と史料を比較しながら新たなアプローチを試みた。12～13世紀に編纂された史料である『三国史記』と『三国遺事』は、高麗時代の視点から新羅史を叙述したため、初期の記録は考古学的な発掘結果とほぼ合致しないという結果が導き出された。特に、重要施設の位置の考証は、文献に合わせて解釈されたり、朝鮮時代以降に指定された遺跡が新羅の歴史性を継承していると理解し、発掘結果で置き換えたりする傾向が見られる。

現在の蘿井は、第1代王である朴赫居世の誕生地として、朝鮮時代以降に指定された。しかし、発掘結果からは井戸ではなく遺跡であることが判明した。掘立柱建物が紀元前後から400年以上にわたって2回重複して維持されたと推定され、蘿井がその役割を果たしたとする解釈は説得力に欠ける。また、2～5世紀の期間に該当する遺物や遺跡も確認されていない。さらに、7世紀末から8世紀代に築造されたと推定される八角形の建物につながる連続性も証明されていない。近隣の昌林寺址に初期王宮があったという『三国遺事』の記録は、発掘の結果、確認される遺跡がない。むしろ発掘の結果によると、現在の蘿井は祭場としての役割を果たしたことが理解され、構造からみて南郊である可能性を提示した。

新羅は隍城洞一帯で初期の勢力基盤を整え、積石木槨墓を築造することから、4世紀代半ば以降から周辺の小国を統合し始めた。百済、高句麗、倭との継続的な対立と侵入を防ぎつつ、6世紀代には王権の強化と体制整備を通じて古代国家の枠組みを確立した。

金城から月城への移転を経て、528年には仏教の公認、553年には皇龍寺（神宮）の建立が行われた。また、漢江流域の占領を通じて中国との交易路を確保し、積極的な交流が行われた。

当時、中国やシルクロードから入ってきた新たな文物は、新羅だけでなく東アジア周辺の国々が切望するものであった。特に4世紀代後半からは、馬具などの金工品やガラス製品などが大量に輸入され、新羅古墳の副葬品として埋葬されるようになった。これらの品々の製作技術も伝来し、多様な発展を果した。皇南大塚南墳と北墳から出土された馬具は、玉虫装飾鞍橋など、最高水準の技術を示している。

現在、韓国の考古学界においては、新羅古墳の編年基準となる皇南大塚南墳の被葬者を奈勿王（356～402年）または訥祇王（417～458年）と推定している。近年は、訥祇王説が主流である。1990年代から最近まで、月城濠の基底部の泥層からは、この古墳と同時期の高杯などの遺物が出土し、月城濠と城壁の築造時期を5世紀中後半とする見解が一般的であった。しかし、第2章で言及した酸素同位元素比年輪年代法による月城濠の木材の年代測定結果は、424年と433年と推定された。これにより、「月城築造年代＝5世紀前半」という年代が提案され、また、年輪年代紀に含まれる木材の分析からは、433年の晩秋から434年の初春の間に伐採された木材が使用されたと発表された。

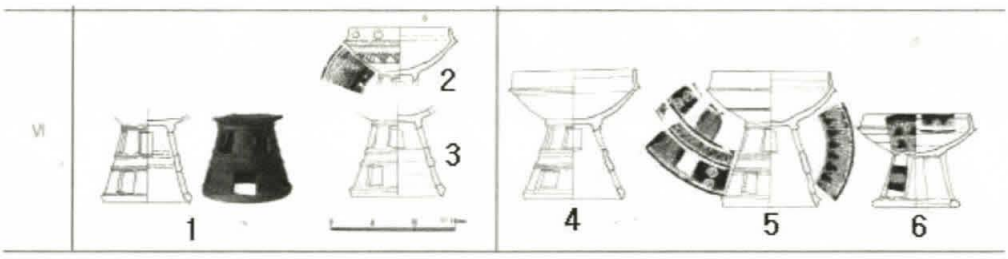


図 1 1:月城濠5号泥層Ⅱ 2:月城濠4号西側内部 3:月城濠4号基底部泥層 4～6:皇南大塚南墳
南翼熙 2021「考古学 編年으로 본 新羅의 年代」『年代測定学을 통해 본 古代 慶州의 時間』
国立慶州文化財研究所・嶺南考古学会 p22 抜粋

しかし、この年代は奈勿王陵や訥祇王陵とは合わないため、学界の注目を集めることができなかった。そして、2021年以降、月城の「人身供犠」の問題が浮上し、4世紀中後半から城壁が築造された可能性、つまり敷葉工法の上で「人身供犠」の儀式が行われ、50～80年程度の時間が経った後の5世紀半ば以降に城壁が築造されたという説が提起された。この説も、皇南大塚南墳と同時期の高杯片が城壁築土層の基底部から出土したことによっている。

このように皇南大塚南墳の築造年代は、月城濠と城壁の築造時期の基準となっている。4世紀中後半から6世紀半ばにかけて、慶州市内の中心地域には大型の積石木槨墓が155基あると報告されており、中小型の墳墓は数百基以上が残存している。その中で、金冠が出土した天馬塚、瑞鳳塚、金冠塚などは王と関連した古墳と推定される（金鈴塚と北墳も金冠が出土したが、子どもと女性と推定）。この積石木槨墓の時代に該当する王は奈勿王（356～402年）、實聖王（402～417年）、訥祇王（417～458年）、慈悲王（458～479年）、炤智王（479～500年）、智證王（500～514年）、法興王（514～540年）などの7人が挙げられる。

皇南大塚南墳が王陵と推定される理由は、その大きさである。この墳墓は長さ120m（北墳を含む）であり、高さは23mに達し、慶州最大の古墳である。鳳凰台古墳の125

号墳や136号墳などの単一墳墓は80m前後の大きさであり、皇南大塚南墳と類似している。そのため、これらすべてが王陵として認識されている。一方、実聖王陵とされることには問題がある。なぜなら、417年に訥祇王によって実聖王が殺害されたため、訥祇王が彼のために新羅最大の古墳を築造したとは言えないからである。

このように王陵と見なすには課題が残されており、もし王以外の墓と考える場合、誰を挙げられるかという問題に直面することになる。奈勿王陵や訥祇王陵とはならない問題を調べることにする。

まず、訥祇王とはならない理由は何だろうか。皇南大塚南墳から出土した主被葬者の歯を発掘当時に鑑定した結果がある。当時の鑑定では、その人物の年齢は50～60歳と推定されている。それならば、その人物は400年前後に生まれたと考えられ、先代の父親である奈勿王が死ぬ前にすぐ生まれてこそそれに合う年齢になれる。しかし、倭と高句麗に人質として送られた未斯欣と卜好という2人の弟がいるため、少なくとも470～490年代に生まれたと考えられる。もし出生年を485年と仮定すると、458年には70代半ばに近い年齢になる。歯の鑑定結果とは差がある。

では、402年に亡くなった奈勿王の墓と見なすことはなぜ困難であるのか。20歳くらいで王に即位したとすれば、335年前後に生まれて60代半ばに死んだ場合、歯の鑑定結果と一致する可能性がある。しかし、皇南大塚南墳から出土する各種遺物の編年は既存の年代観に合わせて考えると、5世紀初めとものとするのは困難である。

特に馬具は新羅式で製作される玉虫装飾鞍橋の場合、最も豪華な金工品であり、絶頂期の技術と見られる遺物である。中国で三燕の馬具、孝民屯154号や馮素弗墓(415年)などの年代観をあえて合わせなくても、4世紀中後半と5世紀初めに編年される遺物よりはるかに優れている。崔秉鉉は、玉虫装飾鐙子と積石木槨墳の編年によって皇南大塚南墳の時期を402年奈勿王陵と見ている。

このような技術的な進展が既に完成段階にある場合、4世紀中後半の多様な金工品や馬具は、中国の製品を技術的に凌駕していると言うべきである。技術の伝達と発展には、少なくとも1世代30年以上の経験やノウハウが蓄積される必要がある。鍍金技術を含む金製品の製作技法は、現代の技術でも再現が難しいものが多くある。しかし、その時期の技術的発展は見過ごされているのである。日本の場合、遺物が輸入されて墓に副葬される年代と大差なく編年されているが、これは輸入された完全品として将来されたと解釈しているため可能となる。

現在、中国には4～5世紀代の玉虫装飾鞍橋に類似した遺物の例が存在しない。つまり、これは新羅独自の技術であると言える。1975年に皇南大塚の発掘調査が終了してから、玉虫装飾鞍橋の後輪の復元には30年の期間がかかった(2006年復元)。金工技術が導入されるとすぐに製作が可能であり、新羅式や伽耶式の遺物に発展する段階は数年以内に実現する可能性があるという仮説が樹立され、この仮説が証明されれば、402年の奈勿王陵と見られるだろう。日本は五世紀に金工技術の導入され、100年以上も経っているにもかかわらず、6世紀後半の藤ノ木古墳の鞍橋製作技術の起源や輸入品の問題はまだ提起されていることを考えるべきである。

皇南大塚南墳の主槨からは、5世紀中後半以降に出土する新式の高杯と呼ばれる遺物が2点も見つかっている。しかし、副槨から出土した1,292点の高杯には、その型式に当てはまるものは1点もいない。これは402年と時期的な差異を示す遺物であり、これをどのように説明するのか、年代観の再考が必要となる。

もし両王の墓でなければ、誰の墓と推定できるであろうか。ここでは未斯欣を推定してみることにする。訥祇王の最も近い弟である未斯欣は、433年5月に亡くなった。新羅王の下で第2人者である舒弗邯の官職を受け、夫人は日本に渡って未斯欣を救出した朴堤上の娘であり、以後、彼の娘は次期王である慈悲王の妃となる。未斯欣は王族の家系において最高の血統であり、訥祇王が最も大切にした弟であった。彼の死亡時の年齢は、史料を元に推定すると40代から50代前半程度までと見ることができる。死亡当時の年齢を史料として推定すると、40代から50代前半程度まで見ることができる。もし皇南大塚南墳が433年に造成された墓であるなら、月城址と城壁の築造時期と同時期に編年できる。

図 2 皇南大塚南墳封土の修葺痕跡

『三国史記』の訥祇麻立干条には「修葺歴代園陵」（435年）という記事がある。この記事は、積石木槨墳の封墳が修理された可能性を示していると解釈されている。皇南大塚南墳の頂上部には木槨の陥没により被覆土層が崩れ落ちた痕跡が見られ、その上に再び真砂土が覆われた跡が現れている。この覆われた層は自然に経年することで形成されたものではなく、人為的

な痕跡であることが示されている。様々な年代的条件が一致している。

ただし、50～60歳の歯の鑑定結果と年齢には差異がある。実際に未斯欣の年齢を正確に推定することはできないが、当時の王の年齢には疑問があることは事実である。訥祇王と未斯欣の父である奈勿王は356年に即位したが、王位に就くまでに少なくとも20歳前後であったと仮定すると、402年に死ぬまでに3人の息子の誕生年を推定してみると、年代観に問題が生じる。

訥祇王が約385年に生まれたと考えると、彼の在位30年の間に息子はいなかったとされたが、50歳以降に3人の息子を得たとされている。彼の夫人は味鄒王（262～284年）の娘である保反と記録されている。もし彼女が284年に生まれたと仮定すると、彼女が100歳を超えてから3人の息子を得たと解釈しなければならない。

402年、奈勿王の息子3人が幼くて、訥祇が王になれず、代わりに甥である実聖が王に推戴されたという記録がある。この記録は、当時の支持勢力の競争によって訥祇が排除された可能性も考えられる。また、婚姻関係が複雑であり、家系図には誤記や都合良く書き換えられた可能性がある。そのため、すべてを信じて年代を推定すると解釈が不可能になる場合もある。したがって、訥祇王や未斯欣の年齢が実際よりも上であった可能性を考慮する必要がある。このような場合、歯の鑑定結果と近い年齢の可能性が高いと言える。

そして、皇南大塚南墳では被葬者が金銅冠を着装しており、その冠については「王の身分ではない」という意見と、「金冠が製作される前の時期のもの」という意見が分かれている。しかし、その当時においては金製の冠が十分に製作できる環境が存在した可能性を考慮しなければならない。金銅冠には金製垂飾や曲玉があり、腰には金製の銙帯も装着されており、他の金冠を持つ古墳と類似しているためである。つまり、王ではないかもしれないという仮定ができる。

また、北墳では女性が金冠を身につけており、「夫人帯」という銘文が刻まれた銀製の帯金具が発見された。南墳被葬者の夫人とみなすべきものについては確定できない。双墳だからといって必ずしも夫婦という埋葬方式が証明されたわけではない。当時の新羅の埋葬慣習は母系中心と関連がある可能性があり、この点については継続的な研究が必要である。また、銀製品であるからといって、これが平時に着用されていたものであるという意見もあるが、儀式用または副葬用を平常の際に着装していたことも問題のある解釈である。重要な副葬品には、貴族が上納した遺物も多く含まれている可能性があるため、これ

らをすべて被葬者本人の遺物と見なすことは問題があると考える必要がある。

皇南大塚南墳の年代を402年に合わせると、土器編年全体が早まるというズレが発生し、6〜7世紀の編年に問題が生じる可能性がある。一方、458年に合わせると、積石木槨墓が地上化する大型墳の築造がその後100年以内に圧縮される現象が起こっている。現在、重要な古墳の編年のほとんどは5世紀末から6世紀初めに編年され、この時期に圧縮されているため、詳細な分類作業が再試行される必要がある。

したがって、皇南大塚南墳の築造時期を433年に設定することで、既存の両側編年観の問題を解決できる可能性がある。このように、皇南大塚南墳の年代は、5世紀代の新羅古墳編年において核心的な位置を占めている。

王陵は、被葬者となる王が生前に築造するのではなく、後の王によって推進されるものである。奈勿王の後継者である実聖王は、訥祗、卜好、未斯欣を牽制するために高句麗と倭に人質を送ったが、最後は417年に彼自身が殺害された。では実聖王は、奈勿王のために新羅最大規模の墓を造成したのだろうか。458年2月に地震が発生し、8月に訥祗王が亡くなり、翌年の459年2月には倭の大規模な侵入によって月城が攻撃された時期に、新羅最大の墓を築造できた可能性についても考慮する必要がある。

訥祗王の治世において、未斯欣の死によって最も悲しみ、自身の能力を誇示できる、新羅最大規模の墓の築造が行われた可能性を提示しようと考えている。高句麗は各種の青銅遺物や漆器などを、倭は16年間の人質であった未斯欣のために青銅鏡と沖縄産の夜光貝などを葬儀用に贈ってきたと推測される。新羅の積石木槨墓では青銅鏡を副葬することはほとんどなく、このような例も考慮する必要がある。

最近、発掘が進められている月城において話題となった「人身供犠」については、調査地域の上層と下層を区分すれば不要の議論であったが、これを同じ工程と見なしたため、研究者に混乱を来したものと考えられる。また西門址が発見されなかった点については、門の痕跡が失われたのではなく、もともと城門が存在しなかったことを示すものであり、その前に統一新羅時代の建物が建てられていることも、これを証明している。

新羅において553年、真興王代の都において、王権の象徴となる建造物（新宮）を建設することは、東北アジア諸国の流れに沿ったものであった。真興王が新宮の地に皇龍寺を造成したのは、意図的な計画の下で「王即仏」という概念で三金堂を配置したものであり、これは真平王と善徳女王、真徳女王の系譜まで続いた。善徳女王も釋迦族の王女であり、聖骨系統を受け継いで即位すると、すぐに芬皇寺三金堂を造成した

が、女性であるという限界から「品」字配置型式、釈迦牟尼仏を安置した中金堂よりは一段階下がる東西金堂を造成する形となり、その後このような三金堂配置は新羅社会において造営されなかった。絶対王権の象徴であった皇龍寺は、中央金堂に丈六尊像、東金堂に塑造丈六尊像（あるいは薬師如来仏像）、西金堂に天賜玉帯を配置し、「王即仏」を示していった。その絶頂として、善徳女王の時代の645年に築造された九層木塔は、新羅三宝として皇龍寺の完成を示し、新羅都城においてもっとも重要な王権と国家の権威を象徴する場所であったことが証明されている。

皇龍寺の配置は、非常に緻密な測量に基づくものであり、思想的背景と理念を反映した形で築造された。この寺院を中心に都市計画が推進された。朱雀大路の概念は、南北の道路が王朝儀礼の軸線に合わせて計画されたものであったが、結果的に王宮ではなく寺院となったことにより、実質的に築造されなかったことが分かる。

約200年にかけて都市が完成したが、その過程では自然地形に合わせて道路の幅や築造方式が多様であり、坊の規格も時期によって異なることが分かった。同様に、地方の9州と5小京も、自然条件に基づいて都市が築造された。これは中国の基本的な概念が導入されつつも、半島国家の特徴として文化が消化され、変形したことを示している。言い換えれば、イタリアが大陸文化と海洋文化を受け入れ、それを多様な形で発展させていったのと似たような特徴が見られる。

新羅が676年に三国を統一した後、都を遷さないまま、扇状地内で王宮の月城を中心に再編された。本研究では、史料に登場する東宮、臨海殿、北宮、南宮、龍宮について再検討し、これらの位置について新たな解釈を提示した。具体的には、東宮は管理機関である東宮衙と共に月城の東南側に位置し、北宮は善徳女王によって創建された芬皇寺の東側にある苑池に存在し、南宮は月城の正南側にある。また、皇龍寺内部にある新羅最大の井戸を龍宮と推定した。

8世紀代の中後半以降、禅宗思想の影響により、南山に150カ所以上の寺院が建設された。また、都城内でも王族や貴族などの個人のための寺院が都心地に建てられるようになった。『35金入宅』は「金」で飾ったり、「金」が入ってくる富潤大宅という従来の解釈とは異なり、金仏像があったり、金殿がある家屋を指すと考えられる。坊内部に回廊や講堂、南門など寺院の基本施設がなく、塔と金堂を備えた王京S1E1地区の第1家屋、味呑寺址、天官寺址などがこれに属すると考えられる。ほぼ同時期にあたる760年、春陽橋と月淨橋の建設は南山への道をつなぐ橋施設であり、いずれも王宮とつなが

る地点にあり、これらの橋を管理する官庁も存在したことを発掘資料として提示した。

新羅は505年に氷庫典を設置するほど氷の需要が高く、百済からの低温貯蔵庫と氷庫の築造技術が統一期に導入された可能性が高いと考えられる。単純な竪穴氷庫から財買井址の方形石垣氷庫や九黄洞苑池遺跡の六角形氷庫など、石垣氷庫が製作され始め、宮にはすべて氷庫が備えられたと推測される。このような氷庫の技術は、朝鮮時代まで受け継がれたと考えられる。

新羅の遺物のうち、これまで用途不明とされてきた滑石については、日本の遺物と比較した結果、初めて温石として使用されたことが確認された。これらの製品は8世紀代から唐でも容器や実用品として広く愛用され、茶や薬などの貿易品と関連性が高いと考えられている。新羅においては、まだ滑石の産地が発見されていないことから、原石や加工品として多くの滑石が貿易船の舶載品として輸入された可能性を想定しておきたい。日本では古墳時代から滑石製の遺物が多様に使用されており、大宰府からも多量の温石が出土している。また、奈良など他の地域でも出土が確認されており、鎌倉時代だけでなく江戸時代全般にわたっても出土例がある。

新羅千年の歴史の中で、史料や考古学的資料を通じて当時の生活を明らかにできるものは、全体の5%にも満たないと考えられる。型式と枠組を整えた後、古代の歴史を理解するアプローチは、現代的な視点で解釈される素地が非常に高いことが分かる。また、「人身供犠」という概念からも、当時の社会では平凡で一般的な条件、耕作地ではなく、低湿地（泥層）や不毛の地に下層民の墓が造成され、これが月城の城壁築造と関連し、新羅の殉葬（永遠不滅の神仙思想）と同様の役割を果たしていると解釈されている。

『新羅だから』や『新羅はやはり特別だ』、『月城は王宮だから違うはずだ』といった命題や先入観に基づいて、今もなお新羅史を解釈しようとする傾向が広く見られる。そのような立場から『月城の時期を上げる必要性　－101年の月城築造時期に接近できる考古学的証拠資料の確保』が問題となる可能性がある。考古学の資料を史料と整合させると、全く異なる解釈が生じることもある。筆者自身も30年余り前に王京S1E1地区の発掘に参加し、都城の築造時期を上げようと努力したが、現在は現状をそのまま理解しようとしている。

古代から現代まで、人間は生活を営みながら経済的で効率的な方法を模索し、文明は発展してきた。しかしながら、基本的な人間の意識は変わらないものである。考古学の資料は、当時の普遍的な状況を理解し接近する際に最も近い解釈となり得ると考えられている。

参考文献

日本

『日本書紀』

神奈川県教育委員会・平塚市博物館・神奈川県立歴史博物館 2018『潮風と砂の考古学』平成30年度
かながわの遺跡展

鎌倉市教育委員会・鎌倉市考古学研究所 1995『集成鎌倉の発掘4』鶴岡八幡宮他編(1)

鎌倉市教育委員会 2020『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告報告書』36 令和元年度発掘調査報告(第1分冊)
令和元年度発掘調査報告(第4分冊)

九州歴史資料館 2018『大宰府史跡発掘50周年記念特別展 大宰府への道 -古代都市と交通-』

国指定史跡「永福寺跡」案内資料

『古代史研究 8』「古代の宮殿と寺院」1988 講談社

『世界美術大全集』1997 東洋篇 第4券 隋・唐 小学館

大宰府市教育委員会 2008『大宰府条坊跡 』36

大宰府市教育委員会 2020『大宰府条坊跡 』50

対馬博物館 平常展示図録 2022

東京都埋蔵文化財センター 2019『文京区大塚遺跡Ⅱ』347集

奈良県教育委員会 1985『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 1996 奈良市教育委員会

奈良文化財研究所 2002『大和山田寺跡』

<論 文>

井上秀雄 1968「新羅 王畿の構成」『朝鮮学報』49 朝鮮学会

井上秀雄 1978『古代朝鮮史序説(王者と宗教)』 寧楽社

井上和人 1984「古代都城制地割再考 -藤原京・平城京を中心として-」研究論集 Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報 第41冊

末松保和 1954「梁書新羅傳考」『新羅史の諸問題』東京 東洋文庫

小澤 毅 1995「條坊の復元」『平城京左京三條一坊十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所
2003『日本古代宮都構造の研究』東京 青木書店
2010「7世紀の日本都城と百済・新羅王京」『日韓文化財論集Ⅱ』奈良文化財研究所・国立文化財研究所

北見俊夫 1985「市とその生態」『日本民俗文化大系』11

鬼頭清明 1979「新羅における都城制の発達」『朝鮮歴史論集(上)』龍溪書舎

近藤剛 2019『日本高麗関係史』八木書店

齊藤忠 1936「新羅の王京跡」『夢殿』 15 ; 1973『新羅文化論攷』吉川弘文館

齋藤忠(朝鮮古蹟研究會)1938「城東里の遺構址」「慶州に於ける統一新羅時代遺構址の調査」『昭和十二年度古蹟調査報告』
妹尾達彦 2001『長安の都市計画』講談社
2011「隋唐長安城と郊外の誕生」『東アジアの都城の比較研究』京都大学出版会
2015「隋唐長安城と関中平野の土地利用 -官人居住地と墓葬地の変遷を中心に-」『都市と環境の歴史学〔増補版〕第3集特集 東アジアの都城と葬制』
田中俊明・東潮 1988『韓国の古代遺跡』新羅篇(慶州)
田中俊明 1992「新羅における王京の成立」『朝鮮史研究会論文集』 30
玉田芳英 2019「古代都市藤原京の実態」『藤原から平城へ 平城遷都の謎を解く』奈良文化財研究所
筒井紘一 1996「Ⅶ 飲茶の世界-茶以前から煎茶・点茶へ」『長安-絢爛たる唐の都』京都文化博物館編 角川書店
長谷川輝雄 1924「四天王寺建築論」『建築3誌』第47号
平木 寛 2001『朝鮮社会文化史研究 Ⅱ』阿吽社
藤島亥治郎 1930『朝鮮建築史論』; 1982 景仁文化社 覆刻本
藤田元春 1929「都城考」『尺度綜考』刀江書院
村上四男 1962「新羅王都顧略」『朝鮮学報』 24
諸橋轍次 著 1957『大漢和辭典 6』大修館書店
山田隆文 2003「新羅金京復元試論」『古代学研究』159
2009「新羅の九州五小京の構造と實態について -統一新羅による計画都市の復元研究-」『考古学論攷』彊原考古学研究所紀要 第31冊
米田美代治 1944『朝鮮上代建築の研究』秋田屋
和田 萃 2000「古代の祭祀空間」『祭祀空間・儀礼空間』国学院大學日本文化研究所編 雄山閣

中 国

『魏書』
『新唐書』
『括地志』
『資治通鑑』
中国社会科学院考古研究所 1963『考古』
錢國祥 2022「漢魏帝都洛陽の空間構造」『古代東アジア都市の構造と変遷』
王貴祥 2013「隋唐時期仏教寺院」『百濟寺刹研究』国立扶余文化財研究所
賀業鉅(尹正淑 譯) 1995『中國 都城制度의 理論』이회文化社
龔巨平 2021「南京西營村南朝佛寺遺址考古發現與研究」『百濟와 南朝寺院의 새로운 認識』国際学術大会資料集 国立扶余文化財研究所・釜山大学校

韓 国

<文 献>

『三國史記』
『三國遺事』
崇福寺碑』『保寧 聖住寺址 朗慧和尚塔碑』『蘿井碑』
『新增東國輿地勝覽』『東京雜記』『輿地圖書』
柳宜健 「羅陵眞贗說」
李舜相 「松湫斎集」
金相定 「東都訪古記」
高麗大學校民族文化研究院 2009『高麗大学校韓国語大辞典』
東亜大學校出版部 1971 譯註『高麗史』
世宗大王記念事業會 1972『世宗莊憲大王實錄』

<報告書>

嘉耕考古學研究所 2011『華城 安寧洞 安寧村遺蹟』
2015『華城 安寧洞遺蹟』
京畿文化財研究院 2009『華城 南陽洞遺蹟』
겨레文化遺産研究院 2016『서울 禿山洞遺蹟 -서울 衿川區心 都市開發事業區域內 遺蹟試・發掘調査報告書-』
2017『慶州 堤内里・椧溪里・蘆谷里遺蹟』
慶尚文化財研究院 2016「益山IC~金馬間地方道擴大・包裝工事敷地内 文化財發掘調査略式報告書」
2023「晉州 本城洞 雨汚水管整備區間內 遺蹟發掘調査 專門家檢討會議資料集」
慶州市・鷄林文化財研究院 2015「月淨橋 周邊 整備事業敷地内 遺蹟發掘調査 略報告書」
2017『慶州 校洞 158-2番地 遺蹟』
2022『慶州 昌林寺址Ⅰ』
慶尚北道文化財研究院・慶州市 2001『慶州市 沙正洞 459－9番地 收拾發掘調査報告書』
慶州市・新羅文化遺産研究院 2015「慶州 財買井活用方案을 위한 學術심포지움」
2016「慶州財買井址-遺跡整備를 위한 學術調査報告書」
2018『慶州 皇龍寺 廣場과 都市Ⅰ』
2020『慶州 皇龍寺 廣場과 都市Ⅱ』
慶州文化財研究所 1992「月淨橋址 南便農業地 發掘調査」『文化遺蹟發掘調査報告 緊急発掘調査報告書Ⅰ』
1994 『慶州 東川洞 삼성아파트新築敷地 緊急發掘調査報告書』
高麗文化財研究院 2014 『慶州 仁旺洞 王京遺蹟 -國立慶州博物館南側 擴張敷地内 遺蹟Ⅰ』
國立慶州文化財研究所 1995『殿廊址・南高壘 發掘調査報告書』
1995・1997『慶州 芳内里古墳群 』本文・出土遺物
1996『財買井址 發掘調査報告書 』
1998『天龍寺址 發掘調査報告書』
2002『新羅王京』發掘調査報告書Ⅰ

2003『慶州 仁旺洞 556·566番地 遺蹟』 發掘調査報告書
2004『月城垓子 發掘調査報告書 Ⅱ』
2004『慶州蓀谷洞·勿川里遺蹟 -慶州 競馬場 豫定敷地 A地區-』
2004『慶州 南山 精密學術調査報告書』
2004『慶州 天官寺址 發掘調査報告書』
2005『芬皇寺 發掘調査報告書 Ⅰ』
2005『春陽橋址(日精橋址 史蹟475號) 發掘調査報告書』
2007『傳仁容寺址 發掘調査中間報告書』
2008『慶州 九黃洞 皇龍寺址展示館 建立敷地內遺蹟-九皇洞 苑池遺蹟-』
2009『慶州 皇南洞 大形建物址-皇南洞 123-2番地 遺蹟』
2010『慶州 月城 基礎学術調査 報告書Ⅰ研究報告書』
2011『慶州 皇龍寺研究센터 建立豫定敷地內 遺蹟 發掘調査報告書』
2013『傳仁容寺址 發掘調査報告書Ⅰ』
2015『芬皇寺 發掘調査報告書 Ⅱ』
2017『月城 東門址 및 東城壁 試·發掘調査報告書』
2017『文獻으로 보는 新羅의 王京과 月城』
2017『慶州 東宮과 月池 Ⅲ』
2018『慶州 東宮과 月池 復原整備事業 發掘調査報告書 -A建物址 -』
2019『新羅 千年의 宮城, 月城』
2019『皇龍寺 發掘調査報告書 Ⅱ -東回廊 東便地區』
2020『慶州地域 遺蹟分析資料 DB構築 및 分析研究 1 DB分析資料集 新羅王京』
2021『慶州 月城 試·發掘調査報告書』
2021『慶州 皇龍寺址 西回廊 西便地區 發掘調査Ⅰ』
2021『年代 測定學을 통해 본 古代 慶州의 時間』
2022『月城 西城壁 發掘調査 專門家포럼』
2022「新羅寺院의 建築技術과 生活文化」 發表資料集
国立慶州博物館 2002『国立慶州博物館 新築美術館 連結通路敷地 發掘調査報告書』
2007『味呑寺址』
2011『慶州工業高等學校內 遺構 收拾調査』
2018『特別展 皇龍寺』
國立慶州博物館·新羅文化遺産研究院 2014『慶州 仁旺洞 王京遺蹟Ⅱ-國立慶州博物館 南側敷地(2次)發掘調査-』
國立文化財研究所 2007『皇龍寺 基本計画』
國立文化財研究所·慶州市 2011『皇龍寺 復原 考證研究』皇龍寺研究叢書 8
國立文化財研究所·國立慶州文化財研究所·慶州市 2018『皇龍寺 復原整備事業 發掘調査Ⅰ-中門址·東門址 等』
國立扶餘文化財研究所 2010·2013『扶餘 軍守里遺蹟Ⅰ·Ⅱ』
2009『扶餘 官北里 百濟遺蹟發掘報告Ⅲ -2001~2007年 發掘區域 百濟遺蹟-』
2010『東아시아 古代寺址 比較研究(Ⅱ)-金堂址編-』
金鰲文化財研究院 2019『慶州 東川洞 798番地 遺蹟』
2020『慶州東川洞 343－4番地 遺蹟』
東國大學校 慶州캠퍼스博物館 1996『慶州 隍城洞 267 略報告』
2013『慶州 東川洞 834－5番地 遺蹟』

東邦文化財究院 2012『五松 統一新羅時代의 集落遺蹟』
東西文物研究院 2011『咸安 槐山里遺蹟』
東亞細亞文化財研究院 2006『咸安 忠義公園 造成敷地內 文化遺蹟 發掘調査報告書』
文化公報部 文化財管理局 1978『雁鴨池 発掘調査報告書』
百濟古都文化財團 2015「扶餘 舊校里 구드래一帶(名勝 第63號)內 遺蹟発掘調査会議資料」
扶餘郡・百濟古都文化財團 2017『扶餘 舊校里 구드래一帶의 百濟建物・道路・氷庫 遺蹟』
2022「扶餘 花枝山遺蹟 9次 發掘調査 2次 現場說明資料」
徐羅伐文化財研究院 2016「慶州 塔洞 37番地一圓 近隣生活施設(病院)新築敷地內 遺蹟 文化財發掘調査 略報告書」
2020『慶州 東川洞 都市計画道路(小2－117)敷地內 遺蹟發掘査報告書』
2020『慶州 東川洞 都市計画道路(小2－120)開設敷地內 遺蹟發掘調査報告書』
2022『慶州東川地區 都市開発事業敷地內 遺蹟發掘調査報告書』
聖林文化財研究院 2011『慶州 沙正洞 175－5番地 王京遺蹟』
2012『慶州東川洞 826－7番地 遺蹟』
2017『慶州 校洞 都堂山土城 遺蹟』
2019「慶州 狼山一圓內 推定古墳址 整備遺蹟 3次 文化財發掘調査 略式報告書」
新羅文化遺産調査團 2009『王京遺蹟-慶州 仁旺洞 412-2番地 遺蹟』
新羅文化遺産研究院 2012『王京遺蹟XXI－慶州 東川洞 72番地 單獨住宅築敷地內 遺蹟』
2014『慶州 東川洞 510－1番地 遺蹟』
2021「慶州 皇龍寺址東便 S1E1地區 整備 및 活用을 위한 學術大會」
2022「新羅의 住居文化」『第15回 新羅學國際學術大會』
新羅文化遺産研究院・高麗文化財研究院・한울文化財研究院 2012『國立慶州博物館 南側敷地 文化財發掘調査』 第1次 現場說明會資料集
安山市・漢陽大學校博物館 2017『安山邑城 및 官衙址V』
嶺南文化財研究院 2004「尙州 伏龍3地區 住宅建設敷地內遺蹟 文化財試掘調査 約報告書」
嶺南文化財研究院 2005『尙州 屛城洞・軒新洞古墳群』
2006『尙州 第2건널목立体化施設工事敷地內 尙州 伏龍洞 397-5番地 遺蹟』
2008『尙州 伏龍2地區 住宅建設敷地內 尙州 伏龍洞 256番地 遺蹟Ⅰ-Ⅳ』
2009a『尙州 伏龍洞 아파트建設敷地內 尙州 伏龍洞 230-3番地 遺蹟Ⅰ-Ⅱ』
2009b『尙州 中央路(第2鉄道)拡張区間內 尙州 伏龍洞 10-4番地 遺蹟Ⅰ-Ⅱ』
威德大學校博物館 2001『慶州 南山 長倉谷 新羅瓦窯址 地表調査報告書』
中部考古學研究所 2015『楊平 大坪里 2號墳』
2016『楊平 大坪里古墳群』
中央文化財研究院 2008『慶州 蘿井』 發掘調査報告書
忠淸文化財研究院 2007『洪城 五官里 遺蹟』
2010『牙山 新法里 土壘 遺蹟』
河南歷史博物館 2012「河南市 校山洞 82 建築物新築敷地內 遺蹟 發掘調査 略報告書」
한겨레文化財研究院 2012『慶州 城乾洞 遺蹟 - 慶州 城乾洞 緑地造成豫定敷地 發掘調査』
韓國考古學會 2018「交流와 交通의 考古學」 第43回 韓國考古學全國大會
韓國考古環境研究所 2009『龍仁 麻北洞 遺蹟』
韓国文化財保護財團 1999『慶州競馬場予定敷地C-1地區 發掘調査報告書』

2001『尚州 屏城洞 · 軒新洞 古墳群』
2003『慶州 隍城洞 遺蹟Ⅰ』
2003『慶州 北門路 王京遺蹟』 試 · 發掘調査報告書
2005『隍城洞 遺蹟Ⅱ~Ⅳ』
2010『慶州 東川洞 696－2番地 遺蹟－共同住宅新築敷地 發掘調査報告書－』
2013「慶州 東川洞 833-18番地 文化遺蹟發掘調査略報告書」
韓国文化財財團 2021『慶州 塔洞 28-1番地 遺蹟 發掘調査略報告書』
2021「慶州市 東川洞 373番地 遺蹟」『2019年度 小規模 發掘調査報告書 Ⅸ』

<論 文>

姜奉遠 2005「慶州 北川의 修理에 관한 歷史 및 考古學的 考察」『新羅文化』25 東國大學校 新羅文化研究所
權五榮 · 이형원 2006「三国時代의 壁柱建物研究」『韓國考古學報』60
権宅章 2013「考察 3. 傳仁容寺址 傳仁容寺址出土 木簡 檢討」『傳仁容寺址 發掘調査報告書 Ⅰ』
권태효 2012「우물의 空間的 性格과 象徵性 研究」『民族文化研究』56 高麗大學校 民族文化研究院
金敬東 2017「考察」『慶州 校洞 158－2番地 遺蹟』鷄林文化財研究院
金敬烈 2017「Ⅴ.考察 東宮과 月池 가地區建物址 및 排水体系檢討」『慶州 東宮과 月池Ⅲ』國立慶州文化財研究所
2020「慶州 東宮과 月池遺蹟 建物址 配置 및 空間區劃 檢討」『韓國古代史研究』100 韓國古代史學會
2022「東宮과 月池 周辺建物群의 構造와 機能에 대한 考古學的 檢討 -A建物址 發掘調査 成果를 中心으로-」『2022 新羅學學術大會 '慶州東宮과 月池' 研究의 現段階와 爭點』國立慶州博物館
金吉植 2001「氷庫에서 본 公州 艇止山遺蹟의 性格」『考古學誌』13
2002「古代의 氷庫와 喪葬禮」『韓國考古學報』47 韓國考古學會
金東河 2018「中金堂은 青銅佛、東金堂에는 塑造佛仏-説明칼럼」『特別展皇龍寺』
2021「新羅 芬皇寺 歷史 · 文化的 價値와 意味」『新羅王京의 寺刹과 庭園』新羅文化遺産研究院
2022「皇龍寺 回廊外郭 空間의 區劃과 性格」『新羅王京의 都市構造와 月城』國立慶州文化財研究所 · 韓國古代史學會
金洛中 1998「新羅 月城의 性格과 變遷」『韓國上古史學報』 27
金炳坤 2013「雁鴨池의 月池 改名에 대한 再考」『歷史民俗學』 43 歷史民俗學會
2015「新羅東宮의 役割과 領域」『韓國古代史探求』 20 韓國古代史探求學會
2017「新羅王城의 変遷과 居住集團」『文献으로 보는 新羅의 王京과 月城』 國立慶州文化財研究所
金秉模 1984「都市計劃」『歷史都市 慶州』
金淑瓊 2016「皇龍寺 伽藍計画 尺度研究」『建築歷史研究』25
2020「皇龍寺建築과 南쪽廣場」『慶州 皇龍寺址 南쪽廣場』整備 및 活用을 위한 學術大會』慶州市 · 新羅文化遺産研究院
金有植 2010「新羅 瓦當 研究」 東國大學校博士論文
金錫煥 1996「慶州地域道路施設에 관해서－発掘調査된 地域을 中心으로」 徐羅伐 5
김요정 2021「木材의 年代分析을 통한 慶州地域 年代紀 復原」國立慶州文化財研究所
金元龍 1976「斯盧六村과 慶州古墳」『歷史學報』70 歷史學會

김재철 2014「三國時代 時至聚落의 構造와 性格」『嶺南文化財硏究 』27
金宰賢 2002「連結通路敷地內 우물 出土 人骨에 대한 所見」『國立慶州博物館敷地內 發掘調査報告書』國立慶州博物館
金宰賢 · 김주희 · 김형철 · 鄭珉圭 2018「新羅王京遺蹟 3號우물출토 人骨에 대한 考察」『慶州 東宮과 月池 Ⅲ』國立慶州文化財硏究所
金在弘 1995「新羅中古期 低層地 開發과 村落構造의 再編」 「韓國古代史論叢」 7
2013「新羅 王京의 開發 過程과 發展 段階」『韓國史學報』 52 高麗史學會
2014「新羅王京出土 銘文土器의 生産과 流通」 『韓國古代史硏究』 73
金正基 1980「皇龍寺址 發掘과 三國遺事의 紀錄」『新羅文化祭 學術發表會論文集-三國遺事의 新硏究』1 新羅文化宣揚會
1981「三国史記 屋舍條의 新硏究」「新羅文化祭 學術發表會論文集」2 新羅文化宣揚會
金柱昊 2014「家形土器로 본 古代 地域社會의 一面」『機張 佳洞 古墳群』中 釜慶文物硏究院
金昌億 1996「三國時代 井에 대한 檢討」『碩晤尹容鎭敎授停年退任紀念論叢』
2004「우물에 대한 祭儀와 그 意味」『嶺南文化財硏究』17 嶺南文化財硏究院
金昌鎬 2001「慶州에서 出土된 後三國 기와의 歷史의 意味」『慶州文化』7 慶州文化院
金春實 2006「百濟 6世紀 後半 蠟石製佛像硏究」『美術史學硏究』250 · 251
金弼淑 2021「慶州 昌林寺址 發掘調査(2次)」 第1回 慶州地域 文化遺産調査 · 硏究成果 發表會」 國立慶州博物館 · 文化財廳新羅王京核心遺蹟復原整備推進團 · 國立慶州文化財硏究所
金昡希 2011「第1章 古代의 우물과 祭祀」『國立慶州博物館內 우물(井)出土 動物遺體』國立慶州博物館
김형석 2022「慶州 九黃洞 苑池遺蹟 創建 및 變化時期의 造營과 性格變化」『文化財』55-3
金鎬詳 1997「新羅 王京의 宮城址 硏究 -金城을 中心으로-」 大邱曉星가톨릭大學校 碩士學位請求論文
1999「新羅 王京의 金城硏究」 『慶州史學』 18 慶州史學會
2009「新羅의 소금倉庫와 얼음倉庫」『慶州文化』15 慶州文化院
金鎬詳 · 皇甫垠淑 2006「新羅 王京에 나타난 自然現象 -『三國史記』新羅本紀 記錄을 中心으로」『新羅文化祭 學術論文集』27 慶州市 · 新羅文化遺産調査團
羅熙羅 2003『新羅의 國家祭事』知識産業社
南時鎭 2002「其他遺蹟 4. 橋梁址」『慶州南山 GYEOUNGJU NAMSAN』國立慶州文化財硏究所
盧明鎬外 2000「慶州倭寇擊退事實記」『韓國古代中世古文書硏究(上)』 (校勘譯註篇)서울大學校出版部
文暻鉉 1973「新羅国 形成過程의 硏究」『大邱史學』6 大邱史學會
2004『新羅王京五岳硏究』慶州市 · 慶北大學校 人文科學硏究所
閔德植 1986「新羅 王京의 都市設計와 運營에 관한 考察」『白山學報』33
1989「新羅 王京의 都市計劃에 관한 試考」(上 · 下)『史叢』35 · 36
박기혁 2022「慶州 狼山 一圓內 推定古墳址 整備(傳皇福寺址)遺蹟5次發掘調査」『第1回 慶州地域文化遺産調査 · 硏究成果 發表資料集』國立慶州博物館 · 文化財廳新羅王京核心 遺蹟復原整備推進團 · 國立慶州文化財硏究所
박남수 2019「唐의 祀典体系와 新羅의 祀典整備」『新羅史學報』45 新羅史學會
朴方龍 1999『新羅 都城 硏究』東亞大學校 博士學位論文
2001「皇龍寺와 新羅王京의 造成」『皇龍寺와 綜合的 考察』新羅文化祭學術論文集 22
2013『新羅 都城』 學硏文化社
박성현 2017「新羅 王京 關聯 文獻을 어떻게 硏究할 것인가?」『文獻으로 보는 新羅 王京과 月城』 國立慶州文化財硏究所
朴淳發 2021「風納土城 築城의 意義」『風納土城 築城技術의 秘密을 풀다』國立江華文化財硏究所

朴玧貞 2007「韓日 古代苑池의 變化를 통해 본 九黃洞苑池의 性格 研究」『韓日文化財論集Ⅰ』國立文化財研究所・奈良文化財研究所
朴正宰・崔文禎 2017「慶州 月城과 周辺建物址의 時期別 變遷過程-月城垓字 調査 成果를 中心으로-」『考古學』16-3 中部考古學會
朴晸煥 2013「三國・統一新羅時代 道路築造에 관한 研究－慶南地域 資料를 中心으로－」『中央考古研究』 13
박종서 2013「漢江下流 古代交通路에 대한 檢討」『겨레文化研究』2
朴贊文 2021「慶州 味呑寺址(3~4次発掘調査)」『第1回 慶州地域文化遺産調査・研究成果発表会』國立慶州博物館・文化財廳新羅王京核心遺蹟復原整備推進團・國立慶州文化財研究所
朴贊興 1995「高句麗尺에 대한 研究」史叢 44
朴洪國 2019「慶州 南山 藥水谷과 都堂山 西北麓의 王陵及 單獨古墳」『新羅史學報』45
裵德煥 2009『聚落研究』1 聚落研究會
裵秉宣 2014「益山 王宮城과 百濟 建築」『古代 東亞細亞 都城과 益山 王宮城』國立扶餘文化財研究所
서상규 2007『新羅上古期의 龍神仰』韓國教員大學 碩士論文
서용하 2012「考察」『釜山 楽民洞 遺蹟』東洋文物研究院
손세관 2002『넓게 본 中國의 住宅』說花堂
申東河 2001「新羅 佛國土思想과 皇龍寺」『新羅文化祭 學術發表論文集』22
申昌秀 2002「興輪寺의 發掘成果 檢討」『新羅文化』20 東國大學校 新羅文化研究所
申衡錫 2000「新羅 慈悲王代 坊里名의 設定과 그 意味」『慶北史學』23
沈炫暾 2018「慶州盆地의 古地形과 大陵苑 일원 新羅古墳의 立地」『文化財』51-4
梁銀景 2022「南朝木塔의 築造技法과 周邊国家와의 交流 -南京 西營村 木塔址를 中心으로-」『百濟와 南朝寺院의 새로운 認識』 國際學術大會資料集 國立扶餘文化財研究所
梁正錫 1999「皇龍寺 中金堂의 造成과 丈六尊像」『先史와 古代』12
2001「皇龍寺 伽藍變遷過程에 대한 再檢討 -東・西建物址의 土層分析을 중심으로-」『韓國古代史研究』24
2004『韓国 古代 正殿의 系譜와 都城制』西景文化社
2007「新羅 王京人의 住居空間」『新羅文化祭學術論文集』28 新羅文化宣揚會
2008『皇龍寺의 造營과 王權』西景文化社
2008「新羅 王京과 日本 藤原京」『新羅文化祭學術論文集』29 新羅文化宣揚會
2012「新羅王京의 研究史的 檢討」『皇龍寺 復原研究포럼』國立文化財研究所・慶州市
2013「皇龍寺址 東便 王京遺蹟 月臺附加形 建築物에 대한 一考察」『新羅文化』42 東國大學校WISE캠퍼스新羅文化研究所
2015「統一新羅王京의 都市體系」『新羅王京 中心區域 坊整備 및 活用을 위한 學術심포지엄』
梁正錫外 2010「皇龍寺 周邊의 坊里體系와 新羅王京」『皇龍寺 復原 基盤 研究』皇龍寺研究叢書 6 國立文化財研究所・慶州市
梁正錫外 2010「新羅王京의 研究史的 檢討」『皇龍寺 復原研究포럼』國立文化財研究所・慶州市
余昊奎 2003「新羅 都城의 儀禮空間과 王京制의 成立過程」『新羅王京調査의 成果와 課題』國立文化財研究所・國立慶州文化財研究所 國際學術大會 發表論文
2021「新羅 上古期의 都城 構造와 金城・月城의 性格」『新羅文化』58
吳承燕 2004「韓國 古代 宮苑池의 全開樣相과 思想的 背景에 관한 研究」『文化財』37
2011「新羅의 宮苑池 -九黃洞苑池의 性格을 中心으로」『百濟研究』53
吳英勳 1987「新羅王京에 대한 考察-成立과 發展을 中心으로-」東國大學校 碩士學位論文

禹成勳 1996『新羅王京 慶州의 都市計劃에 關한 研究』成均館大學敎 建築工学科 碩士學位論文
禹成勳 · 李相海 1997「新羅 王京 慶州의 土地 分割 尺度에 대한 考察」『建築歷史研究』第6卷11號
우하영 · 황원우 2022「慶州 城乾洞 647-3道路遺構調査成果」『第1回 慶州地域調査研究 成果発表會』國立慶州博物館 · 文化財廳新羅核心遺蹟復原整備推進團 · 國立慶州文化財研究所
유병록 · 진성섭 2022「竪穴式氷庫의 考古學的 研究」『野外考古學』43
兪洪植 2006「芬皇寺 伽藍配置와 變遷에 관한 考察」『特別展 芬皇寺 出土遺物』國立慶州文化財研究所
유태용 2005「漢江流域 出土 高句麗尺의 性格에 대한 研究」(사)高句麗研究會 春季學術大會發表文
尹武炳 · 金正基 1972「歷史都市 慶州의 保存에 대한 調査」『文化財의 科學的 保存에 대한 研究Ⅰ』
尹武炳 1987「新羅王京의 坊制」『斗溪 李丙壽博士 九旬記念 韓國史論叢』
尹張燮 1973「古新羅建築」「統一新羅建築」『韓國建築史』東明社
尹相悳 2009「興輪寺 推定建物址 및 銘文기와」『博物館新聞』454(2009年 6月1日字)
尹善泰 2019「新羅 東宮의 位置와 '東宮官' 機構」『新羅史學報』46
李康根 1999「芬皇寺의 伽藍配置와 三金堂 形式」『芬皇寺의 諸照明』新羅文化學術發表會 論文集 20
2013「城東洞 殿廊址의 性格에 대한 再照明」『先史와 古代』38
李康承 2000「百濟時代의 자에 대한 研究」『韓國考古學報』43
李建壹 · 沈相六 · 林鍾泰 · 鄭勛晉 · 趙源昌 2015『建物址로 본 泗沘考古學』西景文化社
李建壹 2009「百済住居址 地上化 過程研究-湖西地域을 中心으로」忠南大學校 碩士學位論文
李根直 1997「新羅 三姓始祖의 誕降址 研究」『慶州史學』16
1998「慶州地域 新羅文化의 成立과 傳承過程 研究」『韓國文化論集』釜山專門大學 韓國文化研究所 創刊號
2010「新羅 王京의 形成過程과 寺院」『東岳美術史學』11
2012『新羅王陵研究』學研文化社
李根直 · 李恩碩 2002「王陵 · 古墳」『慶州 南山 GYOUNGJU NASAN』國立慶州文化財研究所
李基東 1978「新羅 金入宅考」『眞檀學報』45 眞檀學會
李起鳳 2002『新羅 王京의 範圍와 區域에 대한 地理的 研究』서울大學校 地理學科 博士學位論文
2003「新羅 王京의 空間的 規模와 內部 體系에 대한 一考察」『新羅王京調査의 成果와 意義』文化財研究 國際學術大會 發表論文 第12輯
이동주 2017「新羅 王京의 定意와 그 範圍」『文獻으로 보는 新羅 王京과 月城』國立慶州文化財研究所
2020「新羅 東宮의 構造와 範圍」『韓國古代史研究』100
이동희 2018「弁韓과 伽耶의 區分」『文獻과 考古資料로 본 伽耶』國立伽耶文化財研究所
李文炯 2009「慶州 蘿井(史跡 第245号) 發掘成果」『慶州蘿井 整備計劃 樹立을 위한 學術심포지움」慶州市
李旼馨 2022「慶州 東部 史蹟地帶 撥川遺蹟 調査成果」『撥川 慶州의 옛물길』新羅王京核心遺蹟復原整備事業推進團 · 慶州市 · 慶北文化財團文化財研究院
2022「新羅 眞興王代 新宮 垈地造成研究」慶州大學校 博士學位論文
李凡泓 1992「斯盧國地域의 3~4世紀代 土器研究」『韓國上古史學報』10 韓國上古史學會
李丙壽 1979「新羅의 起源問題」『韓国古代史研究』博英社
李富五 · 橋本 繁 譯 2008『金西 龍의 新羅史 研究』
李尙馥 2008「統一新羅時代 竪穴住居址 研究 -京畿 南部地域을 中心으로」『中央考古研究』4
2011「中西部地域 統一新羅時代 竪穴住居址의 分類와 編年」『中央考古研究』9
李相俊 1997「新羅 月城의 變遷過程에 대한 小考」『嶺南考古學』21
2002「山城」『慶州 南山 GYOUNGJU NASAN』國立慶州文化財研究所

2019「新羅 王京의 開發過程과 考古學的 境界」『新羅 王京과 月城의 空間과 機能』國立慶州文化財研究所・嶺南考古學會 學術大會資料集
李晟準 2018『漢城百濟의 成長』 진인진
2021「風納土城 東城壁의 築造와 規模의 擴大」『風納土城 築城技術의 秘密을 풀다 學術大會發表資料集』 國立江華文化財研究所
李晟準・金秀桓 2011「韓半島 古代社會의 殉葬文化」『韓國考古學報』81 韓國考古學會
이수지 2014「燕岐 羅城里 遺蹟의 百濟時代의 제택」圓光大學校 碩士学位論文
이수훈 2019「新羅王京出土遺物의 辛・辛審・辛番銘과 郊祀 -雁鴨池와 國立慶州博物館(南側敷地) 出土遺物를 を中心으로」『歷史와 境界』113
李宇泰 2002「古代 度量衡制의 發達」『講座 韓國古代史』6 駕洛國史蹟開發研究院
2007「高句麗尺 再論 －高句麗尺과 高麗術의 關係를 中心으로－」東北亞歷史論叢 17
李恩碩 2002「王京의 形成과 背景」『新羅王京Ⅰ發掘調査報告書』國立慶州文化財研究所
2003「新羅王京の都市計劃」『東アジアの古代都城』創立50周年記念 奈良文化財研究所學報 第66冊 研究論集XⅣ
2004「王京의 成立과 發展」『統一新羅時代考古學』第28会 韓國考古學全國大會發表集
2005「新羅 王京 発掘의 課題」『新羅史學報』5 新羅史學會
2011「尙州 伏龍洞 遺蹟과 慶州 王京」『嶺南文化財研究』24
2012「皇龍寺 北便 龍宮에 관한 一考察」『仲軒 沈奉謹先生 古稀記念論選集 東아시아의 文物』
2013「日帝强占期 新羅 都城 研究와 그 意義」『日帝强占期 嶺南地域에서의 古蹟調査』學研文化社
2016「7世紀代 新羅 家屋構造에 對한 考察」『新羅史學報』37 新羅史學會
2016「皇龍寺 建立과 新羅 王京의 造成」『皇龍寺址 發掘調査 40周年紀念 國際學術大會 發表資料集』文化財廳・國立慶州文化財研究所
2018「安山邑城氷庫」『第9回 全國海洋文化學者大會 發表資料集』
2021「新羅 都城의 構造와 城廓調査의 成果」『季刊 韓國의 考古學』vol 46 周留城
이재환 2011「傳仁容寺址출토 '龍王' 木簡과 우물・연못에서의 祭祀儀式」『木簡과 文字』7 韓國木簡學會
李鍾旭 1980「新羅上古時代의 六村과 六部」『眞檀學報』49 眞檀學會
李楨美 2021「S1E1地區의 建築的 特性」『慶州 皇龍寺址 東便S1E1地區 整備 및 活用을 위한 學術大會』慶州市・新羅文化遺産研究院
이지은 2011「安羅國 都城의 景觀 研究」慶南大學校 碩士學位論文
이창희 2021「放射性炭素年代를 利用한 月城 垓字의 歷年代」國立慶州文化財研究所
李春先 2018「咸安 阿羅伽耶 推定王宮址 最新發掘成果」『2018 伽耶文化遺産 最新調査成果』國立羅州文化財研究所・國立伽耶文化財研究所
이필영 2008「우물 信仰의 本質과 展開 樣相 - 民俗學資料를 中心으로」『歷史民俗學』26 民俗園
李賢泰 2010「新羅 中古期 里坊制의 受容과 王京의 中心軸線」『先史와 古代』32 韓國古代學會
2011「新羅 南宮의 性格 -南宮之印名 기와의 出土地 分析을 中心으로-」『歷史와 現實』81
2019「1974年 國立慶州博物館 敷地의 發掘調査와 成果 -道路遺構를 中心으로-」『東垣学術論文集』20
2020「新羅 月池宮의 性格과 太子宮의 位置」『韓國古代史研究』100
2022「慶州 東宮과 月池'의 性格을 둘러싼 論議와 爭點」『2022 新羅學學術大會 '慶州東宮과 月池' 研究의 現段階와 爭點』國立慶州博物館
李弘稙 1959「新羅의 都京과 条坊」『地方行政』12月號
張企明 2020「新羅 王京의 造成 原理와 運營體系」『嶺南考古學』88 嶺南考古學會

2021「月城垓字의 調査 成果와 古環境 研究와의 接點」『新羅文化』58 東國大學校 WISE 캠퍼스 新羅文化研究所
2022『新羅 宮城의 建立과 擴張을 둘러싼 論議와 새로운 摸索』 韓國古代史學會
張企明 · 崔文禎 2022「新羅 月城 西城壁의 築造 工程과 人身供犧」『嶺南考古學』92 嶺南考古學會
張順鏞 1976『新羅王京의 都市計劃에 關한 研究』서울大學校 環境大學院 碩士學位論文
張容碩 2006「新羅 道路의 構造와 性格」『嶺南考古學』38 嶺南考古學會
장호진 · 강량지 2020「新羅 皇福寺址 東便 廢古墳址의 性格」『文化財』53-1
全德在 2005「新羅 坊里制의 施行과 그 性格」『新羅文化祭 學術論文集』26
2007「新羅의 王京과 王宮」『慶州 月城의 어제와 오늘, 그리고 未來』國立慶州文化財研究所 學術심포지엄 發表要旨
2009『新羅 王京의 歷史』새문사
田庸昊 2021「益山地域에 있어서 長舍와 鳥形土製品에 關한 研究-6~8世紀의 韓日宮城의 建物配置와 寺院出土塑像의 比較檢討를 中心으로-」『韓日文化財論集』Ⅳ 國立文化財研究所 · 奈良文化財研究所
鄭珉圭 2020「4-7世紀 嶺南地域 竪穴住居址의 特性」東亞大學校 碩士學位論文
鄭永鎬 1977「慶州 東川洞 逸名寺址 石造物에 관한 考察」『文化財』11
鄭子永 · 卓京柏 2007「韓國 古代 木塔의 基壇 및 心礎部 築造技法에 관한 考察 -百濟 寺址를 中心으로-」『文化財』40 國立文化財研究所
丁仲煥 1984「新羅建國說話 小考」『慶州史學』3 慶州史學會
鄭泰恩 2009「Ⅳ.考察」『慶州 皇南洞 大形建物址 -皇南洞123-2番地遺蹟 -』國立慶州文化財研究所
趙由典 1994「皇龍寺 三金堂考」『石堂論叢』20
趙由典 · 南時鎭 1992「芬皇寺發掘調査報告」『文化財』25
趙胤宰 2017「中國 先秦 · 漢唐時期 藏氷, 造氷 및 冷藏遺構 考古資料 考察」『先史와 古代』54 韓國古代學會
朱甫暾 2016「皇龍寺 創建과 新羅 中古期 皇龍寺의 位相」『皇龍寺址發掘調査 40周年紀念 國際學術大會發表資料集』文化財廳 · 國立慶州文化財研究所
2017「月城과 垓字出土 木簡의 意味」『東아시아 古代 都城의 築造儀禮와 月城垓字 木簡』韓國木簡學會
2017「新羅 王京論」『文獻으로 보는 新羅 王京과 月城』國立慶州文化財研究所
2020『新羅王京의 理解』周留城
2021「新羅王京과 王宮, 그리고 撥川」『撥川, 新羅王京의 옛물길』學術大會資料集 新羅王京核心遺蹟復原整備事業推進團 · 慶州市 · 慶北文化財團文化財研究院
車順喆 2009「慶州隍城洞古墳群」『韓國考古學 專門事典 古墳篇』
2019「新羅 王京의 道路와 都市構造」『新羅 王京과 月城의 空間과 機能』國立慶州文化財研究所 · 嶺南考古學會 學術大会資料集
2022「Ⅳ遺蹟 · 遺物에 대한 檢討」『慶州 東川地區 都市開發事業敷地內 遺蹟 發掘調査報告書』徐羅伐文化財研究院
蔡美河 2008『新羅 國家祭事와 王權』혜안
崔光植 2007「韓中日 古代의 祭祀制度 比較研究 -八角建物址를 中心으로」『古代』27 韓國古代學會
2021「芬皇寺와 九黃洞苑池 遺蹟의 性格과 歷史的 意味」『先史와 古代』67
崔夢龍 · 千命薰 1990「Ⅵ. 出土人骨」『月城垓字Ⅰ』文化財研究所 慶州古蹟發掘調査團

崔文禎 2021「慶州 月城에서의 年代測定 研究와 方向」『年代測定學을 통해 본 古代 慶州의 時間』 國立慶州文化財研究所・嶺南考古學會
崔善子 2013「新羅 皇龍寺의 創建과 眞興王의 王權 强化」『韓國古代史研究』72 韓國古代史學會
崔珉熙 2011「慶州 扇狀地와 新羅史에서의 井 및 池에 관한 考察」『慶州文化論叢』14 慶州文化院附設 鄕土文化研究所
최성우 2013「考察 3. 傳仁容寺址 遺蹟의 変遷過程과 周邊遺蹟과의 關係 檢討」 『傳仁容寺址 發掘調査報告書 Ⅰ』
최영성 2014「月池宮 關聯 資料 再檢討 - 東宮은 太子宮이 아니다 -」『東洋古典研究』55 東洋古典學會
崔在錫 1987「新羅의 六村・ 六部」『東洋學』16 檀國大學校 東洋學研究所
崔宰榮 2017「隋唐長安城 東宮의 構造와 性格-魏晋南北朝 都城의 東宮과 関連하여-」『歷史와 世界』51 효원사학회
崔兌先 2016「新羅寺刹의 伽藍構造와 皇龍寺 伽藍配置」『皇龍寺址 發掘調査40周年紀念 國際學術大會發表資料集』國立慶州文化財研究所
韓政鎬 1997「皇龍寺의 諸照明을 위한 試論」『東院論集』東國大學校15代總學
황보경 2012「漢江遺蹟出土 新羅 수막새 考察 -서울・京畿地域 出土 수막새를 中心으로-」『東洋學』52
2013「新羅古墳出土 石枕考察」『考古學』12-1
皇甫垠叔 2008「新羅王京의 都市的 發達」『新羅文化』32
2009「金城의 位置 比定」『新羅文化』34
黃相一 2007「古代 慶州地域의 洪水可能性과 人間活動」『大韓地理学会誌』123 大韓地理學會
黃仁鎬 2004「慶州 王京 道路를 통해 본 新羅 都市計劃 研究」東亞大學校 碩士學位論文
2006「新羅 王京の変遷 -道路を通って見た都市計画-」『東アジアの古代文化』126号 古代社会研究所 東京 大和書房
2007「新羅 王京의 造營計劃에 대한 一考察」『韓日文化財論集Ⅰ』國立文化財研究所・奈良文化財研究所
2009「新羅 王京의 計劃都市化 過程 研究」『新羅史學報』17 新羅史學會
2010「新羅 王京 整備의 基準線과 尺度」『韓日文化財論集Ⅱ』國立文化財研究所・奈良文化財研究所
2014「新羅 9州5小京의 都市構造 研究」『中央考古研究』14
2015「新羅 王京 中心部의 都市化過程 및 坊里構造 考察」『韓國上古史學報』90
2021「皇龍寺址 東便 王京遺蹟(S1E1地區)의 再檢討」『慶州 皇龍寺址 東便S1E1地區 整備 및 活用을 위한 學術大會』 慶州市・新羅文化遺産研究院